
ある少年のなんとかなった学園物語

1 2 J o k e r

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少年のなんとかなつた学園物語

【Nコード】

N4896T

【作者名】

12Joker

【あらすじ】

桐札漣司は、車に引かれそうになつた子供を庇つて死んだ。神によつて転生されてきた世界は、色々な作品のキャラがいる学園の世界だった！神からもらったジョーカーメモリと12本のガイアメモリで様々な困難をなんとか乗り越えて仲間達と面白可笑しく学園生活を送る物語

仮面ライダージョーカー 仮面ライダーバース IS インファイニット・ストラトス ハヤテのごとく！ はじめてのあく！ 遊戯王5D'S トリコ ながされて藍蘭島 おまもりひまり 相棒

かへたんでいぶ

オリ主設定（ネタバレ注意 随時更新予定）（前書き）

漣司の設定です。

オリ主設定（ネタバレ注意 随時更新予定）

桐札漣司 きりふだ れんじ

身長 175？

体重 68？

趣味 サイクリング 読書 デッキ構築

好き 仮面ライダー カフェオレ 仲間

嫌い 仲間や女の子を泣かせる奴 食べ物を粗末にする奴 嘘を
ついたり約束を守らないふざけた奴

得意 喧嘩 英語以外の教科 家事 料理 機械いじり

苦手 色恋沙汰の話 英語

持っているメモリ

ジョーカー
Jメモリ

インフィニット・ストラトス
ISメモリ

アクア
Aメモリ

サイクロン
Cメモリ

Dメモリ
ダークネス

Fメモリ
フレイム

Gメモリ
グランド

Iメモリ
アイス

Mメモリ
メタル

Rメモリ
ライト

Sメモリ
スカイ

Vメモリ
ボイス

Tメモリ
サンダー

Wメモリ
ウェーブ

武器 ISキャリバー

他 ロストドライバー メモリリング

デッキ

シンクロドラゴンデッキ

ガスタデッキ

切り札

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン レッド・デーモンズ・ドラゴン
銀河眼の光子竜

精霊 風霊使いウイン ガスタの巫女 ウィンダ 銀河眼の光子竜

バイク（D・ホイール）？

この物語の13人の主人公の一人。神であるレイのミスで本来死ぬはずだった子供を庇って車にはねられて死んだ。レイによって転生の方舟で転生することが出来た。その時貰ったガイアメモリで転生した世界で仮面ライダージョーカーとして新しい人生を生きっていくことを決めた。

初めて会ったにも関わらず、自分に学園と言う居場所を与えてくれた千冬と束には感謝をされていて、彼女らの頼みや約束を必ず守っている（仲間達のことになる以外）。

見た目は仮面ライダーWの左翔太郎の16才くらいの姿で結構女子に人気があるくらいの男前。

元いた世界で公園に置き去りされていた時今の両親に拾われた。両親の家事能力がなかったので8才頃から家事をしていたので、家事は得意。

茶髪っぽい黒髪は地毛。

この髪でよく年上や不良に絡まれていたので相手してたらいつの間にか最強になっていた。学校の先生にも目をつけられていたが、それだけで勉強をしない理由にはしたくなかったので勉強をした結

果、英語以外は得意になった。

先生は基本的に信頼していなかったが、中学の数学の先生は別で休み時間などはその先生と親友達と一緒に色々バカをやっていた。先生の教えは親友達と一緒に忠実に守っている。

工業系の高校に進学してそこで出会った親友達と一緒に独学で勉強して、実際に機会弄りしてたら半年で高校三年間の知識と技術を身に付けた。

色恋沙汰の話が苦手なのは、中学は男子と女子の間に溝ができて気まずい生活で高校ではほぼ男子校みたいな所だったから、経験がないだけである。別に女の子が嫌いだとか苦手と言うわけではなく、箒達とは普通に話が出る。

オリ主設定（ネタバレ注意 随時更新予定）（後書き）

随時更新予定です。いつ更新出来るか分かりませんが……。

13人の主人公設定（前書き）

主人公達の設定です。

1 3人の主人公設定

1 桐札漣司

オリ主設定参照

2 織斑一夏

設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。原作基準だが、この小説では、篤、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪とは全員幼なじみ。また、漣司達の特訓で白式・雪羅を使いこなしているので原作よりも強い。適合メモリはスカイメモリ。
使うデッキはデュアルモンスターデッキ。

3 篠ノ之篤

設定 ほぼ原作基準。

備考 13人の主人公の1人。原作基準だが、幼い頃、一夏と離ればなれになっっていないので、姉である束を嫌っていない。

束に紅椿を貰って漣司と特訓していたとき、漣司とは恋人とは違う親友以上の関係になりたいと告白したら、漣司が相棒になってくれと願ったので漣司とは相棒となった。

漣司と共にいるので、周りには付き合っていると誤解される。適

合メモリはフレームメモリ
使うデッキは真六武衆デッキ。

4 綾崎ハヤテ

設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準だが、主である三千院ナギとは、誤解がなく、恋愛感情がない主従の関係である。適合メモリはサイクロンメモリ。
使うデッキは、ドラグニティデッキ。

5 後藤慎太郎

設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準。時期的には伊達の後任として2代目仮面ライダーバースとなった辺り。
ヤミーとの戦闘中、そのヤミーが光だして気が付いたらこの世界にいた。実力は学園でもトップクラス。漣司とは仮面ライダーとして共に特訓をしている。適合メモリはサンダーメモリ。
使うデッキはマシンナーズデッキ。

6 阿久野ジロー

設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準。ジロー達の活動がこの世界に影響を与えてしまったため、千冬がジロー達を保護と言う形で学園に入学させた。

かなりの実力者だが、キョーコを初め、女性はまだまだ苦手なようである。適合メモリはボイスメモリ。

使うデッキはインフェルズデッキ。

7 不動遊星

設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準。チーム5D'sや鬼柳京介、トオルやミサキと共に、デュエルで輝かしい功績を残したので、学園からの推薦入学で学園に来た。適合メモリはウェーブメモリ。

使うデッキはもちろん原作のままの遊星デッキ。

8 トリコ

設定 ほぼ原作基準。

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準。美食家の代表として仲間達と共に学園に入学した。適合メモリはグラントメモリ。使うデッキは、剣闘獣デッキ。

9 東方院行人

設定 ほぼ原作基準。

備考 13人の主人公の1人 ほぼ原作基準。行人達も後藤と同じく、異世界にある藍蘭島の住人。すず達と花見をするために桜の大木に向かう途中、光に包まれてこの世界に来た。剣の腕前はかなりのもので、主人公達では、箒と匹敵するほどである。ただし、鼻血はこの世界から来てから増えてきたようである。優人と相棒の仲になる。適合メモリアイスメモリ。
使うデッキは、氷結界デッキ。

10 天河優人

設定 ほぼ原作基準。

備考 ほぼ原作基準。後藤と同じく、異世界の住人。緋鞠達と妖を探している途中、光に包まれてこの世界に来た。人や妖だけではなく色々な種族の共存ができる考えを持つようになる。行人とは相棒の仲になる。適合メモリはライトメモリ。
使うデッキはヴァイロンデッキ。

11 伊達明

設定 ほぼ原作基準。

備考 13人の主人公の1人。後藤と同じ世界の住人。手術が成功して日本に戻ってきた時、鴻上会長から後藤が行方不明と聞いた

時、開発されたもう1つのバーストライバーとバースバスターを持ち、探していたら、急に光に包まれこの世界に来た。適合メモリメタルメモリ。

使うデッキはジエネックスデッキ。

12 イブキ

設定 オリジナル有り

備考 13人の主人公の1人。異世界の住人。姿はフスベジムリダーのイブキだがポケモンバトルの時、相手のポケモンが光出して気が付いたらこの世界に来た。夜空とはその時に会い一緒に仕事していた。仕事を失敗し依頼主に追われ、逃げた密林地区でゴブリンプラントに襲われるが漣司、後藤に助けられる。

ポケモンは持っていないが、代わりに自分自身がドラゴンタイプの技が使えるのと、技を使うのに消費する夜空と同等の魔力を持つ。適合メモリはアクアメモリ。

使うデッキはドラゴンデッキ。

12 法仙夜空

設定 オリジナル有り

備考 13人の主人公の1人 姿はハヤテのごとく！の法仙夜空だが、ハヤテ達とは違い異世界の住人で、魔法が科学で証明された世界から来た。魔術の実験中、光に包まれこの世界に来た。その時

にイブキと会い一緒に仕事していた。仕事を失敗し依頼主に追われ、逃げた密林地区でゴブリンプラントに襲われるが漣司と後藤に助けられる。

前の世界では魔力と魔術はトップクラスでこの世界に来てから格段に上がっている。適合メモリはダークネスメモリ。

使うデッキは魔法使いデッキ。

その0 俺のビギンズナイト(前書き)

はじめて投稿します。馴れない上に駄文になると思いますが宜しく
お願いします。

その0 俺のビギンズナイト

俺は桐札 漣司【きりふだ れんじ】高校一年生だ。趣味はサイクリングと読書（主に推理小説やマンガ）。このご時世は就職氷河期だから就職率が高い工業高校に進学したが、今やってみたい仕事はない。色恋沙汰には興味はなく、高校でできた親友達とバカやってるほうが楽しい。

俺は帰りに本屋で推理小説を買って家で読もうと帰ろうとしたら、なんと脇道から飛び出した子供が車に引かれそうなる。俺は考えるよりも先に体が動いて子供を庇った。

ドゴーン！！！

俺は盛大にはねとばされた。子供は？良かった無事か……。ダメだ、瞼が重くなって意識が朦朧としてきた。これは死ぬな。父さん、母さん、そして親友達、先にあっちに逝くことになってごめん。でも後悔はしていない。最後に人を助けることが出来てむしろ満足だ。俺は意識が途切れた。

これが、俺のこれからの学園物語、ビギンズナイトの始まりとはその時は思いもしなかった。

その0 俺のピギンズナイト（後書き）

時間があつたら少しずつ投稿していこうと思います。

その01 漣司と神と仮面ライダー（前書き）

漣司と神が出会うところです。

その01 漣司と神と仮面ライダー

うーん・・・？ あれ・・・？ 俺は何をしていたっけ？ ああ、そうだ、俺は死んだだっけ？ ということはここは天国か地獄かどっちだろう？ 天国にしては真っ暗（自分自身はみえているが。）だし、地獄かというと、恐怖感を感じない。一体ここは・・・？

？「ここは天国でも地獄でもないよ〜」

一体誰だ？ やけに可愛い声だったな。

？「こっちだよ〜」

とりあえず声のする方に行ってみた。

そこにいたのは見た目12〜13才くらいの銀髪ポニーテール、右目はルビーで左目がサファイアのような目で白いワンピースを着た可愛いらしい女の子だった。

漣司「君は誰だ？それにここは何処だ？」

レイ「私はレイ、レイ・S・ノヴァだよ〜」
スカーレット
「ここはね、転生
の方舟というのだよ〜」

漣司「転生の方舟？」

レイ「転生の方舟というのは、本来まだ死ぬべき時じゃない人が、私達神のミスをしてしまったことで死なせてしまった人を別世界に転生させるところだよ〜」

へえーそうなんだってちょっと待て。

漣司「君は神なのか？」

レイ「そうだよ〜 150年している新人だけどね〜」

150年で新人て・・・。

漣司「もしかして、俺が死んだのって・・・」

レイ「ごめんね、君を死なせてしまったのは私なんだ桐札漣司君。」

そうだったんだ。まあ、こんな可愛い子を怒る気にならないし

漣司「気にするな。それに転生が出来るんだ。その別世界で自分の新しい人生を楽しむよ。」

レイ「ありがとう。さてお詫びにこれをプレゼントするよ〜」

レイの右手が一瞬光ったと思ったら、アタッシュケースが出てきて俺に渡す。

漣司「これは・・・！」

中身はなんと仮面ライダーのベルトの一つロストドライバーに切り札の記憶であるジョーカーメモリ、ほとんど見たことがない12本のガイアメモリ、それとメモリ一本入りそうなブレスレット。

レイ「そうだよ〜 仮面ライダージョーカーだよ〜 変身したら、ブレスレットを左手首にはめてね〜 そしたら、他のガイアメモリ挿すことによって挿したメモリの力を使うことができるんだよ〜」

仮面ライダーダブルは見ていて一番好きなのは、左翔太郎が変身していた仮面ライダージョーカー。まさかこの俺がジョーカーになれるなんて。

漣司「ありがとう。最高のプレゼントだよ！」

レイ「ふふっ、良かった。これから転生先の別世界は、実は色々な作品のキャラがいる世界。私達はクロスオーバーの世界で呼んでいるんだよ〜」

漣司「俺はどうすればいいんだ？」

レイ「それは自分自身で決めることだよ〜 君はどんな困難や逆境を『なんとかかなる』と言う口癖でなんとかなったら大丈夫だよ〜」

そうだったな。俺はそれを口癖にして、諦めずに頑張ったからな
んとかあったよな。

レイ「それじゃ大丈夫？」

漣司「ああ、何時でもいいぜ！」

レイ「それじゃいつてらっしゃーい〜」

こうして俺は別世界の人生、ビギンズナイトの始まりだった。

その01 漣司と神と仮面ライダー（後書き）

今回はインフィニット・ストラトスからあの二人が漣司と出会います。

その02 出会いと最強の女教師と天才ウサミミ博士(前書き)

戦闘シーンがありますが、あまり上手ではありません

その02 出会いと最強の女教師と天才ウサミミ博士

漣司 side

ここがクロスオーバーの世界か。見たところ、元いた世界とあんまり変わらない。ここはどこかの施設の庭のようだが。

？「そこのお前、何をやっている？この学園は関係者以外立ち入り禁止だぞ。」

？「ちーちゃんどうしたの？おや、君は誰だい？」

一人目の女性はスーツ姿でスタイルがよく、美人な人。

二人目の女性は不思議の国アリスに出てきてそうなドレスに、ウサミミという可愛い人。

漣司「ああすいません。俺は桐札漣司と言います。貴女方は？」

千冬「私は織斑千冬だ。」

東「私は天才の篠ノ之東さんだよ。よろしくね〜れっくん」

れっくん？ 何故か分からないが東さんに気に入られたらしい。

漣司「学園ってさっき言っていましたけど千冬さんここは一体何処
なんですか？」

千冬「なんだお前知らないのか？まあよい、ここは・・・！？」

突然殺気を感じた方に向いたらなんとマグマドーパントがこっち
を睨み付けた。

千冬「なんだこいつは！！」

東「なんかあれかつこいいなあ」

漣司「二人共、下がって下さい。」

俺はロストドライバーを腰にかざし装着し、ジョーカーメモリを
左手に持ち記憶の声を鳴らした。

『ジョーカー！』

漣司「変身！」

俺はジョーカーメモリをドライバーに挿入し、ポーズをとりながらドライバーを展開した。

『ジョーカー!』

俺は仮面ライダージョーカーに変身した。

千冬 マグマ「『!?!?』」

東「お〜」

千冬さんとマグマドーパントは驚き、東さんは感心していた。

マグマ『なんだ!その姿は!お前は何者だ!!!』

漣司「俺は・・・仮面ライダージョーカー!さあ、お前の罪を・・・数える!!!」

俺はマグマドーパントに近づいてパンチ10発、キックを5発を浴びせぶっ飛ばした。マグマドーパントも反撃しようとするが格闘能力が極限に高められているジョーカーにとっては敵ではなかった。

漣司「止めだ」

俺はドライバーからジョーカーメモリを抜きドライバーの右部分にあるマキシマムスロットにさしこむ。

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司「ライダーキック！」

俺の右足に力が込められて、俺はそれをマグマドローパントに飛びげりてぶつけた。マグマドローパントはぶつ飛び爆発して消えた。俺は変身を解除した。

私は驚いた。桐札漣司はベルトのようなものを装着し、USBメモリのようなものをさしこむと変身しだした。怪物を難なく倒したあいつが何者か興味がわいてきた。

漣司 side

ふう、なんとか倒した。やっぱりジョーカーは強いな

俺は変身を解除した。

その時、千冬さんが来て「話がある」と無理矢理応接室みたいなところに連れてこられた。

千冬「まず、あれはなんだ？どうしてお前はそのような力を持っている？」

東「東さんも聞きたいな〜れつくん」

何故か分からないが俺は二人には正直に話した方がいいと思いい、俺が元の世界で死んで転生してこの世界に来たと言った。

千冬「信じられん話だが、お前がそういう嘘を付く理由がないか

ら本当のことだろう」「

東「東さんも信じるよ。」

漣司「ありがとうございます。」

千冬「なあに、礼にはおよばん。さて、本題だがここは九路州学クロス園。ここにいる生徒のほとんどが特別な存在であらゆる国家から守るために造られた学園だ。お前は私の弟達と共に入学してもらいたい。」

漣司「もし、断ったら？」

千冬「別に構わんが、お前は最強の兵器を使う者として追い回されるだろうな。」

う・・・それはやだな。俺は潔く・・・。

漣司「よろしくお願いいたします。」
従った。

千冬「ああ、よろしく」

東「よろしくね」

今日は3月1日、一ヶ月後に始まる俺のいや・・・、

俺達の学園生活の始まりだった。

その02 出会いと最強の女教師と天才ウサミミ博士(後書き)

次回から色々なキャラとの出会いを書こうと思います。

その03 買い物とGと「世界で唯一」の名をもつ二人の少年（前書き）

今回は食事中や台所のGが苦手な方は読まないほうがいいと思います。

では、一夏達との出会いです。

その03 買い物とGと「世界で唯一」の名をもつ二人の少年

3月2日、俺は一ヶ月後に始まる九路州学園の入学の準備をするため、近くの街で、買い物をしていた。

社会的には元いた世界とあんまり変わらないが、東さんが開発したIS インフィニット・ストラトス という女性にしか使えないパワードスーツが原因で、女性優遇されていることがある。

まあ、この世界ではISが最強という訳ではなく、あまりにひどい女はまず嫌われる。

俺は媚びるとかパシリとかは一切お断りだ。むしろそれを、俺にしてきた奴をフルボッコ（女の子には説教）にして二度とそういうふざけたことができないようにしてやった。

さて俺の黒歴史はともかく、服が転生の時のと、学園の制服しかなかったので俺はまず、服を買うことにした。お金については、レイが通帳と印鑑をもらったので問題はなかった。むしろ通帳の中身を見たら貯金額は0が9個ついたので、一瞬倒れそうになった。

服を買い、日用品も揃えた俺はカードショップがあったので、そこに入っていた。遊戯王OCGは、親友と一緒に遊んでいたのので、大量に買うことにした。

俺は今、学園の寮で、住まわせてもらっている（生徒は全員寮だとうことらしい）、帰ってデッキを作るう思った時に、前方がやけに騒がしいので、いつてみたら 6人の女の子達がチャラそうな男達に囲まれていた。

？「あんた達、さっさと退きなさいよ！！」

茶髪のツインテールの小柄な女の子が男達に言うが、

男「いいじゃん 俺達と一緒に遊ばぜ」

男達は女の子達に手を伸ばそうとした時、俺は考えるよりも体が動き、男の一人に、ドロップキックをかました。

男「げふうつつつ!?!」

男は盛大にぶっ飛んだ。

男「てめえ!なにしゃがる!」

漣司「女の子が嫌がっているのに、無理矢理連れて行くことした
チャラ男^{アホ}にドロップキックをかましたただだが何か?」

男「おい!お前ら!!あいつを半殺しにするぞ!!!」

男達「おー!!!」

チャラ男達(アホ共)はそれぞれサバイバルナイフやメリケン、
金属バットや釘バット更には鎖鎌など持っていた。

ちよつと待て、お前らそんなもん何処に持っていた? というより
か、半殺しですむレベルじゃないぞ。

ま、^{アホ}なんとかなるか。それに、武器を持ってねえとケンカできな
い男に負ける気はしない。サバイバルナイフで襲い掛かる奴に、蹴
りをかましてナイフを落とさせて、怯んだ隙にアッパーカットを喰
らわした。こうやって次々と倒した。

?「危ないですわ!!!」

金髪のお嬢様のような女の子が叫んだ。後ろで金属バットで俺を殴ろうとした奴がいた。ヤバイ、気づかなかった、間に合わない！俺は覚悟したが、突然、金属バットを持っていた奴の左頬に拳がめり込んでぶっ飛んだ。

？「一人相手に大勢で襲ってんじゃねーよ！！！」

？「「「「「「「「一夏^{さん}！！」」」」」」」」

どうやら一夏と呼ばれた男が助けてくれたようだ。

一夏「箒、皆無事か？」

箒「ああ、あの人が助けてくれた。」

箒と呼ばれた黒髪のパニーテールの女の子が俺に指を指して言った。

漣司「一夏と言ったな。助かったぜ。」

一夏「此方こそ、仲間を助けてくれてありがとう。」

？「一夏、遅いじゃない！」

？「一夏さん、何をしていましたの？」

一夏「悪い鈴、セシリア。白式の書類作成で千冬姉に捕まっていた。」

ツインテールの子が鈴で、お嬢様のような子がセシリアという名前だそうだ。

ん……？千冬姉？一夏で、もしかして千冬さんの……？

男「てめらあ！俺達をほったらかしかい！！こつなつたら……」

男が取り出したのはなんとガイアメモリだった。

『コックローチ！』

男は左手にコックローチメモリを差し込んでコックローチドーナツに変身した。

？「きゃあああああ〜！！」

突然、もう一人金髪の女の子が悲鳴をあげた。

一夏「わあ！どうしたシャル？」

シャルという子が涙目になりながら

シャル「ゴキ・・・ゴキ！」

漣司「はい、女の子がダイレクトに言わない。そう言えば、千冬さんと束さんから聞いたことがあるな。」

一夏、篝「千冬姉（姉さん）を知っているのか!?」「」

ああやっぱり、千冬さんと一夏は姉弟なのか。それと束さんと篝という子も姉妹なのか。

漣司「ああ、知っている。それよりも、こいつらは確か・・・」

コックローチ「そう、俺らは「ザ・ゴキ○リズ」違うわああああああー!!」

コックローチドーパントは思いつきり叫んで否定した。

コックローチ「俺らは『一人いたら30人いる』チームだ！」

漣司「やっぱりゴキ○リじゃねーか。」

コックローチ「何度もダイレクトに言うなああああー!!せめてGと言え!!」

漣司「分かった分かった。んでお前の名前は翻危不離男【ごきぶりお】さんだっけ？」

コックローチ「違うわあああああ!俺は古流工呂治【こるくろち】だ!!」

漣司「どつちにしても変わらねえじゃねーか。」

コックローチ「煩い！！お前らまとめて痛い目にあわせてやる！！！！」

あらら、奴さん怒っちゃった。

一夏「皆下がってる。来い！白・・・」

「「待て（ま、待って）！！一夏！！」」

一夏「なっ！？どうした？ラウラ、簪」

ラウラと呼ばれた銀髪の眼帯の子が一夏の右腕を、簪と呼ばれた水色髪の眼鏡を掛けた子に左腕を掴んで止めさせた

簪「ここで、白式を出したら条約に違反するよ！！」

ラウラ「そうだぞ！！一夏！教官の説教じゃ済まなくなるぞ！！」

一夏「くっ！！」

コックローチ「どうした？来ないのか？腰抜け。はっはっはっ！！」

その言葉で俺の何かが切れた。

漣司「おい、何かに頼んないとケンカ出来ねえ奴が、人を腰抜けと言ってんじゃねーよ。」

コックローチ「ふん！ガイアメモリを手に入れた俺は無敵なんだよ！」

漣司「残念だったな。お前みたいなアホがガイアメモリ使って悪さしている奴がいたら止めることができる切り札があるんだよ。」

コックローチ「なんだと？」

漣司「でだ。その切り札は俺の手の内にある。」

俺は左手にあるジョーカーメモリを見せた。

コックローチ「ほう、お前も俺みたいなドーパントという奴になるのかい？」

漣司「違うぜ。俺がなるのは、仮面ライダーだ。」

俺は右手にロストドライバーを持ち、装着した。

『ジョーカー！』

漣司「変身」

『ジョーカー！』

「夏、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、簪「「「「「「「！
！？」「「「「「「「」

「夏達は俺の姿に驚いていた。

コックローチ「なっなんだ！？何者なんだ！？お前は！！！」

コックローチドーパントは震えた声で言った。

漣司「言っただろ。俺は仮面ライダー・・・ジョーカー。さあ、
・・・お前の罪を数えろ！」

コックローチ「うわああああ！」

コックローチドーパントは叫びながらこっちに来たが、俺はジャンプしてかわして、後ろに回り込み、蹴りをかました。

コックローチメモリはスピードが上がる能力のあるメモリだが、適合率が悪いのかあまり能力をフルに使いこなしてはいないようだ。それによほどパニックになっているため、動きが滅茶苦茶だ。俺は避けてキックを連続で叩き込んで、回し蹴りでコックローチドーパントをぶっ飛ばした。

漣司「さて、メモリブレイクだ。」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司『ライダーパンチ！』

俺は右手に力を込めて、コックローチドーパントを殴り付けた。
コックローチドーパントは爆発し、古流工は倒れ、コックローチメ
モリは粉々に割れた。

俺は古流工達を警察につきだして解決した。

すると一夏が声を掛けた。

一夏「えーと……。」

漣司「漣司だ。桐札漣司。」

一夏「漣司。あれは一体？」

俺は変に誤魔化しなくなかったので、一夏達に千冬さん達と同じ
ように話した。

一夏「そうだったのか。でも、そんなのは関係ない。漣司は俺の
ために怒ってくれて、仲間達を助けてくれた。漣司は俺達の仲間だ。」

篝「ああ。」

セシリア「そうですね。」

鈴「そうね。」

シャル「そうですね。」

ラウラ「そうだな。」

簪「そうだね。」

漣司「ありがとう皆。改めて自己紹介する。俺は桐札漣司。世界で唯一の仮面ライダーだ。漣司と呼んでくれ。」

一夏「俺は織斑一夏だ。世界で唯一ISを動かせる男だ。一夏でいいぜ。漣司。」

篝「私は、篠ノ之篝だ。篝と呼んでくれ。漣司。」

セシリア「私は、セシリア・オルコットですわ。セシリアとお呼び下さい。漣司さん。」

鈴「あたしは鳳鈴音よ。鈴て呼んでね。漣司。」

シャル「僕はシャルロット・デュノアだよ。シャルロットて呼んでね。漣司。」

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィッツだ。ラウラと呼んでくれ漣司。」

簪「更識簪です。簪と呼んで。漣司。」

漣司「ああ。よろしく、一夏、篝、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪。」

こうして俺は一夏達と出会い仲間という絆が出来た。

その03 買い物とGと「世界で唯一」の名をもつ二人の少年（後書き）

暫くは「夏達との交流を書こうと思います。」

その4 引っ越しと手伝いと漣司のスペックの高さ(前書き)

ー夏達の寮の引っ越しと漣司のスペックの高さの話です。

その4 引っ越しと手伝いと漣司のスペックの高さ

3月5日、一夏達と出会い、仲間になって3日が過ぎた。俺は寮の部屋で、買い物で買ったカードでデッキを作っていたら、ドアからノックがしたので開けたら、一夏だった。

漣司「よお、一夏どうした？」

一夏「実は俺達も、入学前から寮に住むことになって、漣司と同じ部屋になったんだ。」

漣司「そうだったんだ。ん？俺達てことは、箒達も？」

一夏「ああ。箒達も住むことになって、皆、同じ部屋だって。」

学園の寮の部屋は、一部屋6人部屋なのだが、さすが、特待生が入学する学園だ。高級ホテル並みの豪華さと、快適さがある。しかも教室よりも広くゆっくりくつろげることができる。俺や一夏その他に後4人は入れることか。どんな奴が来るか楽しみだぜ。

漣司「で、一夏の荷物は、着替えとケータイの充電器だけか？」

一夏「ああ。千冬姉がそれだけは手配してくれた。」

漣司「なんか優しいお姉さんだな。」

一夏「ああ。それらだけ用意してくれた千冬姉に嬉しくて、俺は泣けてくるぜ。」

漣司「時間があつたら、買い物に付き合つてやるよ。」

一夏「ありがとう。ああ、そうだから漣達の引っ越しの手伝いに行こうぜ。」

漣司「ああ、そうだな。女の子だけじゃ引っ越しは大変だろう。」

俺達は引っ越しの手伝いに行った。

漣司 一夏「手伝いに来たぜ」

箒「一夏と漣司か。助かるぞ。」

漣司「それじゃ俺と一夏が家具とか重い物を運ぶから皆は他の軽い物を運んでくれ。後、俺と一夏に見られたら困る物があつたら言ってくれ。」

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪「……」
分かった（りましたわ）（ったわ）（ったよ）（ったぞ）（った）
「……」

漣司「よし、始めますか。」

俺達は引っ越しを始めた。

一夏「箒、このタンスは？」

箒「ああ。タンスはあつちに頼む。」

漣司「セシリアの家具って、特注品なのか？」

セシリア「ええ、そうですね。自慢の調度品ですよ。」

漣司「そうなんだ。ん？鈴の私物はそのバッグの中だけなのか？」

鈴「そうよ。あたしはバッグ一つでどこでも行けるから。」

一夏「相変わらずフットワーク軽いなあ。」

シャルロット「漣司？手伝つて〜。」

漣司「ああ。悪い悪いシャルロット。」

一夏「ラウラ、この大量のナイフは・・・」

ラウラ「何だ。問題があるのか？」

一夏「こんだけ有っても困るだろ。」

漣司「一夏、ツッコミおかしいぞ。」

箒「一夏もかっこいいけど、漣司君も、頼りになるね。」

まあ、なんとか昼前に引っ越しを終えて、俺は蕎麦を打って引っ越し蕎麦を皆に振る舞った。

食べ終わって一夏が聞いてきた。

一夏「漣司で、スペック高いみたいだけど、元の世界では何をしていたんだ？」

第「料理はどこで覚えたのだ？」

漣司「両親の家事能力が壊滅的にダメでな。片付けは一つの物片付けたら十の物を散らかすし、洗濯は洗濯機に洗剤入れすぎて泡だらけなるし、白味噌と間違えてキムチ味噌買ってきてそれで味噌汁を作ろうとするし、ポットやレンジの使い方が分からなくて、インスタント食品も満足に作れなくて、俺が家事全部やっていたら、必然的に覚えることができた。」

鈴「なんか、ある意味すごい両親ね……。」

ラウラ「教官……いや、織斑先生から聞いたが機械にも強いと聞いたが？」

漣司「工業の高校に通っていたんだが、先生の教え方が下手すぎて、独学で勉強をし、親友達と一緒に、実際に機械弄ってたら半年ぐらいで、高校三年間分の知識と技術を手に入れることができた。」

シャルロット「じゃあ、学園の倉庫にあるバイクは？」

漣司「ああ。この学園のアーリーナはライディングデュエルができるから、一から組み立てているんだ。本当は、仮面ライダーなのにバイクに乗ってないのはおかしいと思って自分だけのバイクを組み立てようと思ったのが始まりだ。組み立ててから、二日目だから全然出来てないが。シャルロット、あれでよくバイクで分かったな。」

シャルロット「ええ、まあ・・・」

セシリア「漣司さん、身体能力が高そうですが、それはどちらで？」

漣司「この茶髪ばい黒髪は地毛だが、染めていると思われてよく不良や年上に絡まれてな。仕方なく付き合っていたら、喧嘩なれしていた。」

簪「勉強は英語以外ほとんどできるんだ？」

漣司「さっき言ったように、この髪で先生らにも目をつけられない。だからといってそれで勉強はやらない理由にはしたくなかったし、俺は初めから何もせず反発するよりも、やるべきことをやって成果を出して見返した方が気分よかつたしな。ただ、英語だけはダメでな。どれだけ努力してもなんとかならなかつたな。」

「夏達「漣司（君）て天才を越えた超人！！？」」

「」

皆は驚いたが、俺がやりたいことやっているだけだからそれを自慢には思っていない。むしろ俺はまだまだと思っっている。一夏達はもっと凄いと思うし追い付きたいと思っっている。

夕方まで喋って皆と食堂で、夕飯を食べ一夏と俺は部屋に戻り、デッキ構築の続きをして就寝まで一夏と一緒に余ったカードで一夏のデッキを作っていた。

その4 引越しと手伝いと漣司のスペックの高さ(後書き)

その03の簪の言葉が原作と合っていなかったなので書き直します。

その05 新たな出会いとプレゼントと力を手にした少女（前書き）

キーワードに間違えたことを書いたので訂正します。

その05 新たな出会いとプレゼントと力を手にした少女

3月6日、俺、漣司は倉庫でバイクを組み立てていた。

学園から少し歩くとスクラップの山々（俺達はスクラップ山脈と命名。）があつて、そこでたまたま見つけた仮面ライダーWが乗っていたバイク、マシンハードボイルダーのモデルのバイクが捨てられてたので、持ち帰り、解体して組み立て直している。

なかなか順調にはいかないが焦る必要はなかったのんびりと組み立てている。D・ホイールの知識がなく（当然か。）本で調べているが、そこが一番苦労している。

すると一夏、篝、鈴、簪の四人が来た。

一夏「漣司、バイクはどうだ？」

漣司「まあ、ぼちぼちだな。一夏達、今日はどうしたんだ？」

簪「漣司君、今時間を空けることができる？」

漣司「ん？バイクはいつでもできるから、大丈夫だが、どうしたんだ？」

鈴「実は漣司に会わせたい人達がいて、紹介したいのよ。」

篝「それに、姉さんが漣司に渡したい物があるから、連れて来てほしいで。」

漣司「そうか、それじゃ行くうか。行かなかったら東さん、人参ロケットで来そうだしな。」

俺達は、学園のロビーに向かった。

ロビーには東さんと何人がいた。

漣司「東さん、五日ぶりですね。」

東「やあやあ、れっくん、来なかったら人参ロケットで行きそうだったよ。」

俺の予想は当たった。

?「あなたが、桐札君ね。」漣司「ああ、そうだが、あんたは？」

楯無「私は簪ちゃんの姉で更識楯無よ。私達も九路洲学園に入学することになったのよ。楯無て呼んでね。」

漣司「そうか、改めて自己紹介する。俺は桐札漣司。他の人も漣司と呼んでくれ。」

虚「布仏虚です。よろしくね。漣司君。」

本音「布仏本音だよ。よろしくね。きりふー。」

黛「黛黛子よ。よろしくね。漣司君。」

弾「五反田弾だ。俺と一夏と鈴と俺の横にいる数馬は中学からの仲で一緒に遊んでたんだ。弾でいいぜ。よろしくな。漣司。」

数馬「御手洗数馬だ。俺と弾は一夏と鈴について、色々な人なつきまとされて、千冬さんが保護という形で入学することになった。数馬でいいぜ。よろしくな。漣司。」

蘭「五反田蘭です。そこにいる五反田弾の妹です。蘭て呼んで下さい。よろしくお願いします。漣司さん。」

漣司「ああ、よろしく、楯無、虚、本音、薰子、弾、数馬、蘭。」

自己紹介が終わって、東さんが言った。

東「あーそうだ。篝ちゃんとれっくんにプレゼントがあるんだ。」

プレゼント？

東「まずは篝ちゃんから、じゃじゃーん！！これが篝ちゃんの専用機、第四世代型IS紅椿！東さんお手製だよ。」

あれ？俺の調べでは、IS開発企業はどこも、やっと第三世代型が出来たばかりのはずだが？

俺はそれについて東さんに話したら、

東「まあー、れっくん。そこは東さんの腕なのだよ。バイバイ。」

だそうだ。

篝「姉さん、ありがとう！」

東「どういたしまして。はい、れっくんには、これをプレゼント。」

「東さんは縦50センチ、横130センチ、高さ20センチくらいのきれいにラッピングされた箱を俺に渡した。やけに重いな。」

漣司「開けていいですか。」

東「勿論。れっくんのプレゼントだからね。」

開けて見ると中身は、仮面ライダーオーズに出た武器、メダジャーバーに似た1メートルくらいの大型剣とISと書かれたジョーカーメモリと同じ形のガイアメモリだった。

東「それは、仮面ライダージョーカーであるれっくんのために作った、万能大型剣《ISキャリバー》と、ISメモリだよ。」

漣司「何故これを俺に？」

東「れっくんで前に言っていたジョーカー以外の12本のガイアメモリは特別で使用は、ちーちゃんに止められているでしょ？」

そう、12本のガイアメモリは普通には使えない。ジョーカーに変身した後、メモリリング（神であるレイが命名）というプレスレットを左手首につけ、いずれかのメモリを差し込むことによって、メモリの中にある、生物をモチーフとしたガジェットが出てきて、そのガジェットが専用武器とアーマーとなって装着される。これによってジョーカーは差し込んだメモリの専用武器と固有能力と戦闘スタイルを使うことができる。

千冬さんと東さんにこのことを話したら、千冬さんが入学までこれ以上目立つ行動は避けるようにと、ジョーカーメモリ以外のメモ

りの使用を止められた。

東「ISメモリは、メモリリングに差し込むことで、ジョーカーに紅椿に似た蒼いISアーマーが装着されて、いっくん達と一緒にISで訓練や模擬戦ができるよ。ISキャリバーは格闘だけのジョーカーのために遠中近距離に対応出来るし、ジョーカーメモリかISメモリをそのスロットに差し込んだらマキシマムドライブを発動できるよ。」

漣司「東さん、ありがとうございます。ここまでしてくださって。」

東「いやいや、れっくんのためならこれぐらいは朝飯前だよ。ただ代わりていつてなんだけど、篝ちゃんとタッグを組んで、来週いっくん達とタッグバトルしてほしいんだ。紅椿とISキャリバーとISジョーカーのデータを録りたくて、ちーちゃんには許可は貰ったから。」

篝「わかったよ、姉さん。」

漣司「それぐらいはお安いご用です。」

東「ふふ、ありがとうございます。それじゃあまたね。」

東さんが帰った後、一夏と鈴が話してきた。

一夏「漣司、お前と戦ってみたいと思った。まさか形で実現出来るとは、思わなかった。やるからには本気でやるっぜ。」

漣司「一夏、俺もお前と戦ってみたいと思った。俺の限界をお前にぶつけてやるぜ。」

鈴「漣司、箒、やるからには本気で行くから覚悟しなさいよ！」

漣司 箒「ああ!」「」

一夏達は寮に帰った。

漣司「箒。」

箒「どうした漣司？」

漣司「ISキャリアバーを使いこなしたいから、俺に剣の間合いとか教えてほしい。」

箒「ああ、いいぞ。その代わりに、紅椿を使いこなしたいから特訓に付き合ってくれるか？」

漣司「ああ、お安いご用だ。」

箒「ありがとう!」

それから一週間の間、俺と箒は互いの都合が合う時にアリーナで訓練をし、互いに技術を高めあった。

その05 新たな出会いとプレゼントと力を手にした少女（後書き）

この小説の中では筭は一夏と離れ離れになっていないので束さんを嫌ってはいません。筭は一夏が好きなので、漣司とは相棒的な仲間になっていきます。

その06 模擬戦と代表候補生とコンビネーション（前書き）

戦闘は鈴、セシリアペアの模擬戦しか考えてなかったのでもれしか書けませんでした。一夏達の模擬戦楽しみにしていた方は、すみませんでした。では、その06が始まります。

その06 模擬戦と代表候補生とコンビネーション

3月13日、束さんからプレゼントを貰って一週間が経ち、漣司達はIS専用の第2アリーナにいた。

千冬「桐札、すまないな。目立つなと言っときながら、模擬戦に参加してもらって。」

漣司「いえ、俺に居場所を与えてくれた千冬さんと束さんの頼みを無下に断るといふことは、俺には出来ません。恩返しということに参加させて下さい。」

千冬「そうか、感謝する。後、学園生活では織斑先生と呼んでくれ。」

漣司「分かりました。」

千冬「うむ、ではこれより、タッグ模擬戦を行う。桐札と篠ノ之はオルコットと鳳、デュノアとボーデヴィツヒ、織斑と更識の順番で始めてくれ。」

漣司 side

この模擬戦では、俺のジョーカーと一夏達のデータを録ることに
なっている。俺は一夏のISは知らない。調べれば分かるが、そ
れでは面白くないしこれからの敵も正体や能力が分からないのは当
たり前だから、俺と篤は技術向上と連携訓練に時間を費やした。

今の服装は、俺と弾と蘭と数馬は私服で千冬さんはスーツ、一夏
達はISスーツだ。女子達のISスーツはスクール水着みたいなも
ので正直、変態みたいに興奮はしないが目のやり場に困る。一夏の
は腹だしタイプ、よく平気でいられると逆に感心ができた。

俺はジョーカーに変身してからISを起動してから着替える必要
がない。ちなみに、ISの実戦訓練は俺と一夏以外の男子はデー
タ収集や訓練機の整備などの、女子達のサポートすることになっ
ている。

女子は訓練機である打鉄つちがねやラファール・リヴァイブを使って訓練
することになっている。

セシリア「いきますわよ。ブルー・ティアーズ!!」

鈴「来なさい。甲龍シエンロン!!」

篤「来い、紅椿!!」

三人はISを装着した。

漣司「さて、俺もいくか。」

ロストドライバーを装着し、ジョーカーメモリを押した。

『ジョーカー!』

漣司「変身!」

『ジョーカー!』

切り札の戦士、仮面ライダージョーカーに変身した。

楯無「ほー、これが。」

虚「これが仮面ライダージョーカー……。」

本音「わあ〜ほとんど真っ黒だ〜。」

薰子「いける。これは確実に売れる。」

漣司「更に、もうひとつ。」

俺はメモリリングを左手首に付け、ISメモリを押し、メモリリングに差し込んだ。

『IS インフィニット・ストラトス ！』

『IS ジョーカー！』

ISメモリからアーマーが出てきて、装着される。見た目は紅椿の蒼色バージョンで肩と胸と腹にもアーマーがある仮面ライダージョーカー、ISジョーカーフォームになった。

弾「スゲー。」

数馬「カッチョイイー。」

蘭「それと、漆黒と蒼色の組み合わせがいいです。」

皆に誉められてどうしても照れてしまう。

漣司、篝、セシリア、鈴「い（くぜ）（くぞ）（いきますわよ）（くわよ）（…）」

俺、箒ペアとセシリア、鈴ペアの模擬戦がはじまった。

鈴「漣司、なかなかの格闘センスじゃない。」

俺は鈴が所持している二つ青竜刀が連結した双天牙月の刃以外の部分を蹴り、攻撃を防いでいた。

鈴「でも格闘だけじゃ勝てないことを教えて・・・て、うわ！」

鈴に近付いて、足ばらいをして鈴が倒れた際にかかとおとしを繰り出した。

鈴「くっっ！」

鈴はとっさに回避をして、かかとおとしを繰り出した俺の右足は地面に直撃し、半径5メートルの地面は地割れをおこした。

鈴「接近戦はヤバい！こうなったら！」

鈴の両肩に浮いている非固定浮遊部位アンロック・ユニットからエネルギーがチャージし、見えない何かが来るのが分かると俺はISキャリアーを取り出し、弾き飛ばした。

漣司「驚いたぜ。」

鈴「こっちは龍砲の見えない衝撃砲を弾き飛ばしたあんに驚い

たわよ！」

セシリア「鈴さん、まず漣司さんから倒しま・・・きゃあ！」

セシリアが鈴の援護をしようとしたが、箒が所持していた二刀の一つ、雨月から出たレーザーで妨害した。

箒「私を忘れるな！漣司、セシリアは任せてくれ！」

漣司「分かった。じゃあ、連携訓練の成果を試すか！」

箒「ああ！」

鈴「連携訓練だか何だか知らないけどさせないわよ！」

セシリア「そうですわ！」

鈴は俺に、セシリアは箒に攻撃を仕掛けた。

俺はISキャリバーで袈裟斬りを放ち、双天牙月を真っ二つにした。

鈴「くっ！やっぱり接近戦じゃあキツいわね。かといって龍砲は全部弾き飛ばしちゃうし、一旦退いて・・・。」

セシリア「ちょっ・・・ちょっと鈴さん!？」

鈴「え？」

二人は一緒になった。実は俺と箒は別々に戦っているように見せて二人を一緒に集まるように誘導したのだ。

漣司「これで決めるぜ。」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司「ライダーキック！」

俺のライダーキックは二人に炸裂した。

セシリア 鈴「きゃあ~~~~~！！！！」

二人は叫びながら墜落した。

千冬「試合終了！勝者桐札、篠ノ之ペア！」

俺達の勝利だった。

千冬「さすがだな、桐札。一週間でISをここまで物にするとはな。」

漣司「いえ、俺はまだ限界を出しきれてないのでまだまだです。」

一夏「それでもすげーな。漣司、なんか上達するコツとかあるのか？」

漣司「しいて、言うなら、基礎訓練が上達のコツかな。」

千冬「そういうことだ。精進しろよ。馬鹿者。」

一夏「はい……。」

千冬「では、次を始めるぞ。」

二時間後、模擬戦は俺と篝の勝利で終わった。

その06 模擬戦と代表候補生とコンピネーション（後書き）

次の次にハヤテのごとく！のキャラ達を出す予定です。

その07 相棒と色恋沙汰と質問攻め（前書き）

各話 詰めていたのでスペース空けて編集し直しました。

その07 相棒と色恋沙汰と質問攻め

模擬戦が終わったたら、昼だったので、漣司は疲れている皆にきつねうどんと野菜の天ぷらを作り、食べていた。

漣司「あつ、すまん。お茶用意するのを忘れてた。用意してくる。」

一夏「漣司も、疲れているだろ。ここは俺が用意してくるよ。」

漣司「サンキュー。」

一夏はお茶を用意に行った。

シャルロット「漣司、このきつねうどんもしかして、麺から作ったの？」

漣司「ああ、麺は三日前に打っていたやつを食堂の冷蔵庫で保存して使っている。」

ラウラ「いつも作っているのか？」

漣司「いや、皆に食べてもらいたくて作っているから、それに俺は自分の味付けが分かっているから、自分のはインスタント食品で済ましている。」

篝「そつ、それではいかんぞ！ちゃんと栄養のあるもの食べないと。そうだ。漣司が私達に、料理を作って食べさせてくれるなら私が漣司に料理を作って食べさせてやるぞ！」

漣司「いいのか？ 箒。」

箒「ああ、遠慮するな。何せ漣司と私は相棒なのだからな！」

「「「「「え？」「」「」」」」」

セシリア達は驚いた。

セシリア「漣司さんと箒さんが相棒？」

鈴「てっきり私達は付き合っていたのかと。」

箒「なっ何故そうなる！」

シャルロット「だって二人きりで訓練していたし。」

ラウラ「それに、屋上で二人きりで夕日を眺めていたのを見たぞ。」

箒「後、箒は漣司君のガレージの前で待っていて漣司君が来たら一緒に入るを見たよ。」

蘭「後、街で二人きりで歩いていてまるでデートでした。」

楯無「漣司君がリヤカーを引いてスクラップ山脈に行こうとしたら、篝ちゃんも付いていったよね。」

弾「漣司が食堂の食材を調達しに行こうとしたら、篝も『危険なのは分かっているから連れてってくれ!』と涙目になりながら言っ
て一緒に行ったよな。」

数馬「だから、俺達は漣司と篝ができているんじゃないかと思っ
ているんだ。」

束「そのところはどなの?篝ちゃん、ねっくん。」

漣司「あー篝、恥ずかしいと思うが話していいか?このままじゃあ、変な誤解されてしまうし。」

篝「う・・・うん。」

篝の顔が完熟トマトのように真っ赤になった。

漣司の回想

あれは、束さんからプレゼントを貰ってその日に、篝と一緒に訓

練をしてそれが終わって、更衣室で着替えが終わり帰る途中に篤が待っていたんだ。

篤『実は話したいことがあるんだ。』

漣司『分かった。とりあえず、ガレージで話そうか。』

ガレージに着いた俺は篤の話聞いた。

漣司『さあ、話していいぜ。』

篤『実は、漣司に初めて会ってから私は漣司に一夏に対して思う似たような感情を持つようになった。』

漣司『篤は一夏のことを異性として好きなんだよな。』

篤『ああ、私は一夏が好きだ。漣司のは、一夏のと似ているのかもしれない。でも、漣司のは、共に戦いたい、守られてばかりいるから、守りたい、もっと頼ってほしい、意見を言い合ってそれで口喧嘩をしたい、恋人とは違う親友以上の関係になりたい、そういうことを思うようになった。』

漣司『俺と元いた世界の親友達は篤が言う関係を俺達は、相棒と言っている』

篤『相棒？』

漣司『そうだ。それでだ篤。もしお前がいいなら俺の相棒になってくれるか？』

箒『私なんかでいいのか？』

漣司『ああ、俺は学校の先生で唯一信頼できる中学の数字の先生がいたんだ。その先生が 人生の相棒と言える人を探せ。男、女どちらでもいい。その相棒と絆で結ばれた仲間達と共に、あらゆる困難に立ち向かい乗り越える。 てな。箒は俺の相棒と言える人だ。こんな俺でいいなら相棒になってくれ！』

箒『ああ、漣司がそう言ってくれるならこちらこそよろしくお願ひします！』

俺と箒は握手をした。

漣司「とまあ、こうして俺と箒は相棒になったんだ。」

鈴「けどね、人が聞いていたらそれってプロポーズと間違いそうね。」

漣司「そうか、そういう勘違いにならないように言葉を選んで言っただけだ。」

セシリア「二人の行動はどう見ても恋人同士にしか見えませんかよ。」

漣司「ああ、一つずつ説明するわ。箒との訓練は今回の模擬戦の為に二人きりでしていた。夕日を見たのは箒は紅椿の単一仕様能力、ワンオフアビリティ

絢爛舞踏けんらんぶたつを上手く発動出来なく焦っていたんだ。それで箒と一緒に夕日を見に行っただ。屋上で見る夕日は綺麗で落ち着くことができるからな。箒も落ち着くことができ、この日以降の訓練から絢爛舞踏を任意で発動することが出来たぞ。」

シャルロット「漣司も箒のためにしないようなことをするんだね。」

漣司「ああ、それほど箒は焦っていたからな。ガレージについては箒がバイクの組み立てに手伝ってくれたんだ。ガレージで二人きりといつても、その後一夏と千冬さんがバイクを見に来たぞ。箒がデッキを作りたいと言ったからカード買うためにカードショップに行くのに付き合っただ。」

楯無「漣司君でもしかして女の子と付き合ったことがあるの？」

漣司「なかったな。中学時代はある事件を境に男子と女子の間に溝が出来て気まずい雰囲気でも思春期の男女が過ごすとは思えない中学生活だったし、高校は、女子がほとんどいない工業高校だったし、他校の女子に告白はされることがあったがな。」

薫子「その時の状況を教えて。」

漣司「十人くらいで来たな。その子達は学校ではアイドル的な存在だったみたいで、その子達によると不良に絡まれたところを俺は助けたみたいだ。」

ラウラ「みたいだ？」

漣司「この見た目で不良が寄って来て喧嘩三昧だったからな。いつ、どこで助けたのか分からなかったんだ。それがきっかけで告白されたんだが丁寧に断ったよ。」

簪「どうして？」

漣司「今でもそうだが、俺は本当にどうしようもなく、色恋沙汰に興味が無くてな。親友達と一緒にバカやってた方が楽しかったし、それに付き合ったら俺がしたいことが自由に出来なくなるからそれだけでもイライラしてくるんだよ。」

鈴「漣司で、鈍感そうには見えないけど、親友達にそのところなんて言われたの？」

漣司「俺は色々な奴に目をつけられてな。誰も敵意、邪険、信頼感、好意、尊敬色々とそういう目で見られているから誰が誰にどういう目でみるかわかるんだよ。」

簪「漣司が引越しの時、私達が一夏が好きなのがすぐわかったらしいぞ。」

漣司「まあ、簪達が一夏のことが好きなのは分かるし、大切な仲間達と思っているから、まあ、よろしく？」

この後すぐ一夏が、戻って来て、昼食が終わった。

午後は夕飯まで模擬戦の反省会をした。

翌日、俺達は新たな仲間達と会う。

その07 相棒と色恋沙汰と質問攻め(後書き)

次はハヤテのごとく!のキャラ達と出会います。

その08 少年執事と酒飲み教師と力を持つ者の使命(前書き)

遅くなつてすみません。中々、思ったように書けなくて、それで今回の話は二話に分けました。なるべく後半は早く投稿出来るようにします。

その08 少年執事と酒飲み教師と力を持つ者の使命

3月14日

俺達は千冬さんに招集をかけられた。

一夏「どうしたんだよ。千冬姉『バシーン！！！！』ぐえ！！！」

千冬「学園では織斑先生だ。それと教師には敬語を使えよ馬鹿者。」

千冬さんの出席簿アタックが炸裂したな。一夏の頭と出席簿に煙が立っている。

「さて諸君に集まったもらったのは、入学することになった生徒達が船で来るから、港まで行ってその出迎えを頼みたいという予定だったが問題がおきた。」

ここは10年以上前に突如、太平洋の真ん中に浮上した島だったようで、あらゆる国や組織が手を出せないから、ここに学園を設立したようである。面積は四国の10倍くらいの広さで色々な地区がある。この学園地区や、市街地区、スクラップ山脈、森林地区、鉦山地区、氷山地区、火山地区、砂漠地区、海岸地区、湖などなど、人が住む以外の地区にはそれぞれの生態系が生んだ猛獣がいる。そのほとんどの猛獣にはIGO（国際グルメ機関）という機関が定めた捕獲レベルというのがある。捕獲レベルは猛獣の強さ、食材の発見、調達、調理の難しさを表している。これら食材を探求し食す美食屋と絶滅寸前の猛獣や食材を保護、再生し、度が過ぎた食材調達

をする者を独断で検挙することが出来る再生屋と言う人達がいるらしい。

話がそれってしまったが、その地区の一つ港地区は入学する生徒が乗っている船が10時に来るようだ。ん？今千冬さん問題がおきたと言わなかったか？

千冬「ああそうだ桐札、その生徒達が乗っている船が何者かに占領されたとの情報が入った。」

ラウラ「教官『バシーン！！』・・・織斑先生、その船に乗っている生徒は？」

千冬「大富豪の息子や娘とその執事達だな。」

シャルロット「では、その人達が狙い？」

千冬「そこまでは分からん。それで、桐札と専用機持ちは船に行つて生徒達を救出してほしい。桐札、織斑、篠ノ之は実力は有つても代表候補生みたいな特別な訓練を受けてないから危険かもしれない。無理にとは言わない、どうする？」

漣司「その人達は俺達の仲間になるんだ。その仲間の危機を俺は助けたいから、行きます。」

一夏「そうだな。女の子に任せるといふ男にはなりたくないな、俺も行きます。」

篝「私も仲間達を守りたい。それに相棒の漣司と一緒になら大丈夫です！ですから、私も行きます。」

千冬「ふつ、では、桐札、織斑、篠ノ之、オルコット、鳳、デユ
ノア、ボーデヴィツヒ、更識妹は船に向かい、残りは待機だ。」

「「「「「「「はい！」「」「」「」「」

俺達は停留している船に入った。そして、生徒達がいるであろう
ロビーに向かった。それにしても占領されたにしてはやけに静かす
ぎる。それに、ロビーからは女性の酔っぱらった声と男達の悲鳴声
が聞こえる。俺達は急ごうとしたら、ラウラがいきなり近くのゴ
ミ箱に向かって言った。

ラウラ「そこにいる二人、出てこい。」

ゴミ箱の裏から出て来たのは水色髪の執事服の男と桃色の長髪の
女の子だった。

漣司「俺は桐札漣司、あんた達は？」

ハヤテ「僕は、綾崎ハヤテです。」

ヒナギク「私は桂ヒナギクよ。」

一夏「俺は織斑一夏だ。」

箒「私は篠ノ之箒だ。」

セシリア「私はセシリア・オルコットですわ。」

鈴「私は鳳鈴音よ。」

シャルロット「僕はシャルロット・デュノアだよ。」

ラウラ「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

簪「私は更識簪です。」

漣司「二人は何でここに？」

ヒナギク「私の友達がハヤテ君と一緒に助けを呼んできてと頼まれて、あなた達が来たからとりあえず隠れることにしたの。」

ハヤテ「桐札君達はどうしてここに？」

漣司「俺のことは漣司でいい。織斑先生にあんた達を救出してほしいと言われてここに来た。」

ハヤテ「僕もハヤテでいいです。」

ヒナギク「私もヒナギクでいいわ。」

漣司「わかった。それじゃ行きますか。」

俺達はロビーに急いだ。

？「私の生徒に手を出すなー！！」

男「がは！」

ロビーで俺達が見たのは、あちこちに倒れている男達とそれを倒している女性だった。

ヒナギク「お姉ちゃん！」

鈴「え？あれ、あんたのお姉ちゃん？」

ヒナギク「ええ、雪路お姉ちゃん。私達の先生よ。」

それにしても似てねえな。それにやけに顔が赤くて酒臭いな。

漣司「ヒナギク、あんたの姉貴、もしかして酒飲んでんのか？」

ヒナギク「ええ、お姉ちゃん給料のほとんどをお酒に替えるほどのお酒好きなの。」

ヒナギクは呆れたように言う。

おいおい、生徒が頑張っているのに教師は酒飲んでんのかい。

リーダー「くっ、こうなったら」

リーダー格の男がガイアメモリを取り出したが雪路先生がそれを

奪った。

雪路「へえーこれを使ったんだ。だったらこれを使って生徒に手を出したあんた達に裁きを下してやるわ!!!」

雪路先生はガイアメモリの記憶の声を鳴らし、腕に差し込んだ。

『ビースト!』

獣の記憶、ビーストメモリで雪路先生はビーストドーパントになり、リーダー格の男を襲おうとした。

て、おい!犯人が死んでしまう!

漣司「ヤバい!」

俺はジョーカーメモリを取り出した。

『ジョーカー!』

「変身！」

リーダー「助けてくれ！！！」

雪路「覚悟『ジョーカー！』て、え？ わー！」

俺は仮面ライダージョーカーに変身して雪路先生に飛び蹴りをくらわせた。

漣司「間に合った。一夏、その男を頼む！」

一夏「わかった！」

一夏は男を安全なところに避難させる。

篤「一夏！漣司！何故犯人を助ける！そんな男は放っておいて……」

一夏 漣司「篤！！！」

篤「！！？」

一夏「そんな寂しいことを言わないでくれ。力を手にしたら弱者の立場が分からなくなるなんて箒らしくないぜ。」

漣司「俺達を知っている箒は力がない者達を助ける優しい女の子のはずだ。」

箒「私は・・・」

雪路「あんた達、よくもやってくれたわね！」

雪路先生もといビーストドーパントが箒を襲おうとした。

漣司「箒！！！」

俺は箒を抱き、ビーストドーパントの攻撃をくらってしまった。

漣司「ぐう！！！」

箒「漣司！私なんかを庇って・・・」

漣司「女の子を守るのは男の仕事だ。それに、先生は言っていた。『力を手にした者は二つの使命がある。一つ、その力を、何時、何のために使うのか見極めること。もう一つ女の子や力がない者を助けること。例えそれが犯罪者であっても』とな。力を手にした者は使命と言うものがある。」

箒「漣司、すまない。私はまた間違いを・・・」

漣司「これ以上は言わなくていい。大事なのは、同じ過ちを繰り返

返さないことだ。篤、お前だったら見極めることができる。」

篤「漣司、その為だったら私に力を貸してほしい。」

漣司「ああ、任せな。よし、あの酒飲み教師を止めるか。」

篤「ああ！」

俺達はその教師に犯罪者になって欲しくないから、絶対に止める。

その08 少年執事と酒飲み教師と力を持つ者の使命（後書き）

実は自分は前はシャルロット党でしたが、今はファース党です。黒髪ポニーテールの大和撫子である筈はいいですね。

その09 仲間力と教師の抱擁と新しい生き方(前書き)

編集し直しました。ではどうぞ。

その09 仲間の力と教師の抱擁と新しい生き方

俺達は雪路先生もといビーストドーパントを倒すため闘う。

ビースト『うおおおおおおお！！』

ビーストドーパントは怪力でテーブルや椅子を投げてきたがラウラのIS、シュヴァルツエア・レーゲンのAIC（慣性停止能力）で防いだ。

ラウラ「一夏、漣司！私達が時間を稼ぐから、倒してくれ！」

一夏「わかった！」

漣司「一夏！ビーストドーパントは再生能力があるから、零落白夜で攻撃してくれ！そしたら、俺が間髪入れずメモリブレイクする。」

ビースト「なんなんかよく分からないけど、させる「邪魔させると思う？」！？」

シャルロットが割って入った。ショットガンを二挺使ってビーストドーパントを妨害したばかりか瞬時に、右手を近接ブレードブレード・スライサーでビーストドーパントの攻撃を受け止め、左手で持ったマシンガンで直接ビーストドーパントのボディに銃口を付けて撃った。

シャルロットのISラファール・リヴァイヴ・カスタム？は訓練機ラファール・リヴァイヴの基本装備を外して、その代わりISに武器を量子変換するために必要な拡張領域「バスロット」を倍に

していて装備が20もあるらしい。

シャルロットはその拡張領域を利用して状況に合わせて、武器を呼び出ずとも戦闘と同時進行で行える高速切替 ラピッド・スイッチ を特技としている。

シャルロットはラファール・リヴァイヴ・カスタム？と高速切替で『砂漠の逃げ水』という戦法ができる。この戦法は押そつが引こつが一定の距離と攻撃リズムを保ち、安定した戦いができる。

シャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム？、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンのコンビはほぼ死角なしだ。俺と篤は模擬戦でよく勝つことができたと思う。

ビースト『ぐあああああああ！』

シャルロットとラウラのコンビネーションは抜群だ。セシリアと鈴とは違うな。それでもビーストドーパントにはダメージが与えられない。いや、与えられないんじゃなく、ビーストドーパントの再生能力が皆の与えるダメージよりも上回っているからダメージがなないように見えるんだ。

セシリア「くっ！これじゃキリがありませんわ！」

鈴「でも、もうこれで終わりよ！」

篤「一夏、やれ！」

一夏「零落白夜、発動！」

一夏のIS、白式の単一仕様能力、零落白夜は対象のエネルギーを消滅させることができる。あれをくらってしまつたら、俺は強制

解除されてたな。

まあ、俺はISキャリバーで全部防いだが。

一夏「うおおおおおおおおお!!!!」

雪片はビーストドーパントのボディに直撃した。

ハヤテ「凄い……。」

ヒナギク「でも、まだ倒れてないわ!」

簪「大丈夫。私達には白の戦士、一夏と。」

俺はビーストドーパントの後ろに回り込んだ。

篝「切り札の戦士、漣司がいる!」

漣司「さあ、あんたが犯そうとした罪を数えろ!」

『ジョーカー! マキシマムドライブ!』

漣司「ライダーパンチ!」

ビーストドーパントは振り返って殴ろうとするが、俺は避けてボディにライダーパンチを当てた。

ビーストドーパントは爆発しその後、雪路先生が倒れ、ビーストメモリは粉々に割れた。

ヒナギク「お姉ちゃん！」

ヒナギクは雪路先生に駆け寄った。

ヒナギク「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ しっかりして！」

漣司「安心しな。メモリブレイクしただけで、少しすれば目が覚めるはずだ。」

一夏「漣司、大丈夫か？」

漣司「まあ、大丈夫だ。」

今回もなんとかあったようだ。

あれからハヤテやヒナギクの他の生徒を助けだし、任務は完了した。ケガをしたのは箒を庇ってダメージを受けた俺ぐ

らいだった。箒は気にしてたようだが俺は頭を撫でてあげた。箒は少し元気になったようだ。

俺と一夏の部屋にハヤテが新しい仲間になった。俺と一夏は祝いにハヤテのデッキを作る手伝いをした。ちなみに一夏はデュアルハヤテはドラグニティ、俺は闇と風のドラゴンとのシンクロデッキだ。

俺は飲み物買いに、外の自販機に行こうとしたら千冬さんがいた。

漣司「織斑先生。」

千冬「今は千冬さんでいい。それよりも漣司、箒を庇ってケガをしたそうじゃないか。」

漣司「いえ、たいしたケガじゃないですよ・・・!?!」

俺は驚いた。何故なら、千冬さんは俺を近くのベンチに座らして、母親のように抱きしめられたからだ。

漣司「ちよっと千冬さん!?!」

千冬「まったく、一夏といいお前といい、どうして私の生徒はこう無茶ばかりするんだ。」

漣司「すいません。」

千冬さん「なあに、ただ何があっても、どんな無茶もしていい。決してお前達は死ななくてくれ。頼むから。」

千冬さんはしっかりとした喋り方だったが体が震えていた。

漣司「大丈夫ですよ。俺や一夏だけじゃない、貴女の生徒達は必ず生きて貴女の元に帰って来ますよ。」

俺は千冬さんの背中を擦り安心させた。

千冬「まったくお前も一夏と同じ妙に女を刺激させるな。」

漣司「今は千冬さんを安心させようとしただけです。」

千冬「そうか、では話を変えるがお前の生き方は見つかったか？」

漣司「俺の生き方は、この学園では誰にも泣いてほしくない。だから俺は仲間達と共にこの学園を守りたい！」

千冬「そうか、では守りたいのなら、更に精進しろよ。」

漣司「はい!!」

こうして俺は新しい生き方を仲間達と共に過ごす。

その09 仲間の方と教師の抱擁と新しい生き方（後書き）

中々入学に繋がれませんか。次からははじめてのあく！、遊戯王5D
' S、トリコのキャラを出します。

その10 特訓と学園事情と新たな出会い（前書き）

だいが慣れてきたので自分のペースで出来るので安心です。

その10 特訓と学園事情と新たな出会い

3月16日

ハヤテ達と出会って二日が経ち、俺達は剣道場で特訓をしていた。セシリア代表候補生はISが使用不可能になっても闘えるように訓練されている。

俺もジョーカーに変身出来なくなっても仲間達と闘える為に日々筋トレやジョギング、箒との剣術修行、千冬さん直々の特訓をしている。これらを俺、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪にハヤテとヒナギクとも一緒にすることになった。

ハヤテの主やヒナギクの親友達は体力が無さすぎて鍛える以前に筋肉痛で動けなくなるそうだ。その上ハヤテの主、三千院ナギという女の子は頭がいいが体力がなく、昔よりかはマシになっているが、極度の引きこもりだったらしい。ヒナギクの親友である花菱美希、瀬川泉、朝風理沙は成績も悪く、体力が無いくせに、悪知恵は働いてヒナギクを困らせている。通称生徒会三人娘。

この三人は何故かハヤテのことをハヤ太君といい（一夏は一太君、俺は漣太君と呼ばれた。）彼に関する動画を撮っているらしい。

後、ナギの親友が三人いて大阪弁を使う女の子愛沢咲夜、和服が似合う女の子鷺ノ宮伊澄、口は悪いが努力家の男の子橘ワタルがいる。俺と一夏は咲夜とワタルに兄、伊澄には様付けで呼ばれている。

他に五人いて、ナギいわくザ・キングオブ・普通と言われて、またはハムスター（人間だった）と呼ばれている西沢歩、ラブ師匠霞愛歌、よく育てられた腐女子春風千桜、最弱のヘタレ東宮康太郎、ハヤテを狙うホモの変態で泉の双子の兄でもあり執事の瀬川虎鉄

ちなみに、ナギ、美希、泉、理沙はハヤテを女顔だからといって女装させたと聞いた俺と一夏は四人に説教し、反省してくれたので

ハヤテに女装はさせないと約束してくれた。まあこれで虎鉄とお金関係以外の不幸はないだろう。

俺達はナギ達を連れて剣道場に訪れた。

さて、学園の事情を説明しよう。この九路洲学園は俺達が入学生一号なので二、三年がいないのだ。だから二十歳越えた人も俺達と同じく一年生から始まる。更に一つのクラスを六十人にするから大したものだ。

部活も色々あつて俺達は剣道部にした。理由は剣術を磨くことができるから。

漣司「まったくお前らは呆れるほど体力ないな。」

ナギ「うつつ、もうへ口へ口なのだ。」

花菱「まったく漣太君達は」

朝風「本当に容赦ないな。」

瀬川「疲れたよ〜」

篤「まだ、三十分も経ってないぞ。」

東宮「ピューピュー」

ラウラ「ヘタレの息がヤバイな。」

ヘタレ「ヘタレ違つわあああああああああ！て、名前までも!?!」

ヒナギク「これはあなた達のためにやっているのよ？」

ヒナギクの言う通り、この五人は体力が無さすぎる。ヘタレを除く子はISの訓練があるが、乗れたとしても十分もたないだろう。だから俺達で鍛え上げている

鈴「あんた達はまだマシよ。問題はそこのヘタレよ。ヘ・タ・レ！」

ハヤテ「鈴さん、ヘタレヘタレ言わないであげてください。確かに東宮君は体力がなく、負けたら次は自分より小さくて弱そうな相手を戦って負けても、ヘタレは言い過ぎだと思いません。」

セシリア「ハヤテさんが一番言い過ぎだと思えますけど・・・。」

東宮「ぐはっ！」

漣司「あっ、東宮が倒れた。」

シャルロット「東宮君~~~~！しっかりして！」

シャルロットが往復ビンタで東宮を無理矢理起こした。

簪「シャルロットで、たまに凄いことするね・・・。」

まあ、東宮も結構しぶといからなんとかなるだろう。

一夏「それでも、お前らに合わせた練習メニューなんだぜ？」

一夏の言う通り、俺、一夏、箒、ハヤテ、ヒナギクで剣術の相手

をしてナギ達のレベルに合わせているのだ。

ナギ「それでも、ツライものはツライのだ！」

ハヤテ「皆さん、今日はこれくらいにしませんか？お嬢様も頑張っていますし。」

漣司「まだ満足じゃないがこれくらいにするか。」

俺達は帰る準備をしていたら、千冬さんと山田^{やまだ}真^ま耶^や先生とツラが来た。俺は雪路先生を先生とは思えないのでツラと言っている。

漣司「織斑先生と山田先生どうしたんですか？」

雪路「ちよっと！桐札君！あたし無視！？」

漣司「何ですか。居たのですか？ツラ。」

雪路「ツラじゃないわ。桂よ！桐札君あたしは先生だから敬意を持ってほしいわ。」

漣司「仕事中に酒飲んで、酔っぱらってガイアメモリ使って、犯人を殺そうとしたばかりか生徒にケガをさせた人を俺は教師だと思っ
ていません。」

雪路「ううっ……。」

千冬「もういいだろ桐札。さて新しい生徒になるもの達を呼んだから紹介しよう。さあ入れ。」

千冬さんは三十人くらいはいるだろう生徒を入れさせた。

ジロー「阿久野ジローだ。よろしく頼む。」

キョーコ「渡キョーコです。よろしくね。」

アキ「中津川秋穂だ。よろしくな。」

ユキ「東雲雪路です。よろしくね。」

緑谷「緑谷ヤスヒコです。よろしく。」

黄村「黄村ヨシヒトだ。よろしく。」

シズカ「草壁シズカです。よろしくお願いします。」

乙型「キョーコ乙型です。乙型と呼んでください。」

黒澤「黒澤アキラです。よろしくお願いします。」

サブロー「阿久野サブローです。よろしく。」

遊星「不動遊星だ。よろしく頼む。」

ジャック「俺の名はジャック・アトラス。よろしく頼むぞ。」

クロウ「クロウ・ホーガンだ。よろしくな。」

アキ「十六夜アキです。よろしくね。」

龍亞「龍亞です。よろしくね。」

龍可「龍亞の双子の妹の龍可るかです。よろしくお願いします。」

ブルーノ「ブルーノだよ。よろしくね。」

鬼柳きりゅう京介けいけいだ。共に満足に行こうぜ。」

トオル「トオルだ。よろしくな。」

ミサキ「ミサキ……。よろしく……。。」

トリコ「トリコだ。よろしく。」

小松「小松です。よろしくお願いします。」

ココ「ココです。よろしく。」

サニー「サニーだ。よろしく。」

ゼブラ「ゼブラだ。お前ら俺に適応しろよ。」

鉄平「鉄平だ。よろしく。」

滝丸たきまる「滝丸たきまるです。よろしくお願いします。」

マッチ「マッチだ。よろしく。」

千冬「これで諸君のクラスは全員揃った。後は『ドゴーン……!』……!」

一夏「なっ何だ!？」

ジロー「何か、落ちたような音だぞ！」

箒「様子を見に行こう。」

遊星「しかし、どこに落ちたかわからないぞ。」

トリコ「大丈夫だ。ゼブラ、場所は分かるか？」

ゼブラ「南西のほうだ。そう遠くじゃねえ。」

千冬「第三アリーナのほうか。」

漣司「よし、行ってみるか。」

俺達はライディングデュエル専用の第三アリーナに着いた。
そこにいたのはスーツを着た人がベルトとタンクと一緒にアリー
ナの中央で倒れていた。

その10 特訓と学園事情と新たな出会い（後書き）

次は新たな仲間達と共に戦闘です。追記 間違えたので訂正しました。

その11 異世界の人達と二人目の仮面ライダーと集まった仲間達(前書き)

仮面ライダーオーズのあの人と、ながされて藍蘭島、おまもりひまり、相棒のキャラが出ます。

その11 異世界の人達と二人目の仮面ライダーと集まった仲間達

俺達は倒れていた人に声をかけた。

漣司「おい、あんた大丈夫か？」

？「ん・・・ここは？君は誰だ？」

漣司「ここは九路洲学園と言うところだ。俺は桐札漣司。あんたは？」

後藤「俺は後藤慎太郎。」

千冬「私は織斑千冬。後藤。何があつたか話してくれるか。」

後藤「俺はヤミーを倒していたら、そのヤミーが急に光だして気が付いたらここにいました。」

一夏「ヤミー？」

後藤「ヤミーは人の欲望から生まれた怪物なんだ。その欲望はセルメダルになってヤミーの肉体になるんだ。俺はヤミーを倒す仕事をしているんだ。」

篝「あの、ヤミーとやらを倒す仕事をしているって、後藤さんはもしかして漣司と同じく仮面ライダーなのですか？」

後藤「ああって、桐札、君も仮面ライダーなのか？」

漣司「ああ、俺は切り札の戦士、仮面ライダー・・・ジョーカー。」

後藤「俺はセルメダルを使って変身する仮面ライダー・・・バースだ。」

その後、後藤によるとバースは元々装着者がいたらしいが、その装着者が闘えなくなり装着者の意志を継ぎ後藤がバースとなったようだ。

漣司「後藤。俺達と一緒にここ生徒にならないか？」

後藤「いいのか？桐札。」

漣司「ああ、いいですよね千冬さん？」

千冬「全く、勝手に決めおって、まあいいだろ。」

後藤「ありがとうございます。」

その時、三つの光が現れた。どうやら新しい仲間は後藤だけではないようだ。

？「いてて、皆大丈夫か？」

？「私達は大丈夫だよ行人」

？「うーん、緋鞠、皆大丈夫か？」

？「私達は無事じゃ若殿。」

？「亀山君、神戸君無事ですか？」

？「ええ、右京さん俺は無事です。」

？「はい、杉下さん僕も無事です。」

漣司「あんた達、俺は桐札漣司。あんた達は？」

行人「僕は東方院行人とうほういんです。」

すず「私はすずです。」

あやね「私はあやねよ。」

まち「私はまちよ。」

りん「あたいはりんだ。」

みこと「ウチはみことや。」

ゆきの「私はゆきのだよ。この動物達は私の友達だよ。」

ちかげ「私はちかげです。」

梅梅「わ、私は梅梅メイメイといいマス。こちらの河童かどうさんは遠野とんさんといいマス。」

しのぶ「拙者はしのぶでしれる。」

くない「私はないです。」

みちる「私はみちるです。」

優人「僕は天河優人あまかわ ゆうとです。」

緋鞠「野井原緋鞠のいはら ひまりじゃ。」

凜子「九崎凜子くざき りんこです。」

静水久「静水久シズク・・・なの。」

くえす「神宮寺じんぐうじくえすですわ。」

右京「僕は杉下右京すぎした うきょうといます。」

亀山「俺は亀山薫かめやま かおるだ。」

神戸「僕は神戸尊かんべ たけるです。」

話を聞くと、行人達は藍蘭島という島の住民でお花見に行く途中突然光に包まれて、優人達は妖アヤカシを探す途中に突然光に包まれて、右京さん達は刑事で犯人を追跡中に、突然光に包まれていつの間にかここにいたそうだ。

それにしても、後藤といい行人達といい、俺とは違う方法でこの世界に来たようだ。

その時、俺達の周りに黒いもやが出てきた。

『!!!?』

もやからバイオレンスドーパント、ジュエルドーパントを筆頭に怪物が現れた。

クロウ「なんだコイツらは!?!」

漣司「後藤、コイツらは。」

後藤「ああ、ヤミーだ。共に戦ってくれ。」

漣司「もちろん、いくか。」

俺はロストドライバーを装着し、ジョーカーメモリーを、後藤はバーストドライバーを装着し、セルメダルを持った。

『ジョーカー!』

漣司 後藤「「変身!」」

『ジョーカー!』

俺はジョーカーメモリをドライバーに装填し展開し仮面ライダージョーカーに、後藤はドライバーの左側の投入口にセルメダルを入れ、右側のハンドルレバーを回したら、複数のカプセルが出てきてアーマーになり、仮面ライダーバースとなる。

ジロー「おお!カッコいい。」

亀山「まるで特撮だな。」

漣司「さあ、お前達の罪を数えろ!」

俺と後藤はドーパント&ヤミー軍団に立ち向かった。

漣司「数が多いな。」

一体一弱いが、数が多い。

一夏「俺達も加勢するぜ。」

一夏達が来てくれた。一夏、ハヤテ、ジロー、遊星達は俺を、トリコ、行人、優人達は後藤のサポートをしてくれた。

バイオレンス、ジュエルは俺を狙って来るが、

第「やらせるか!」

一夏「漣司ばっか狙ってんじゃねえ!」

ハヤテ「僕を忘れてもらっては困ります!」

ジロー「複数で来るとは悪の風上にも置きぬやつらだ!」

遊星「仲間をやらせはしない!」

箒達の攻撃でドーパント達は吹っ飛んだ。他の皆は、マスカレイドドーパント軍団と戦っている。

後藤「こうなったら。」

後藤バースはセルを投入口に投入し、ハンドルレバーを回した。

『ドリルアーム!』

後藤バースの右肘からカプセルが出てきてそれは右手から右肘にかけてパーツが装着されて巨大なドリルになった。

トリコ「おお!」

後藤バースはカプトムシをモチーフとしたヤミーにドリルアームで突いた。するとヤミーからセルメダルがどんどん溢れてドリルアームにくっついていく。

千冬「なるほど、戦いながら、セルメダルも回収も出来るか。良

くできたシステムだ。」

後藤「皆、止めを刺すから時間稼ぎを頼む。」

すず「わかった。」

ゼブラ「わかったぜ。ただし、ミスすんじゃないぞ！」

後藤「ありがとう！」

後藤バースはドリルアームを解除し、メダルを投入し回した。

『ブレストキャノン！』

今度は後藤バースの左胸からカプセルが出てきて胴体に装着され
巨大なキャノン砲となった。

後藤「さらに！」

後藤バースはタンクからセルメダルを取りだし二枚ずつ投入し、
回した。

『セルバースト！』

後藤バースはそれを繰り返していた。

『セルバースト！』

『セルバースト!』

『セルバースト!』

緋鞠「まだか!」

『セルバースト!』

後藤「よし、充電完了!皆、離れる!」

トリコ達は離れ、後藤バースはブレस्तキャノンから赤い防弾をヤミー達に浴びせた。ヤミー達はセルメダルになった。

漣司「よし、俺も片付けるか。」

俺はISキャリバーを取りだしISメモリを装填した。

『IS インフィニット・ストラトス !マキシマムドライブ!』

漣司「はああああああつ!せいや!」

ISキャリバーから衝撃波が飛び、ドーパント達に当たり爆発した。

昼12時、食堂で皆と昼飯を食べた。これから、面白可笑しく過
ごすメンバーになるからそこが嬉しい。後藤や行人達は生徒、右
京さん達は先生になるそうだ。

例えどんな敵や困難が来ようとも俺達は必ず乗り越えていく。

その11 異世界の人達と二人目の仮面ライダーと集まった仲間達（後書き）

後何話か投稿したら オリ主、ジョーカー、主人公達の設定と入
学式の話を投稿します。

その12 バイクと命名と対の存在(前書き)

遅くなりました。では、漣司のバイクの話です。

その12 バイクと命名と対の存在

3月17日

この日、漣司のガレージに漣司、一夏、篤、後藤、ジロー、ハヤテ、遊星、ブルーノ、トオル、ミサキが集まっていた。

遊星「漣司、お前は廃材から、バイクを組み立てたのか？」

漣司「ああ、スクラップ山脈からパーツを拾って、それ以外は市街地で買って集めて組み立てたんだ。」

ジロー「すごいな。ほとんど完成している。」

漣司「ああ、だがD・ホイールとしては出来てないんだ。」

ブルーノ「僕で良ければ見せてほしい。」

トオル「俺も見させてくれ。」

漣司「ああ、いいぜ。」

ミサキ「ありがとう……。。」

三時間ぐらいで俺のバイクはライディングデュエル専用のバイク、D・ホイールに出来た。

漣司「ありがとう。ようやくできた。」

一夏「何、仲間だから協力して当然だ。」

篤「漣司、このバイクの名前は決まっているのか？」

漣司「そーいや、組み立てるのに夢中で全然考えてなかったな。」

後藤「皆で考えるのはどうだ。」

遊星「そうだな、もうすぐ昼だし、食堂に来た連中で考えないか？」

ハヤテ「そうですね。」

漣司「それじゃ、食堂に行こうか。」

漣司達は食堂に着き、ほとんどの生徒がいたので、昼食を済ませると、ガレージに集めると後藤が皆に言った。

後藤「皆、さっき漣司のバイクが出来たのだが、名前が決まっていないんだ。だからいい名前があったら言ってほしい。」

漣司「ちなみに、バイクのメインカラーは黒で、サブは紫と蒼だ。」

りん「漣司のダンナ。」

漣司「どうしたりん？」

りん「ばいくて、なんだ？」

りんの質問に行人達以外の皆は驚いたが無理もない。

行人と梅梅と遠野以外の藍蘭島の住人は外の交流がなく、明治時代の考え方が根強く残っていたので、現代社会がわかっていないのだ。

ジロー「バイクで言うのは、……(割愛)……と言うのがバイクなんだ。」

ゆきの「そうなんだ。」

りん「こんな便利なもんがあるんだな。」

漣司「改めて聞くぞ。」

ヒナギク「はい!」

漣司「え?それじゃヒナギク。」

ヒナギクはネーミングセンスがないので漣司達は不安になった。

ヒナギク「ブラックカーてのはどう?」

漣司「はい、他には?」

ヒナギク「ちよっ、ちよっと！何初めから聞かなかったことにしているの！？」

漣司「一応聞いてみたけど、ダメだったから、聞かなかったことにしたんだ。」

一夏「花菱達から、雀の雛をチャー坊と言ったり、タヌキをポコ吉と言ったり、カツコいい名前を付けると言ったらスーパーカーと言ったりと聞いたぞ。」

ヒナギク「うぐっ。」

漣司「他には？」

ゆきの「はい！ゆきのはれんれん号がいいと思うの。」

漣司「うーん他に？」

歩「西沢の西からとって、ウエスト・・・」

東宮「いや、東宮の東からとって、イースト・・・」

ナギ「おい、何でお前達の名字から漣司のバイク名を決めねばならんのだ。」

東宮「なんだと・・・」

鈴「へタレは黙ってなさい。」

ラウラ「そうだぞ、ヘタレ。」

ヘタレ「はい……て、またヘタレになっている!？」

静水久「ブラックバードてのはどう……なの?」

クロウ「いや、それ俺のと被っているし。」

雪路「じゃあ……」

漣司「あんたは黙ってる、ヅラ。」

ヅラ「はい……て、私も!？」

サニー「ビューティーブラックのはどうだ?」

漣司「サニーが思うほど美しくないぞ。」

篝「そう言えば、漣司のISの姿はバイクの色と似ているな。」

一夏「そう言えばそうだな。」

漣司「あのISには蒼椿あさぎと名付けているが。」

後藤「だったら、それと対になりそうな名にしたらどうだ?」

漣司「それだったら、いい名が思い付いた。」

トリコ「どんな名だ?」

漣司「黒桜だ。この名が思い付いたら何故かしっくりくるんだ。」

篤「黒桜かなんかいいな。」

花菱「ああ、ヒナよりか断然いい。」

ヒナギク「悪かったわね！でもいい名だわ。」

俺は黒桜に手を置いた。

漣司「黒桜、お前の名は黒桜だ。これからよろしく頼むぜ。」

その夜、漣司は黒桜のメンテナンスにガレージにいたら、東が来た。

東「ヤッホー、れつくん。」

漣司「東さん、お久しぶりですね。」

東「うん、お久しぶりだね。れつくんその子は黒桜で言うんだね。」

漣司「何故知っているんです？」

東「まあ、そこは東さんだからだよ。ブイブイ。」

漣司「流石は東さんで感じですね。」

東「まあそこは置いといて、れっくん、黒桜触らせてくれないかな？」

漣司「いいですよ。」

東はどこからかコードを複数取り出し黒桜に射し込んで空中投影のディスプレイとキーボードを出し、ディスプレイを見ながら、キーボードを叩いていた。

三分後、東はディスプレイとキーボードを閉じ、コードを抜いた。

漣司「何をしたんです？」

東「れっくんて蒼椿の対となるように黒桜と名付けたでしょ。本当に対の存在になるようにしただけだよ。じゃあねれっくん、バイバイ。」

そう言うと東はガレージを後にした。

漣司が東の言ったことの意味が分かったのはもう少し先のお話。

その12 バイクと命名と対の存在(後書き)

次はどの話するか迷っています。

その13 恋する少女達と計画と追跡調査（前書き）

あの3人が漣司に惚れる話です。

後、東さんが漣司と篝の関係を確かめるために動きます。

その13 恋する少女達と計画と追跡調査

3月18日

鈴 side

私達の部屋に、箒以外と楯無さん、千桜、りん、みことが来ていた。

シャルロット「楯無さんも来てどうしたのですか？」

楯無「んー、お姉さんは興味本意で来たと言いたいけどこの子達と同じ理由よ。」

ラウラ「理由？」

千桜「桐札君のことについて聞きたいんだ。」

鈴「漣司のことです？」

りん「実はみこと以外のあたい、楯無さんと千桜とあたいは漣司のダンナに惚れちまつたんだ。」

りん達の顔が真っ赤だわ。まあ、漣司もカッコいいし、女の子には優しいからね。まさか楯無さんまで惚れるとはね。

セシリア「皆さんは漣司さんのどこに惚れたのですか？」

楯無「お姉さんはね、事務関係の仕事を漣司君に頼んだら、漣司君は嫌な顔をしてくれないで、心よく引き受けてくれたのよ。それに仕事で疲れている私に色々ともてなしてくれたことかな。」

千桜「私は、実はアニメとかが好きで皆に気持ち悪がられたら嫌で隠してたんだ。一昨日の夜に桐札君にバレてしまったけど、桐札君はそんな私を受け入れてくれたばかりか、マンガやアニメや特撮のDVDを貸してくれたことかな。」

りん「あたいはダンナに昨日の午後からバイクをやつを細かく教えてくれたんだ。そして、実際、後ろに乗らさしてくれてダンナの背中てこんなにも大きくて頼りになるんだと思つて。それにあたいが女の子らしい着物とか簪付けて見せたら綺麗だつて言ってくれたんだ。」

みこと「うちは行人以上にりん姉え様を骨抜きにした漣司に制裁を下すためや。」

みことのは置いといて、漣司もこんな美人でスタイルのいい人達に持てるとはね。

りん「それで鈴、漣司のダンナはどこ行つたんだ？」

シャルロット「漣司なら、箒と一緒に買い物に行つたよ。」

千桜「なんだって!？」

りん「もしかしてダンナと箒は付き合っているのか!？」

二人は泣きそうになるけど、私達は漣司と箒の関係を話した。

千桜「なるほど、二人は仮面ライダーWの主人公達のような関係か。」

りん「相棒の関係か。それでも羨ましい。」

鈴「まあ、実際私達から見たら付き合っているようにしか見えな
いけどね。」

楯無「でも、漣司君て色恋沙汰には興味がなく、誰とも付き合う
気はなかったよね。」

ラウラ「一夏みたいに唐変木じゃないから、女の子がそういう目
で見るとすぐわかるし、ちゃんと断っている。」

千桜「確かに……。」

りん「ダンナはそういうのにも鋭いからな。」

鈴「ある意味、一夏やハヤテ、ジロー、遊星、トリコ、行人、優
人達よりも攻略は難しいかもね。」

そう、そう言う意味で漣司を攻略するのは難しい。鈍感じゃない
から、漣司は自分を好きになった子達にはちゃんと理由を言って断
っている。

それでも女の子達は諦めずに、漣司にアタックしている。

漣司に惚れた女の子達は漣司が自分達が漣司のことが好き（異性
として）なのを分かってくれているので、私達はそこが羨ましい。

簪「まあ、漣司が好きなことを気づいてくれただけでもいいと思うよ。」

りん「それもそうだな。」

千桜「でも、桐札君にはアピールはしたいな。」

セシリア「それでしたら、楯無さん、千桜さん、りんさんは明日から三日間、一人一日ずつ、漣司さんにアピールするのはどうでしょうか?」

楯無「それいいね。」

千桜「それだったら平等にアピールが出来る。」

りん「よし、それに決めた!」

鈴「順番はクジで決めようか。」

厳選なるクジの結果、一日目は千桜、二日目は楯無さん、三日目はりんとなった。

鈴「私達は束さんが作ってくれた追跡カメラで様子を見るから。」

りん「分かった。」

千桜「今、桐札君と簪はどうしているんだろう?」

セシリア「さあ、今さっき簪さんが出掛けたばかりでしたから。」

コンコン、誰かがノックをした。

鈴「はい、一夏どうしたの？」

来たのは一夏だった。

一夏「楯無さん達も一緒だったのか、ちようどよかった。」

鈴「ちようどよかった？」

一夏「ああ、束さんが全員モニタールームに来てほしいんだって。」

鈴「分かったわ。皆行きましょ。」

私達は一夏と一緒にモニタールームに行った。

一夏 side

俺達はモニタールームに着いた。このモニタールームは教室の約2倍の広さで、故に100人は余裕で入れるほどだ。それにしても束さん、何で俺達を集めたんだろう？

東「いつくん達も来たようだし、話を始めるよ。実は、今日れっくんと篝ちゃんが一緒に買い物に行ったことは知っているよね？」

俺達は頷く。

東「当人達は相棒という関係だけど、私達からすれば2人はできているようにしか見えない。」

俺達は頷く。

東「それでね、2人にそれぞれ追跡カメラを追わせているの。このモニターから映るから、2人は本当に相棒なのか、それとも2人は気付かないうちにできているのか皆で見えて結論を出そうと決めたんだ。」

千桜「なるほど、一理あるな。」

りん「確かに、ダンナも篝も魅力あるし、2人とも異性として意識しているかも。」

楯無「まあ、2人とも恋愛対象にならないかも知れないけど、万が一ということもあるし。」

この3人は、やけに漣司と篝の関係を意識しているなあ。何でだろっ？

鈴「今のアンタじゃ一生分らないわよ。」

何で俺の考えていることが分かるのかね。

東「まあまあいっくん、そこは置いて、早速、繋げるよ」

東さんはモニターのスイッチを押した。

漣司はどうやって女の子をエスコートするのだろうか？

少し興味が出てきた。

鈴「まあ、アンタよりかはマシでしょ。」

セシリア「そうですね。」

シャルロット「そうですね。」

ラウラ「そうだな。」

だから、何で俺の考えていることが（以下同文）。

その13 恋する少女達と計画と追跡調査（後書き）

あの3人にした理由は個人的に気に入っているからです。漣司とのCPにするかどうかも未定です。

箒を相棒にしたのは、漣司にも相棒的な存在が欲しかったのと、自分はファース党で、箒が一夏のことを好きという設定を崩したくないという2つの理由です。

後、これを読まれている方は、アドバイス（特に文章）をよろしくお願いします。

その14 簿の悩みと漣司の存在と2人のデッキ（前書き）

もう仕事とかで週一しか出来ないのもう少し早く出来る努力をします。

その14 箒の悩みと漣司の存在と2人のデッキ

午前9時半 一夏side

東さんが、モニターのスイッチを押すと、駅前の大きな時計台の下に漣司の姿が映っていた。

腕時計を見たり、辺りを見回りにいかにも待ち合わせしている雰囲気を見せていた。

ジロー「待ち合わせしているようだな。」

鈴「確か、箒は10時に待ち合わせしているって聞いたわ。」

小松「今9時半ですから、」

キョーコ「漣司は30分も前からまっているの!？」

シャルロット「そう言えば、箒が初めて漣司と買い物行くとき、箒は一夏以外の男の子と初めて買い物だったから、緊張して30分早く来て待っていたそうだよ。」

ラウラ「おそらく、漣司は今日も箒が30分早く来ると自分で分もそうしたのだろうか。」

行人「漣司は相手に合わせて行動ができるのか。」

ハヤテ「本当に、間が悪い、僕とは違いますよ……。」

ハヤテは落ち込みながら言う。

虎鉄「綾崎、気にするな。それで皆に嫌われても、俺がいるじゃないか！」

ハヤテ「変態は黙っとけー！ー！！！」

ドカツ！バキツ！ボコ！バツコーン！！

虎鉄「ギヤアアアアアアアアアアア！ー！！！」

ハヤテは抱き付こうとした虎鉄をフルボッコにして虎鉄をぶっ飛ばした。

それにしても、ハヤテにあんだけやられているのに虎鉄は懲りないなあ。

すず「あ、箒が来たようだよ。」

すずが言うと箒が来たようだ。箒は珍しく、オシヤレをしていた。うんづん、箒も漣司の相棒になってから、変わったから良かったぜ。

箒『すまない漣司、待たせたか？』

漣司『いや、俺も5分くらい前に来たばかりだし、大丈夫だ。それと可愛いな。似合っているぜ。』

箒『あ、ありがとう……。』

箒の顔が赤い。

漣司『まあ、この言葉は一夏に言ってほしかったんじゃないか？』

箒『まあ、そうだな。』

箒、俺が言っても嬉しいのか。そんなに褒められたいのかー。

漣司『さて、まずは、箒のデッキを作るためにカードショップでカードを買いに行くか。』

箒『ああ、よろしく頼む。』

漣司と箒は歩き出した。

咲夜「それにしても、漣司兄ちゃんも箒姉ちゃんも本当に付き合っているようにしか見えないほど仲ええなあ。」

ラウラ「確かに、2人のコンビネーションは最高だ。」

遊星「それに漣司は一夏、ハヤテ、ジロー、のD・ホイール以外に箒の分まで組み立てている。」

ヒナギク「箒も漣司君のために栄養満点のお弁当を作っているし。」

緑谷「僕らのために練習メニューを2人で考えているし。」

ゼブラ「あの2人の心音や脈拍など聴いたら、上っ面ではない、互いが心の底から信頼しあっているのが分かるぜ。」

サニー「あの2人は最高に美しすぎる……。」

千桜「いいなあ、箒は。」

楯無「漣司君と一緒に買い物ができる。」

りん「今すぐにも、変わってほしい……。」

東「まあまあ3人共、れっくと箒ちゃんは付き合っているわけではないから、焦らずゆっくりやっていけばいいんだよ。」

千桜 楯無 りん「……はい……。」

3人は少し元気になって頷いた。

それにしても、漣司は3人も好意を持ってくれているのに、箒と一緒に買い物なんて漣司で意外と鈍いのか？

鈴「いや、漣司は一夏とは違うから。」

セシリア「そうですね。漣司さんは一夏さんとは違い、女性の気持ちが分かる殿方ですね。」

シャルロット「一夏、乙女の気持ち分からない男は馬に蹴られて死ぬといいよ。」

ラウラ「人の好意に気が付かない男は犬にも劣るぞ。」

なーんで俺の考えていることはバレやすいのかね。それに言い方があるだろう、ちょっと傷つくぜ。

ココ「そこまでだよ。漣司君と箒ちゃんが話はじめたよ。」

ココに言われて俺達はモニターを見た。

漣司と箒は公園のベンチに座っていた。2人以外には居ないようだ。箒は顔が暗くなりながら喋りだした。

箒「やはり駄目だな私。」

漣司「紅椿を持つことにか？」

箒「ああ、私は力を手にしたら、思いつきり使いたくなってしまった。暴走して自分自身を抑えることが出来なくなってしまうんだ。この前の船での戦闘でも、私だけは力のない犯人を見殺しにしてしまっただった。本当に駄目だな私は……。どうしても力を手にしたら力がない人のことが見えなくなっている……。」

箒は両手でスカートを握り、涙目になりながら言った。

漣司「箒……。」

箒漣「漣司……？ふえっ！？」

箒は驚きながら腑抜けた声をあげた。何故なら、漣司は箒の頭を撫でたからだ。

箒「れっ、漣司！？」

漣司「箒、力を手にしたら思いつきり使いたくなってしまつたの。力を持ってない人のことが見えなくなってしまう、自分が持っている力を捨てたい、逃げたいという気持ちは分からなくはない。俺も

ジョーカーの力を正しいことに使えているか今でも悩んでいる。』

箒『漣司……。』

漣司『だがな箒。だからと言って自分の力から逃げては駄目だ。』

漣司は真剣な目で箒を見た。

漣司『前にも言ったが力を持つ者には使命がある。先生は言っていた。力はその力を持つ者にしか使えない。だから力を持つ者はその力から逃げずに正しいことに使えるように努力をして、責任を持ち、先生が言った2つの使命を守ることだ。てな。紅椿は箒、お前の力だ。』

箒『ああ……。』

漣司『その紅椿を正しいことに使えるのは箒しかいないんだ。だから紅椿から逃げずに努力をして、責任を持ち、2つの使命を守るんだ。』

箒『漣司……私は紅椿を正しいことに使えるのだろうか……？』

漣司『その為だったら、一夏や千冬さん、束さんやセシリア達を頼れ。皆箒の仲間だし、そして何より……。』

漣司は一息ついて言った。

漣司『相棒の俺がいるだろ？1人で抱え込まず、俺達を頼れ。お前は俺達の大切な仲間なんだからな。』

『 簞 漣司……うっ……うっ……うっ……。』

簞の目から涙が溢れだした。

簞『うわああああああああああん！！！！』

簞は泣きながら、漣司に抱き付いた。漣司は抱き締め、右手で簞の頭を撫でた。

シャルロット「簞、悩んでいたんだ……。自分が紅椿をもって
いていいのかって。」

ヒナギク「しかも、それを自分の心が壊れそうなくらいに真剣に
悩んでいたのね……。」「

ジャック「だが、簞には俺達がいって何より、漣司がいる。」

まち「漣司様と簞は恋愛ではない、別の信頼関係で結ばれている
わ。」「

右京「それは僕と亀山君と神戸君同じ関係かもしれないね。」

亀山「そうですね、右京さん。」「

神戸「僕達と同じ関係を持った子達に出会えたのは嬉しいですね。」

行人「相棒か……。なんか僕もそういう人が欲しくなったな。」「

優人「だったら僕と相棒になってほしい。」

行人「いいの？ありがとう。」

トリコ「小松、あいつら俺達にも劣らねえコンビだな。」

小松「そーですね。トリコさん。」

キョーコ「何か、2人を見ていると私とジローも家族以上の信頼関係なのかもね。」

ジロー「ん？キョーコ何か言ったか？」

キョーコ「べーつに。」

ナギ「私とハヤテも主従以上の信頼関係かもしれんな。」

ハヤテ「そうですね。お嬢様。」

遊星「俺達が仲間いう絆で結ばれたのは漣司のおかげだな。」

後藤「ああ、漣司は箒ちゃんだけではなく、俺達にはなくてならない存在になったな。」

一夏「ああ、俺達は漣司と共に生きて様々な敵や困難を乗り越えていこうぜ！」

『おーーーーー！！！』

漣司、俺達を会わせてくれて本当にありがとう。

漣司 side

5分くらい経って箒は泣き止んだ。

箒「漣司すまない。涙で服を濡らしてしまって。」

漣司「気にするな。お前の心が楽になったのなら、安いもんだ。」

箒「そうか、ありがとう。」

漣司「どういたしまして。さて行くところか。」

箒「ああ。」

俺達はカードショップに行った。

箒「箒はどの様なデッキにしたいんだ？」

箒「私に合っているのがいい。」

漣司「だったらこれはどうだ？」

箒「真六武衆？」

漣司「ああ、箒は剣道やっているしサムライガール見たいに見えるから、似合っているかなと思ってな。」

箒「そうか、漣司が言うのならこれにしよう。」

俺達はシヨップに置いてある机で椅子に座り、箒の真六武衆のデッキを作った。

漣司「出来たな。」

箒「漣司のおかげだ。ん？漣司、デッキを作っているのか？」

漣司「ああ、なぜかこのデッキを作らなければいけないような気がしてな。」

箒「これは・・・ガスタ？」

漣司「ああ、作ったデッキはライディングデュエル用にしたり、スタンディングデュエル用にしようと思う。」

すると突然2枚のカードが輝きだした。

箒「漣司、どうしたのだ？」

どうやら箒は輝きが見えなかったらしい。

俺は輝きだした2枚のカードを見た。

『風霊使いウィーン』

『ガスタの巫女 ウィンダ』

何故この2枚が輝きだしたのだろうか？今は分からない。

漣司「箒、行こうぜ。」

箒「あ、ああ。」

俺達は近くのラーメン屋でラーメンを食べ、近くのホームセンタ
ーで必要な物を買ひ、午後3時に寮に帰った。

帰ったとたん、楯無、千桜、りんは箒を羨ましそうに見ていた。

まさかあの3人は……。

今考えてもしょうがないか。俺は皆で夕食を食べ、それぞれの部
屋に入っていた。

俺はガスタのデッキを調節してから寝た。

その14 幕の悩みと漣司の存在と2人のデッキ（後書き）

次は漣司が久々に神と会いある頼み事を任されます。

その15 告白と計画と頼みごと(前書き)

ISのコレクションフィギュアを買いいきなり簿が出ました。もう
テンション上がっています。

その15 告白と計画と頼みごと

3月19日 午前2時

漣司 side

今午前2時か。俺は急に目が覚めてしまった。俺は一夏達を起こさないように動き、冷蔵庫に入れてある水が入ったペットボトルを取り出し水を飲んだ。やはり数時間前に話されたことがあってなかなか寝付くことが出来ない。

今から6時間前 3月18日 午後8時

俺達の部屋は俺と同じ部屋で住んでいる一夏、ハヤテ、後藤、行人、優人の6人と篤、ジロー、遊星、トリコ、千桜、楯無、りん、千冬さんの8人、合わせて14人いた。

篤「漣司、実は千桜、楯無さん、りんが漣司に言っておきたいことがあるそうだ。」

漣司「ん？どうしたんだ3人共。」

千桜「漣司君、あなたに本当の私を見てくれた時から好きでした。結婚を前提にお付き合いしてください。」

楯無「漣司君、仕事で疲れている私を癒してくれて、さらに私が

更識の女なのに関係無く普通に私や簪ちゃんと接してくれたことにお姉さん、心を奪われたわ。お姉さんの夫になることを前提にお付き合ひしてください。」

りん「漣司のダンナ、男口調で怪力な男女なあたいをダンナは女の子として見てくれて、あたいのお洒落を笑いもせず綺麗だと笑顔で言ってくれたダンナに惚れたんだ。あたいをお嫁さんにする前提にお付き合ひしてください。」

はい？

漣司「簡単に言うと俺を異性として好きで、付き合ってくださいってことか？」

俺は勘違いにならないように、確認の為に質問した。

千桜「はい！」

楯無「うん！」

りん「ああ！」

どうやらそれで合っているみたいだ。

元いた世界でのことを反省して、女の子を刺激させないように、一定の距離をとって接して（筈は相棒で互いに恋愛感情ないから普通に接していた）いたのに、まさか3人も好意を寄せられているとは、しかもあの楯無が俺に好意を寄せているとは思ひもなかった。楯無の理想結構高そうなんだが、俺が理想に合っているのか、理想と現実のギャップを感じないのかどちらかは分からない。

とにかく、3人共いい娘なんだが、俺は誰とも付き合う気はない。

傷付くかもしれないけど、はっきりと断った方がいいな。

漣司「3人の気持ちは嬉しいが、俺は……。」

千桜「わかっている。漣司君が誰とも付き合っ気がなく断り続けていることを。」

楯無「でも、一回の告白で失敗したからって諦めるお姉さん達だと思っって?」

りん「ダンナは何も思わなくていい。あたい達が勝手に好意を寄せているだけだから。」

……恋する女の子は強いと先生は言ったが、まさにこの事だな。一夏やハヤテに自覚しろと言ったが、これじゃ2人の事が言えなくなったな。

一夏「とりあえず、漣司、19日は千桜、20日は楯無さん、21日はりんがそれぞれお前にアピールすることになっただ。」

ジロー「俺達はその様子を追跡カメラで見ることにしたのだ。」

漣司「もしかして、今日幕と買っ物に行ったときの生き物ではない視線を感じるのはそのカメラということか。」

優人「気付いてたの?」

漣司「俺だけでなく、幕も気付いてたぞ。」

幕「ああ、ただ私達を見てただけで漣司と一緒に無視しただけ

だ。」

漣司「さて、明日生徒会3人娘を黙らせてくるか、放つといたら
筈が弄られそうだし。」

ハヤテ「有り得ますね……。」

千冬「まあ、私がいる限り私がさせないがな。」

千冬さんは凄い、この人に逆らえる人がいたら逆に見てみたい。

遊星「漣司、3人とどのように過ごすか予定組む方がいいじゃないか？」

漣司「確かに、組んだ方がいいな。3人共何か予定あるか。」

千桜「漣司君、私は午前中、買い物に出掛けないか？」

漣司「もしかしてアニメDVDが発売するのかわ？」

千桜「ああ、それだけではなく仮面ライダーも発売されているんだ。午後からそれらを鑑賞したりゲームしたりして過ごそう。」

漣司「分かったぜ。」

楯無「漣司君、お姉さんはね午前中はいつも通り、生徒会の仕事を手伝ってほしいのよ。3人娘と黄村君以外のメンバーは総動員で動いているけど、漣司君がいないと半分ぐらいしか出来ないほどの量なのよ。」

漣司「分かった。その日は必ずその4人は来させるようにはする。」

楯無「ありがと。午後はお姉さんの家に招待したいのよ。」

漣司「更識家の家か？」

楯無「そう、いつも、手伝ってくれている漣司君におもてなしを
したいの。」

漣司「なるほど、分かったぜ。」

りん「漣司のダンナ、あたいは朝はバイクの稽古つけてほしいん
だ。代わりにあたいが大工のことを教えるから……。」

漣司「いいぜ。」

りん「そっか、じゃあ昼からあたいの部屋に来てほしいんだ。そ
れで、新しい服が手に入ったからそれを見てほしいんだ。」

漣司「分かったぜ。」

これで計画は決まった。

トリコ「それにしても、女子の比率が多いな。これじゃ1人の男
子に複数の女子が好意を寄せられることなりそうだな。」

行人「もし、1人の男が複数の女の子に好意を寄せられていてそ
の男が誰も選ばなかったら……。」

後藤「間違いなく、せの男は共有財産とされるだろうな……。」

『……………』

この部屋は沈黙に支配された。

漣司「まあ、ハーレム目指している以外は大丈夫だろう……多分。」

一夏「でも、本人はその気はなくても第三者から見たら『見ろ、これが俺のハーレムだぜ!』としか見えないよな……。」

優人「俺達はそういう節操なしじゃないと信じたい。」

遊星「兎に角、好きな異性は1人に決めよう。」

漣司「ああ……。」

一夏「そうだな……。」

ハヤテ「そうですね……。」

ジロー「色々と問題があるしな……。」

トリコ「いくらオレでも体が持たない……。」

行人「僕なんか鼻血の大量出血で死んじゃうよ……。」

優人「緋鞠や凜子に凄い怒れそうだからな……。」

こうして俺達は共有財産にされないように10時まで話し合った。

それで冒頭に戻る。

俺はちゃんと、3人の中から1人を選ぶことが出来るのだろうか？
例え、選ぶことが出来たとしてもその娘を幸せに出来るのだろうか？

それに3人だけじゃなく、今まで告白してきた娘達もいるし、また俺に好意を寄せる娘がいなくても限らない。

選ばなかったら、俺は確実に共有財産にされるだろう。それだけは色々大変だから絶対に避けたい。

そう考えていると、後ろから声がした。

レイ「おーい…… 漣司君……。」

漣司「レイか久しぶりだな。」

振り向くといたのは俺をこの世界に転生させたレイだった。

レイ「漣司君覚えてくれたんだ…… 嬉しいよ……。」

漣司「まあ、あんなことがあったから、忘れたくても忘れないよ。それより何かあったのか？」

レイ「なぜ、そう思ったの？」

漣司「いくら自分のせいでもこの世界に転生した俺を見に来るほど暇ではないはずだ。何かあって俺のところに来たんじゃないか？」

レイ「流石だね〜　その通りだよ漣司君〜　実は頼みがあるの。」

話によるとカードの精霊がいて、精霊を使って悪いことをしているアホがこの世界にいるらしい。そのアホ達をこらしめてほしいとのことだ。

漣司「ああ、引き受けるよ。」

レイ「ありがとね〜　後、漣司君ジョーカーメモリ以外のメモリを出してくれる？」

俺は言われたようにメモリを出した。

レイ「漣司君このメモリの力関係を教えてあげるね〜」

レイがこれから話したことはまた俺に覚悟と力をくれた。

その15 告白と計画と頼みごと(後書き)

取り敢えず続きます。

その16 メモリと神の説教と3枚のカード(前書き)

今回の話で12本のメモリがわかります。

その16 メモリと神の説教と3枚のカード

俺は言われたようにメモリを出した。それにしても、結構メモリがあるな。 ジョーカーに アクア、サイクロン、ダークネス、フレイム、グランド、アイス、メタル、ライト、スカイ、サンダー、ボイス、ウェーブの13本だ。Wの約2倍だぞ。

レイ「今から12本のメモリの力関係を教えるね〜。まずはどのメモリも強弱関係なくジョーカーとの適合率は100%だから安心してね〜。でも一度使うと漣司君の体力が非常に消耗してしまうから気を付けてね。」

漣司「何回か使う内に慣れることは出来るか？」

レイ「出来るけど、あんまりして欲しくないな。」

漣司「分かった、分かった、体力をつけるから泣きそうな顔はやめてくれ。」

レイは本当に泣きそうだった。それほど俺のことを本気で心配してくれたからだ。

レイ「ありがとう。メモリの能力を教えるね。まずは風のサイクロンメモリは超高速の移動が可能で、スピードと2本の青竜刀を武器に敵を倒せるよ〜」

漣司「なるほど、カブトのクロックアップと同じようなもんか。」

レイ「次に雷のサンダーメモリ、付属の近接ブレードとマシンガ

ンに雷の力宿らせて広範囲の攻撃と貫通能力で大量の敵を倒せるし、学園の1年分を賄える電気を供給することが出来るんだよ〜」

漣司「なるほど、戦闘以外でも役に立ちそうだ。」

レイ「そうだね〜」次に金属のメタルメモリは最高の攻撃力の三ツ又槍と最高の防御力の盾を持ち、特殊な電磁波を出して、地中の鉱物を金属にして仲間達の支援が出来るんだよ〜」ただし、全フォーム中スピードが最弱だけだね。」

漣司「スピードを落として余りある能力があるのか。」

レイ「次に地のグラウンドメモリ、これは全フォーム中パワーと姿勢制御に特化して両腕に付いているガントレットを武器に、さらに周囲の重力をコントロールすることが出来るんだよ〜」

漣司「重力操作って、えげつないな・・・。」

レイ「次は波動のウェーブメモリは波動の力を使って自分も仲間
の能力を強化する事が出来るんだよ〜」因みに武器は二刀一対の
ガンブレードだよ〜」

漣司「完全にサポート系のメモリか。」

レイ「音のボイスメモリは聴覚に優れていて、武器は鈴が付いた
錫杖で攻撃も防御も支援も音を使って闘うことが出来るんだよ〜」

漣司「ゼブラとほぼ同じかあ。」

レイ「空のスカイメモリはウイングスラスタに付いている20機のピットとドリルランスで闘うことが出来て、さらに超音速の飛行が可能だよ〜」

漣司「ランスはともかく、ピットは使いこなせれるかな。」

レイ「次に氷のアイスメモリは弓矢を使った遠距離の戦い方で、冷却能力と低温維持能力に優れているよ〜。さらに周囲の水分を凍らせて、氷を使う戦い方が出来るんだよ〜」

漣司「みちるに教えてもらおうかな。」

レイ「次に光のライトメモリはアックスを使った戦い方で、腕力、広範囲攻撃、高温耐性に優れていて、固有能力は湖の水を一瞬で蒸発させる高熱線を発光することが出来るんだよ〜」

漣司「これもえげつないな。」

レイ「次に闇のダークネスメモリは視覚、視野、瞬発力に優れていて、武器は鎌で、あらゆる攻撃や防御を拒絶することが出来るんだよ〜」

漣司「使い方によってはある意味最強だな。」

レイ「次に水のアクアメモリは潜水能力、感知能力に優れていて、手甲型の剣と水の盾、固有能力の水を操ることが出来て、柔軟な戦い方が出来るんだよ〜」

漣司「これって、楯無のIS、ミステリアス・レイディみたいだな。」

レイ「うふふ 最後に・・・炎のフレイムメモリは、視覚、キック力、飛行能力、飛行補助能力、空間認識能力に優れていて、武器は他のメモリの力を引き出せる手甲型のフレイムスピナーだよ〜
固有能力はあらゆる攻撃を吸収し、炎に変換させる能力だよ〜
12本のメモリの中で全体的に戦闘能力が高いね〜」

漣司「多分、ヒートより強いんだろうな。」

レイ「これで説明終わり〜」

レイは両手を挙げて体を伸ばしていた。

レイ「まあ、入学までは使うことが出来ないと思うけど、仲間達と相棒の篝ちゃんの為に絶対に無理はしないだね。」

漣司「ああ、努力はする。」

レイ「そこは、約束するぜとか言っただけ〜」

漣司「仲間達の為には無理をすることがある。」

レイ「でも、仲間達は漣司君に無理することを望んでないと思うけど。」

漣司「……………」

レイの正論に俺は何も言えなくなった。

レイ「漣司君、君が仲間達のことを大切に思っているように、仲

間達も漣司君を大切に思っていることを忘れてたらダメだよ」

漣司「わかった、約束する。」

レイ「うんうん 素直でよろしい いい子いい子」

そう言っただけ俺の頭を撫でた。

レイ「じゃあまたね〜」

漣司「おう、仕事頑張れよ。」

レイ「うん、ありがとう それじゃ・・・って、あー！忘れる所だった。」

帰ろうとしたレイはあわててこっちに来た。

漣司「どうした？」

レイ「あのね、漣司君、ナンバーズというカードを集めて欲しいの。」

漣司「ナンバーズ？」

レイ「うん、ナンバーズは持った人の欲望や負の感情を増幅させて、暴走させるカードなの。」

漣司「わかった、引き受けるぜ。」

レイ「ありがとう。この本で回収したナンバーズを入れてね。後、

私の手元にあった2枚のナンバーズとこの子を託すから頑張っ
てね。」

レイはちょうど100ページある本と3枚のカードを俺に渡した。

『No.39 希望皇ホープ』

『No.17 リバイス・ドラゴン』

『銀河眼の光子竜』

レイ「それじゃ頑張っ
てね〜。」

レイは光となって消えた。

うーん、今1時間くらいたったか。寝よう……。ZZZ……。。

その16 メモリと神の説教と3枚のカード(後書き)

次からは千桜、楯無、りん順番で漣司にアピール作戦を実行します。

その17 嚴重注意と疑問と2人の死の危機（前書き）

今回は少しですけど早めに投稿できました。

千桜、楯無、りんそれぞれ2話ぐらいに分ける予定です。

その17 嚴重注意と疑問と2人の死の危機

3月19日 午前8時 学園地区 ????

ブルー「よし、これで、編集出来たな。」

ブラック「漣太君と箒の買い物記録がな。」

レッド「ふう、泣きながら漣太君に抱き付く箒ちゃんは可愛いねえ〜。」

イエロー「これは高く売れるぞ。」

ヘタレ「これで、いつも僕達をしごいている漣司や篠ノ之の弄りのネタが出来たな。」

ブルー「儲けるし弄りのネタが出来たし……。」

『おいしい話ですな〜。』

千冬「ほう……?」

ビクッ!?!?

千冬「その話……。」

ギギギギツ 5人が後ろに振り向く音

千冬「ぜひ、私にも聞かせて欲しいものだ……。」

そこには鬼神のオーラを纏った千冬がいた。

5人『ギャアアアアアアアアアアアアアアア!!?』

しばらくの間、この5人を見た者は誰もいない。

同時刻 市街地区 駅前

漣司 side

千桜「漣司君、待たせたな。」

漣司「いや、俺も5分早く来たただけだ。」

アピール「1日目は千桜との買い物だ。」

千桜とは同じくアニメや特撮好きなのが意気投合してたまに一緒

に鑑賞していたりしていたが、まさかそれで俺に好意を寄せるとは。千桜は俺にバレて以来は自信を持ったのか、ナギだけではなく、ヒーロー物が好きな、簪や龍亞とも話をするようになった。

漣司「それじゃ行くか。」

千桜「うん……。」

千桜は右手を差し出した。

千桜「漣司君、手を繋いでくれるか？」

漣司「あ、ああ。」

俺は吃りながらも、千桜の手を繋いだ。

千桜「ありがとう。」

漣司「どういたしまして。」

俺と千桜は大きいお友達御用達のア　メイトと言うところに行っ
た。

元の世界でもあったのだが自分は特撮全般というより仮面ライダー
ジョーカー、W、ディケイド、オーズがカッコよく憧れていただ
けで、オタクみたいに熱狂的にアニメや特撮が好きではない。

千桜「漣司君は入るのは初めてなのか？」

漣司「まあな。機械弄りそのものが俺達の青春みたいなもんだっ
たしな。」

千桜「意外だな。漣司君はケンカとかばっかりかと思っただけど……。」

漣司「あはは……。まあそう思われるのも無理ないか。確かに中学、高校ケンカしていたけど、週に1回あるかないかだし、俺自身ケンカ売ってんじゃなく、売られたケンカは買うという感じでしていたんだ。」

千桜「ごめん、漣司君をそういうふうに見ていたんだ。」

漣司「気にすんな、それよりも早く入ろう。欲しいものが売り切れる前に。」

千桜「うん、そうだな。」

漣司 side out

同時刻 学園地区 九路洲学園 モニタールーム ハヤテ side

ヒナギク「ハル子、冷静を装っていても、緊張しているのが分かるわ。」

咲夜「ハルさんも、漣司兄ちゃんの前では骨抜き状態やな。」

愛歌「本当ね、咲夜さん。」

愛歌さんが暗い笑みで弱点帳という学習帳で何か書いています・
・？。

ナギ「千桜はよく鍛えられた腐女子だからな。漣司に恋心を持つたことで、青春しているのだ。」

歩「ナギちゃん、腐女子は言い過ぎだと思っけど……？。でも千桜さん生き生きしているんじゃないかな。」

弾「漣司もまんざらではないようだな。」

数馬「けど、箒とは違う雰囲気だよな。」

凜子「だって、漣司と箒は恋愛感情がないから、互いが遠慮しないで信頼関係が築いていけるじゃない。」

伊澄「千桜さんだけではなく、楯無さん、りんさんは漣司様に好意を寄せているから少しでもアピールしようと、箒さんとは違う雰囲気になるのはしょうがないわ。」

セシリア「漣司さんはそれも承知の上で、3人のお誘いを了承したのでしょうね。」

皆さん、漣司君と千桜さんの買い物に興味を持ち、様々な意見を出しあっています。

それにしても漣司君は最終的には誰を選ぶのでしょうか？

ただ分かってるのは箒さん（名前でいいと言われた）は選ばない。漣司君と箒さんは友情や恋愛感情を越えた相棒という絆で結ば

れていますから、やはり千桜さん、楯無さん、りんさんの中から選ぶのでしょうか？

ハヤテ「結局、漣司君は誰を選ぶのでしょうか？」

トリコ「さあ？こればかりは漣司でないとわかんねーな。」

クロウ「3人の内の誰かもしれねーし。」

ジャック「他の女かもしれんしな。」

くえす「確かに3人だけではありませんからね。」

優人「筈の次に親しい女ひとで、織斑先生と東さんだっけ？」

梅梅「ひゃあああ、漣司サンと織斑先生が生徒と教師の禁断の……」

遠野「こらこら、梅梅、何であんたはすぐそーいう方向に話を持っていくのよ？」

小松「でも案外似合っているのかもしれないよ？」

皆さん色々意見を出しあっています。でも最終的に漣司君の気持ち次第ですから僕達は見守りましょう……ってあれ？

ハヤテ「そう言えば、花菱さん、瀬川さん、朝風さんはどこ行っただけでしょうか。」

ジロー「そう言えば、黄村も朝から見てないな。」

鈴「ヘタ・・・あず・・・東宮もいないわね。」

シャルロット「鈴、今ヘタレと言いかけて、名前忘れそうになっ
たよね・・・?。」

今の5人は興味を持ちそうなのにどうしたのでしょうか?

千冬「その馬鹿者共なら・・・。」

そう言いながら、織斑先生が入ってきました。

千冬「ちよつと前においしい話をしていたので、私もせのにおいし
い話とやらを聞かせてもらった。」

セシリア「どんな話ですか?」

千冬「昨日の、桐札と篠ノ之の買い物映像をくだらんことに使お
うとしたらしい。そこで私も混ぜてもらった。」

行人「それで、その5人は?」

千冬「しばらく見ないと思うぞ?」

織斑先生は何をしたのでしょうか・・・。正直不安です・・・?。

千冬「心配するな綾崎。少し嚴重注意をただけだ。」

何で心の方が聞こえるのですか!?

千冬「少し分かりやすかったただけだ。」

ハヤテ「はぁ……。」「

千冬「それから梅梅。」「

梅梅「ハ、ハイ!」「

千冬「教師が自分の教え子に惚れるわけがないだろ。馬鹿者。」「

梅梅「ひゃあああ、ごめんなサイ〜!。」「

千冬「分かればいい。」「

鈴「あれ？織斑先生で思い出したけど、一夏は?」「

ラウラ「そう言えば、箒も居ないな。」「

ああ、皆さんようやく気付いてしまったようですね。

シャルロット「後藤さんはなにか知らないの?」「

後藤「実は昨日の夜話し合いが終わった後の話だが、漣司は一夏と箒ちゃんに映画のチケットを渡したようだけど。」「

遊星「漣司は箒が一夏と一緒にいるために色々協力しているんだ。」「

ラウラ「ほう、漣司が私の嫁に、浮気を協力しているのか?」「

シャルロット「漣司、いくら相棒だからって不公平じゃないかな
」？」

鈴「よし！一夏と漣司、共に殺そう！」

セシリア「ふふっ、うふふふふふふふふふ。」

4人共恐いです……。？。一夏君、漣司君、殺されないように祈
ってます？。

ハヤテside out

その17 嚴重注意と疑問と2人の死の危機（後書き）

次は一夏と筈の所も書く予定です。

その18 Wデートと少女達の怒りとメイドさん(前書き)

サブタイトルについての感想をお願いします。

その18 Wデートと少女達の怒りとメイドさん

同日 午後1時 市街地区 千桜side

漣司（ゾクッ!?!）

漣司君は一瞬身震いして、辺りを見回り出した。

千桜「漣司君、どうかしたのか?」

漣司「い、いや別に（何だ、この悪寒と俺に対しての殺気を感じたが・・・、もしかして一夏と筭をデートさせたことがセシリア達にバレたのか!?!）。」

千桜「そう。体調悪かったら、言ってくれ。」

漣司「ああ、ありがとう。」

漣司君は笑顔で返事してくれた。

漣司君は私なんかの女の子でも優しく話しかけてくれる。だから私も漣司君に惚れてしまった女の子達の1人になってしまったのだ。

漣司「千桜、そろそろ帰るか、それで一緒に見ようぜ。」

千桜「そうだな、2人きりで見ような。」

漣司「ああ、」

私と漣司君は学園に帰ろうとしたら映画館から織斑君と篤が出てきた。

千桜 side out

同時刻 市街地区 映画館 篤 side

一夏（ゾクッ!?!）

一夏が身震いして、辺りを見回り出した。

篤「一夏?どうしたのだ?」

一夏「いや、何でもねえ（何だこの悪寒と俺に対しての殺気を感じたが・・・気のせいか?）。」

篤「そうか、体調が悪かったら言ってくれ。」

一夏「ありがとう。」

一夏はお礼を言ってくれた。

漣司には感謝しないとな。昨日の夜、話し合いが終わった後漣司

が私と一夏に映画のチケットを渡してくれたのだ。漣司は相棒である私に一夏にアピール出来るチャンスを与えたのだ。今、見ているのはコメディ系の映画だ。いきなり恋愛系は一夏が断ると思った漣司が私と一緒に見に行ってくれるようにと漣司なりの配慮だった。

一夏「それにしてもこの映画面白いよな。」

箒「ああ、私はあまりこういうは見ないが、たまに見るのはいいな。」

一夏「箒、楽しめたか？」

箒「ああ、漣司には礼を言わないとな。」

一夏「・・・箒、少し話が変わるのだが・・・。」

一夏は顔を近づいてきた。

箒「どっ、どうした一夏？」

私は慌ててしまった。

一夏「タツグの模擬戦が終わった後の昼飯の時、漣司と箒が相棒になった時の話をしたよな。」

箒「ああ、そうだがどうしたのだ？」

一夏「箒は俺と漣司に対して特別な感情を持っていると言ったな。漣司は相棒という関係になった。じゃあ、箒は俺とはどういう関係になりたいんだ？」

箒「えっ、えっと、それは……。」

一夏「俺とはただの幼なじみの関係ではダメなのか？」

あの唐変木の一夏がこんなことを言うなんて思いもしなかった。

一夏とはただの幼なじみの関係じゃなく恋人関係になりたい。でも、一夏はどれだけアピールやデートに誘っても勘違いをして全然効果がなかった。

箒「いつ、一夏、あまり顔を近づけるな、はっ、恥ずかしい……。」

一夏「あっ、悪い。」

一夏は謝りながら、顔を離してくれた。

箒「一夏、まだ心の整理がついてないから、しばらく時間をくれないか？」

一夏「あ、ああ、いいぜ。」

話が終わった直後に映画が終わった。

一夏「箒、映画が終わったから出ようか。」

箒「ああ、そうだな。」

私達は映画館から出たら、漣司と千桜がいた。

箒side out

同時刻 市街地区 映画館前 漣司side

漣司「一夏、箒どうだった？楽しめたか？」

一夏 箒「あ、ああ……。」

一夏達に会ったから声を掛けたのだが、2人共何か雰囲気微妙だな。一夏は何かモヤモヤしているみたいだし、箒は顔真っ赤だし。取り敢えず千桜に箒を任せて俺は一夏を連れて、事情を聞いた。

一夏から映画館の話聞いた。

漣司「なるほど（一夏は箒を意識している証拠なのか？）。」

一夏「漣司、俺は箒と漣司が仲良くすればするほど自分では分からない感情を抱いてしまうんだ。俺このままじゃ箒を傷付けてしまふんじゃないかと思ってしまふんだ。」

漣司「一夏。」

俺は一夏の肩に手を置く。

漣司「一夏、それはゆっくり考えてもいいんだ。今は分からなくても、一夏だったらいつか分かるはずだ。」

一夏「漣司……。」

漣司「さて一緒に帰るか！」

一夏「ああ、漣司ありがとう。」

漣司「どういたしまして。」

俺達は学園に帰って来たが、突然、さっきの殺気を感じた。

上を見上げると、ブルーティアーズのピットの一機が一夏の頭目掛けて撃ってきたから俺はISキャリバーで弾き飛ばした。

さらに上を見上げると、ISを纏ったセシリア、鈴、シャルロット、ラウラがいた。かなり怒っているみたいだ。

ラウラ「一夏、私の嫁なのに浮気をするとはな。」

シャルロット「一夏、何で僕達に黙ってたのかな？」

鈴「よし！今から拘束して聞き出そう！」

セシリア「一夏さん私達とたっぷりOHANASHIしましょう。」

「

ヤバイ！4人共かなり怒っている。特に、鈴とセシリアは俗に言うヤンデレとなっている。

漣司「一夏、箒と千桜を連れて逃げる。」

一夏「漣司は？」

漣司「俺がなるべく時間を稼ぐ。」

一夏「すまん、漣司、借りは返すから箒、千桜行くぞ！」

箒「ああ！漣司、死ぬな！生きて帰ってこい！」

千桜「えっ、ちよっと・・・うわ!？」

一夏と箒はISを展開し、千桜は箒に連れられた。

ラウラ「逃がすか『ジョーカー!』!？」

漣司「変身。」

『ジョーカー!』

俺は仮面ライダージョーカーに変身し、セシリア達の前に立った。

漣司「邪魔させてもらっぜ。一夏が惨殺死体になる恐れがあるからな。」

ラウラ「ほう?だったら一夏の浮気を協力した漣司が一夏の代わ

りに惨殺死体となつてもらおうか？」

シャルロット「漣司、覚悟してね？」

鈴「漣司、泣いて土下座しても許さないからね！」

セシリア「うふふ、さあ、漣司さん、踊り狂って下さいな。私達が奏でる鎮魂歌レクイエムで！」

漣司「来な！俺がお前らの怒りを全て受け止めてやる！！」

俺は、皆に仲良くやって欲しい。だから皆の怒りや悲しみは全て受け止めてやる。

今誓つたが流石にこれはちとキツイ。

ラウラが言ったように気を抜いたら、俺は本当に惨殺死体になつてしまうな……。

それだけは気を付けながら皆の怒りを受け止めた。

2時間後、騒ぎを聞き付けた千冬さんの伝家の宝刀、出席簿の出席簿アタックがセシリア達の頭に炸裂し、事なきを終えた。なんとかなつた。千冬さんありがとうございます。

さらに5時間後、午後8時、一夏達は訳あって別の部屋で寝るらしい。

漣司「久し振りだな1人で寝るのって。」

そう言いながらは俺は部屋に入った。

？「お帰りなさいませ、ご主人様」

部屋にはミニスカのメイドさんの千桜だった。

漣司「もしかして、千桜か？」

ハル「流石です漣司君。ですが今は咲夜さんの専属メイドのハルです」

漣司「では、ハルさん。どうして、メイド姿になって俺達の部屋に？」

ハル「咲夜さんが『メイド姿になってご奉仕すれば、漣司兄ちゃんでも喜ぶんとちゃうか？』とそれで来ました。」

うーん、俺はメイドさんにご奉仕されて喜ぶ趣味は無いんだが、千桜の好意を踏みにじる訳にはいかな。

漣司「それじゃハルさん。」

ハル「は、はい！」

どもっている。何を想像していたのだろう。

漣司「昼間見えなかった仮面ライダーのDVD、一緒に見るか。」

ハル「！、はい！」

こうして俺と千桜もといハルさんは深夜12時まで、仮面ライダーのDVDを鑑賞した。

その18 Wデートと少女達の怒りとメイドさん(後書き)

次は楯無の話の前に漣司のカードの精霊の話です。

その19 精霊と価値と決意（前書き）

遅くなつてすみません。それでは漣司と精霊の話です。

その19 精霊と価値と決意

3月20日 深夜1時 学園地区 九路洲学園 学生寮 漣司達の部屋

漣司と千桜がDVDを見終わって千桜が自分の部屋に帰り、漣司は明日(日付が替わっている)ので正確には今日(に備えて就寝した1時間後のお話である。

漣司の机にあるデッキのカードから数枚、光が出て漣司が寝ているベッドの周りに集まった。

? 『マスター……いい加減起きてよ……』

? 『ダメだよ。ウイン、マスターを無理矢理起こそうとしたら。』

? 『レイ様が一目置かれている男、桐札漣司……』

? 『我らナンバーズを使うに相応しい者か……』

? 『ふん、レイの奴、新しいマスターが出来るからと言ったが、まだこんなガキじゃねーか。』

? 『おいギャラクシー。お前はマスターを馬鹿にしているのか!』?

? 『別に?希望皇?只、こんなガキがお前や俺の力を正しい事に使えるか疑問に思ったただだよ?お前はこのガキが俺達の力を正しい事に使えるか絶対に信じることが出来るか?』

? 『それは・・・。』

? 『ほら見る。お前も信用してねーじゃねーか。』

? 『だからこそ、我らが見極めなければならない。』

? 『大丈夫だよりバイス。マスターは仲間の事を信じてるから私達も信用してくれるよ。私達はそこを信じようよ。』

? 『ウインダ・・・そうだな。』

漣司「んー・・・?何か騒がしいな。」

? 『あ、マスターが起きた』

漣司「ん?」

漣司 side

楯無の手伝いの為に早め（もう深夜だが）寝ることにしたのだが、急に話し声が聞こえたから目が覚めてしまった。やがて意識が覚醒した俺の目の前に、筭との買物に光だしたカード、『風霊使いウイン』、『ガスタの巫女 ウィンダ』、レイから譲り受けた『No. 39 希望皇ホープ』、『No. 17 リバイス・ドラゴン』、『銀河眼の光子竜』が半透明で居た。

ウイン『マスターおはよう』

漣司「あ、ああ、おは……って、まだ深夜だが……。」

ウイン『あつ、そうだね』

ウィンダ『ウイン……ちゃんとしっかりしてよ……。』

このウインと言う子はなんだかレイと微妙に喋り方が似ているな。

漣司「で、君達がレイの言っていたカードの精霊で、俺は君達のマスターになるってことか。」

ウイン『うん　私は風霊使い　ウインだよ　ウインって呼んでね』

ウィンダ『私はガスタの巫女　ウィンダです。私とウインは双子です。私のことはウィンダとお呼び下さいマスター。』

ホープ『私は100枚のナンバーズの内の1枚、39の数字を持つ希望皇ホープです。これからはマスターの剣と盾となります。よ』

ろしくお願いします。』

リバイス『我もホープと同じくナンバーズの内の1枚、17の数字を持つリバイス・ドラゴンだ。マスターに我の力を授ける。』

ギヤラクシー『俺は銀河眼の光子竜だ。ガキ、漣司と言ったな。俺はお前を信じてねえがレイの言っていたことが本当かどうか試させてもらうぜ。』

漣司『ああ、皆も今日から俺……いや、俺達の仲間だ。』

ウィン『うん』

ウインダ『はい!』

ホープ『マスター!』

リバイス『そうだな。』

ギヤラクシー『ふん。』

漣司『マスターになったのはいいが、俺は精霊を悪用する奴を倒しながら、後、残り98枚のナンバーズを回収すればいいんだな?』
ウインダ『はい。ただ、ナンバーズはナンバーズとの戦闘でしか破壊されないんです。ですからマスターもナンバーズを持つ者とデュエルする時はマスターもナンバーズを使わざるおえないでしょう。』

ウィン『だからマスター。ナンバーズを賭けたデュエルは私達のデッキより、もう1つのシンクロドラゴンデッキで戦って。少し調

整したらエクシーズモンスターであるナンバーズを召喚出来ると思うから。』

ギャラクシー『まあ漣司、希望皇やリバイスに頼らなくても俺がいるんだ。俺の方が頼りになるぜ。』

ホープ『お前は どうして俺達に喧嘩を売るようなことしか言えないんだ？』

ギャラクシー『このような性格なんでね。それに俺は対ナンバーズのエクシーズキラーのカードだ。言うなればナンバーズの回収の為だけに生まれてきたような存在なんだよ。それ以外の価値は無。銀河眼の光子竜。』！？何だ漣司？』

漣司『頼む、銀河眼の光子竜。その為だけに生まれてきたとかそれ以外の価値が無いとかそう言う悲しいことは言わないでくれ。』

ギャラクシー『。。。』

漣司『確かにお前を作った奴はその為だけに作っただけでそれ以外の価値が無いようにしたかもしれない。だが、人であろうと精霊であろうと、生きる自由はあるし、自分が生きる価値は自分で決めることも出来る。』

ウインダ『マスター。。。』

漣司『俺はお前をナンバーズ回収の為だけに利用することはしない。お前が少しでも生きる価値を探したいのならいくらでも協力するし、信用出来ないなら俺を試してもいい。だから。。。』

ギャラクシー『ギャラクシー。』

漣司「え？」

ギャラクシー『フルネームで呼ばなくていい。ギャラクシーでいい。呼ばなかったら、協力しねーぞ。』

漣司「分かった、ギャラクシー。」

ギャラクシー『ふん……。』

ギャラクシーはカードの中に戻っていった。

ウィン『やれやれ、素直じゃないんだから。』

ウィンダ『凄いですね、マスター。ギャラクシーの心を開かせるなんて。』

ホープ『何せ、あいつが自分のことをギャラクシーと呼ばせるのは、俺ら精霊以外はレイ様とマスターだけだからな。』

漣司『そうなのか。』

リバイス『口ではああ言っているが、無意識にマスターを信じてみようと思ったのだろうな。』

ウィン『何にしてもこれからよろしくね。』

漣司「ああ、よろしくな。」

ウィン達もカードに戻った。

漣司「俺は仲間達を守る。」

何処まで出来るか分からないが、皆の悲しみや怒りを受け止めてやる。例え・・・俺が決めた決意で俺自身に残酷な運命が待っているように俺は仲間達を守って見せる！！

その19 精霊と価値と決意（後書き）

漣司の決意が後に仮面ライダージョーカーに大きな変化を与えます。12本のメモリ使用の後になりますけど・・・。

その20 生徒会と欲望とナンバーズを賭けたデュエル（前書き）

遅くなりすみません。色々とやることがあったので、それでは始め
ります。

その20 生徒会と欲望とナンバーズを賭けたデュエル

3月20日 午前8時 学園地区 九路洲学園 生徒会室 漣司
Side

楯無「ちやお 漣司君」

ヒナギク「おはよう、漣司君。」

漣司「おはよう。楯無、ヒナギク。他のメンバーは？」

楯無「他の皆は後もう少しで・・・あ、来たわ。」

蘭「皆さんおはようございます。」

ハヤテ「今日も手伝いに来ました。」

一夏「今日も頑張るか。」

篝「ああ、そうだな。」

虚「さあ、セシリアさん達も頑張ってください。」

セシリア 鈴 シャルロット ラウラ「・・・はい・・・。」

「

今日は楯無が俺にアピールする日だ。

今生徒会室には俺、一夏、箒、楯無、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、蘭、ヒナギク、ハヤテ、虚、千桜、愛歌がいる。

俺は楯無の計画で、一夏、箒、ハヤテはただの手伝いで、セシリア達は無断でISを動かし、騒動を起こした罰で生徒会の仕事をすることになった。

俺が何で生徒会の仕事を手伝っているのは、ハヤテ達が来た次の日の3月15日の事だ。俺は体力がないナギや花菱達の特訓のメニューを考えながら散歩していたら、珍しく悩んでいる顔している楯無がいたから俺は声をかけた。

漣司『よう、楯無、悩んでいるようだな。俺でよかったら相談に乗るが?』

楯無『ああ、漣司君ありがとう。実はね。』

楯無の話によると、今誰がこの九路洲学園の生徒会長になるか学園の理事長達が議論中とのことだ。今有望株なのは前に在籍していた学校の生徒会長の楯無、ヒナギク、蘭、黄村の4人、男でISを使える一夏、紅椿を手に入れ予想以上の成績を上げた箒、ある意味反面教師となり、影響力のある東宮、容姿も宛ら、運動神経、知能、戦闘能力が高く正義感がある後藤と最後に俺もその有望株の1人となってしまうた。

俺の場合、箒と紅椿の力を引き出したのと、模擬戦の時のジョーカーの戦闘能力の高さ、この2つが有望株となった理由らしい。生徒会長に戦闘能力は関係ないと思うが……。

もし、議論で決まらなかつたら、生徒達に決めさせるという、生徒達に押し付けるといふ形になるらしい。

もし、生徒達に決めさせたら間違いなく、能力や人望以前に、容姿端麗な楯無やヒナギク、蘭、篝の誰かに絞られてしまう。女の子を生徒会長にさせる気持ちがある俺には分からない。俺は後藤が一番適任だと思うが。話を元に戻そう、楯無はその生徒達に決めさせることで悩んでいた。一癖も二癖もある生徒だらけの学園だ。外見だけで決めてしまう生徒達の判断で生徒会長を決めてしまうのは危険ではないかと悩んでいたのだ。

楯無『でね、漣司君は誰が生徒会長に適していると思う？』

漣司『後藤が一番適任だと思う。』

楯無『そこは俺だと言って欲しかったな。』

漣司『俺は元の世界では生徒会長に推薦されたけど、辞退したからな。』

元の世界では生徒会長立候補者の演説で俺は辞退を宣言したからな。俺は今回も演説があつたら、多分辞退するだろう。

漣司『生徒会長するということは自分がしたいことする時間が減るだろ。それが嫌なんだよ。』

楯無『確かに、漣司君は自分がしたいことをしたいという欲望に忠実だね。』

漣司『俺だけじゃない。一夏は仲間達を守りたいから強くなりたいたいという欲望。篝は一夏や俺と仲間達と共に戦いたいという欲望が彼女に紅椿という力が授かり、後藤は世界を守りたいと伊達という人の死なせないという2つの欲望で彼はバースとなることが出来た。』

ハヤテだつて主であるナギや友人達を守りたいと言うのも立派な欲望だ。』

楯無『確かにね。』

漣司『ジローも世界を征服したい欲望が彼は知恵と力を身に付けた。遊星も仲間達の絆を守りたい、その欲望が彼をクリアマインドと言う境地を見ることが出来た。トリコもうまいものを食べたい欲望が彼に欲望を満たせるように進化が出来た。行人も俺達やず達と一緒に過ごしたい欲望が彼自身や俺達の体も心も成長させることが出来る。優人は人も妖も共に生きたいと言う欲望が彼を天河家の光渡しの力を手に入れた。千冬さんも一夏を守りたい欲望が彼女をIS最強の操縦者となった。右京さんも真実が知りたいと言う欲望が数々の難事件を解決することが出来た。』

楯無『皆、欲望があるからこそ、頑張ることが出来るのね』

漣司『そういう楯無こそ、欲望はあるんじゃないか？』

楯無『お姉さんはね、恋人が欲しいと言う欲望なのよね。』

漣司『恋人？楯無のことだから恋人がいるかと思つたが？』

楯無『うーん、お姉さんはね、好きな人がいて告白しても、貴方とは釣り合わないとか貴方と付き合つのは恐れ多いとか私を過大評価し過ぎて全て断られてしまうの。』

漣司『なるほどな。そうだ、楯無が恋人出来るまで色々と協力するぜ。』

楯無『え？』

漣司『多分、楯無が告白した奴は楯無の外見や能力の方を見てしまつて、断つたんじゃないか？楯無も本当は恋する可愛い女の子だと見てくれたら、いいんじゃないか？』

楯無『（ドキッ、私は綺麗とか美人だとか言われたけど可愛い女の子では初めて言われた。』

漣司『ん？どうした楯無？俺、変なことを言ってしまったか？』

楯無『ううん、何でもないのよ。』

漣司『そうか（楯無、まさか・・・、まさかな。）。』

楯無『あつ、そつだ漣司君。協力してくれるなら生徒会の仕事を手伝つてくれない？』

漣司『生徒会の仕事？いいぜ。仕事を早めに終わらせれば楯無の恋人探しの時間も作れるしな。』

楯無『ありがとう漣司君（漣司君と一緒にいてこの気持ちが無なのか突き止めよう。）！』

漣司『ああ、つてそんなに抱き付くほど嬉しいのか？』

楯無『お姉さんはね、女の子の頼みを快く引き受けてくれる男の子は好きよ。』

漣司『そうか・・・。』

っで、それから楯無の頼みがあったら、手伝っている。この時
だろう、楯無が俺に好意を持っていたのは。生徒会の仕事の時、
やたらと楯無が俺に対して熱い眼差しで見ってくる。部屋に戻って来
た時、どうやって入ったのか裸エプロンの楯無が『お帰りなさい。
ご飯にします？お風呂にします？それともわ、た、し？』と言って
迫って来た。その時はちゃんと服着させて、帰って貰ったが、あれ
は流石に精神的に堪えた。

漣司「一夏、箒悪いな。手伝って貰って。」

一夏「何、漣司には昨日の借りがあるからな。」

箒「そうだと漣司。相棒である私に何でも言ってくれ。協力する。」

漣司「ありがとう。」

このまま順調に仕事が進み、終わるかと思っただが、急に、俺は強
力な力の気配がこっちに来るのを感じた。

箒「なっ、何だ？」

一夏「何か来る！」

箒も一夏も何か感じたようだ。皆はキョトンとしているようだ。

扉が開いて現れたのは黄村と東宮だ。しかし様子がおかしい。

ヒナギク「東宮君、黄村君どうしたの？貴方達は織斑先生から謹慎うけているはずじゃ……。」

漣司「ヒナギク！2人に近付くな！！」

ヒナギク「え？……キヤア！？」

2人に近付いたヒナギクは衝撃波によって吹き飛ばされ、壁に激突し、気絶した。

ハヤテ「ヒナギクさん！」

楯無「2人ともから良くないものを感じるわ。」

ウィン『マスター！』

漣司「ウィン！まさか2人は……。」

ウィン『うん、2人共、ナンバーズを1枚ずつ持っている！』

一夏「漣司、お前の隣にいるその子誰だ？」

篝「一夏も見えるのか？」

ハヤテ「僕も見えますよ。」

楯無「お姉さんも見えるわ。」

。 漣司「説明したいところだが、今それどころじゃないようだ・・・」

黄村『レンジ、イチカ、ハヤテ、オマエタチバツカリイイオモイヲシヤガツテ!!』

東宮『オマエタチブタヤロウヲオシテ、カツラサンニミトメテモラウ!!』

漣司「ナンバーズに心を奪われている。かといって、2人相手はキツいな。」

箒「漣司、私も闘う！」

漣司「箒!？」

箒「漣司、相棒としてお前と共に闘いたいんだ!!」

漣司「分かった。ただし、無茶だけはするなよ。」

箒「ああ!!」

黄村『フタリ、イイフンイキヲダスナ!!』

漣司「悪い悪い。それじゃ始めようか。お前達のナンバーズを回収させてもらう!!」

俺と箒は遊星に作って貰ったデュエルディスクを装着し、デッキを入れた。

漣司 第「いく(ぜ)(ぞ)！」

『デュエル！！』

ナンバーズを賭けた最初のデュエルが始まる。

その20 生徒会と欲望とナンバーズを賭けたデュエル（後書き）

今回、自分の解釈で主人公達の欲望を書いてみましたがどうでしょうか？

後、ナンバーズを賭けたデュエルは急展開しすぎでしたでしょうか？

感想、評価お待ちしております。

その21 簿の努力と漣司の逆鱗とボロボロになった2人（前書き）

Wikiで調べてカードの解説まで書いたら長くなったよ、おかしいところもあると思います。

その21 幕の努力と漣司の逆鱗とボロボロになった2人

一夏side

漣司、幕ペアと黄村、ヘタ・・・じゃなく東宮ペアのデュエルが始まる。

『デュエル!!』

漣司 LP8000

幕 LP8000

黄村 LP8000

東宮 LP8000

漣司「先攻は俺が貰う、俺のターン、ドロー！」

漣司「俺はモンスターはセットして、カードを二枚伏せてターンエンドだ。」

漣司 LP8000

手札3枚

裏守備モンスター1体

伏せカード2枚

漣司はこれで様子見だろう。

東宮『ボクノターン、ドロー!』

東宮『ボクハ手札カラ『ジェリービーンズマン』ヲ召喚スル!』
フィールドから剣と盾を持った豆戦士が現れた。

ジェリービーンズマン

地属性 レベル3 ATK1750/DEF0

【植物族】

ジェリーという名の豆戦士。自分が世界最強の戦士だと信じているが、その実力は定かではない。

東宮『サラニカードヲ1枚フセコレターンエンドダ。』

東宮 LP8000

手札4枚

攻撃表示モンスター1体 伏せカード1枚

伏せカードを1枚だけ？戦況をひっくり返すカードなのか？

東宮『私のターン、ドロー!』

東宮『私は手札から、魔法カード、『紫炎の狼煙』を発動する!』

紫炎の狼煙

通常魔法

自分のデッキからレベル3以下の「六武衆」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

箒「私は『紫炎の狼煙』の効果でデッキから『真六武衆 ミズホ』を手札に加える。」

箒は『真六武衆 ミズホ』を手札に加える。

箒「私は『真六武衆 ミズホ』を召喚。」

箒は手札に加えた真六武衆の紅一点、ミズホを召喚した。

真六武衆 ミズホ

炎属性 レベル3 ATK1600/DEF1000

【戦士族・効果】

自分フィールド上に「真六武衆 シナイ」が表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。また、1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上に存在する「六武衆」と名のついたモンスター1体をリリースする事で、フィールド上に存在するカードを1枚を選択して破壊する。

箒「フィールド上に『真六武衆 ミズホ』が表側表示で存在する時、手札にある『真六武衆 シナイ』を特殊召喚する事が出来る。私は『真六武衆 シナイ』を特殊召喚する。」

ミズホの隣に、棍棒を2つ持ったシナイが現れた。

真六武衆 シナイ

水属性 レベル3 ATK1500/DEF1500

【戦士族・効果】

自分フィールド上に「真六武衆 ミズホ」が表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。フィールド上存在するこのカードがリリースされた場合、自分の墓地に存在する「真六武衆 シナイ」以外の「六武衆」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える。

東宮『リバーズカードオープン！永続罫『血の代償』ヲ発動！』

血の代償

永続罫

ライフポイントを払う事で、モンスター1体を通常召喚する。この効果は自分のメインフェイズ時及び相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

ん？このタイミングで血の代償？ただ単に発動するのを忘れたのか？

箒「私はカードを2枚伏せターンエンドだ。」

箒 LP8000

手札2枚

表側表示モンスター2体

伏せカード2枚

黄村『オレノターン、ドロー。』

黄村はどう出る？

黄村『オレハアクロバットモンキーヲ召喚！』

黄村は機械で出来たサルを召喚した。

アクロバットモンキー

地属性 レベル3 ATK1000/DEF1800

【機械族】

超最先端技術により開発されたモンキータイプの自立型ロボット。非常にアクロバティックな動きをする。

黄村「オレハアズマミヤノレベル3、ジェリービーンズマントレベル3、アクロバットモンキーヲオーバーレイ！」

2体のモンスターが光の球体になり突如地面に渦が生じ球体が吸い込まれた。

黄村「2体ノモンスターデオバーレイ・ネットワークヲ構築！
エクシーズ召喚！アラワレロ」No.20 蟻岩土ブリリアント^{きがんと}」

渦の中から、不思議な物体が現れ、変形し、銀と紫の巨大な蟻になった。右の羽に何だろう？数字みたいなのが刻まれている。多分20？

No.20 蟻岩土ブリリアント

光属性 レンク3 ATK1800/DEF1800

【昆虫族・エクシーズ/効果】

レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。自分フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

セシリア「なんですの！？あのモンスターは!？」

鈴「何だろう？あのモンスターから変なのを感じるわ。」

愛歌「聞いた事あるわ。確か最近、デュエリスト達が次々と事件を起こしていると。」

千桜「愛歌さん、もしかしてその人達って……。」

愛歌「ええ、その人達はナンバーズというエクシーズモンスターを使っていたと聞いた事があるわ。」

黄村「バトル！レンジノモンスターニコウゲキ！」

ブリリアントは漣司のモンスターに攻撃した。漣司のモンスターは赤いドラゴンだ。赤いドラゴンは破壊された。

漣司「マスクド・ドラゴン仮面竜のモンスター効果発動！仮面竜が戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚する。俺はランサー・ドラゴニートを特殊召喚する。」

漣司のフィールドに槍を持った緑色の竜が現れた。

仮面竜

炎属性 レベル3 ATK1400/DEF1100

【ドラゴン族・効果】

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを1体を自分

フィールド上に特殊召喚することができる。

ランサー・ドラゴニユート

闇属性 レベル4 ATK1500/DEF1800

【ドラゴン族・効果】

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、そのモンスター守備力を越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

漣司「この瞬間、リバーズカードを発動！速攻魔法、地獄の暴走召喚。」

地獄の暴走召喚

速攻魔法

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスターを1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

漣司「俺は仮面竜の効果で特殊召喚したランサー・ドラゴニユートを選択し、デッキから同じくランサー・ドラゴニユート2体を特殊召喚する。」

上手い、破壊されたのに漣司のフィールドに一気に3体を召喚させるとは。

ハヤテ「凄い、一気に3体も……。」

蘭「漣司さんは破壊されるのを予想して地獄の暴走召喚も伏せたのですか。」

ラウラ「しかし、何故黄村は表側表示の箒のモンスターより、裏側表示の漣司のモンスターに攻撃したのだ？」

黄村「カンタンダ。マズ、レンジヲサキニタオシ、アトカラシノノヲ、ユツクリイタブルノサ!!」

東宮「シノノハオンナノクセニオレヲヒンジャクアツカイシヤガツテオレヲケンドウサセボロボロニスルンダゾ!!」

鈴「いや、それアンタ達が本当に貧弱過ぎて、練習終わった後、後ろに振り向いた箒を不意打ちしようとして逆に返り討ちにあったんじゃない。自業自得よ。」

東宮「ダマレソレニシノノハセンヨウキヲモツテイルガソレハカイハツシャノイモウトダカラトイウミウチヒイキデモラツテイルジャナイカ!!」

箒「うっ!？」

箒は紅椿を手に行っているがそれは身内だからと見られていることが多い。俺はそんな奴らが腹がたつ。

黄村「オレタチニハドリヨクシロトイイナガラ、ジブンハナンノクノウモセズISヲモラツテイル!」

箒「わ、私は……。」

ヤバい、箒が震えて両手で顔隠して泣いている。あいつら！

ブチッ！！

俺が東宮達を殴りにいこうとしたら何かが切れたような音がして不意に止まってしまった。

東宮「ナンバーズハデュエリストニリアルニダメージヲアタエル
コトガデキル！シノノヲココロモカラダモボロボロニシテ「おい
「！？」」

漣司が東宮の会話を遮るようにドスの効いた声で東宮達を睨んだ。
今わかった。今の切れたような音は漣司本気で怒っているんだ。

漣司「お前ら、黙って聞いていれば好き放題言いやがって。いい
加減にしろ。あ？」

ゾクッ！！！！

漣司の声ってこんなに恐かったか？

漣司「お前ら箒がどれ程努力したかも知らないで、好き勝手に言
ってんじゃねえよ。」

箒「漣司……。」

箒「箒は確かに姉である東さんに紅椿を譲り受けた。だがな、そ

れは箒が人一倍に努力をして、それを見た東さんが箒の為に紅椿を作り、箒に託した。それに箒は紅椿を貰ってからは紅椿を使いこなせるように一層特訓して、努力したんだ。朝早くから夜遅くまでな」

東宮 黄村「!!?」

漣司「箒はな、やらされている特訓だけしかしていないお前らは違うんだよ。努力している量も力を持つ責任も覚悟もな!!」

漣司、箒の事もこんなにも理解しているなんて、俺は知らなかった。俺も理解出来るのか？箒の事を……。

漣司「はつきり言ってやる。俺も箒も、お前らみたいな覚悟も責任も努力もない奴どんな力を持つとが、負ける分けねえだろ。」

東宮 黄村「オマエハイッタイナニモノダ!？」

漣司「俺は篠ノ之箒の相棒、仮面ライダー……ジョーカー。桐札漣司だ。」

漣司は一呼吸を置いて言った。

漣司「さあ、ナンバーズで箒を傷付けようとしたのと、箒を泣かせた、お前達の罪を……数える!!!!」

黄村「ダメレ!オレハターンエンドダ!」

黄村 LP8000

手札5枚

表側攻撃表示モンスター1体
伏せカードなし

漣司「俺のターン、ドロー！」

漣司はドローしたカードを見てニヤリと笑った。

漣司「箒、お前のモンスター、俺に託してくれるか？」

箒「わかった。漣司も私に力を貸してくれ！」

漣司「ああ、ありがとう。俺は箒のレベル3『真六武衆 ミズホ』とレベル3『真六武衆 シナイ』をオーバーレイ！」

ミズホとシナイは光の球体になり、地面の渦に吸い込まれた。

漣司「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる『No.17 リバイス・ドラゴン』！」
渦から不思議な物体が変形して、右の角みたいなところに17の数字が刻まれた竜になった。

No.17 リバイス・ドラゴン

水属性 ランク3 ATK2000/DEF0

【ドラゴン族・エクシーズ/効果】
レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、このカードの攻撃力を500ポイントアップする。

このカードのエクシーズ素材が無い場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

漣司「更に、自身の2体のレベル4のランサー・ドラゴニユートをオーバーレイ！」

3体いる内の2体のランサー・ドラゴニユートが光の球体になり、地面の渦に吸い込まれた。

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる」NO.39 希望皇ホープ」！

『リバイス・ドラゴン』と同じように、物体が変形して左肩に39の数字が刻まれた翼の戦士が『ホープ！』と叫びながら現れた。

NO.39 希望皇ホープ

光属性 ランク4 ATK2500/DEF2000

【戦士族・エクシーズ/効果】

レベル4モンスター×2

自分または相手モンスターの攻撃宣言時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

このカードがエクシーズ素材の無い状態で攻撃対象に選択された時、このカードを破壊する。

セシリア「漣司さんもナンバーズを!？」

シャルロット「しかも2体も・・・。」

ハヤテ「でも、黄村君達みたいに操られてないみたいですけど・・・。」

ハヤテの言う通り漣司は ナンバーズを出してもなんの変化もな

い。

漣司「更にチューナーモンスター『デルタフライ』を召喚！」

デルタフライ

風属性 レベル3 ATK1500/DEF800

【ドラゴン族・チューナー】

1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してレベルを1つ上げる事ができる。

漣司「『デルタフライ』のモンスター効果発動！1ターンに1度『デルタフライ』以外の表側表示のモンスターのレベルを1つ上げる事ができる。俺は『ランサー・ドラゴニユート』のレベルを4から5に上げる。」

ランサー・ドラゴニユート

レベル4 5

漣司「俺はレベル5となった『ランサー・ドラゴニユート』とレベル3『デルタフライ』をチューニング！」

『デルタフライ』が3つの光の輪になり、『ランサー・ドラゴニユート』を包み『ランサー・ドラゴニユート』も5つの光の球体になる。

漣司「勝利の切り札は、何時でも俺の手の内にある！シンクロ召喚！」

3 + 5 = 8

漣司「現れる『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」
悪魔みたいなドラゴンが現れた

レッド・デーモンズ・ドラゴン

闇属性 レベル8 ATK3000/DEF2000

【ドラゴン族・シンクロ/効果】

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。このカードが自分のエンドフェイズ時に存在する場合、このターン攻撃宣言をしてない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

鈴「凄い・・・ナンバーズだけじゃなく、シンクロモンスターも召喚するなんて・・・」

一夏「そう言えば、漣司のデッキはドラゴン族のシンクロモンスターを召喚する前提に構築したデッキって漣司が言ってたな。」

ラウラ「なるほど、ナンバーズも召喚できるように少し調節したのだな。」

漣司「『リバイス・ドラゴン』のモンスター効果発動。1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事によって『リバイス・ドラゴン』の攻撃力を500ポイントアップする」

『リバイス・ドラゴン』は自身の周りに回っている2つの光の球体の1つを取り込んだ。

リバイス・ドラゴン

オーバーレイ・ユニット2 1

ATK2000 2500

漣司「バトル！『ホープ』で『ブリリアント』を攻撃。ホープ剣・スラッシュ！」

『ホープ』は剣をブーメランのように放り投げて、キャッチし、ブリリアントに斬撃を与え、破壊した。

黄村「グアツ！？」

黄村 LP8000 7300

漣司「更に『リバイス・ドラゴン』と『レッド・デモンス』でダイレクトアタック！バイス・ストリーム！アブソリュート・パワーホース！」

『リバイス・ドラゴン』は口からエネルギー弾を、『レッド・デモンス』は手から炎の鉄拳を黄村に浴びせた。

黄村「ギャアーーーー！！！」

黄村 LP7300 1800

漣司「俺はカードを1枚伏せターンエンドだ。」

漣司 LP8000

手札2枚

表側攻撃表示モンスター3体

伏せカード2枚

箒「さすが、漣司だな。その、ありがとう……。」

漣司「いいって、相棒を侮辱されて黙っている奴はいないからな。」

東宮「クツ、ボクノターン。ドロー！」

東宮「ボクハ『血の代償』ノ効果発動！ライフを500ポイント
ハライ、『ジェリービーンズマン』ヲ召喚。サラニサントイメノ『
ジェリービーンズマン』ヲ召喚。」

東宮 LP8000 7500

東宮「ニタイノレベル3『ジェリービーンズマン』ヲオーバーレ
イ！ニタイノモンスターデオーバレイ・ネットワークヲ構築！エ
クシーズ召喚！アラワレロ『No.30 破滅のアシッド・ゴーレ
ム』！」

東宮が所持（もとい操っている根源）している紫の体で右足に3
0の数字が刻まれた不気味なゴーレムが現れた。

No.30 破滅のアシッド・ゴーレム

水属性 ランク3 ATK3000/DEF3000

【岩石族・エクシーズ/効果】 レベル3モンスター×2

自分のスタンバイフェイズ時、このカードのエクシーズ素材を1
つ取り除くか、自分は2000ポイントダメージを受ける。

このカードのエクシーズ素材が無い場合、このカードは攻撃でき
ない。

このカードがフィールド上に存在する限り、自分はモンスターを特殊召喚する事ができない。

東宮『バトル！』『アシッド・ゴーレム』デ、ガラアキノシノノノニダイレクトアタック！』

東宮の奴！箒を！

一夏「箒！！！」

『アシッド・ゴーレム』の拳が無慈悲にも箒を襲って・・・。

漣司「『希望皇ホープ』のモンスター効果発動！『希望皇ホープ』のオーバレイ・ユニットを1つ取り除く事によって、モンスターの攻撃1度だけ無効にする。ムーンバリア！」

希望皇ホープ

オーバレイ・ユニット2 1

襲って来なかった。箒の前に『ホープ』が現れ翼を盾にして箒を守った。

漣司「これ以上、相棒に指一本触れさせない！」

東宮『クツ、コレデターンエンドダ。』

東宮 LP7500

手札3枚

表側攻撃表示モンスター1体

永続トラップ1枚

箒「私のターン。ドロロー！」

漣司「箒！『アシッド・ゴーレム』を破壊するために『リバイス・ドラゴン』の効果を発動させて攻撃を！」

箒「しっ、しかしそれでは！」

漣司「『リバイス・ドラゴン』もそれを望んでいる！」

箒「わかった。『リバイス・ドラゴン』のモンスター効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事によって『リバイス・ドラゴン』の攻撃力を500ポイントアップする！」

リバイス・ドラゴン

オーバーレイ・ユニット1 0

ATK2500 3000

箒「バトル！『リバイス・ドラゴン』で『アシッド・ゴーレム』を攻撃！」

『リバイス・ドラゴン』と『アシッド・ゴーレム』は相討ちになって破壊される。

箒「東宮に『レッドデー・モンズ』、黄村に『ホープ』でダイレクトアタック！」

東宮『グアッ！』

黄村『ギャアーーーーー!!..!』

東宮 LP7500 4500
黄村 LP1300 0

黄村を倒した。それにしても、ナンバーズを所持している奴はナンバーズの攻撃を直接喰らっても問題無いみたいだ。箒だけがボロボロにされる恐れがあったんだ……。

箒「私はこれでターンエンドだ。」

箒 LP8000

手札3枚

モンスターなし

伏せカード2枚

漣司「俺のターン、ドロー！」

漣司「バトル！『ホープ』と『レッド・デーモンズ』で東宮にダイレクトアタック！」

東宮『グアツーーーーー！！！！』

東宮 LP4500 0

一夏「やったな！漣司！箒！」

漣司「ああ、それじゃ早速……。」

漣司は気絶している東宮と黄村から一枚ずつカードを取り出した。

『No.20 蟻岩土ブリリアント』

『No.30 破滅のアシッド・ゴーレム』

漣司「『No.20 蟻岩土ブリリアント』、『No.30 破滅のアシッド・ゴーレム』、回収完了。」

セシリア「あの、漣司さん。ナンバーズとは何なのでしょう？」

漣司「ある人から聞いたんだが、ナンバーズと言うのは所持したら、そいつは最もしたい欲望が増幅して暴走するもんだと。俺はその人に100枚あるナンバーズの回収を頼まれている。」

鈴「けど、何でアンタはなんともないのよ？」

漣司「それはこいつが守ってくれるからだ。」

漣司が見せたのは1枚のカードだった。

『銀河眼の光子竜』

漣司「こいつには精霊が宿っていて、ナンバーズの力を抑えてくれるんだ。さっきいた子は『風霊使い ウィン』だ。さて、ヒナギク、東宮、黄村を保健室に運ぼう。一夏、黄村を運ぶの手伝ってくれ。」

一夏「わかった。」

俺達は黄村を保健室に運んだ。

『No.30 破滅のアシッド・ゴーレム』
『No.20 蟻石土ブリリアント』

残りナンバーズ、96枚

その21 幕の努力と漣司の逆鱗とボロボロになった2人（後書き）

感想、評価、アドバイス、間違っている点があったらよろしくお
願いします。

その22 食材調達と2人の少女とWバーズ（前書き）

やっとこの物語の13人の主人公を集結させる事が出来ました。

その22 食材調達と2人の少女とWバース

3月20日 午後1時 密林地区 漣司 side

昼間の件で俺達は騒ぎを聞き付けた千冬さんと山田先生の事情聴取を1人ずつ執る事になった。ナンバーズの事を話したら、2人は信じてくれてナンバーズの管理は俺で構わないとのことだ。

今回の件で楯無の家に行くのは急遽中止にした。楯無の事だから何かしらのアプローチはしてくると思うが……。

俺は今トリコを先頭に一夏、箒、ハヤテ、後藤、行人、優人、ジロ、遊星らと一緒に密林地区に入ろうとしていた。

何故ここにいるのか順を追って説明しよう。ナンバーズのデュエル後、食堂で昼食を食べていたら、食堂のおばちゃん達が困っているのを見て、声をかけた。何でも近日中に俺達1組のクラスの何人が料理大会を開いて料理を振る舞うらしい。っで、その料理に使う食材が足りないとの事らしい。

俺達は何時も世話になって（主に食事で）いるおばちゃん達の為に食材を調達する事にした。

必要な食材が書いたメモを受け取ると、俺、一夏、箒、ハヤテと途中で合流した後藤達と事情を話して行く事にした。

そして冒頭に戻る。

箒「漣司、『リバイス・ドラゴン』は大丈夫か？」

漣司「ああ、今は寝ているが、大丈夫だと。」

箒「そつ、そうか。よかった……。」

箒が安堵の溜め息を漏らす。

一夏「そつといえば漣司、精霊は他にもいるのか？」

漣司「ああ、『風霊使い ウィン』、『ガスタの巫女 ウィンダ』、『希望皇ホープ』、『リバイス・ドラゴン』、『銀河眼の光子竜』だ。」

俺は5枚のカードを皆に見せた。

ギャラクシー「漣司、お前、ナンバーズの時、俺を出さなかったのはどういうことだ？」

『銀河眼の光子竜』のカードからギャラクシーがデフォルメされた感じで実体化し俺を睨んだ。

漣司「悪い、『ホープ』と『リバイス』をリリースしてお前を出していたら箒を守れなかったからな。」

ギャラクシー「そうかい。だがな漣司、お前が俺の為に言ってくれた時から一応マスターとして認めているんだ。命懸けで守ると誓ったんだよ。だから俺をもっと頼って『ギユム』!？」

箒が突然、ギャラクシーの言葉を遮るように、ギャラクシーを抱いた。まるでぬいぐるみを抱くような感じで。

箒「お前がナンバーズの負の力から私の相棒を守ってくれているのだな。礼を言う。ありがとう。」

ギャラクシー「なっ、なんだ小娘!？」

箒「私は小娘ではなくて箒という名がある。それよりも、漣司を守ってくれているのはいいが、自分の事も大事にしてほしい……。」

箒が悲しそうな目でギャラクシーを見る。

一夏「そうだぜ。自分の事も大事にしねえと。」

ハヤテ「1人では限界があります。」

後藤「頼らない!!強いてわけじゃない。」

遊星「仲間達と力を合わせる事が大事だ。」

ジロー「仲間達と一緒に生きていく事は何よりも素晴らしい事だぞ。」

トリコ「皆で食つメシも旨いし。」

行人「この素晴らしさが分からなかったら。」

優人「俺達が教えてあげるよ。」

ギャラクシー「……お前ら、漣司と同じく、俺を心配するんだな。」

ギャラクシーはカードの中に戻った。

漣司「全く素直じゃねえな。暫くそつととしてやるか。」

トリコ「そつだな。さて漣司、頼まれていた食材ってなんだっけ？」

漣司「えっと、この密林地区で採れる『BBコーン』、ブルーブラッド『ホネナシサンマ』、『シャクレノドン』、他、数種類。」

後藤「よし、日が暮れない内に早く調達に行『きゃあああああ！』！？」

ジロー「今の悲鳴は！？」

遊星「この奥からだ！」

行人「行ってみよう！」

俺達は悲鳴の方に向かって走り出した。

?side

?「ぐうっ！」

？「大丈夫！？夜空！」

夜空「ええ、イブキは？」

イブキ「私はなんとか・・・。」

私は法仙ほうせん夜空よんくう。そしてもう1人の少女がイブキだ。私達はパートナ―で一緒に仕事をしている。

今私達は、食材の調達の仕事に失敗をして依頼主の怒りを買ってしまい追われている身だ。なんとかこの密林まで逃げる事が出来たのだが、変な植物の化け物が私達を襲って来た。

イブキ「きゃあ！」

夜空「イブキ！・・・ああっ！」

イブキは化け物の根に弾き飛ばされ、私は助けに行こうとしたが、化け物の根が私の両手両足首、腰、首に巻き付きX字のように磔にされ、捕らわれてしまった。

ミシミシミシミシ！

巻き付かれている所の骨が嫌な音をたてている。

夜空「くそっ！」

私は魔力を使い根を斬ろうとしたが、力が抜けて上手く魔力を練り出す事が出来ない。化け物が急速に成長している。コイツ私の魔力を吸収して成長しているのか！

夜空「あ、ああ……。」

ヤバい、魔力を吸われ過ぎて意識が朦朧としてきた……。

イブキ「夜空！」

イブキが私の名を叫ぶ。すまない、イブキ……

『IS<インフィニット・ストラトス>!マキマシマムドラ
イブ!』

漣司「はああああ、セイヤ！」

後藤「はあ！」

1人の男が持っている大型剣で私の巻き付いた根を切り裂き、私をお姫様抱っこで私を担ぎ、もう1人の男が形の変わった機関銃のような物で化け物を蜂の巣にしてイブキの方に駆けつけた。

漣司「大丈夫か？」

男は私に聞いた。

夜空「大……丈……夫だ。」

漣司「大丈夫ではなさそうだな。今はゆっくり寝ろ。」

その言葉に私は安心して、意識を手放した。

漣司 side

駆けつけた時、女の子が植物の化け物の根に捕らわれているのを見て、俺はISキャリアバーにISメモリを装填し、マキマシマムドライブを発動して根を切り裂き、女の子を助けた。

漣司「大丈夫か？」

少女「大……丈……夫だ。」

女の子は弱々しく答えた。

漣司「大丈夫ではなさそうだな。今はゆっくり寝ろ。」

俺の言葉に安心したのか、女の子は寝てしまう。この時、不謹慎だと思いが可愛い寝顔ですーすと可愛い寝息をたてていた。

後藤「漣司、その子は無事か？」

後藤もバースバスターで化け物を蜂の巣にし、もう1人の女の子を助け、俺に聞いた。

漣司「ああ、今は寝ている。そっちは？」

後藤「ああ、こっちも緊張の糸が切れたのか寝ている。」

トリコ「漣司、後藤、ソイツはゴブリンプラントだ！ソイツを倒すにはかなりの火力のいる兵器で倒さないと再生してキリがない！」

漣司「後藤、俺達が時間を稼ぐから、プレストキャノンで！」

後藤「わかった！」

俺はロストドライバー、後藤はバーストドライバーを装着した。

『ジョーカー！』

漣司 後藤「「変身！」」

『ジョーカー！』

後藤「プレストキャノン、最大出力！」

『ブレストキャノン！』

『セルバースト！』

俺達は即離れて、ゴブリンプラントはブレストキャノンの最大出力を浴びて、爆発した。

ズズーン！！

その時、体長5メートルはあろうかというシャープな形の戦闘ロボが俺達の目の前に現れ男の声がした。

男『お前達、その娘達を渡してもらおう！』

漣司『何でだ？』

男『そいつらは私の依頼を失敗して私に大損を与えたんだ！よって制裁を与えたる！』

漣司『だったら尚更渡すわけにはいかな。女の子を痛め付けるなんて男の風上にも置けねえ奴だ！』

男『だったらお前達もまとめて始末してやる！』

ロボが俺達を襲って来た。

漣司『がつ！』

「夏「ぐあっ！」

後藤「うわぁ！」

俺達はロボの巨大な腕に吹っ飛ばされた。

ジロー「くっ、ジローワイルドドリルキック！」

トリコ「18連！釘パンチ！」

ジローのマントがジローの右足にドリルのように纏い、トリコの右腕の筋肉が膨らみ、ロボの右腕にジローのキック、トリコのパンチが炸裂した。

ズドドドドドドドドドドドッ！！

ズガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

反動でロボの右腕は吹っ飛ばされた。

ジロー「何て固い！」

トリコ「もう釘パンチは打てねえか……。」

ジローとトリコは暫く闘えないか。

後藤「皆は逃げろ！」

行人「後藤さんは！？」

後藤「捨て身の戦法だが、ブレストキャノン最大出力を奴の至近距離で放つ！」

遊星「待て！それじゃ後藤が……！」

後藤「下手すれば相討ち……だが上手く行けば……。」

男『お前達何をごちゃごちゃ言ってやがる！』

ロボは右足を上げて踏み潰そうとした。

ハヤテ「しまった!？」

ババババババババン!

『!?!?』

俺達は驚いた。俺達を踏み潰そうとした右足に銃弾が撃ち込まれロボはバランスを崩し倒れた。

?「後藤ちゃん!そんな捨て身の戦法、教えた覚えはないけど?」

現れたのは、バースバスターを構えた大男が俺達を助けた。

後藤「伊達さん!」

伊達「だて伊達明……リターン!」

伊達と言う男はバースドライバーを装着し、右手でセルメダルをコイントスし、左手でキャッチした。

伊達「変身！」

伊達はセルメダルをバースドライバーに装填してハンドルを回し、仮面ライダーバースに変身した。

後藤「伊達さん！体、大丈夫ですか！？」

伊達「イエス！」

伊達は後藤に近付き、後藤の肩を叩いた。

伊達「行くよ後藤ちゃん！」

後藤「無茶しないで下さいよ！」

伊達と後藤はロボに近付き戦闘を始めた。俺達も戦闘を始めた。

後藤はバースの能力を駆使してアグレッシブな闘い方に対し、伊達はプロレス技を主体としたパワフルな闘い方をする。

一夏「漣司、データが届いた！あれは対IS用に作られた兵器らしい。」

漣司「成る程な、火力も耐久性も桁違いな訳だ。」

篤「このままじゃ！」

伊達「よし、後藤ちゃん！さっきの戦法、やってみようか？」

後藤「教えた覚えはないんじゃないですか？」

伊達「・・・邪魔してすみませんでした。」

後藤「伊達さん・・・また病院送りになるかも知れませんよ？」

伊達「それだけは願ひ下げだな。」

『『ブレストキャノン！』』

男『うおおおおおおお！』

ロボは後藤と伊達に近付く。

『『セルバースト！』』

伊達「よし！充電完了！」

Wブレストキャノンのエネルギー弾がロボに直撃し、ロボは大ダメージを喰らい爆発した。中の男は気絶して倒れた。

その後俺達は食材を調達して学園に帰った。伊達が医者だったのでトリコとジローと寝ている2人を診てもらい、男は警察につきだした。

しかしこの2人や伊達は一体・・・？

その22 食材調達と2人の少女とWパース（後書き）

後、その16を編集して直します。

その23 伊達のカミングアウトと集いし主人公達と三度目の神（前書き）

合計アクセスが5万を超えました。皆さん、ありがとうございます。

その23 伊達のカミングアウトと集いし主人公達と三度目の神

3月22日 午後5時 学園地区 九路洲学園 医療室

医療室には、漣司、一夏、篝、ハヤテ、後藤、ジロー、遊星、トリコ、行人、優人、伊達に、ベッドに寝かされている夜空とイブキ。駆けつけたセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪、楯無、ヒナギク、愛歌、千桜、キョーコ、ジャック、クロウ、小松、ココ、サニー、ゼブラ、滝丸、マツチ、すず、あやね、まち、りん、ゆきの、ちかげ、しのぶ、梅梅、緋鞠、凜子、静水久、くえすに、教師の千冬、山田、雪路、杉下、亀山、神戸がいた。

杉下「さて、あなたはどちら様でしょうか？」

伊達「ああ、俺は伊達明。医者でもあり、後藤ちゃんの前の初代バースだ。」

しのぶ「伊達殿、後藤殿の師匠でござるか？」

伊達「まあそうなるかな。ってお嬢ちゃん、何で侍口調なの？」

しのぶ「拙者はしのぶでござる。侍に憧れてまずは形から入ろうとしたでござる。」

伊達「成る程ね。」

後藤「伊達さん、何があったのですか？」

伊達「後藤ちゃん俺が1億円の金を手に入れて、自分のケガを治しに日本を離れたのは覚えているよね？」

後藤「あの時見送りに行かなくてすみませんでした。伊達さんなら必ず日本に戻って来てくれてまた一緒に闘ってくれると信じていましたから。」

伊達「信じてくれるなんて、お兄さん嬉しい！」

後藤「はい、自分もまた伊達さんと共に闘えるのは嬉しいです。手術は成功したんですね。」

伊達「この通り、完治出来たよ。」

あやね「伊達さんだけ？手術したって事はどっかケガしたか病気だったの？」

雪路「どうせ、酒飲み過ぎて、肝臓悪くしたんでしょ？」

ヒナギク「お姉ちゃんじゃあるまいし……。」

遊星「それに聞いた限りでは、伊達は元バースの装着者だ。持病を持ちながら闘っていたとは思えない。」

伊達「そつ、俺はケガしたんだ。それも命に関わる程な……聞くかい？」

漣司「伊達がいいなら聞かせ。」

伊達「オーケー、まずは俺は医者でな、世界中を回って戦争に巻き込まれ、ケガや病気になった人達を治療していたんだ。」

緋鞠「お主も素晴らしい事をしていたのじゃな。」

伊達「まあね、てか君も侍口調なのね。」

緋鞠「緋鞠じゃ。それで伊達殿は？」

伊達「内戦中の病院で、患者の治療をしていたら、流れ弾が俺の頭に当たってね。」

『!!!?』

伊達の思わぬ発言に後藤以外の人は驚き声が出せなかった。

後藤「伊達さんは一命をとりとめたが、頭に銃弾が残ってしまいそれを取り除く手術するお金が1億円必要だったんだ。」

伊達「俺はバースを開発した鴻上ファウンデーションの会長さんに、報酬を1億円にバースの装着者になりセルメダルを集める仕事をしたんだ。」

後藤「伊達さんは1億円を集め治療する為に海外に旅立ったままで分かるのですが、その後はどうしたのですか？」

伊達「あの後、完治して、日本に帰って来た時会長さんから後藤ちゃんが行方不明になったと聞いてな。もう1つ開発されていたバースドライバーと使っていたバースバスターを持ち、後藤ちゃんを探していたら、急に光に包まれて気が付いたら、あのジャングルに

いたんだ。それにしても後藤ちゃん、ここ日本じゃないよね？」

後藤「伊達さん実は……。」

後藤はここは異世界だと言うことを伊達に伝えた。

伊達「成る程ね。俺も後藤ちゃんも行人達も優人達も杉下さん達も、そして漣司もこの世界に招かれた客って訳か。」

夜空「うう……。」

イブキ「あ……。」

伊達「おっと、お嬢ちゃん方が目を覚ましたようだ。」

伊達の言う通り、夜空とイブキが目を覚ます。

夜空「お前はさっきの……。」

漣司「俺は桐札漣司だ。」

夜空「私は、法仙夜空よ。さっきは助けられてありがとう。」

イブキ「私はイブキよ。漣司、助けられてありがとう。」

漣司「あー、イブキを助けたのは、この後藤だ。」

後藤「後藤慎太郎だ。」

イブキ「後藤、助けられてありがとう。」

それから一夏達も自己紹介した。

漣司「夜空、イブキ。お前達は何者なんだ？」

夜空「話すわ。実は私もイブキも漣司達と同じく異世界の住人なの。私は、魔法が科学的に証明され皆が魔法を当たり前のように使える世界の住人で、私はトップの魔法使いなの。」

イブキ「私はポケモンと言うモンスターがいてトレーナーと言う人達がポケモン同士をバトルさせる世界の住人。私はそのポケモンの中でドラゴンタイプのポケモンを使い、ポケモンジムのジムリーダーをしていたの。」

亀山「2人共、俺達と同じく、急に光に包まれて？」 夜空「そう、魔法の実験をしていたら爆発して急に光に包まれて、気が付いたらこの世界に。何故だか分からないけど、身体能力、魔力、魔術が格段に上がっていたわ。」

イブキ「私はポケモンバトルの時、相手のポケモンが急に光出して、この世界に。手持ちのポケモンが居なくなってしまったけど、代わりに身体能力が上がっていて私自身がドラゴンタイプの技を使えるようになっていて、技を使用するために消費する夜空と同等の魔力を手に入れたわ。」

夜空「私達はこの世界に来た瞬間に会って、互いの事情を知り、依頼人の依頼をこなしながら、フリーの傭兵みたいなのをやっていたの。」

イブキ「でも今回、食材の調達の依頼を受けた内容がパワーアッ

プした私達でも手におえなくて、失敗し、依頼人の怒りを買って追われ、あの密林に逃げて来たの。」

小松「あの、ちなみに、その食材って？」

夜空「この島の砂漠にあるクロスピラミッドの守護獣、『サラマ
ンダースフィンクス』の涙から採れる、世界一旨いコーラ『メロウ
コーラ』を。」

トリコ「『サラマンドースフィンクス』は俺と小松とゼブラがや
つと『メロウコーラ』を出すことが出来た奴だぞ！よく死ななかつ
たな。」

イブキ「ええ私達は何とか隙を見つけて逃げる事が出来たけど、
魔力と体力をひどく消耗してしまっただけ。」

夜空「おかげで、大した実力もない依頼人からも逃げるしかなか
らさっきの化け物にも魔力を吸収されもうダメかと思っただけ。」

まち「でも良かったじゃない。魔力を吸収され尽くされる前に漣
司様と後藤様に助けってもらって。」

優人「確かに後一步遅かったらどうなっていたか。」

神戸「流石、桐札君と後藤君ですね。」

漣司「それにしても、俺は転生してこの世界に来たが何で後藤達
は元の世界から直接来たのだろう？」

漣司はそう言った瞬間、何かを感じ取り、医療室の外側の窓を開

けた。

愛歌「どうしたの漣司君？」

漣司「また、恩人に会うことになるとは。その恩人が突っ込んでくる。」

セシリア「え？」

鈴「は？」

キョーコ「どう言ひいよ？」

レイ「やっーーーーーほーーーーー!!」

『空から幼女が降ってきたー!?!?』

漣司と千冬と杉下以外は空からレイがこっちに向かって突っ込んでくるのに驚いたのだ。

漣司「よつと。」

漣司はレイを受け止めた。

レイ「ありがとう漣司君」

漣司「どういたしまして。」

箒「漣司、その子は誰なんだ？」

凜子「漣司の妹？」

漣司「いや、この人は新人の神であるレイ。俺をこの世界に転生してくれて仮面ライダーの力をくれた俺の恩人だ。」

『ええー！ー！？』

千冬「ほう。」

杉下「なるほど。」

レイの頭を撫でる漣司の言葉に皆が驚いき千冬と杉下は感心した。

漣司「レイ、今回はどういっ件で来たんだ。」

レイ「うん、さっきの漣司君の疑問に答える為に来たんだよ。」

レイは急に、真面目になり出した。

レイ「そして何故私が転生させてまで漣司君を、この世界に送ったのかを話すよ。」

レイが話す事実が誰もが驚愕することになるとは、この時、千冬でも杉下でも予期出来なかった。

その23 伊達のカミングアウトと集いし主人公達と三度目の神（後書き）

もう少ししたら主人公達の設定を投稿します。

その24 主人公達とメモリの力と裸エプロン(前書き)

9割シリーズで1割がほのぼの系かな。

その24 主人公達とメモリの力と裸エプロン

レイ「じゃあ、説明したいけど、そろそろ来るかな？」

漣司「ん？・・・！」

漣司はまた窓を見た。

東「やつーーーーーほーーーーー!!!」

人参型のロケットが近付いてきた。

ドカーーーーーーン!!!

人参は外の地面に着地ではなく激突した。

漣司「東さん相変わらずだな・・・。」

篤「まあ姉さんらしいと言えば姉さんらしいが・・・。」

漣司と篤は若干呆れていた。

一夏は苦笑い、千冬は頭を右手を額に当て困っているし、杉下は「人参型の飛行物体ですか。」と感心していて、他の皆は呆然としていた。

東「やあやあ、皆元気にしていたかな。天才の東さんだよ。」

レイ「久し振りだね〜 東ちゃん〜」

東「本当に久し振りだね〜 レイちゃん〜」

東とレイは抱き締め合う。

漣司「東さん、レイと知り合いなのですか？」

東「そうだよれつくん。れつくんの黒桜が出来た後に知り合ったかられつくんよりか短いけどね。」

篝「姉さん、神とまで知り合いを持つとは・・・。」

東「まあ、篝ちゃん、そこがホレ、東さんだから。」

漣司「レイ、東さん、そろそろ本題を教えてくださいませんか？」

レイ「うん、まずはこの世界に何が起きているか説明するね。」

漣司 side

レイ「まず漣司君、この世界に、ドーパントが現れて何度か闘っているよね？」

漣司「ああ、会ってきた奴らは皆と共に、メモリブレイクして倒したが。」

レイ「じゃあ、この世界にはガイアメモリが存在しないことは知っていた？」

漣司「えっ!?!」

レイ「知らなかっただろうね。私でさえもこの世界には漣司君に持たせたのがはじめてだから。」

俺は驚いた。ここはクロスオーバーの世界だからガイアメモリが存在していても変に思わなかつたからだ。

レイ「後藤君に伊達君。ヤミーはグリードから造られるのは知っているよね？」

後藤「はっ、はい。」

伊達「俺もあいつらは苦手だったな。」

後藤は神の前だろうか若干緊張気味に答え、伊達は思い出しながらしみじみと答えた。

レイ「後藤君、緊張しなくていいんだよ。リラックスしてね。」

後藤「はい。ありがとうございます。」

レイ「うん、よろしい 続きだけだね。そのグリードもガイアメ

モリと同じくこの世界にはいないのだよ。」

後藤「なるほど、どうりでグリードが邪魔に入って来ないか説明がつく。」

伊達「ってそうなるとそのガイアメモリもヤミーもどつから来たんだ？」

行人「もしかして僕達と同じく・・・。」

レイ「そう、行人君。誰かが、異世界から連れてきたのだよ。」

くえす「それは一体誰が？」

レイ「そこまで分からなかったよ。この世界の住人が、私と同じく神なのかさえ、でもその張本人はナンバーズカードまでこの世界にばらまいてしまつてこの世界は混沌の世界になってしまう恐れがあつた。」

優人「それってなんとかならないの？・・・。」

レイ「まず、この状況を打破するために私は漣司君に持たせたジヨーカーメモリと12本のガイアメモリを作つたの。」

神戸「そして、貴女は僕達をこの世界に招いたのでですね。」

レイ「うん。私が招いたの。既にこの世界にいたのと招いた子達、12人の戦士を集めるために。」

すず「12人の戦士？」

レイ「うん、12本のガイアメモリにそれぞれの適合率が100%の戦士と私と呼んでいるの。漣司君、12本のガイアメモリを出して。」

レイに言われた通り、12本のガイアメモリを出すと俺の手から離れ、俺を中心にして回り始め輪を作っていた。

レイ「織斑一夏君。」

一夏「えっ、はい！」

一夏が返事した瞬間、空色のガイアメモリ、スカイメモリが輪から外れ一夏とレイの間に現れた。

レイ「一夏君は空の記憶を宿したスカイメモリの適合者なの。」

一夏「俺が戦士の1人？」

レイ「そうだよ。白式に超音速飛行が可能なの。次に綾崎ハヤテ君。」

ハヤテ「はい。」

今度はハヤテの前に緑色のサイクロンメモリが現れた。

レイ「風の記憶を宿したサイクロンメモリは風を操るだけでなく、超高速の移動が可能だよ。」

ハヤテ「僕にピッタリですね。」

レイ「うん、じゃあ、次に後藤慎太郎君。」

後藤「はい。」

後藤の前に黄色のサンダーメモリが現れる。

レイ「雷のサンダーメモリはセルメダルの代わりにバースの動力源になり、バースの武装に雷の力を宿らせる事が出来るよ。」

後藤「これで皆と一緒に世界を守れる。」

レイ「うん、次に伊達明君」

伊達「あいよ。」

伊達の前に銀色のメタルメモリが現れた。

レイ「金属のメタルメモリは伊達君のバースの使用するセルメダルの量が倍になっちゃうけど、代わりにバースの武装と出力と耐久力が格段に上がるよ。」

伊達「よし、お兄さん頑張りますか。」

レイ「うふふ、頑張つてね。次に不動遊星君。」

遊星「ああ。」

遊星の前に灰色のウェーブメモリが現れる。

レイ「波動のウェーブメモリは遊星君のデッキのモンスターに波動の力を宿らせて敵に物理的に攻撃を与える事が出来るよ。」

遊星「なるほど。」

レイ「遊星君なら大丈夫だから、次にトリコ君。」

トリコ「おう。」

トリコの前に茶色のグランドメモリが現れた。

レイ「地のグランドメモリはトリコ君の能力を数十倍にまで上げる事ができ、周囲の重力をコントロール出来るよ。消費カロリーも数十倍に跳ね上がったけどね。」

トリコ「飯の量が多くなりそうだ。」

レイ「気を付けてね。次に阿久野ジロー君。」

ジローの前に橙色のボイスメモリが現れた。

レイ「音のボイスメモリはジロー君のマントに音の力を、ジロー君自身には聴覚が発達していてその能力はゼブラ君と同等だよ。」

ジロー「使いこなせるか心配だ。」

レイ「大丈夫。次に東方院行人君。」

行人「はい。」

行人の前に白色のアイスメモリが現れた。

レイ「氷のアイスメモリは行人君が修得している東方院家の武術に氷を操る能力でかなり有利な闘い方が出来るよ。」

行人「取り敢えず頑張るかな。」

レイ「うん、次に天河優人君。」

優人「はい。」

優人の前に金色のライトメモリが現れた。

レイ「光のライトメモリは優人君の天河家の力『光渡し』の力を極限にまで上げて仲間達もその恩恵を受けることが出来るよ。」

優人「俺の力を……。」

レイ「そう、逆転の可能性を秘めた力だよ。次にイブキちゃん。」

イブキ「はい。」

イブキの前に水色のアクアメモリが現れた。

レイ「水のアクアメモリはイブキちゃん魔法とドラゴンタイプの技の強化だけでなく、イブキちゃんの意味で全ての水を自由自在に操る事が出来るよ。」

イブキ「氷もか？」

レイ「アイスメモリよりか劣るけど一応使えるよ。次に法仙夜空ちゃん。」

夜空「私？」

驚く夜空の前に紫色のダークネスメモリが現れた。

レイ「闇のダークネスメモリは夜空ちゃんの魔力と魔術強化だけでなく、万物を支配出来る能力まで備わっちゃったの。」

夜空「これは気を付けてないとな。」

レイ「うん、気を付けてね。そして最後に漣司君の相棒の篠ノ之箒ちゃん。」

箒「はい。」

箒の前に紅椿と同じ色の深紅のフレイムメモリが現れた。

レイ「炎のフレイムメモリは12本の中でもトップクラスの能力でね、紅椿に炎の力を宿らせる他、絢爛舞踏を発動中、相手の攻撃も吸収してエネルギーに変換する事が出来るの。」

箒「私が戦士の1人なのか？」

レイ「そうだよ。漣司君や一夏君、仲間達と共に頑張ってる。」

ゆきの「行人達はすごいね。」

雪路「これで一安心だわ。」

レイ「けど。」

12本のメモリは一夏達から離れ、再び俺の周りに回り始めた。

レイ「まだ君達はまだメモリを使う事ができないんだよね。」

『えっ?』

皆が驚く。まだ使えないとは?

ヒナギク「どういふ事ですか。」

レイ「理由は簡単、それぞれのメモリの覚醒が出来てないからだよ。」

亀山「どうすればいいんだ?」

レイ「仮面ライダージョーカーがそれぞれのメモリでフォームチェンジすればいいんだけど、ジョーカーメモリとフォームチェンジのメモリ、1人で2本のメモリを使っているからいくらドライバーやメモリリングが制御しているからって、並みの装着者は使った途端にメモリの強力な力や副作用、暴走に耐える事が出来なくなつて最悪の場合、即死に繋がる。」

『!!!?』

皆が驚く。それは仕方無い事だ。驚くなと言つ方が無理だ。俺もそうなってしまうのか……。

第「それじゃ漣司は・・・！」

東「ところがれつくんだだけは例外なんだよ。」

えっ？

レイ「漣司君、君が死んで私の所に来た時、体を調べさせて貰ったんだ。」

漣司「そうなのか？」

レイ「ごめんね。それで分かったんだけど漣司君はガイアメモリの副作用や暴走の力を殆ど受け付けない体質みたいなんだよ。」

東「れつくくんはフォームチェンジしても体力を激しく消耗だけになるみたいだよ。」

レイ「漣司君はガイアメモリに祝福されている子なのかもね。」

一夏「よかつたな！漣司。」

漣司「だが、それでも楽観視は出来ないな。まあなんとかなるだろう。」

レイ「そうだね。油断は禁物だけど漣司君なら大丈夫。」

凄い信頼されているな俺。

杉下「漣司君達は分かりました。僕達は何故？」

レイ「他の子達も闘って貰いたくて来てもらい、杉下君、亀山君、神戸君は刑事の経験を活かして皆を鍛えてほしいの。」

杉下「なるほど分かりました。」

千桜「私達も闘って大丈夫なのですか？」

レイ「漣司君と戦士の子達だけじゃ戦力不足だと思っの。」

まち「確かに。戦力は多い方が良いわ。」

東「まあこの束さんが皆にも使える武器を作って上げるから安心したまえ。」

レイ「さて、伝える事は伝えたし、皆じゃあね〜」

レイは光に包まれ消えていった。

漣司「さて皆明日からの特訓だ・・・の前にりん。」

りん「い、いやいいんだぜダンナ。あたいなんかより、特訓しようぜ。」

漣司「いや、千桜や楯無だけだと不公平だからな。明日、俺と一緒に過ごそう。」

りん「ダンナ・・・。ああよろしくなダンナ！」

午後9時、あれからは夕飯を食べ、これからの対策を考えてから解散した後、俺は自分の部屋のドアを開けた。

そこに裸エプロン姿の楯無がいた。

楯無「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」 バタン

そう言えば楯無とはあんまり過ごせなかったな。俺はもう一度ドアを開けた。

楯無「お帰り。私にします？私にします？それともわ・た・し？」

漣司「見事に選択肢が1つしかないな。」

その後、俺は楯無にちゃんと着替えさせ、トランプしたりテレビ見たりして過ごした。

その24 主人公達とメモリの力と裸エプロン（後書き）

ミニコーナー

漣司「桐札漣司だ今回から始まったミニコーナーだが、作者が自由によってくれと頼まれたから俺はジョーカーメモリについて教えるぜ。」

ジョーカーメモリ

切り札の記憶を宿したガイアメモリ。格闘能力を極限にまで上げる。

Wの場合、サイクロンメモリとでは最も戦闘バランスが良いサイクロンジョーカー、ヒートメモリとではサイクロン以上の肉弾戦に特化したヒートジョーカー、ルナメモリだとトリッキーな戦闘が出来るルナジョーカー、フアンゲメモリとでは獣のように闘うフアンゲジョーカー、さらに翔太郎1人で変身する仮面ライダージョーカーになる。この小説では漣司が仮面ライダージョーカーに変身して12本のメモリを使いながら闘う。

他のメモリとも相性が良く使い勝手が良いメモリの1つ。

漣司「てな具合だ。このミニコーナーは毎回代わるから楽しみにしてくれ。それじゃ皆ありがとう。」

その25 三日目と意見と不安を消し去る切り札（前書き）

残業で更新速度が遅くなるかもしれない・・・（泣）。

その25 三日目と意見と不安を消し去る切り札

3月21日 午前10時 学園地区 九路洲学園 第2アリーナ
観客席 行人side

アリーナの中央で私服姿の漣司と訓練機用IS『打鉄』を纏って、支給されたISスーツ姿のりんが向かい合っていた。

漣司「俺もやるか。」

漣司は右手に持っているロストドライバーを装着し、左手でジョーカーメモリを持った。

『ジョーカー!』

ジョーカーメモリをロストドライバーに挿入した漣司は左手を顔の前に、右手をドライバーの位置まで下げた。

漣司「変身。」

『ジョーカー!』

右手でドライバーを展開させ、左手の親指と人差し指でりんに見せるようにJの文字にさせ、仮面ライダージョーカーに変身した。

漣司「次に。」

漣司は左手首にメモリリングを嵌め、『IS』と印された。蒼いメモリを出した。

『IS<インフィニット・ストラトス>！』

漣司はISメモリをメモリリングに挿入した。

『ISジョーカー！』

メモリリングからISのアーマーが現れ、ジョーカーに装着されて、ジョーカーはISジョーカーフォームにフォームチェンジした。

りん「ダンナ、準備はいい？」

りんは『打鉄』の基本装備の日本刀型の近接ブレードを持ち構える。

漣司「ああ、何時でも良いぜ。」

漣司は自然体で立っていて右手にはISキャリバーを持っている。

山田『それでは、桐札漣司対りんの模擬戦を始めます。』

山田先生のアナウンスが流れる。

山田『3。』

漣司は右手をISキャリバーの柄に左手を峰部分に添えるように構えた。

山田『2。』

りんもさっきより近接ブレードを強く握る。

山田『1。』

漣司もりんもそのまま動かず。

山田『始め!』

漣司 りん「はああああああ!!!」

始まりの合図と共に両者が互いに突っ込み、刃を交えた。

ガキンツ! ガキンツ! ガキキキンツ!!!

共に剣で斬り合い、両者一步も譲らない。

漣司「くっ!やはり、りんの一撃一撃が重い!」

りん「ダンナこそアタイの攻撃の威力を殺しているから凄い!」

三日目、りんが漣司にアピールする日。当初の予定は漣司がりにバイクの乗り方を教えるの立つたけど、昨日の事でりんが急遽漣司に試合を申し込んだ。漣司の力になりたいみたいだ。

それにしてもりんと言いたい藍蘭島の住人の女の子達がこの世界に来たのは正解かも知れない。僕以外の男を知ることが出来たから。

ヒナギク「凄い……。」

亀山「へえ」。ISがこれ程とは右京さんどう思いますか？」

杉下「ISの性能にも驚きましたが、漣司君もりんさんもまるで自分の体の一部のようにISを動き慣らしてますね。」

そう言えば、運動能力の良い子はISの訓練しているて聞いたけどりんもしてたのかな？

緑谷「流石漣司君。一夏君の次に2人目の男のIS操縦者だね。」

セシリア「あら、漣司さんはISを操縦する事は出来ませんよ。」

行人「え？」

ナギ「何を言っているのだ？現に漣司はISを動かしているではないか。」

一夏「束さんの話だとISメモリにはISが搭載されてなく。ジョーカーを対IS用にジョーカーの力を制御する為のメモリらしい。」

あやね「どう言う事？ISって世界最強の兵器でしょ。何でジョーカーの方が力を制御させる必要があるのよ？」

篝「確かにISはかなり強い兵器だ。だが、ISは対IS用で怪人や未知の生物を闘う為に作られていないんだ。」

鈴「ISは元々宇宙進出を前提に開発されたからね。今では持て余したスペックで武装が取り付けられ、兵器、スポーツに発展させられているけど、少なくとも、元々戦闘用には作られてないはずよ。」

シャルロット「それに対して、仮面ライダーのシステムは最初から対怪人用に作られているから戦闘に特化しているの。」

ラウラ「だからいくらISと云えど、根本的に作られている目的が違うから、仮面ライダージョーカーの方が戦闘力が高いんだ。」

簪「だから、漣司君はISの模擬戦する時はISメモリに内蔵されている『蒼椿』でジョーカーの力を制御しているんだ。『蒼椿』はISじゃなくジョーカーの制御媒体。」

驚いた。僕はてっきりジョーカーを対IS用にまで強化させるんじゃないくて、ISに合わせてジョーカーの力を制御していたんだ。確かに、途中から戦闘用に改良する物より、初めから戦闘を前提に開発された物の方が、断然、そっちの方が戦闘能力に優れている。

まち「それにしても漣司様は武術を修めているようには見えないわね。」

緋鞠「そうじゃの、漣司殿は剣の扱いが素人に近い。」

マッチ「りん比べれば上だが、何と云うか、いつもカー杯に振り上げ、力加減が出来てないみたいだな。」

ヒナギク「まあ、東宮君みたいに竹刀を乱暴に振り回すよりかは大分マシね。」

西沢「ヒナさん、何気に東宮君の心に傷付くような事を言っているね……?。」

伊達「まあ、多分漣司は体は鍛え上げてケンカ慣れはしていても、武術を修得したり、俺や後藤ちゃんみたいに特別な訓練を受けてないからそうなってくるんじゃないか?。」

後藤「伊達さん、そうなって来ると武術を修得している子や、ラウちゃんみたいに軍の訓練を受けている相手には漣司は苦戦するのではないですか?。」

千冬「だから、桐札には織斑と同じく、軍の訓練と織り混ぜた特訓を密かにさせている。織斑はともかく、桐札は薄々気付いているよのだが。」

一夏「千冬姉、いつの間に……ってか俺と漣司に密かにそんな特訓させていたのかよ……。」

スパーーーン!!!!

千冬「今は織斑先生だ。生徒は先生には敬語を使え馬鹿者。」

一夏「すみませんでした……。織斑先生……。」

一夏は織斑先生がいつの間にか所持していた出席簿で脳天を叩かれていた。

僕はあれを防げる自信がない……。

千冬「安心しろ東方院。馬鹿をやらなければ、『これ』を受ける

事はない。」

織斑先生、貴女は、超能力者か何かですか？

千冬「さて、諸君。そろそろ決着が付く。よく見ておけよ。」

僕達は織斑先生の言葉に試合を見ていた。

りんside

漣司「すうー、はあー。」

りん「はあ、はあ、はあ……。」

試合が始まって暫くはダンナとは剣の打ち合いをしていたが、あなたの方がスタミナが切れかけていて、どんどんシールドエネルギーが奪われていく。あたいはこんなにも息が絶え絶えなのに、ダンナは深呼吸をしてリラックスしている。

正直、悔しい。ダンナに勝てない事じゃなく、ダンナの力になれるどころか足引っ張るんじゃないかと。

漣司「りん。」

りん「ん？なっ、何？」

漣司「その表情からして不安があるのか？」

りん「！」

当てられた。あたいは考えている事が分かりやすいのか。

漣司「大丈夫だ。不安があるならそれを思いっきり俺にぶつけて来い。受け止めてやる。」

りん「ダンナ……。」

不安や悩みなどその言葉で消えていく。ああ、だからあたいはダンナを、桐札漣司を好きになったのか……。

りん「なら、行くぜ、ダンナ！」

漣司「ああ、来い！」

りん「はああああああ！」

あたいはダンナ目掛けて突っ込んでいく。

あたいはブレードを頭上まで上げるとダンナに目掛けて一気に振り落とす。

ガキン！！！！！！

漣司「くうっ！」

りん「渾身の一撃を・・・!?きゃあ!」

ダンナはISキャリバーをあたいの一撃横にして受け止めたばかりか、右足を蹴り上げて、あたいを頭上十メートル位に蹴り飛ばした。

漣司「はあ!」

りん「!」

ダンナは私に目掛けてISキャリバーを投げて来たのであたいはブレードで弾き飛ばしたが、下にいたダンナはあたいの目の前にいた。

『ジョーカー!マキシマムドライブ!』

漣司「ライダーパンチ!」

ダンナの右手には紫色の炎が宿っていた。

りん「はあ!」

チツ!

あたいはブレードで突きを放ったが、ダンナは紙一重で右頬を掠めるように避け、ダンナのパンチがあたいの腹に炸裂し、ISの絶対防御が発動し、エネルギーを大幅に奪われて、0になった。

山田「試合終了!勝者桐札漣司!」

山田先生の試合終了の合図と共にあたいは疲労の性が、地面に大の字に仰向けになって倒れて、意識を手放した。

その25 三日目と意見と不安を消し去る切り札（後書き）

ミニコーナー

箒「篠ノ之箒だ。今回は私だ。東宮と黄村があの後、どうなったか説明しよう。」

まず2人は謹慎中に部屋を抜け出した事と生徒会室を派手に壊したことで、千冬に10連釘パンチならぬ10連出席簿アタックを喰らい、謹慎1週間の追加と反省文として400字詰め原稿用紙500枚書かされる。

束は箒を泣かせたのと痛め付けようとした事でネット上に社会的に充分抹殺出来る2人の恥ずかしい写真をばらまこうとしたが、漣司、一夏、箒の3名に止められる。

束を止めた漣司と一夏だが、代わりに死神も顔真つ青の地獄の特訓メニューを2人にさせた。

東宮は反省したが黄村は懲りていない様子。

箒「漣司、一夏、姉さん……。私の為なのは嬉しいが、やり過ぎだと思う……。そろそろ終わりだな皆ありがとう。」

その26 変態くの一とゴトーレムと和服美人(前書き)

早めに投稿出来た・・・。

その26 変態くの一とゴーレムと和服美人

同日 午後0時半 学園地区 九路洲学園 医療室 りんside

e

りん「ん……。」

漣司「おっ、起きたか。」

目が覚めたら、あたいはISスーツを着たままベットに寝かされていて、側の椅子に座って本を読んでいたダンナがいた。

りん「ダンナ、あたいは……。」

漣司「試合終了の直後、りんの打鉄が強制解除されたからどうしたのかと思ったのか、お前の意識が無くてな。俺が医療室まで運び、伊達先生に見てもらったんだ。」

そっか、あたいは負けたのが分かったその瞬間突然意識を失ったんだ。

漣司「伊達先生と千冬さんの話だと、ISを装着しての極度な戦闘をしたせいで心身共に酷く消耗したのでは無いんじゃないかと。りん、結構無理していたんじゃないのか？」

りん「うっ……。」

実はあたいのES稼働時間て言うのが、千桜と同じ位で1時間。専用機つてのを持っていて人を除いて、あたいと千桜が1番長い。けど、実際ダンナと試合したら5分も持たずにスタミナ切れで倒れてしまった。

漣司「無理はするな。まだ時間はある。ゆっくり強くなればいい。」

りん「ああ、ごめん、そうだね……。ん？」

ふと、あたいはある事を思い出してダンナに聞いてみた。

りん「ダンナ、あたいをここまで運んでくれたのはダンナだよな。」

漣司「えっ、そうだが。」

りん「あたいをどうやって運んだんだ？」

漣司「最初は背負って運ぼうとしたんだが、周りの女子が『えっ、おんぶなの？』、『ここはお姫様抱っこでしょ？』、『しなかつたら漣司君男じゃないでしょ！』みたいな目で訴えられてな。抱いて運んだんだ。」

あたいは一瞬呆けてしまう。

りん「それってお姫様抱っこで運んだって事……。？」

漣司「……。ああ。」

ダンナが恥ずかしながら言った。

ボンツ！！ プシューー！

あたいは顔が真っ赤になるのを感じた瞬間ショートしてしまった。

漣司「おい、大丈夫か!？」

りん「うん・・・何とか。」

りん「ダ、ダンナ・・・、重かった？」

漣司「いや、寧ろ軽すぎだ。」

ダンナが言う。そう言えばダンナはISキャリバーを生身で素振りしていたのを見た。あたしも持たせてもらったが、藍蘭島のメンバーの中で1番の怪力なあたいても1回の素振りがやっとな程の重さだった。それに比べればあたいは軽い方なんだな。

バン！

みこと「漣司はん！大変や・・・って、りん姉え様に手を出してないやろな！」

漣司「みこと、お前が心配しているような事はしてない。」

りん「みこと、お前・・・。」

みことが入って来た。折角ダンナと2人つきりだったのに・・・。

漣司「りん、みことはお前を心配していたんだ。あまり邪険扱いはするな。」

りん「わかった……。」

そうだな。みことも心配してくれたんだ……。邪険扱いしないで……。

みこと「くそっ！姉え様だけだったら寝込みを襲えるのに！」

前言撤回、やはり邪険に扱おう。

漣司「それよりもみこと、何が大変なんだ？」

みこと「そうや、漣司はん。黄村っていうデブがまた問題起こしてんねん！」

漣司「黄村が？千冬さんから1週間の謹慎追加で謹慎室に閉じ込められているんじゃないか？」

みこと「なんか知らんけど、いつの間にか脱け出していて、変なISみたいなのが2体と一緒に大暴れしてんねん！」

漣司「変なIS？……って、訓練用の無人ゴーレムの事か。」

みこと「そう！それそれ！」

漣司「束さんが俺達を鍛えるために制作したゴーレムが何故？……黄村の奴ハッキングして自分の味方にしやがったか……。」

ダンナは呆れると同時に怒りが込み上げて来るのがあたいにはわかった。

漣司「場所は？」

みこと「えーと、この端末機の情報だと地下の大型格納庫で専用機持ちと伊達先生、後藤はん達が食い止めてる！」

漣司「よし、俺が行ってくるから、みこと！りんを頼む！」

みこと「了解したで〜」

りん「へっ？ちょ、ちよつとダンナ!？」

ダンナは颯爽と医療室から出ていってしまふ。

みこと「りん姉え様、ウチが看病するさかい、安心してな〜う
っへっへっ〜」

マズイ、疲労で体が満足に動かない。

みこと「とっつ!」

みことがあたいが寝ている布団にダイブした。

ちよつとやあああああああ〜!ダンナ〜!助けて〜!

後藤「皆大丈夫か！」

トリコ「ああ、・・・くそっ！」

遊星「なんとかな。」

ジロー「くそっ！場所が場所だから闘いづらい。」

俺達は互いに無事を確認する。

伊達「格納庫の備品を破損させずに闘うのはキツイね。」

後藤「黄村もそれをわかってわざとゴーレム達を備品に攻撃させている。」

そう、この格納庫は結構重要な物が格納されている。破損は極力避けたいが、黄村がゴーレムにわざと備品に攻撃させている。俺達が防御しているがダメージが多すぎて皆が本格的にヤバい。

黄村「ふっはっはっはっ！ナンバーズはあれだったがこっちは使い勝手がいい！」

黄村はインシャルがCのガイアメモリを俺達に見せた。

黄村「このコントロールメモリが俺に力を与えた！」

あのメモリでゴーレムを操ってたのか。

鈴「あいつぶん殴ってやりたいけど私達も限界だわ……。」

シャル「ゴーレムの火力が強すぎて予想外のダメージだよ。」

東さん訓練用だからって規格外過ぎるだろう……。

黄村「このままじゃお前達が負けるのは目に見えるが篠ノ之をこ
つちに渡せば見逃してやるよ！」

一夏「なっ……！？そんなの「それでいいんだな？」って箒！
？」

箒は紅椿を解除してISスーツの姿になった。

箒「私が来れば、皆を見逃してくれるのか？」

黄村「ああ。」

箒、嘘だろ……？行くな！

箒「一夏……、私は皆が無事だったらそれだけでも「箒、その
必要はないぜ。」えっ？」

黄村「何……へぶっ!？」

黄村の右頬に漣司の膝蹴りが炸裂した。

一夏「漣司！」

後藤「漣司、来てくれたのか。」

漣司「ああ、みことから連絡受けてな。箒。」

箒「漣司……ひゃあ!？」

漣司は箒の前に立つと箒にデコピンをした。

漣司「一人で背負い込むな。こう言う時こそ相棒に頼るもんだろ。」

箒「漣司……。」

漣司「お前が皆を無事なのを祈っているように皆もお前の無事を祈っているんだ。」

箒「!!！」

漣司「だから自己犠牲は考えるな。仲間達を頼れって、俺も箒には言えたもんじゃないしな。さてと……。」

箒に優しい雰囲気だった漣司なのに、倒れている黄村に近づくと黄村の胸ぐらを掴み、無理矢理立たせた漣司の表情は静かな怒りを見せた。

黄村「桐札……ごはっ!ぶはっ!へぶっ!」

黄村が言い終わる前に漣司は黄村の両頬1回ずつ殴り、最後に頭

突きをした。頭突きのせいか、黄村の鼻の骨は完全に折れ鼻血が出ている。

漣司「この前で一夏と共に地獄の特訓させた東宮は反省しているのに、お前はまだ懲りてないどころかまた箒を傷付けようとしたよな？あ？」

ヤバい、漣司を止めたいけど気迫に圧されて動けない。

黄村「よそ見していいのか？」

黄村がニヤリと笑った。

漣司「あ？・・・ん？」

ハヤテ「漣司君危ない！」

漣司の後ろにゴーレムが漣司を殴ろうと拳を振るった。

黄村「お前をこのまま、物言わぬ肉の塊にして『ガキンツ！』！？」

俺達は信じらなかった。漣司は黄村を睨んだまま、左手で持ったISキャリバーで後ろのゴーレムのパンチを防いだ。

ゴーレム『！！！！？？』

ゴーレムは力を入れているが拳が小刻みに震えている。漣司は圧さられているどころかISキャリバーのを持った左腕を微動だに動かない。

「 漣司「てめえ、箒だけじゃなく、東さんの名まで汚す気か？コラ。」

漣司は右手をロストドライバー、ジョーカーメモリの順に装着、装填、展開した。

漣司「変身……。」

『ジョーカー！』

ジョーカーに変身した漣司はISキャリバーでそのままゴーレムの右腕を真つ二つにしてISキャリバーにISメモリを装填した。

『IS<インフィニット・ストラトス>！マキシマムドライブ！』

漣司「はあ！セイヤア！」

漣司はISキャリバーを横一線に振ると、空間ごとゴーレムが横真つ二つにずれた。空間は巻き戻したように戻ったがゴーレムは戻らず爆発して破壊された。

漣司「まだだ。」

今度はジョーカーメモ리를腰のメモリスロットに装填して押した。

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司「ライダーキック。」

漣司は後ろにいたもう1体のゴーレムのプラズマ手刀を腰を落と
して避けゴーレムの頭に回し蹴りを放ち、ゴーレムを破壊した。

黄村「くっそーならば・・・っていだだだ!？」

黄村がコントロールメモリを使おうとする前に漣司が黄村の手を
ひねり上げ、メモリを落とさせた。

漣司「使わせると思ったか?よっと。」

黄村「うっ・・・。」

黄村にデコピンをして気絶させた漣司はそのまま床に落ちたコン
トロールメモリを右足で踏み潰した。

同日 午後7時 九路洲学園 学生寮 漣司達の部屋前 漣司 s
ide

俺は他の皆に連絡して一夏達を医療室まで運んだ。全員、たいし
た怪我は無かったようだ。一夏が念のため俺の左腕を見てもらえと
言ったから、伊達先生に見てもらったら、骨は異常無かったが軽度
の捻挫らしい。ISKヤリバーとはいえ生身でゴーレムの攻撃を受
け止めたんだ。この程度で済んだのは奇跡に近いのか？

黄村はどうなるのかはわからない。反省の色が無いからな。

ゴーレムの中から取り出した、ISKコアは束さんが「私の子を止
めてくれたお礼にれっくんの好きにしてくれたまえ」と言って俺が
管理している。丁度良い、このコアを使って仲間達と共に千桜と鈴

の専用機を開発しよう。

俺はそう考えながら、部屋に入ると着物姿のりんがいた。

りん「お帰りダンナ腹減っているだろ？晩飯作ったから食べて。」

テーブルには和食を中心とした料理が並べられていた。

漣司「りん、一緒に食べるか？」

りん「いいの？」

漣司「ああ、和服美人と一緒に食べた方が楽しいからな。」

りん「ダンナ……。うん。」

一緒に晩飯食べた後、大工の話をしてくれたり、ボードゲームで遊んだりして寝るまで楽しく過ごした。

その26 変態くの一とゴーレムと和服美人（後書き）

ミニコーナー

東「はろー天才の篠ノ之束さんだよ。今回はれつくんが使っているISキャリバーとISメモリの説明をするよ。」

ISキャリバー

束が漣司にプレゼントした万能型の大型剣。見た目はオーズの専用武器メダジャリバーだがメダルの投入口の代わりにマキシマムスロットが付いている。メダジャリバーに比べて一回り大きく、重さもメダジャリバーの3倍だが漣司は毎日それで素振りしているから、片手でも扱える。

付属のISメモリをマキシマムスロットに装填するとマキシマムドライブが発動して、空間もろとも敵を斬り、空間だけを戻し、敵を倒す「ISスラッシュ」が出来る。

ISメモリ

漣司がジョーカーに変身してメモリリングにISメモリを装填するとアーマーが出てきてジョーカーに装着されて「ISジョーカーフォーム」になる。

蒼で装飾され紅椿に似ているから漣司は蒼椿と名付けた。

このフォームは蒼椿がジョーカーをISのレベルまで制御させるので、全フォーム中、最下位のスペックだが代表候補生とその専用機とは十分に渡り合える程の戦闘力がある。

必殺技はジョーカーと同じく「ライダーパンチ」、「ライダーキック」。

東「まあこんなものかな。おっ時間だね。それじゃバイバイ」

その27 2つのコアと開発と7色のメダル（前書き）

活動報告で書いた通り、編集し直しました。ちなみにその09とその16です。

その27 2つのコアと開発と7色のメダル

3月22日 午前9時 学園地区 九路洲学園 IS整備室
outside n

ここは生徒達がISとISの兵装の開発、整備する事が可能なIS整備室。

この整備室に13人の主人公の他にセシリア、鈴、シャル、ラウラ、楯無、簪、虚、本音、ブルーノ、トオル、ミサキに今回集まった理由の千桜にりん、更に立会人として千冬、山田、杉下、そして興味本意で来た亀山、神戸、謹慎が解けた泉、美希、理沙の生徒会3人娘が集まっていた。

箒「漣司、腕は大丈夫か？」

漣司「ああ軽い捻挫だが、骨には異常はないな。」

箒「そうか、無理はするな。私に頼ってくれ。」

漣司「ああ、頼りにしているぜ。相棒。」

千冬 杉下以外（もう付き合っているしか見えない……。）

漣司と箒の会話に千冬はやれやれといった感じで見て、杉下は2

人を見て、「本当に2人は仲がよろしい」と感心したり、楯無、千桜、りんは羨ましそうに見ている。

千冬「やれやれ、桐札と篠ノ之は特殊な関係になったものだな。」

伊達「これで互いに恋愛感情が無いってのは驚きだね。」

トオル「何かそう言う意味では残念な関係だな……。」

ミサキ「……トオル、人の関係にいちやもん付けるのは不粋……。」

遊星「まあ、確かに2人が納得しているなら、俺達がどうこう言うものじゃないな。ん？どうした一夏？」

一夏「遊星！？あつ、いや、何でもない……。」

後藤「？」一夏、漣司と篝ちゃんがああやって話しているとぼーっと見ているようだ(どうしたんだ?)

千冬「さて、桐札と篠ノ之、話はこれくらいにして桐札、本題を。」

漣司 篝「はっ、はい。」

泉「あつ、ハモった。」

美希「漣太君、篝君、息ピッタリだね。」

理沙「本当は付き合って「よし、今から俺と一夏と篝でお前ら

に地獄のIS特訓を……。」「ごめんなさい。もうふざけません。」「

漣司「まったく、じゃこれから説明する。今回皆集まって貰ったのはこれについてだ。」「

漣司は、右手に紅色の、左手に深緑色のISコアを箒達に見せた。

漣司「知っている人もいると思うが、これは昨日、バカな事して箒を傷付けようとしたが俺によって阻止された奴がメモリの力で操っていたISゴーレムのコアだ。」「

簪「漣司、何気に前回のあらすじ言っているよね……。」「

漣司「まあそれは兎も角、東さんがそのISゴーレムを阻止したお礼に俺がこのコア達を好きにしていいたいそうさ。」「

千冬「全く、東の奴……。」「

漣司「こっちの紅色をりん、深緑のを千桜のでそれぞれの専用機にしようと思うんだ。」「

千桜「漣司君、私達の為に……。」「

りん「そうだぜダンナ。あたい達よりもダンナが使えばいいんじゃないか。」「

漣司「2人忘れていいのか？俺は男だからISは使えないんだぞ。……。」「

りん「あっ！」「

千桜「確かに確かISメモリはジョーカーの制御媒体だったんだっけ。」

漣司「やっぱり勘違いしている人が何人かいるな。」

一夏「見た目がISに似ているから、ジョーカーをIS用に強化された様に勘違いされるんだ。しょうがないって。」

漣司「そうだな……。毎回説明するのが億劫になってくるぜ……。まあそれは兎も角2人にはそれぞれ世話になったからと2人がIS適正が高かったからこのコアを使つて2人だけの専用機を作る。」

千桜「漣司君……。」

りん「ダンナ……。」

漣司「皆に集まつて貰つたのは他でもない。2人の専用機の製作に力を貸して欲しいんだ。」

一夏「いいぜ漣司。」

篝「相棒として力を貸すぞ。」

ハヤテ「仲間として執事としてお手伝いします。」

ジロー「科学者として腕がなるぞ。」

遊星「仲間の為なら力を貸す。」

トリコ「力仕事なら任せな。」

漣司「ありがとう。まず、千桜、りん、どういう機体がいいんだ？」

千桜「私は射撃がよかった方だから中々遠距離で闘える機体がいい……。」

りん「あたいは射撃が全くダメだったから、基本は接近戦型がいいかな。」

漣司「そう言えば、楯無の専用機は中々接近戦型の機体だったよな？」

楯無「ええ、そうだけど、それがどうしたの？」

漣司「いや、千桜が遠距離、楯無が中、りんが近距離が得意みただから、2人のISも楯無のミステリアス・レイディと連携しやすい機体にしようかなって思うんだ。」

行人「三位一体みたいな感じにするんだ。」

美希「ああけど、一から作るとなると骨が折れそうだ。」

理沙「漣太君、既にある機体をベースにしたらどうだろうか？」

泉「理沙ちゃん、いい考えだね。」

漣司「それも考えたんだが、それはちとマズいな……。」

優人「どうして？」

千冬「存在している機体をベースとしたら、その機体を製作した国から2人の何かしらの接触があるかも分からない。下手したら2人共その国に実験などで拘束されるかも知れない。」

杉下「だから漣司君は、どの国にも属さないオリジナルのISを製作し、学園のテストパイロットになって貰い学園が保護すると言ったところでしょうね。」

漣司「2人共流石ですね。その通り、千桜とりんが国の実験動物にはさせない。だから皆でオリジナルの機体を考えて欲しいんだ。」

イブキ「だったら、デザインは私と夜空に任せて。」

夜空「結構自信はあるから、」

トオル「じゃあ次は機能はどうする？」

亀山「りんは接近戦だから、パワーとスピードがある様にしたらどうだ？」

一夏「白式のデータが参考になると思う。」

伊達「漣司、バースのバースCLAWSのデータも入れたらどうだ？」

後藤「確かにバースの武装は主に接近戦に特化しているようですし、漣司、バースのデータもそっちに送ろう。」

鈴「だったら、甲龍のデータも送るわ。パワー系だけと安定性と燃費がいいから役に立つとは思っわよ。」

セシリア「千桜さんのは実弾とエネルギー系両方の兵器を扱えるような機体の方がよろしいのでは？」

ラウラ「千桜は器用だから大型よりも小回りが効く小型の武装の方が良いだろう。」

シャル「だったら高速切替は修得した方が良いかも。僕が教えてあげるから。」

千桜「ありがとう。」

漣司「よし、りんはパワーとスピードを活かした大型の武装を扱える機体で、千桜は小回りが効く実弾、エネルギー系の武装両方扱える機体で製作しよう。」

午後2時 中庭 漣司 side

俺は気分転換に中庭を散歩している。

あれから製作しているが2割程度しか出来ていない。国がほとん

どの予算と膨大な時間と多くの人とあらゆる技術を駆使して第三世代型のISを製作しているんだ。無理もないか。東さんはそれらの努力を無駄だと主張するように第四世代型のIS《紅椿》を筭にプレゼントしているから各国のIS開発に携わっている皆さん、ご愁傷さまです……。

漣司「さてと、そろそろ戻るか……ん？」

俺は中庭の中央にあるオブジェの前に何かあるのに気付いた。

漣司「何だ？中には……メダル？」

オブジェの前にはアタッシユケースがあって開けてみると赤、緑、黄、白、青、紫、橙色のそれぞれ3種類ずつのメダルが入っていた。

漣司「セルメダルとはまた違うようだな。とりあえず持っていこう。」

俺はアタッシユケースを俺の部屋に置き、整備室に行き日付が代わるまで皆と作業をした。

その27 2つのコアと開発と7色のメダル（後書き）

ミニコーナー

漣司「おい、作者。多重クロスだからってコアメダル出すって
んこ盛り過ぎるだろ。」

いやー、バース出てきているからさ、オーズも出そうかなくて。

漣司「ったく、映司さんが出るのか？」

いや、オーズになるのは君の相棒だよ。

漣司「え？」

紅椿×オーズになるけど。

漣司「第大丈夫か？」

第「私も初めて聞くぞ……。」

では、今回はこれで……。

漣司 第「「待て。」」

漣司、第どうしたのってギャー……！

作者がログオフになった。

一夏「作者大丈夫なのか？」

漣司「大丈夫だろう・・・多分。」

箒「それじゃ次回もお楽しみに。」

その28 新パッケージと特訓と言う名のランチと7色を持った赤

3月23日 午前10時 九路洲学園 第2アリーナ 一夏 s i
d e

この日俺達はそれぞれの専用機のデータ収集の為の機体の出力調整や新武装のインストールをしていた。

一夏「漣司、白式の出力はどうだ？」

漣司「うーん。零落白夜でさえもかなりエネルギー消費するのに雪羅もかなりの大食らいだから、自滅が多いな。取り敢えず、エネルギー配分の調整してみるがエネルギー消費が激しいのは変わりないだろうな。」

一夏「うう……。紅椿の絢爛舞踏みたいな能力があれば……。」

箒「何、心配するな一夏。私がいるではないか。」

漣司「箒は絢爛舞踏を任意で発動出来るしな。俺との模擬戦も五分五分だったっけ？」

箒「どちらかと言うと漣司が6で私が4だ。」

一夏「漣司……。どうやったんだ？」

漣司「一夏も見ていたと思うが、やっぱり、紅椿みたいなエネルギー増幅機能持っていたとしても結局はシールドエネルギーを0にすれば勝てるからな。俺は箒が絢爛舞踏を発動させる前に一気に攻撃をしてエネルギーを0にさせる戦法で勝てたと言っつていい。」

箒「漣司には驚いたな……。私の二刀流でも難なくISキャリバーで対処してセシリア達とはまた違う闘い方なのだからな。」

漣司「俺は、戦闘より、どちらかと言えば不良の喧嘩みたいなものだからな。セシリア達とは勝手が違うもんな……。あつ、そうだ。一夏。」

一夏「ん？どうしたんだ漣司？」

漣司「雪羅って格闘、射撃、防御あらゆる事に対応出来ているんだよな？」

一夏「ああ、けど結構エネルギー消費が激しくてそう迂闊には使えないんだよな。」

漣司「エネルギー質だから問題なだけで、エネルギー質の代わりになる物があれば自滅は少なくなり、勝率は上がるな。」

一夏「まあ、それがあればの話だけど……。って漣司、ISメモリを出してどうしたんだ？」

一夏の言葉通り、俺はISメモリを出して自分の端末機に挿し込んだ。

『IS<インフィニット・ストラトス>！』

更に端末機から出ているコードを雪羅に挿し込む。

一夏「れっ、漣司？」

漣司「今から、I Sメモリに記録されている俺の戦闘データを端末機にある俺が設計した武装パッケージに読み込ませ、雪羅にインストールする。」

鈴「漣司、あんたいつの間にそんなの作ってたの!？」

セシリア「そうですね。パッケージだけでも資金と技術と優秀な人材と膨大な時間が必要ですのに。」

漣司「えっ? パッケージだけでもそんなに掛かってしまうものなのか?」

シャル「漣司・・・、因みにそれどれくらい掛かった?」

漣司「東さんじゃあるまいし、1週間近く掛かったよ。でも雪羅のデータがあつたから1週間で出来たんだ。」

ラウラ「新パッケージの開発は早くとも1ヶ月も掛かるんだぞ・・・。」

簪「しかも、1ヶ月ってのはセシリアがさっき言ったように資金と人材と技術が揃った場合でもっと掛かるかもしれないに・・・。」

漣司「技術については機械弄るのが好きだったし、東さんから教え

て貰った。ジローや遊星らと一緒に互いが持っている技術を見せあっていたな。」

楯無「漣司君、各国の研究員達がこれを知ったら、落胆するか、漣司君を引き込むかどちらかになると思うから気を付けた方が良いわよ。」

漣司「気を付けるよ。」

楯無の言う通りに本当に気を付けた方がいいな。

漣司「話を元に戻す。一夏、雪羅も零落白夜や同じく、全てエネルギー質で動かすから、エネルギー切れも早い。俺は代わりになる物を探してみたがけど、シールドエネルギーの代わりとなる物が無かった。」

一夏「そうか……。」

漣司「そこでだ、俺が設計したパッケージを使う。これでインストール完了だ。」

一夏「早っ！10分しかたってないぞ！」

俺は雪羅からコードを抜くと雪羅からパッケージの武装が取り付けられた。

漣司の作業は凄い。パッケージにI Sメモリのデータを読み込ませながら、雪羅にインストール、同時進行でやってのけた。

漣司が雪羅からコードを抜くと雪羅の上部分には2メートル強の物理シールド、右部分には並列に並んだ2枚刃のブレード、左部分には実弾のキャノン砲が2門がそれぞれ取り付けられ、雪羅の爪部分が白から銀色に変わった。

漣司「一夏、シールドエネルギーを、消費して戦闘する必要がない状況で使うようにしたのがこのパッケージ。『雪羅・破壊の騎士』と俺は名付けた。」

一夏「破壊の騎士……。」

漣司「このパッケージは実弾の武装や物理的攻撃用に組み込んだんだ。これで物理的、エネルギー系の格闘、射撃、防御が両方可能となった。」

一夏「両方に……。」

漣司「だがな、これはエネルギー系の攻撃には対処出来なくて、それは普通の雪羅に切り替えなければならないんだ。」

箒「状況に合わせて切り替えないとパッケージが破損してしまうんだな。」

漣司「そう言う事。じゃあ一夏、俺が物理的、箒がエネルギー系

の攻撃するから、上手く切り替えが出来る特訓しよう。」

一夏「ちょっと待て！それって、俺対漣司、箒の1対2の模擬戦だよな！？」

漣司「心配するな。出来る限り力を制限する・・・多分。」

一夏「多分って、何！？多分って！」

漣司「俺は大丈夫だが、箒、力みすぎるなよ。」

箒「心配するな漣司。私も紅椿を大分使いこなせて『穿千』^{うがち}も使用可能となった。」

漣司「両肩の展開装甲がクロスボウに変形したブラスタライフルだったな。束さんの話だと戦闘経験値が一定に達すると使用可能と聞いたが、箒そこまで成長したか。」

箒「ああ、だから漣司、私に気を使わず一夏の特訓に集中しよう。」

漣司「そうだな、それじゃ一夏！行くぜ！」

箒「行くぞ一夏！」

一夏「ちょっと、ちょっと待て！これじゃ、特訓じゃなくてただのリンチ・・・って、アー！！！！」

1時間後、そこには「動かない。まるで屍のようだ。」状態の一夏がいた。

漣司「一夏、大丈夫か？」

一夏「大丈夫……じゃない……。」

一夏が弱々しく答えた。

最初の方は切り替えが出来ていたが、俺と箒が少しレベルを上げたら、一夏が冷静に判断出来なくなり、切り替えが出来ない隙に俺と箒が攻撃して一夏が撃沈した。

漣司「一夏、すまん……。」

箒「やり過ぎてしまった……。」

箒は一夏を担ぐと医療室に運んだ。

それにしても『破壊の騎士』は予想以上に性能は良かった。一夏も初めてにしては大分使いこなせていたし。

鈴「漣司、あたしの専用パッケージ作って欲しいんだけど。」

セシリア「わたくしもお願いしますわ。」

シャル「僕も作って欲しいいな。」

ラウラ「私も頼む。」

簪「私も……。」

漣司「ああ俺で良ければな。」

ジローや遊星達に手伝ってもらおうと思った。

同時刻 学生寮 漣司達の部屋

漣司の机にあるケースが7色に光だした。

ギヤラクシー『何だ？』

ウィン『どうしたの〜？』

ギヤラクシー『いや、昨日漣司が持ってきたケースが光だしてよ。開けてみるか。』

ギヤラクシーはケースを開けようと手を伸ばした。

ギヤラクシー『うおっ!?!』

ウィンダ『きゃあ!』

3枚で1種類、合わせて7種類、合計21枚のメダルがケースから出てきて、外に出ていった。

ギャラクシー『何だったんだ？』

ウィン『さあ？』

同時刻 医療室 第side

今一夏はベットで寝ている。少しやり過ぎてしまったな。

第「何か飲み物でも買ってくるか・・・！」

私は一夏の為に飲み物を買うに行こうと立ち上がって驚いた。待機状態の紅椿を机に置いていたのだが、21枚のメダルみたいなのに囲まれて宙に浮いていた。

第「何だ？このメダルは？」

暫し見ていたが、緑、黄、白、青、赤、紫、橙の順番に待機状態の紅椿に取り込まれた。紅椿が床に落ちそうだったので慌ててキャッチした時も驚いた。紅椿の待機状態は金と銀の2つの鈴が付いた紐なのだが、鈴がさっきのメダルと同じ色が7つ増え、紐も真ん中部分7色に色付けされていた。

第「紅椿・・・。お前も進化するのか？」

私は紅椿の待機状態を胸元の前まで寄せ、握り締めた。

第「姉さんか漣司に聞いてみよう。」

私はそう言いながら飲み物を買いに医療室を後にした。

その28 新パッケージと特訓と言う名のリンチと7色を持った赤（後書き）

ミニコーナー

漣司「今回紅椿が取り込んだメダルはご存知のようにタカ、クジヤク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バッタ、ライオン、トラ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウ、シャチ、ウナギ、タコ、プテラ、トリケラ、ティラノ、コブラ、カメ、ワニだ。それにしても、当初の予定では今回で第3がオーズになる予定だったんだか、作者これはどういう事だ？」

.....。

漣司「この沈黙が恐ろしい.....。」

一夏「取り敢えず、次回もお楽しみに。」

その29 信じる信じないと捜索とドーパントガールズ

同日 午前11時 学園地区 九路洲学園 学生寮 漣司達の部屋

一夏、箒を除いた主人公達と他の仲間達は漣司達の部屋に来ていた。

漣司「ギャラクシー、このケースに入っていたメダルは本当に何処かに行っただんだな？」

ギャラクシー「ああ、間違いねえ。7色に光だしたから開けようとしたらメダルが出てきて何処かに行っちゃったんだ。」

後藤「まさか、コアメダルまでこの世界に来るとは。」

ワタル「コアメダル？」

後藤「コアメダルはヤミーを作る怪人グリードの核となるメダルでセルメダルとは比べ物にならない程強力な力を持っているんだ。」

伊澄「そう言えば、昨日中庭にいた漣司様から強力な力を感じたわ。」

まち「伊澄も感じた？確かに式神や妖怪とも違う力を感じたわね。」

ココ「21個の強力な電磁波を感じたね。」

行人「またまた皆妖怪とか不思議な力とかただのメダルなんかにそんな力があるわけないでしょ。漣司もそんな痛い創作は良くないよ。」

漣司「行人、ガイアメモリやISは信じてコアメダルは信じないのか？」

行人「信じるも何もISとガイアメモリはオーバテクノロジーで作られているからね。妖怪やらそのメダルの力やら信じる事が出来ない・・・ムグッ！」

行人が言い終わる前にさすが行人の口を抑えていた。

すず「もおー！行人が喋るとややこしくなるから、少し黙ってて！・・・って行人！？」

すずは口と一緒に鼻まで抑えてしまったから息が出来なくなり、行人が気絶した。

あやね「すず、あんたやり過ぎよ・・・。」

すず「うにゃあーん！！行人ーん！！！！」

すずは行人を揺さぶる。

ゼブラ「行人の心音や脈拍を聴いてみたらどうやら本当に信じてねーみてーだぜ。」

緋鞠「そうじゃの行人殿は私の耳や尻尾をハリボテだと思ってい

るようじゃし。」

ギャラクシー『俺らをホログラムだと思っているようだし。』

伊澄「私達が力を見せても。」

くえす「手品としか見てくれませんでしたわ。」

伊達「行人はセルメダルをガソリンか何かを固めた物かと思っ
ているし。」

黒澤「私のスーツも変な解釈していますし……。」

中津川「スーツって言えば、あたし達がISスーツ姿の時行人だ
けが、不自然に視線反らしてたよな。」

ゆきの「顔を無理矢理向かせたら鼻血出して気絶しちゃったし。」

漣司「案外行人が一番大変なのかもな。」

優人「相棒としても少しでも良いから信じてほしいよ……。」

トリコ「こればかりしょうがないんじゃないかね？」

愛歌「行人君は取り敢えず寝かせておいて、まずはそのコアメダ
ルを捜すのが先決ね。」

漣司「そうだな、皆伊澄やまち、力を感じ取れる者をリーダーに
して手分けして捜そう。」

こうして漣司達はコアメダルを捜索が始まる。

中庭 漣司 side

俺は取り敢えずギャラクシーと一緒にコアメダルを捜していた。

漣司「それにしても変だ……。」

ギャラクシー「何がだ？」

漣司「誰がどうしてコアメダルだけをこの世界に……？」

ギャラクシー「コアメダルだけじゃおかしいのか？漣司。」

漣司「ああ。後藤から聞いた話じゃ、コアメダルの制御するベルトがあるんだと。」

ギャラクシー「レイだったら、そのベルトも送るはずだからな。」

ギャラクシーの言う通り、レイが俺達の誰かにコアメダルの力を使わせようとするなら、そのベルトまで送るはずだ。

漣司「俺が想像出来る事は3つ。1つはレイが言ってたこの世界を混沌にしようする奴が送り込んだ。」

ギャラクシー「なるほどな。」

漣司「2つ、レイが送り込んだ前提の話なんだが、レイはベルトが無くてコアメダルの力を引き出せる力を持った奴がいると知っていてあえてコアメダルだけを送った。」

ギヤラクシー「力を引き出せる奴がいるならベルトは必要ないな。」

漣司「3つは・・・これもレイが送り込んだと前提なんだが、レイがただベルト入れるのを忘れたのか・・・。」

ギヤラクシー「それは・・・有り得るな・・・。」

レイは神だったとしてもどっか抜けているところがあるからな。ベルト入れるのを忘れたとしても不思議ではない。

ギヤラクシー「レイの奴・・・漣司！この先から強力な力を5つ感じるぞ！」

ギヤラクシーがそう言うと、目の前に、高校生ぐらいの女の子が5人いた。

漣司「お前ら誰だ。」

？「私達はこの4月にこの学園に入学するんだよ。君も？」

漣司「そうなのか？それじゃ後で案内を・・・。」

ギヤラクシー「おい！漣司！この小娘からさっきの力を感じるぞ。」

『！』

漣司「何!？」

俺は彼女達から素早く離れた。

?「あちゃー、バレてもーたか。」

?「ボク達が新しく手に入った力を見抜く何てね。」

?「私達はこの学園で自分の力を試そうと入学してきました。」

?「陰で隠れて試そうと思ったがしょうがねえ。」

?「悪いけど、君には口封じとして消えてもらうよ。」

彼女達はそう言うとそれぞれガイアメモリを出したが、ちょっと待てあれは……!

『サイクロン!』

『ヒート!』

『ルナ!』

『メタル!』

『トリガー!』

それぞれガイアメモリを差し込んでドーパントになった。ふざけるなよ。あれは、あのメモリは……!

ルナ「うーんやっぱりこれ気分がいいね。」

ヒート「さすがはガイアメモリってところか。この力を使ってこの学園を好き放題に「おい。」「！！???」

俺は彼女達が話している途中に俺の堪忍袋の緒が切れてしまったようだ。

ギャラクシー『（ヤバい！ナンバーズの時の漣司になってやがる！）』

漣司「お前らが使っているのはな、ある都市を命懸けで守っている2人の人が使っている力だ。学園を好き放題に出来る為にあるんじゃないんだよ！」

メタル「そつ、それでどうするのですか？ドーパントになった私達を倒そうと？」

トリガー「だったらお前もこのメモリでドーパントに「その必要はない。」「は？」

トリガードーパントはジョーカーメモリを取り出したが俺は断る。

漣司「何故なら、俺自身がジョーカーだからだ。」

俺は左手に持ったジョーカーメモリ彼女達に見せた。

『ジョーカー！』

俺はロストドライバーを装着しジョーカーメモリを挿し込み展開した。

漣司「変身……。」

『ジョーカー!』

『『『『『!?!?』』』』』

彼女達はジョーカーになった俺に驚く。

サイクロン「あなたは何者なの!?!」

漣司「言っただろ?俺は仮面ライダー……ジョーカー!」

俺は彼女達に指差しながら言った。

漣司「さあ、お前達の罪を数えろ!」

彼女は一齐に俺に立ち向かって来るが、恐怖は感じない。何故なら、彼女達が使っても弱いと確信していたからだ。あのメモリ達はあの2人だけが使いこなせる力だからだ。

その29 信じる信じないと捜索とドーパントガールズ（後書き）

ミニコーナー

レイ「ちよつとー！ー！ー！！漣司君！！」

漣司「どうしたレイ？」

レイ「どうしたも何も私が何か何時も凡ミスするようない方・
」。

ギャラクシー「その凡ミスで漣司を死なせてしまったのを忘れて・

・。っつて、おい、泣くな！」

漣司「レイが泣いちまって慰めるのに時間が掛かるからな・。・。
今回はここまでだ。じゃあな。」

その30 第六感と救援とエセ外国人

ドーパント達は一斉に漣司に立ち向かう。

ヒート「くっ！こいつホンマに強い！」

メタル「私達の運動神経の高さとメモリの能力、相性の良さには自信がありました、彼はどれも私達の上をいってます！」

ヒートは熱を帯びた拳で、メタルはシャフトの棒術で立ち向かうが漣司は必要最低限の動きで対処してカウンター攻撃を主体とした戦法で5人を一度に相手していた。

ルナ「おりゃ！」

トリガー「喰らえ！」

ルナは両手を伸ばし、トリガーは所持していた銃で射撃したが、漣司はルナの両手を掴み、盾のようにして弾丸を防ぐ。

ルナ「痛っ！？」

トリガー「あつ！悪い……って、わぁ！？」

ルナ「きゃあああぁっ！！」

漣司はルナをハンマー投げの要領でトリガーの方に投げた。

サイクロン「皆！よくも……！」

サイクロンは漣司に突進し回り蹴りを連続で繰り出した。

サイクロン「はあっ！はあっ！はあああああっ！！」

ところが漣司には全く当たらない。漣司には相手が次にどんな攻撃、防御が相手の仕草で大体予想ができ、対処している。

漣司は転生する前、中学、高校時代様々な不良に喧嘩を売られ、全て買い喧嘩をした。その経験から相手の行動を直感的に予想が出来る第六感に近い感覚を身に付けていた。

また、千冬から軍の訓練と織り混ぜた特訓メニューにISの模擬戦、一夏や箒との剣道の練習や自主トレーニングなどで漣司のそれは更に鋭さを増していき、的中率90%以上になっていった。

漣司が人からの好意に鋭いのは正にこれが原因である。

因みに一番発達しているのは漣司で一夏達は漣司のようには上手く出来ないが、多少なりとも予想は出来ている。

サイクロン「くっ！なかなか当たらない！だったら皆！！」

ヒート「ええ！」

ルナ「うん！」

メタル「はい！」

トリガー「おう！」

漣司「ぐっっっ！」

彼女達は一緒のタイミングで攻撃が漣司に直撃し漣司は苦痛の声を上げる。

漣司「かはっ！」

サイクロン「やっぱり。君は私達の攻撃を予想出来ても一緒に同じタイミングで攻撃されたら対処出来ないね。」

漣司「ぐっ！（これはちとマズいな・・・。）

ヒート「それやったら、覚悟！」

ヒートは漣司に止めを指そうとした。

漣司「千冬さんに怒られる覚悟で12本のメモリを使わせ「使う必要は無いわ漣司。」え？」

イブキ「りゅうのはどう!」

夜空「雷の剣（サンダー・セイバー）。」

イブキが体から波動を、夜空は魔力で作り出した、雷の力を宿した蛇腹剣でヒートを攻撃した。

ヒート「ぐあっ!」

メタル「ヒート!だったら私が「はぁー!」「!?!」

シャフトを構えたメタルには木刀を持った行人と優人が防いだ。

トリガー「何だよこいつらは」「お前の相手は俺達だ!」「!?!?」

トリガーの前に遊星とトリコが現れる。

遊星「レベル2、スピードウォリアーにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング!」

遊星のデュエルディスクから召喚されたジャンク・シンクロンが3つの光の輪となり、スピードウォリアーを包む。

遊星「集いし星が、新たな力を呼び起こす!光差す道となれ!シンクロ召喚!出でよ!」ジャンク・ウォリアー!」

遊星の前にレベル5のシンクロモンスター、ジャンク・ウォリアーが召喚された。

トリコ「はああああ!」

トリコも右腕に力を込める。

遊星「行け」ジャンク・ウォリアー!」

トリコ「10連……」

遊星「スクラップ・フィスト!」

トリコ「釘パンチ!」

2つのパンチがトリガーに炸裂する。

トリガー「ぐはっ!!」

ルナ「皆!だったら」「させるかー!!」「!?!」

ジロー「ジローワイルドドリルキック!」

ハヤテ「疾風の如く!」

ジローと木刀・正宗を所持していたハヤテはそれぞれの必殺技をルナに当てた。

ルナ「うわー!」

ルナは吹き飛ばされる。

サイクロン「ちょっと2対1は卑怯」「5人で漣司を袋叩きにしようとする奴に言われたくない。」「!?!」

『キヤタピラレッグ!』

『シヨベルアーム!』

伊達と後藤はバースに変身して伊達は両足に装備された紫色のラインが入ったキヤタピラで、後藤は左腕に装備された橙色のラインが入ったバケットでサイクロンに攻撃した。

サイクロン「うにゃあああああっ!?!」

ドーパント達を攻撃した後藤達は漣司の元に駆けつける。

ハヤテ「漣司君！大丈夫ですか！？」

漣司「ああ……。なんとかな……。行人……。目え覚めたんだな……。」

行人「まあ、あの後ね……。」

漣司「遊星もデュエルディスクのモンスターの実体化に成功したんだな……。」

遊星「ああ、漣司。お前やジロー達が協力してくれたおかげだ。まだ試作段階でウェーブメモリのように上手くいかないが……。」

優人「それよりも漣司、ジョーカーのボディがボロボロじゃないか！」

優人の言う通り、さっきの一斉攻撃でジョーカーは傷だらけで漣司も軽傷ではないだろうと誰でも理解出来た。

漣司「やっぱり、5人まとめて相手するのは無理があつたか。」

伊達「全く、漣司も後藤ちゃんと同じく無茶するね。」

ジロー「漣司！何故すぐ知らせなかつたのだ！」

漣司「悪いなジロー……。あいつらが使っているのは、仮面ライダーとして闘っている2人が使っているメモリで、あいつらはそれで学園を好き放題にしてやると言いやがったから、いてもたっても

もられず……。」

イブキ「だからって漣司一人で頑張る必要はないの！」

漣司「イブキ……。」

夜空「イブキの言う通りよ漣司。漣司がこの前篇に言ったのを覚えてるわよね？」

漣司「自己犠牲は考えず、仲間達を頼れ……！」

夜空「いい、漣司がいなくなったら私達も悲しいし、千桜も楯無もりんも千冬さんも束さんも杉下さん達も悲しむし……。」

後藤「何より相棒の篝ちゃんも悲しませる事になる。」

ギヤラクシー「漣司……俺達精霊もだからな……。」

漣司「皆……すまねえ。」

ハヤテ「いいですって。早くあの人達を止めましょう。」

漣司「ああ！」

漣司達、11人の主人公がそれぞれ構える。

サイクロン「うー痛たた……って、うわ!？」

ハヤテ、ジロー、トリコ、遊星、行人、優人、夜空、イブキがド
ーパント達に攻撃して一ヶ所に集めさせた。

ジロー「後藤、伊達先生今だ！」

後藤「ああ！」

伊達「はいよ。」

後藤はバースバスターのメダルポッドを銃口に連結させ、

『ブレストキャノン！』

伊達はブレストキャノンを装備した。

『セルバースト！』

バースバスターの砲撃がヒート、ルナにブレストキャノンの砲撃がトリガー、メタルに直撃した。

漣司「俺も決めるぜ。」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司「ライダーパンチ！」

漣司は紫色の炎を宿した拳でサイクロンを殴った。

「「「「ぐわあー！」「」「」

ドーパント達からメモリが排出され、少女達に戻った。

サイクロン「あれー？ここは？」

ヒート「うちら、何してたんやろ？」

行人「君達、何やってたか覚えてないの？」

メタル「ええ、全く・・・。」

トリコ「まさかお前達もナンバーズを！？」

ギャラクシー『いや、コイツらは持つてねえ。』

漣司「ああ、操られていたにしては意識ははっきりしていたしな。俺は桐札漣司だ。お前らは？」

サイクロン「えみな「私は都幾川えみなだよ。」

ヒート「なな「うちは瑞穂ななや。」

ルナ「美由「ボクは鳩山美由だよ。」

トリガー「理沙「オレは名栗理沙だ。」

メタル「静「私は花園静です。」

漣司達はえみな達の名前を聞いた後、散らばっている、6本のメモリを回収した。

ジロー「半分のは漣司のメモリと同じだな。」

漣司「ああ、さっきも言ったように、これらのメモリは『仮面ラ

ライダーW』と言う2人で1人の仮面ライダーが使うメモリだ。」

「静」でも何故私達が持っていたのでしょうか？」

？「ハッー、ハッ、ハッ！」

「！！！？」

皆が考えていた時に甲高い笑い声が聞こえた。

？「ソレハワタシガメモリノチカラヲツカッテアナタタチヲアヤツツテイタカラデース。」

漣司達は声がしたほうを向くとそこには外国人（？）がいた。

漣司「何だ？あの素直に外国人とは思えない、外国人に会ったのは初めてだ。」

ギルバード「ワタシハ『ラッキークローバーズ』のヒトリ、ギルバードデー・・・ギャーーーーー！！！！？」

ギルバードと言う外国人（？）が言い終わる前にハヤテが木刀・正宗を持って襲い掛かった。

ここからは残酷過ぎるので『音声』だけをお送りします。by作者

ドカツ！バキッ！ドコッ！

ギルバード「ハヤテサーン！イタイデース！！！」

メリツ！ガリガリ！グリグリ！

ギルバード「ギャーーーーー！ハヤテサーン！コスラナイデー！
キズグチエグラナイデクダサーイ！！」

ヒューーーーー、ゴシャ！ドシャ！グシャ！メキメキ！

ギルバード「アツーーーーー！！！！！！！！！！」

ハヤテ「ふうっ、スッキリしました。（超スマイル顔）」

優人「あんな笑顔であれをやるハヤテは正直言って怖い……。」

夜空「あれだけやられてもあの外国人（？）、原型は留められて
いるわね……。」

トリコ「奴が頑丈なのか、ハヤテが加減したのか……まあ、加
減しているようには見えなかったな。」

漣司「ハヤテがああなるとはあの外国人（？）とハヤテの関係っ
て……？」

一気に謎が深まる漣司達であった。

その30 第六感と救援とエセ外国人（後書き）

ミニコーナー

ハヤテ「ここでは初めまして。綾崎ハヤテです。いやー今回はスツキリしました（ブラックスマイル）。」

漣司「ハヤテ・・・一体どうしたんだ？」

一夏「さあ？」

第「今回のと関係ありそうだが・・・、次で決着がつきます。」

後藤「次回もお楽しみに。」

その31 副作用と闘牛と連携攻撃

後藤「ハヤテ、このギルバードって人とはどういう関係だ？」

ハヤテ「お嬢様の遺産を狙うエセ外国人ですよ」

遊星「ハヤテ目が笑ってないぞ・・・。」

ギルバード「グツ・・・！」

漣司「漸く意識が戻ったか。教える、何でこれらのメモリを持っていた？」

ギルバード「アナタガタニオシエルキハアリマセーン！」

ギルバードは漣司から離れると別のガイアメモリを手に持った。

『ライアー！』

ギルバードはライアーメモリでライアードーパントに変身した。

漣司「なるほど、えみな達をライアーの能力で『自分達はメモリの力を使い学園を好き放題したい』と言う嘘の欲望を信じこませていたのか・・・！」

漣司はえみな達よりも更に怒りが込み上げているのがハヤテ達はすぐにわかった。

行人「漣司、怒っているの？」

えみな「わ、私達も・・・ふえっ!？」

えみなのはサイクロンメモリに手を伸ばしたが、漣司はえみなの腕を掴み遮る。

漣司「頼む・・・、使わないでくれ・・・。お前達をメモリの犠牲になって欲しくない・・・。あの人達の名を汚したくないんだ・・・。」

漣司は悲しそうな目でえみなを見る。

えみな「う・・・うん。(何だろ?漣司君に腕を掴まれてドキドキ・・・じゃなくて!何であんな悲しそうな目を?)」

ライアー「グオオオオオー!!」

ライアーはえみなに向かって突進した。

漣司「危ねえ!？」

えみな「きゃあ!？」

漣司はえみなの抱えてライアーの突進を間一髪で回避した。

漣司「大丈夫か？」

えみな「あつ、ありがとう・・・!。だ、大丈夫だから降ろして!」

漣司「ああ悪い。」

えみなは漣司にお姫様抱っこされているのに気付いたので漣司に降ろして貰うように頼み、漣司はえみなを降ろす。

えみな「あつ……ありがとう（なつ何なのこの気持ち！？胸がドキドキする……。）」

遊星「皆！来るぞ！」

遊星の言葉で全員が構える。

ガシッ！

ライアーはバッファローの怪力で半径3メートルの岩石を持ち上げて投げて来た。

ジロー「ここは俺」「俺達に任せな！」「！？」

ジローが必殺技を放とうとするが目の前にゼブラとサニーが現れる。

ゼブラ「てめーら、耳塞げよ！」

ゼブラは大きく息を吸い、漣司達は耳を塞ぐ。

ゼブラ「サウンドバズーカ！」

ゼブラの咆哮の衝撃で岩石を粉々に砕く。

サニー「髪^{ヘア}ネット！」

サニーの目に見えない触覚がネットを作り、岩石の全ての破片を受け止めた。

サニー「スーパーフライ返し！」

サニーは飛んできた以上のスピードで岩石を弾き飛ばし、ライアーに直撃した。

ライアー「グアッ!？」

ジャラジャラ!

ライアー「!？」

3方向から分銅の付いた鎖がライアーを巻き付ける。

くない「よし！」

しのぶ「上手くいったでござる。」

みこと「でも力が強いからそう長く持たへん！」

鎖の先にはそれぞれ忍装束のくない、しのぶ、みことが鎖を握っていた。

ヒナギク「いいえ、ありがとう。」

緋鞠「時間稼ぎ感謝するぞ。」

ライアーが鎖を引きちぎった瞬間に前には白桜を持ったヒナギク、後ろには安綱を構えた緋鞠がライアーに斬撃を放つ。

ライアー「ガハッ！クソッ！グウゼンヒロツタメモリデメチャク
チャニスルワタシノヤボウガー！！」

ライアーはヒナギク、緋鞠に突進を繰り返すが、動きが止まる。

ライアー「！？」

ラウラ「私達を忘れてもらっては困るな。」

ラウラのシュヴァルツァ・レーゲンのAICで停止させた。

鈴「ラウラ、そのまま押さえてね！」

セシリア「行きますわよ！」

簪「ヒナギク！緋鞠！離れて！」

ヒナギクと緋鞠は離れると セシリアはブルー・ティアーズの6機のビットとレーザーライフルスターライザーmkIEEの一斉射撃で鈴は甲龍の2門ある龍砲の衝撃砲を最大出力で放ち、簪は打鉄二式の山嵐のミサイル一斉射撃でライアーに全命中した。

シャルロット「まだまだ！」

シャルロットは撃ち落とされたライアーに近付き、ラファール・リヴァイヴ・カスタムIEEの切り札とも言える左腕の大型物理シールドに隠された灰色の鱗殻でライアーを打つ。

ズガン！ズガン！ズガン！

リボルバー式なので連射が可能なので3連発くらわせる。

ライアー「クソツッー！ー！」

ライアーは2本のバッファローの角を伸ばし漣司を串刺しにしよ
うとするが……。

ガキンッ！

一夏「漣司、遅くなったな。」

箒「漣司、大丈夫か！？」

一夏が雪片で箒は空裂で角を防ぐ。

漣司「まあ、結構ギリギリなんだがな……。一夏も目が覚めた
んだな。」

一夏「ああ、さっきな。おりゃ！」

箒「はあっ！」

雪片で右角を空裂で左角を切断した。

漣司「行くぜ！」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司「ライダーキック！」

漣司はライダーにライダーキックをくらわせる。

ライダー「ギャアーーーー!?」

ライダーとバッファローのメモリはメモリブレイクしギルバードは気絶し、倒れる。

漣司「こいつ、拾ったと言ってたな……。目が覚めた後、聞き出すとするか……。うっ!?うっ……。うっ……。うっ……。」

ジョーカーの変身が解除され、漣司も気絶して倒れる。

「漣司!?」

篤達は漣司に駆け寄る。

伊達「マズイ!傷が思ったよりか酷いな。応急措置するから手伝って後藤ちゃん！」

後藤「わかりました！」

トリコ「それじゃ俺が運ぶぜ！」

一夏「漣司、死ぬなよ！」

応急措置が終わった漣司をトリコが運び急いで医療室に向かった。

その31 副作用と鬪牛と連携攻撃（後書き）

ミニコーナー

一夏「織斑一夏です。今回は漣司の設定追加です。」

1 漣司はこの作品の原作はWまでの平成仮面ライダーしか知らない。

2 漣司の身体能力や技術力は転生前からの努力して得たものでレイから貰ったチートのものではない。

3 後に漣司はこれから邪な気持ちでチートに頼って努力しない転生者が来た時、その転生者を元の世界に強制送還させる力を手にする。

一夏「最後のはネタバレになっちゃったな……。以上の3つはこれからの物語に係る事らしい。次回も楽しみにしてくれ。」

その32 傷と謝罪と天才達の会話(前書き)

早く投稿出来た・・・。

その32 傷と謝罪と天才達の会話

午後3時 医療室の前

えみな「ぐすつ・・・、ひつぐ・・・、うええ・・・。」

えみは医療室に着いてからずっと泣き出していた。

梅梅「ひゃあああ、泣き止んでください？」

梅梅は慰めているが無理もない。いくらライアードーパントの能力で操られていたとしても、漣司に重傷を負わせ、気絶させてしまったのは自分達なのだ。

ななも美由も理沙も静も暗い顔している。

鈴「はあ、アンタ達のせいでこんな事になったんでしょ。今反省中？ふざけんじゃないわよ！」

理沙「何だと！」

理沙は鈴の胸ぐらを掴もうとするが、鈴は理沙の腕を取り左手で理沙の両腕を理沙の背中に右手で理沙の頭を抑え、床にねじ伏せさせる。

理沙「はっ、離せ！」

鈴「アンタ達は何で泣いたり落ち込んだりしかできないのよ！漣司を信じる事が出来ないの!？」

理沙「お前達は心配じゃねーのかよ!？」

鈴「あたし達が心配してないと言いたいの!？」

ココ「鈴ちゃん、離してあげなよ。」

ココに言われ理沙を離す鈴。

ココ「大丈夫。漣司君に死相は見えなかった。漣司君は死なないよ。」

ジャック「漣司は例えその死相があろうがなかるうが、こんな事ぐらいでくたばる奴ではない!」

篝「何より、漣司は私の相棒だ。相棒の私だ。相棒の私を残して死ぬなど有り得ん。」

千冬「静かにしてるガキ共。桐札はこれくらいで死なない。何せ私の生徒だからな。」

プシュー。

医療室のドアが開き、漣司の治療をしていた伊達と後藤が出てきた。

伊達「終わったぜ千冬ちゃん。」

千冬「ご苦労様です。それから伊達先生。ここでは織斑先生と呼んでください。」

伊達「あつ、すみません。」

えみな「あ、あの！」

伊達「うおっ!？」

えみなのは伊達の両腕を掴む。

えみな「漣司君はどうなったんですか!？」

後藤「君、落ち着いて！」

伊達「大丈夫だ。漣司は今寝ているんだが……。」

千冬「何か問題が？」

後藤「皆、落ち着いて聞いてくれ。漣司の傷が治っているんだ。」

「「「え?」「」」

後藤の言葉に皆驚く。

ナギ「どつという事なのだ？」

弾「漣司って超再生力の細胞を持っていたのか？」

数馬「幾らなんでも早すぎね?」

小松「そうですよ!グルメ細胞を持っているトリコさん達でも適した食材を食べないと、傷が治らないのに!」

咲夜「漣司兄ちゃんも伊澄さん達と同じく力を持つてんのか？」

伊澄「いいえ、漣司様からそういったのは感じられなかったわ。」

伊達「なんと云うか、傷を負った後が無いんだよ。」

後藤「治ったと言うよりまるで最初から傷なんか負ってないって、言った方が正しいか。」

伊達「俺と後藤ちゃんは調べたが原因が解らずに、出てきたところだ。」

一夏「そう言えば、初めてハヤテ達と会った時、ドーパントの攻撃から箒を庇って受けた時も漣司の傷、いつの間にか治っていたし。」

アキ「もしかしてガイアメモリの力に耐える事が出来るのとの関係があるのかしら？」

ジロー「確かに関係があるかもしれないが、情報が少なすぎる。」

皆が意見しあっていたその時、

漣司「うっ……うっん。」

漣司が目を覚ます。

「漣司！」

皆が漣司が寝ているベッドに集まる。

千冬「桐札、大丈夫か？気分は悪くないか？」

漣司「織斑先生。ああ、はい。頭が少し痛いだけです・・・」
「ギョッ！」!?。」

漣司の意識が一気に覚醒した。何故なら、えみなが泣きながら漣司に抱き付いたのだ。

えみな「ぐすつ・・・、うええ・・・、ごめんなさい。ごめんなさい・・・。」

泣きながら謝るえみなに漣司は一瞬戸惑っていたが直ぐに、

漣司「気にすんな。お前達は悪くない。」

漣司はえみなの頭を撫でた。

千桜「(うう・・・。出遅れた。)」

楯無「(新たな強敵現れるか・・・。)」

りん「(いいなあ、あの子・・・ダンナに撫でてもらって・・・。)」

落胆する3人。

5分後、えみなは泣き止み、今度は顔真っ赤にして漣司から離れた。

えみな「えっ、えっでごめんなさい。」

漣司「俺は大丈夫だ。気にすんな。」

一夏「漣司、傷は大丈夫なのか？」

漣司「ああ、俺自身も驚く程、完治してんだ。元の世界でもケンカした時、よくケガしてたが、次の日になるとまるでケガなんかしてなかったかのように傷が治っているんだ。」

えみな「漣司君、元の世界って？」

漣司「ああ、それはな……。」

漣司は自分が転生してこの世界に来た事をえみな達に伝える。

えみな「そうだったんだ……。」

漣司「まあ仮面ライダーの力以外は転生前とほぼ同じなんだがな……。そう言えば、ギルバードはどうなったんだ？」

遊星「今は地下の独房室に入れている。学園を襲撃したんだ。織斑先生の判断でそうした。」

漣司「そうか……。」

ガシッ！

千冬「待て桐札何処に行く？」

漣司はベッドから降り部屋から出ようとしたが、千冬に止められる。

漣司「何って奴から聞き出すんですよ。アイツはWのメモリを拾ったと言ったが、もう少し話を聞いてくる。」

千冬「だったら焦るな。近い内、その男に尋問する。お前も同行を認めるから今は休め。」

漣司「・・・わかりました。」

漣司は千冬に説得されベッドに戻る。

漣司「傷は治ったが、疲れているみたいだから寝さしてもらおう・・・。」

篝「ああ、お休み、漣司。」

篝達は部屋から出た。

転生の方舟

ここは漣司を今の世界に転生させた場所で、まだ死ぬべきじゃない人が死んでしまった時別の世界に転生させる転生の方舟。

そこを管理しているのが、漣司を凡ミス(?)で死なせてしまった。新人の神、レイ・スカーレット・ノヴァである。

レイ「むっ、なんか失礼な事を言われた気が……。ん？東ちゃんからの着信だ〜」

レイは東からの着信を繋げる。

レイ「ヤッホー東ちゃん」

東「こつちこそヤッホー レイちゃん」

レイ「どうしたの東ちゃんから連絡なんて珍しいね」

東「うん、れっくんの体に何かが起きているみたいなんだよ。」

東は急に真面目な声で言う。

レイ「成る程、意外と早く兆候が出るとは……。東ちゃん、今から漣司君達にはまだ早い話をするから。」

東「わかったよ。」

レイ「ありがとう。実は漣司君がそつちの世界に来てから、漣司君の体内に少しずつだけど、あるメモリが作られているのがわかったんだ。そのメモリの名は……、」

エクストリームメモリだよ。」

束は納得したかのように頷く。

束「束さんは何をすればいいのかな？」

レイ「束ちゃんは今まで通り他の子達でも闘える力を開発して欲しいのと、これから誰かの力で転生して来る子が来るかも知れない。来た時は知らせるからもしその子が漣司君達に危害を加えそうだったら、元の世界に強制送還して欲しいんだ。」

束さん「わかったよ。でもエクストリームが完成したらどうなるの？」

レイ「私の予想だと、漣司君はガイアメモリもISも執事の力も正悪の組織もデュエルモンスターズもグルメ食材も妖も全てを司る究極の仮面ライダーになっていると思う……。」

レイは複雑な表情になる。

束「そうか……。そう言えば、紅椿がコアメダルを取り込んだ件だけだね。あれもわかった？」

レイ「うん。どうやら、あのコアメダルは錬金術とは違う方法で

作られたみたいで、元のあった世界から何かしらの原因でこっちに
来たみたい。」

東「グリードが復活するかもしれないと？」

レイ「それは安心して。どうやら、頭部のコアそれぞれにグリー
ドとは違う、真の友情を持った7人の勇者の意思が込められている
みたいだから。」

東「そう、なら安心したよ。それじゃまたね〜」

レイ「うん またね〜」

東からの通信が終わった。

レイ「よし、私も頑張るか!」

一層やる気を出すレイであった。

その32 傷と謝罪と天才達の会話（後書き）

ミニコーナー

orz・・・。

漣司「どうした作者？」

感想を書いてくれた人が3人だけで、毎回書いてくれる人が1人しかない・・・。

漣司「作者・・・。1人でも毎回感想書いてくれる人がいるんだ。それだけでも、充分幸せだと思うぜ。」

漣司・・・。

漣司「感想たくさん来て欲しいなら、文章力を上げたり、投稿ペー
スを早めにしたりする努力をしろ！」

はいいいいっ!??

漣司「ったく、これを読んで下さっている皆さん、ウチの哀れな
作者の為に感想を待ってるぜ。次回も楽しみにしてくれ。」

その33 少女達の会話と夢と石板

3月24日 午前9時 学生寮 廊下

ここ学生寮の廊下で2人の少女が悲鳴を上げていた。名前はみちると三千院ナギである。その原因は・・・

みちる「いやぁー！離してください。漣司くん！」

ナギ「漣司離せー！！！」

・・・半日近い睡眠をとって元気になった漣司である。しかし彼は少々不機嫌な表情をして、右肩にみちるを乗せ、左腕でナギを抱えてIS専用の第2アリーナに向かっていた。

漣司「お前らいい加減にしろよ……。体力が無いからって引き込もってたら益々、体力が無くなるぞ……。」

漣司はため息をつく。

ナギ「っていつか、どうして私達の部屋の鍵をお前が持っているのだ!？」

漣司「ナギはヒナギク、みちるはあやねから借りた。2人共、お前らを何とかして欲しいと頼まれたからな。サボった分みっちり鍛えさせてやるからな。覚悟しとけよ。」

ナギ みちる「「いつ、いやぁー！！！！！！」」

その後第2アリーナに2人の断末魔の叫びがあったのは言うまでもない。

午後0時 食堂

食堂には口から魂が半分出ているナギとみちるが机に突っ伏していた。

歩「ナギちゃん大丈夫??」

ナギ「ううゝ。大丈夫じゃないのだゝ。(泣)」

みちる「小雪さんの妖力全開でも体が熱いですゝ……。」

ラウラ「情けないぞ! 漣司はさっきの10倍の量の訓練をしているのだぞ。」

虚「漣司君は更に織斑先生の特別メニュー、剣道、組み手もしていますよ。」

キョーコ「なのに英語以外の成績はトップクラスよ。」

ゆきの「それに漣司が作る料理も上手いし。」

「漣司(君)(さん)はほぼ無敵のスペックだ……。」

少女達は次々と漣司に好評価を出す。

朝風「漣太君は転生前からそれほどのスペックだとは、彼自身も大変な人生だったろうな……。」

中津川「それなのに漣司は前向きに生きようとしている。」

本音「だから、たちちゃん達はきりふーを好きになっちゃったんだよね。」

楯無「ま、まあその話は置いて、漣司君、今日はかなり苛立ってたみたいだけど。」

あやね「あんた達漣司様を怒らせるような事したんじゃないの？」

ナギ「私は何もしてないぞ!？」

みちる「そうですね!そりゃ訓練サボって、引き込もってしましたけど……。」

ヒナギク「確かにナギやみちるには厳しい特訓してたけど漣司君は2人に怒りをぶつけるような事はしてないから2人が原因じゃないと思うけど……。」

シャルロット「漣司が露骨に不機嫌な表情するのってあんまり見たこと無いけど……。」

夜空「やはり昨日の事で何かあったのかしら?」

ガチャ。

イブキ「漣司が来たわ。」

イブキの言葉にナギとみちるは即隠れる。

鈴「あんた達、どんだけ漣司が恐いのよ……。」

鈴が呆れながら言う。

漣司はカウンターで働いているえみなと一緒に話していた。

東雲「漣司君。えみなちゃんと話し込んでいるみたい……。」

少女達は耳を傾けるが、なに話しているか聞こえなくてわからない。

花菱「おつ、漣太君が料理選んで、テーブルに行ったぞ。」

愛歌「あら、あつちから、織斑君と篠ノ之さん？」

しのぶ「一緒に食べるみたいでござる。」

少女達は更に観察を続ける。

漣司 side

変な夢を見た。細かい事までは覚えてないが、俺が他の転生者達を元の世界に強制送還させる夢を見た。転生者達はチートやバグに頼った奴等ばかりだったが、その夢では何故か俺は奴等のチートやバグは通用しなく、触れただけで強制送還させる事が出来た。

全員強制送還させると、突如目の前に仮面ライダージョーカーが現れるのだが、そのジョーカーは全身に12体の動物の顔があちこちにある鎧みたいなのに包まれていたのだ。

しかもドライバーもロストドライバーじゃなくダブルドライバーになっており、挿入されていたメモリは……。

その時に目が覚めたのだ。

漣司「何だっただんだ？今の夢は……？」

時計を見たら、自分は半日近く医療室のベッドに寝ていたようだ。今、朝の4時で俺は体を完全に目覚めさせるため、軽くジョギングした。

今、食堂が開いてあるはずがないからジョギングが終わった後、自分の部屋に戻り食材調達の時に手に入れた食材を使い、備え付けのキッチンで朝食を作り、早めの朝食を食べた。

これらをまだ起きるのには早いだろっ、一夏達を起こさないように気を付けながら済ませた。

9時から全員のISの特訓やデータ収集が始まるまで、IS整備室で千桜とりんの専用機とセシリア達の専用パッケージを開発に取り掛かった。

9時、ナギとみちる、2人を除いて全員集合した。この2人最近サボってばかりだったから流石に俺自身で無理矢理連れていこう

と決心した。

ヒナギクとあやねからそれぞれ鍵を借りて無理矢理2人を引つ張りだし、サボった分みっちり特訓させた。やり過ぎた自分に反省したが……。

それにしても、あの夢に対する嫌悪感が全く無くならない。

あのジョーカーのドライバーに装填されたメモリは見たことあるが、目が覚めたらどんなメモリか思い出せなくなっていた。俺自身がなるのかまたは、別の誰かがなるのかはわからない。今考えてもしょうがないか……。

今12時だから、食堂で料理選ぼうとカウンターに行ったらエプロン姿のえみなが働いていた。

漣司「よう、えみな。」

えみな「あ、漣司君。元気になったんだ。」

漣司「まあな。えみなのはで食堂で働いているんだ?」

えみな「漣司君にお礼と謝罪の意味で手料理を振る舞おうと思っただけけど、私は料理苦手だから食堂で働きながら料理を覚えようとしているんだ。」

漣司「俺はもう気にしてないから別にいいぞ。」

えみな「ううん、これは私がやりたいからやりたいんだ。漣司君が許してくれても私自身が許せないから……。」

漣司「……わかった。楽しみにしてるよ。」

えみな「うん！」

えみな、昨日はあんなに泣きじゃくっていたのにすっかり元気になったな。

俺は来た料理を貰いえみなと別れた後、空いているテーブルを探していたら特訓終わって一時別れた一夏と箒に会い、一緒に食事した。

一夏「そう言えば漣司、昨日皆色々動き回っていたけど、どうしたんだ？」

漣司「ああ、実は……。」

俺は詳細を知らない2人にコアメダルについて話した。

漣司「……と言う事だ。」

一夏「俺が寝ていた間にそんな事があったのか……。」

箒「漣司……、もしかしてそれって、7色のが3枚ずつあったメダルか？」

漣司「そうだが……、箒よくわかったな。」

箒「ああ、実はこれを見てくれ。」

箒が見せたのは紅椿の待機状態のだが、鈴が7つ増え、9つになつており、紐も真ん中部分が7色に裝飾されていた。

漣司「まさか、紅椿の中にあるとは、箒何ともなかったのか？」

箒「ああ、私は大丈夫だそれに紅椿も問題なく動いた。」

漣司「見させてくれないか・・・!？」

俺は紅椿の待機状態を手に持った瞬間、突如目の前が真っ暗になった。そしていきなり10メートルはあるだろう台座に置かれた円盤形の石板が現れた。

漣司「何だこれは・・・？」

その石板をよく見ると、中央にはJで周りには上から時計回りにF、C、T、I、S、G、M、V、W、L、D、Aの順番になつており更にその周りは21個の窪みがあつた。更にその周りには10枚の絵が彫られていた。

その石板の台座には馬に乗った西部のガンマン風のと、角が生えてマントを持っていた闘牛士みたいなのと、中国服みたいなのを着ているのと、サッカーボールを持っているのと、アラジンに出てきそうな魔法使いみたいなのと、狼みたいなのと、後タヌキ(?)みたいなのを合わせて7人がそれぞれ右手にカードみたいなのを持っている絵が彫られていた。

漣司「ここは一体・・・？」

考えていたら、台座から、タカ、クワガタ、ライオン、サイ、シヤチ、プテラノドン、コブラの絵が彫られた7枚のコアメダルが出てきた。

その33 少女達の会話と夢と石板（後書き）

ミニコーナー

遊星「不動遊星だ。作者、何をすればいいんだ？」

取り敢えず、最近の事とか言いたい事があるなら「自由」にどうぞのコーナーだから好きにしていよ。

遊星「わかった。毎日やっているISでの特訓は一夏と漣司以外の俺達男はISの戦闘データ収集しているんだ。ISって本当に興味深い。何故なら・・・」

1時間後

「・・・っと言うわけだ。大分時間使ったな・・・。次回も楽しみにしてくれ。」

その34 メダルの意思と少女の初恋と深まる絆(前書き)

後書きのミニコーナーにお知らせがあります。

その34 メダルの意思と少女の初恋と深まる絆

台座からコアメダルが出てきて俺はロストドライバーを装着した。

コブラ『待つである。わがはい達は君と闘う気は毛頭ないである。』

ライオン『そうだぜ！その気があつたら台座から即お前を攻撃してる！』

漣司「……。」

クワガタ『それにしてもマスターよりも早くこの石板に来る子がいるなんて驚いたよ。』

サイ『それがマスターの相棒だとは、』

タカ『流石は全ての力を司る切り札ですね。』

プテラ『……。』

漣司「？」

こいつらの話を聞いた限りでは、マスターは箒の事を指しているんだろう。それにしても切り札はわかるが俺が全ての力を司るって……？

シャチ『君もここに来るべきだったんだけどまだ早すぎるんだ。』

ライオン『だから戻ってもらうぜ!』

漣司「ぐっ!」

コア達が光だし俺は目をつぶってしまった。

一夏「……じ。……んじ。……漣司!」

漣司「ん……?んん。」

一夏の呼び掛けに俺は目を覚ます。

俺は食堂のソファーに寝かせてられており、セシリア達もいた。

篝「ビックリしたぞ!紅椿に触れたら漣司急に気を失ったから……」

龍可「一体何があつたの?」

漣司「えーっと、紅椿に触れたまでは覚えているんだが……、あれ?思い出せない。」

ラウラ「どうしたのだ漣司?」

漣司「何か大事な物を見たような気がしたんだが、それが何なのか思い出せないんだ。」

そう、それは大事だと言う事は思い出せたがそれが何なのか思い出せなくなった。

えみな「漣司君！大丈夫！？」

えみなが慌てて駆け付けた。

えみな「大丈夫？気分が悪くなったの？」

漣司「ああ、大丈夫だが……。」

なな「えみな、あんた桐札君の事心配し過ぎなんとちゃう？」

静「そうですね。トウマ君が体調崩した時以上に心配していますし。」

漣司「トウマって？」

美由「えみなの双子の弟だよ。」

理沙「まあ、一緒に入学するから入学式の人に会えるが……。」

なな「トウマ君と会えるのが待ち遠しいわ。」

ななの頬が赤い。ななはトウマって奴が好きなんだな。

えみな「もー！トウマにベタベタして良いのは私だけなんだからね！」

えみなが怒っている……ん？もしかしてえみは……。

漣司「えみなって、ブラコンなのか？」

静「ええ、そうなんです……。まあそこがカワイイですけど……」

ん？ 静の頬も赤いな。

歩「話が逸れちゃったけどえみなちゃん。本当に漣司君を心配しているんだね。」

なな「あんた、桐札君に気があるんとちゃうか？」

えみな「えっ！ 漣司君は確かに心配だよ。漣司君は酷い事した私を助けてくれたし、メモリを使おうしたら本気で止めてくれて『何ともないか』って言って心配してくれたし……。あつても、自分は漣司君にそう言った感情は……。ただ漣司君はカツコよくて、トウマと同じくらいに大切に頼りになる存在だけど、あれ？ 私漣司君の事をどう思っているんだろ？」

ななの問いに若干顔が赤くなり困惑している。まあ昨日あんな事があつて、俺自身もえみななの心を揺さぶってしまうような言葉や行動してしまったしな。

でも朝訓練に参加してた美由がえみなは小説家になるのが夢で他に興味を持つ事が無かつたて言ってたから、えみなが俺の事を好きになる事は無いだろう……。

だが後にえみなが漣司の事が好きになった少女の1人になるとは漣司でも思いもしなかったのである。

n o t s i d e

漣司達が話している時、千冬、山田ら教師達が来た。

千冬「男子は織斑と桐札だけか。」

漣司「どうかしたんですか？」

杉下「実は2日後に地下の独房室に留置しているギルバードさんの聴取をするのですよ。」

山田「桐札君達当事者達は私達と一緒に他の人はモニター室で見てもらおうことにしました。」

亀山「本当は皆入って貰いたかったんだが、流石に全員は入れないからな……。」

神戸「そこで、山田先生が仰ったような処置を取りました。」

千冬「桐札、2日後だから気持ちを整理するようにな。」

漣司「わかりました。」

千冬「では、1時間後に第2アリーナでISの搭乗、機動訓練と訓練のデータ収集を行う！各自迅速に食事を済ませ、訓練に備えよ！」

「はい！」

ナギ「またやるのか？」

みちる「こっさり抜け出して……。」

千冬「桐札、織斑、篠ノ之。あそこの2人が私と山田先生、お前達に模擬戦を申請した。付き合えよ？」

漣司「一夏 篤「「わかりました！」」」

みちる「ナギ「「いやぁー！ー！ー！」」」

抜け出す計画を立てたみちるとナギに漣司達と模擬戦させる千冬。

1時間後、第2アリーナで3時間に渡る本日二度目の断末魔の叫びが聞こえたと言っ。

午後8時 IS整備室

箒「皆飲み物を買ってきたぞ。」

伊達「ありがとう箒ちゃん。」

遊星「ありがとう。」

主人公達と専用機持ちと千桜とりんは2人の専用機の開発をしていて休憩の時箒が皆の飲み物を買ってきて渡していた。

箒「漣司、はいカフェオレだ。」

漣司「ありがとう箒。」

漣司はカフェオレの缶を箒から受け取る。

一夏「漣司、カフェオレが好きなんだな。」

漣司「ああブラックも好きだが、疲れた時や闘いの後は甘くてほろ苦いカフェオレが俺にとっては1番いいんだ。」

一夏「確かに漣司って訓練終わった後もカフェオレ飲んでたよな。」

そう言いながら、一夏わスポーツドリンクを飲む。

篤「漣司、午前中機嫌悪かったようだが、何かあったのか？相談に乗るぞ？」

篤は緑茶が入ったペットボトルを飲んでから言う。

漣司「ああ、実は……。」

漣司は夢の内容を皆に話した。

トリコ「まあ確かに、よくわからない夢を見たらいい気分じゃねーな。」

後藤「ジョーカーに装着されたの鎧みたいなのは12本のメモリと関係するのかな？」

漣司「そこまでは……ただ、12体の生物の顔があったから少なからずとも関係していると思う。」

ジロー「でも不思議な夢だよな。転生者である漣司がこの世界にやって来た他の転生者を元の世界に戻すとはな。」

漣司「正直、それでイライラしてたのもあったんだ。今の世界で一生懸命生きようとせず、努力しないで転生して来る奴らが……。もうその世界に生きたいのに死んで生きる事が出来ない奴がいるの……。」

漣司は右手で飲み干したカフェオレの缶を握り潰して、震えている。

篤「漣司、この世界に来て後悔しているのか？」

箒は不安そうな顔で漣司に聞く。

漣司「あるな。親や友達、尊敬してた先生に別れを言えず唐突に死んでしまった事。だがな……。」

漣司は一息入れてから言う。

漣司「先生は言っていた。『後悔し続けてばかりだと、人の進化は終わり退化する。常に前向きに努力する事で人は極限を超え進化する。』と。俺はレイからジョーカーの力を貰い、この世界に転生する事が出来ると聞いた時、今度こそ後悔しない生き方をしようと決めた。」

ハヤテ「漣司君……。」

漣司「俺は皆と仲間となり、俺を本気で好きになってくれる子達もいる。そして何より……。」

漣司は箒を見る。

漣司「箒、俺はお前の相棒になれた事を誇りに思う。」

漣司は涙を流して言う。

箒「私も漣司、お前の相棒になって本当に良かった……。」

箒も涙を流して言う。

この日から、漣司達1年1組の絆がさらに深まったのは言うまでもない。

その34 メダルの意思と少女の初恋と深まる絆（後書き）

ミニコーナー

漣司「桐札漣司だ。」

篤「篠ノ之篤です。」

一夏「織斑一夏です。」

篤「作者からのお知らせがあります。次の話は3つほど考えているらしいが、作者がどの様にするか迷っているらしいんだ。」

一夏「考えているのは……。」

1 料理が下手なキャラ達で料理対決する。

2 幾つかのチームに別れて、この島の調査をする。

3 主人公達のデュエルモンスターのデッキ調節する（デュエルするかは未定）。

一夏「以上の3つです。」

漣司「これを読んでくださっている皆さん、感想の方でアンケートを金曜日まで受け付けます。答え方は1、2、3でお願いします。」

第「1番多かったのを次の25日に、ギルバード聴取の26日の後に、2番は27日、3番を28にする予定です。」

「夏」それじゃ次回も楽しみにしてくれ。」

その35 料理対決とチームと調理開始（料理対決前編）（前書き）

投票の結果と言うより、1票しか無かったので料理対決しました。

O r z 。

その35 料理対決とチームと調理開始（料理対決前編）

3月25日 午前9時 食堂

花菱「これより1年1組の交流会及び料理対決を行う！」

瀬川 朝風「イエーイ！」

花菱が叫び、瀬川はラッパを鳴らし、朝風は太鼓を叩く。1組のメンバーも拍手をする。

花菱「司会はこの生徒会ブルーこと、花菱美希！」

瀬川「生徒会レッドこと瀬川泉！」

朝風「そしてミナミハルオ・・・『ゴツン！』すまない。風紀員ブラックこと朝風理沙！」

朝風がボケたので、花菱がツッコミと言う名のゲンコツを喰らわせた。

花菱「気を取り直して料理対決のルールを発表する！ルールは簡単！挑戦者達は事前に決めた協力者達7人と組み、8人で1チームを作る！」

泉「挑戦者は我々が出すお題に料理をして貰い、協力者は挑戦者を仕込み等のサポートする！」

朝風「制限時間は3時間後の正午12時まで！それでは挑戦者達の登場だ！」

朝風が言い終わった後、厨房から5人の挑戦者が現れる。

朝風「1人目は、セシリア・オルコット！」

シェフのエプロン姿のセシリアが一礼する。

朝風「協力者は織斑一夏！篠ノ之箒！鳳鈴音！シャルロット・デユノア！ラウラ・ボーデヴィツヒ！更識簪！そして、桐札漣司！」

セシリアの後ろに一夏、箒、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、漣司がいる。

朝風「続いて2人目は三千院ナギ！」

ナギもエプロン姿で一礼する。

朝風「協力者は綾崎ハヤテ！桂ヒナギク！西沢歩！愛沢咲夜！鷺ノ宮伊澄！橘ワタル！春風千桜！」

ナギの後ろにハヤテ、ヒナギク、歩、咲夜、伊澄、ワタル、千桜がいる。

朝風「3人目は阿久野ジロー！」

ジローもエプロン姿で両手を上げて気合を入れている。

朝風「協力者は後藤慎太郎！伊達明！不動遊星！トリコ！東方院行人！天河優人！亀山薫！」

ジローの後ろに後藤、伊達、遊星、トリコ、行人、優人、亀山がいる。

朝風「4人目はまち！」

巫女服で割烹着姿のまちが包丁を持ってニヤリと笑っている。

朝風「協力者は、すず！あやね！しのぶ！りん！ちかげ！ゆきの！みちる！」

まちの後ろにはすず、あやね、しのぶ、りん、ちかげ、ゆきの、みちるも割烹着姿でいた。

朝風「5人目はイブキ！」

エプロン姿で緊張したイブキがぎこちない一礼をする。

朝風「協力者は法仙夜空！十六夜アキ！渡キョーコ！キョーコ乙型！五反田蘭！九崎凜子！更識楯無！」

イブキの後ろには夜空、アキ、キョーコ、乙型、凜子、蘭、楯無がいる。

朝風「そして審査員は、織斑千冬先生！山田真耶先生！杉下右京先生！神戸尊先生！桂雪路先生！」

審査員の席では千冬、真耶、杉下、神戸、雪路が座っている。

朝風「料理のお題は『井物』！それではスタート！」

セシリアチーム

漣司「セシリアはどんな井物にしたいんだ？」

セシリア「えーとですわね。取り敢えず……このレシピに載っている親子丼を作ろうかと……。」

漣司「よし、セシリアはここにいてくれ。皆集合。」

セシリア「？」

セシリアは頭の上に？マークを浮かばせながら、集合した漣司達を見る。

一夏「漣司……。」

漣司「わかっている。皆、セシリアが余計な物を入れようとしたら止めてアドバイスするんだ。」

篝「セシリアが作った料理は見た目は完璧なのだが……。」

鈴「レシピに書いてある調理法を見ずに写真に似せようと色々な物を入れてんのよね……。」

シャルロット「ただ単に不味いんじゃないって、見た目と味が一致してないんだよね……。」

ラウラ「だからちゃんと手順通りにしたら大丈夫だと思うが……。」

簪「言えない……。セシリアには言えない。」

漣司「兎に角、ちゃんと千冬さん達が食べられるように全力でサポートしよう。」

「「「おー!」「」」

セシリア「????」

いきなり円陣組んで掛け声を上げた漣司達に益々、?マークを浮かべるセシリア。

ナギチーム

ハヤテ「お、お嬢様はどの様な井物に?」

ハヤテは恐る恐るナギに聞く。

ナギ「ふっ、ふっ、ふっ。私はオリジナリティー溢れる丼物を作る！」

ヒナギク「取り敢えず皆頑張りましょう……。」

「「「おー……。」「」」

ナギ「何なのだ！そのやる気のなさはー!?!」

ジローチーム

ジロー「亀山先生協力感謝する。」

亀山「いいつて事よ。」

伊達「本当は漣司達誘おうと思ったんだが……。」

後藤「漣司と一夏はセシリアちゃん、ハヤテはナギちゃんのチームに行ってしまったから。」

行人「東宮と黄村は謹慎中だし。」

優人「弾と数馬は、蘭の無言の圧力で拒否してしまったし。」

遊星「ジャック、クロウ、鬼柳、トオルも経験がないから辞退した。」

トリコ「小松も自分が出たら不公平じゃないかと辞退したし、コ
コは別件でいねーし、サニーは美しくない奴とはしたくないと言っ
し、ゼブラは論外だ。」

亀山「そこで俺が参加したって訳ね。ジローはどんな丼物にする
んだ？」

ジロー「全員男だから男の料理の定番、肉を作った丼物にしよう
と思うのだ！」

トリコ「よし決まったし早速料理開始だ！」

「「「おー！」「」「」

男達の男の料理が始まる。

まちチーム

まち「ふっ、うふふふふふ……。」

まちは相変わらず包丁を見て不気味に笑っている。

すず「怖いよ。」

あやね「取り敢えず、お姉様は見た目が悪いのと、台所滅茶苦
茶にするのを防げたら何とかかなると思うから頑張るわよ！」

「「「おー……。」「」」

ナギチームとはまた違った不安を持つまちチームだった。

イブキチーム

夜空「イブキはどんなの作りたいの？」

イブキ「か、かわいいの……。変？」

キョーコ「ううん、変じゃないよ。」

アキ「私達が全力でサポートするから安心して。」

乙型「他の皆をギャフンと言わせましょう!」

凜子「ギャフンって古いわね……。でも他のチームをあっと言わせましょ。」

蘭「だからイブキさん自信を持ってください!」

楯無「お姉さんの力、見せてあげるわ。」

イブキ「皆……。ありがとう。」

友情が高まったイブキチームであった。

各チームが食材を確保し、仕込み、調理を始めた。

残り時間、2時間50分。

その35 料理対決とチームと調理開始（料理対決前編）（後書き）

ミニコーナー

漣司「作者……感想書いてくれている人が少ないから、投票は無理だったんじゃないか？」

そうだったね……。もう1つの作品の方が人気あるし、転生者のオリ主で多重クロスって人気が無いのかな……？

漣司「うーん……。キャラクターは原作基準でも話自体はオリジナルが多いから理解してくれる人が少ないか、この作品自体があまり知られてないか……。」

orz……。

漣司「やべつ……。作者を更に落ち込んでさせてしまった……。処女作だから仕方ないか……。それでは次回も楽しみにしてくれ。」

その36 過去話とカオスと調理終了（料理対決中編）

セシリアチーム

セシリアチームは一夏と漣司が率先として仕込みをしていた。

シャルロット「凄い……。一夏も漣司も……。」

シャルロットが驚く。何故なら、2人の作業のペースが速くて、それで丁寧であるからだ。

一夏は怪鳥ゲロルドの肉を丁寧に一口サイズにして、人数分作る。漣司も玉葱を人数分切り終えた後、ガーリックの風味を出す為か、ニンニクを細かく切り、若干油を敷いたフライパンで炒め始めた。

403

篝「流石は一夏と漣司だな……。」

彼女達は暫く2人の作業を見ていた。

漣司「篝、親子丼で鶏肉と同じく必要な卵を選ぶのを頼む。ラウラは俺達が仕込み終わったゲロルドの肉と玉葱を一人前ずつ分けてくれ。」

一夏「鈴は極楽米の炊飯を炊飯釜で頼む。シャルは肉を網で最初軽く炙るから火の準備を。篝はセシリアに手順を教え込んでいてくれ。」

「はっ、はい！」

彼女達は漣司達の指示で即行動する。

一夏「流石漣司だな。作業しながらも的確な指示は。」

漣司「一夏こそ並大抵の料理人じゃ扱えない、食材の仕込み恐れ入ったぜ。」

2人は決して手を休まず、作業を続ける。

漣司「そう言えば話は変わるが、一夏。箒達とは幼なじみで言ってたが、国籍がバラバラの彼女達とは何処で出会ったんだ？」

一夏「えーと、箒とは小さい頃、あいつの実家が神社で剣道場を開いていて千冬姉の紹介で入って、箒とはそこで出会ったんだ。初めは睨み付けていたが、一緒に稽古していたら、仲良くなったんだ。」

漣司「そうだったんだ。」

一夏「次に会ったのは鈴と簪だ。中学の時に会ってな弾と数馬、蘭に楯無さんもその時に会ったんだ。セシリアは皆と一緒にイギリスに旅してた時会ったんだ。セシリアは変な力を持つ奴に狙われていて俺達が助けたんだ。」

漣司「もしかするとそいつって……。」

一夏「ああ、今から思うと転生者かもしれない。チートのな力を持った……って漣司！力入れすぎ！」

漣司は力を入れすぎた為持っていた包丁がまな板にめり込んでいた。

漣司「あつ、悪い。」

一夏「い、いや気にするな。話は戻すけど、シャルはイギリスの次にフランスに旅に行った時デュノア社に無理矢理連れて行かれそうになったから一緒に旅に同行したセシリアと一緒に助けたんだ。ラウラは千冬姉がドイツ軍の教官していて、ラウラはドイツ軍に所属していたから千冬姉が紹介して仲良くなったんだ。」

漣司「凄い出会い方したんだな……。」

一夏「まあ、これらのお陰で皆に会えたんだからかな『ドカーン！……！』『ドゴーン！……！』！？何だ！？」

漣司「ナギとまちが派手にやってるな……。」

一夏「大丈夫か……？」

漣司「あまりに酷かったら止めてくる。」

一夏「俺も手伝つよ……。」

巻き添えを喰らう最悪の事態にならない事を漣司と一夏は祈った。

ナギチーム

ナギ「フハハハハハハハハハハハッ！！」

ハヤテ「お嬢様！毒化したフグ鯨はマズイですって！」

ヒナギク「ナギー！ルビークラブは殻を取らないと食べられないでしょー！！！」

ナギチームはオリジナリティーの海鮮丼を作っている。どれも特別な調理法が必要な特殊調理食材なのだがナギはそれに構わず、適当に食材を切って、極楽米が入っている丼に入れている。

歩「マズインじゃないかな！？」

歩の言う通り、ナギの料理は不味いとかのレベルじゃなく、確実に死人が出る殺人料理が出来てしまう。

咲夜「ウチ！漣司兄ちゃんと一夏兄ちゃん呼んでくるわ！」

ワタル「俺も他の兄ちゃん達も呼んでくる！」

数分後。

ナギ「ぐはっ！？」

ナギの意識は駆け付けた漣司によって墮とされ、後藤達が片付けの手伝いをした。

ヒナギク「皆ごめんなさいね……。」

伊達「良いつて事よ。」

ナギが意識不明の為、ナギチーム棄権。

ジローチーム。

伊達「それじゃ仕切り直ししますか！」

遊星「各肉の仕込みは終わったぞ。」

行人「固さはどれくらいにするの？」

ジロー「黒胡椒を掛けて固めに焼いてくれ。さてと……。」

後藤「ジロー、ゆで卵するの？」

ジロー「ああ、これを時間掛けて茹でる。」

優人「半熟にした方がいいんじゃないか？」

ジロー「いいや敢えてハーフ（半熟）じゃなくハード（完熟）にする。」

トリコ「拘りがあるのか？」

ジロー「漣司がハードボイルドの探偵小説を貸してくれた時憧れてから形だけでもハードになろうと思ってな。」

亀山「なるほどね……。」

（ゆで卵以外）順調なジローチームだった。

まちチーム

ドカーン！！！！

すず「うにゃああああっ！！！！」

ドコーン！！！！

りん「ひひひひひひひひ！！！！」

一体どんな調理したらキッチンが破壊するのだろうと思つ程、破壊音を出しながら料理するまち。

しのぶ「これじゃ近付けなくて、止めるどころか、協力も出来な
いでござる…」

しのぶの言う通り、包丁やら骨やらキッチンノ瓦礫やら、色々な
物が飛んで来て近付けなくて皆一生懸命避けている。

あやね「へばっ！ごぶっ！ぶへっ！」

何故かあやねには百発百中で当たっているが…。

ゆきの「誰か呼ぶ!?!」

みちる「漣司くん達呼んで…。」

りん「それじゃダンナ達がタダじゃ済まねーだろ!」

あやね「あんた達、少しは私を心配しなさいよー!…!」

絶叫が飛び回るまちチームであった。

イブキチーム

イブキ「これでよしっとな…。」

夜空「上手く出来たわね。」

キョーコ「これで大丈夫でしょう。」

乙型「後は待つだけですな。」

蘭「それにしても一番驚くのは漣司さん達ですよな。」

アキ「そうよね遊星達がどんな反応するか楽しみだわ。」

凜子「井が大きくなっちゃったけどね……。」

楯無「でも皆喜ぶと思うわ。」

イブキ「うん！」

イブキ達は時間終了まで待つ。

審査員席

神戸「杉下さんはどうなると思いますか？」

杉下「三千院君のチームが棄権したのは残念でしたが、皆さん興味深い料理が出来ると思いますよ。」

山田「三千院さんの流石に……。」

千冬「桐札が止めてなかったら私達の意識が飛ぶことになるからな。永遠に……。」

雪路「ZZZ……。」「

雪路はさっきまで酒飲んでいたので眠っていた。

千冬 杉下 神戸 山田「……。「……。「……。「

そんな雪路を見て何とも言えない表情をする千冬達。

そして、

ドン！ドン！ドン！

花菱「終了ー！！！！」

瀬川が太鼓を叩き、花菱が終了の言葉を掛ける。

朝風「それでは各自挑戦者達は井を持って来てくれ。」

セシリア達はトレイに載せた五つの井を持ち集まる。

審査員の審査が始まる。

その36 過去話とカオスと調理終了（料理対決中編）（後書き）

ミニコーナー

漣司「なあ、篝。」

篝「どうしたのだ漣司？」

漣司「一夏達が『篝が作ったチャーハン食べたら、ビックリする』って言うから食べてみたいんだが……。」

篝「えっ！？あつ、いやっ、そのっ（一夏達め〜！）。」

漣司「篝……？チャーハン作りたく無いなら諦めるが……。」

篝「何時か必ず作るから、待ってくれるか!？」

漣司「あつ、ああ、いいぜ……（余程チャーハン作りたくないんだな）。」

篝「（漣司だけは、相棒だけには、味なしチャーハンを食べさせられない！一夏達……!!!!）」

一方その頃

「「「（ソクッ!?!?）」「「「

ハヤテ「一夏君達？どうかしましたか？」

一夏「いやっ……。」

鈴「なっ、何でもないわよ。」

セシリア「そっ、そうですね。」

シャルロット「あっ、あはははは……。」

ラウラ「……（今、教官以上の覇気と殺気を感じた!?!?）。」

簪「……（この感じ）。」

「……（まっ、まさか箒さん!?!?!?）」「」

遊星「どうしたんだ一夏達は？」

優人「さあ？」

行人「取り敢えず次回もお楽しみに。」

その37 審査と変人刑事とただ1人の犠牲者（料理対決後編）（前書き）

サブタイトルに書いてありますが、死人は出ません。出す予定もありません。

その37 審査と変人刑事とただ1人の犠牲者（料理対決後編）

審査員達の審査が始まった。

セシリアチームの場合

神戸「オルコットさんのチームは親子丼ですか。」

セシリア「はい、どうぞ。」

千冬 杉下 神戸 山田「」「」「頂きます。」「」「」

雪路はまだ寝たままなので、千冬達は先に食べる。

山田「美味しい……。」「」

神戸「ふわふわの卵と少し固めの鶏肉がバランス良くて良いですね。」

杉下「更にクセのあるガーリックが効いていて、興味深いですね。・。・。」「」

千冬「前のオルコットなら想像出来なかったな。」

セシリア「はっ、はい！ありがとうございます！」

セシリア慌てて一礼する。

因みに漣司はセシリアの手料理を食べた時、一つ一つの料理が見た目では想像していたとは違う味をしていたので、流石の漣司も軽度の頭痛と吐き気の症状が出た。

閑話休題。

ジローチームの場合

山田「これ、ご飯が入っているのですか？」

ジロー「当然です。さあどうぞ。」

ジロー達の丼はデビルオロチやガララワニなどの肉を盛りすぎて、山のような形にしており、極楽米が見えなかった。そして何故か一番上には半分に切った2つのゆで卵があった。

千冬 杉下 神戸 山田「」「」「頂きます。」「」「」

4人は圧倒されながらも食べ始めた。

山田「色々な肉の味がありまして美味しいですね。」

杉下「どれも固めで歯応えがありますし。」

神戸「えーとこのゆで卵は・・・、って固い！」

千冬「本当だ。阿久野、このゆで卵は固すぎないか？」

ジロー「固めになるように茹でておきましたから。」

「「「何で!?」「」」

ジローチームと漣司以外は何で固めにしたのか聞いてみた。

ジロー「それがハードボイルドだからです！」

「「「・・・。」」」

キョーコ「ジローのバカ・・・！」

キョーコは顔を真っ赤にしており、漣司とジローチームも苦笑し、皆は茫然としていた。

まちチームの場合

杉下「これは・・・。」

神戸「インパクトありますね……。」

まちもナギ（棄権したが）と同じく海鮮丼なのだが、見た目が酷かった。

杉下「どんな味がするのか大変興味があります。」

「「「（やっぱり杉下先生は変人だ……。）「「「

長年一緒に仕事をしている亀山と神戸以外はそう思った……。

千冬 杉下 神戸 山田「「「頂きます。「「「

まず始めに千冬と杉下が一口食べる。

杉下「おや？」

千冬「これは……。」

この場に戦慄が走る。

杉下「美味しいですね。」

千冬「うまいな。」

神戸「嘘……。」

山田「私達も……。」

神戸も山田も食べ始める。

神戸「本当だ……。」

山田「美味しい……。」

あやね「お姉様様の料理は何で見た目は悪いのに美味しいのかしら……。グエツ!？」

あやねは一言余計に言ってしまった為、まちから藁人形の呪いを受ける。

イブキチームの場合。

千冬「ん？やけに井が大きいな。」

千冬の言う通り、イブキチームの井は他のチームの1・5倍大きく、蓋がされていた。

千冬「開けてみるか……。ほう、なるほどな。」

「「「おー!」「」」

最初に見た千冬は納得し、他の皆は感嘆した。

イブキチームの井はデコレーションしたもので、真ん中がジョーカーメモリを持った漣司で、回りには12人の戦士達が漣司を囲む

ように描かれていた。

漣司の上から時計回りにフレームメモリを持った箒、サイクロンメモリを持ったハヤテ、サンダーメモリを持った後藤、アイスメモリを持った行人、スカイメモリを持った一夏、グランドメモリを持ったトリコ、メタルメモリを持った伊達、ボイスメモリを持ったジロー、ウエーブメモリを持った遊星、ライトメモリを持った優人、ダークネスメモリを持った夜空、アクアを持ったイブキがそれぞれメモリを持って笑顔だった。

杉下「これは微笑ましいですね。」

神戸「食べるのが勿体無いですね。」

山田「でも、美味しそうに見えます。」

千冬「では、そろそろ……。」

千冬 杉下 神戸 山田「」「」「頂きます。」「」「」

千冬達は食べ始める。

千冬「美味しいな。」

杉下「ええ。」

神戸「見た目も味も良いですね。」

山田「バランスが合って良いですね。」

千冬達は高評価を出す。

そして、

朝風「結果発表！」

遂に審査員達の結果発表が始まる。

朝風「それでは審査員達一番美味しかったのはどのチームか判定をどうぞ！」

全員がフリップを出す。

朝風「何と全員イブキチームだ!!!」

全員フリップにはイブキチームと書かれていた。

杉下「印象が残ったのはイブキ君のチームですからね。」

神戸「他の皆さんのも美味しかったのですが……。」

山田「最も見た目と味が両立が出来たのはイブキさんのチーム

でした。」

千冬「私も同意見だ。」

朝風「と言うわけで優勝はイブキチームだ!!!」

漣司達はイブキチームに盛大の拍手をした。

これで交流を含めた料理対決は終わ・・・、

雪路「ちよつとあんた達……!!!私を放っておくなんてどう
言う事……!?!?」

・・・らなかった。

漣司「何ですかヅラ?折角綺麗に終わろうとしているのですが・
。」

雪路「桐札君!いい加減ヅラはやめて!私は何も食べてないのに
。」

雪路の分は雪路が何時までたつても起きなかつたので漣司達が試食してしまつたので無かつた。

ヒナギク「お姉ちゃんが起きなかつたからでしょ……。」

雪路「うるさい！うるさい！うるさい！……い……！私も何か食わせろ……！！！」

雪路まだ酔いが覚めてないようで駄々っ子の様に腕を振るう。

伊達「雪路ちゃん。こんな事があるうと作って置いたぜ。」

雪路「ホント！？」

雪路の目が輝いている。

確かに伊達の両手には蓋がされた井を持つていた。

雪路「ありがとう！頂きまーす！」

雪路は蓋を取り食べ始めた。

雪路「ぐはっ！？」

雪路は倒れた。

ヒナギク「お姉ちゃん！？」

ヒナギクは駆け寄る。

後藤「伊達さん……。もしかして……。」

伊達「おう、後藤ちゃん。おでんの具におでんの出汁を掛けたおでん丼だ。」

伊達はおでん丼を皆に見せた。勿論皆は引くが杉下だけが興味を示し食べてみた。

「「杉下先生（右京さん）！！？」」

皆は杉下の行動に驚く。

杉下「何ともよくわからない味ですね……。それ故クセになります。」

杉下は食べ始めた。

「「「やっぱり杉下先生は変人だ……。」」」

本日2回目の杉下の変人ぶりが解った料理対決は幕を閉じた。

その37 審査と変人刑事とただ1人の犠牲者（料理対決後編）（後書き）

ミニコーナー

料理対決終了した日の夜

篤「漣司……。」

伊達「どうしたの篤ちゃん？」

篤「伊達先生……、実は明日のギルバードって人の聴取が始まるのが近付いているのか、さっき漣司に話し掛けようとしたら、漣司険しい顔つきで考え事していたみたいで心配なんです……。漣司無茶を事をするんじゃないかって……。」

伊達「心配するなって篤ちゃん。千冬ちゃんや杉下さん達もいるし、ハルバードの奴が漣司を怒らせない事を言わない限り大丈夫だって。」

後藤「伊達さんハルバードじゃなくてギルバードです……。」

伊達「おっと、そうだった。」

篤「伊達先生ありがとうございます（漣司……無茶だけはしないでくれ……）。」

その38 尋問と正体と切り札の逆鱗

3月26日 九路洲学園 地下

九路洲学園地下の廊下には横2人ずつに歩いて千冬と山田を先頭に、漣司と後藤、一夏と篤、ハヤテとジロー、遊星とトリコ、行人と優人、夜空とイブキ、杉下と伊達、亀山と神戸の順番で、ギルバードのいる独房室に向かった。

一夏「なあ、漣司・・・!?!」

漣司に声をかける一夏だが、一瞬黙ってしまった。
何故なら、漣司の表情は何ら変わらなかったが、漣司の周りは温度が下がっているかの様に冷たく感じたのだった。

後藤「漣司・・・。大丈夫なのか？」

漣司「ん？ああ一夏、後藤。すまねえ・・・。考え事していた・・・。」

どこかぎこちない感じで返事をする漣司。

篤「・・・。」

そんな漣司を見て心配そうな表情をする篤。

山田「皆さん、そろそろ着きますよ。」

山田の言う通り、後10メートルでギルバードが入れられている
独房室に着く。

トリコ「ギルバードの奴、どんな情報を持っているのか……。」

杉下「それは聞いてみないとわかりませんねえ。」

千冬「では、入るぞ。」

千冬は独房室のドアを開ける。

独房室の中は広めに造られており、真ん中には机が置いてあった。
その机を挟む様に椅子が置かれてあって、奥側の椅子に手錠を掛け
られ、死んだ魚の目をしていたギルバードが座っていた。

千冬「では杉下先生、亀山先生、神戸先生お願いします。」

杉下「わかりました。」

亀山「うっす。」

神戸「了解しました。」

千冬の言葉に頷いた杉下は入り口側つまり、ギルバードの向かい
側の椅子に座り、亀山は机の右側、神戸は机の左側に立った。

神戸「まず、貴方の名前はギルバード。間違いありませんね？」

神戸は訪ねるがギルバードは答えない。

ギルバード「……………」

亀山「おい！返事くらいしろ！」

亀山が机を叩き、ギルバードを睨む。

神戸「亀山さん。落ち着いてください。」

神戸が亀山を宥める。

亀山「悪い……………」

ギルバード「エエ、ソウデスヨ……………」

ギルバードは弱々しい声で神戸の質問に答える。

神戸「何でこんな事を行ったのかな？」

ギルバード「コノ学園ハアラルユル国ノ政界ニ影響ヲ与エ、ワタシモソノ影響ノ犠牲ニナツタ。ソノナ学園ヲメチャクチャニシタカツタノデスヨ……………」

亀山「お前の身勝手な考え方や行動が俺達の生徒が重傷を負ったり、そのせいで都幾川達の心が壊れそうになったりしたんだぞ！わかってんのか！」

亀山が怒り、ギルバードの胸ぐらを掴もうとしたが、杉下に止められる。

亀山「っ！？……………右京さんすみません……………」

杉下「いえ、気にしないで下さい亀山君。ギルバードさん、一つ聞いても宜しいですか？」

杉下は右手の人差し指だけを上げて、訪ねる。

ギルバード「ナンデシヨウカ……。」

杉下「貴方は3日前の3月23日に都幾川君達をライアーメモリの能力を使って彼女達に貴方が拾ったメモリを使わせ、桐札君を襲わせました。貴方は何処でメモリを拾ったのですか？」

ギルバード「ソツ、ソレハ偶然拾ッタダケデ……。」

亀山「へえ、偶然拾っただけで良く使う気になったな。」

神戸「普通は良くわからない物は不安や気味が悪くて使おうとは思えないよ？」

ギルバード「……。」

杉下「それからもう一つ。貴方はどうやって来たのですか？」

ギルバード「ハ？」

ギルバードは杉下の質問の意味がわからなかったのか、呆気な声を出す。

杉下「この学園は海の真ん中にある島で、空には捕獲レベルの高い猛獣が飛び回っていてISでないと飛ぶの大変危険です。この島

にたどり着くのは週に一回来る船だけです。しかし23日に来た船の渡航歴には都幾川君達の名前はあっても貴方のだけは無かったのですよ。」

亀山「海岸地区は複雑な海流で海から近付く事が出来なくて不可能だし、唯一の船が近付ける事が出来たのは港区だけだ。」

神戸「その港区も各国から選ばれた軍の人達が厳重な警備をしているから怪しい船が来てもすぐ捕まる。」

杉下「さらに貴方は約一ヶ月前の2月20日、三千院家の襲撃未遂事件を起こして、刑務所に収容されています。収容された刑務所に確認をとったところ、貴方はまだ刑務所にいる事がわかったんですよ。」

杉下達の言葉にギルバードは焦りの表情を浮かべる。

亀山「何で今刑務所にいるお前が、こっそりとこの島に来る事が出来たのか。」

神戸「それは僕達と同じく、貴方はおそらく、別世界のギルバードさんで僕達をこの世界に招いた神とは違う神が貴方にガイアメモリの存在を教えて、メモリを渡し、この学園に来るようにした。」

ギルバード「・・・!？」

杉下「どつやら凶星のようですねえ。」

杉下の言葉にギルバードはわなわなと震えているが、急に立ち上がる。

ギルバード「クッソー！アノクソ神ガ！！ワタシ八元ノ世界デ死
ニ、アノ神ノ元ニ来タ時ニ」転生したらこの3本のメモリを使って
好き放題暴れる事が出来る」ト言ツタノニ！！！」

ギルバードの口からはイニシャルのKが刻まれたガイアメモリが
出てきた。

『ナイト！』

騎士の記憶を宿したナイトメモリがギルバードの顎に挿入され、
手錠が壊された。

神戸「杉下さん！？」

亀山「くそっ！」

亀山が机を蹴り飛ばし、机を盾にする事で杉下と神戸もメモリを
挿入した衝撃波から身を守った。

神戸「杉下さん大丈夫ですか？」

杉下「ええ、僕は、2人は？」

亀山「俺は大丈夫です。」

神戸「僕もです。でもメモリを3本貰ったって言うてましたが・
・」

杉下「おそらく、今のナイトと桐札君達がメモリブレイクしたら

「イアーとバツファローでしょう。」

ナイト『ソウデス！！アノ6本ノメモリハコノ学園ニ来タ時、偶然、近クニアツテ、偶々近クニイタ彼女達ニライアーノ能力ヲ使イ彼女達ニ使ワセマシタ！！彼女達ハ運ガナカッタト諦メテ貰ウシカアリマセーン！！』

ナイトは高らかに笑う。

トリコ「あいつ！！！！」

一夏「図に乗りやがって！！！！」

ハヤテ「流石に僕も怒りました！！！！」

伊達「皆！行きますか・・・！！！！？」

ゾクツ！！！！

皆がナイトを倒しに行こうとしたが、急に寒気と殺気を感じて動けなくなる。

遊星「なっ、何だ！！！！？」

ジロー「急に足の震えが止まらないぞ！！！！？」

イブキ「私達に向けられて無いのはわかるけど、それでも怖い・・・」

夜空「イブキしっかりして！！！！」

イブキはあまりの寒気と殺気に倒れそうになるが後藤が支える。

後藤「漣司！大丈夫・・・か！！？」

後藤は漣司を見るが黙ってしまい、一夏達も恐怖を感じた。

何故なら、その寒気と殺気を出していたのは他でもない、漣司だったのだ。

篤「れっ、漣司？」

漣司の表情は落ち着いていたが、目は完全にナイトドーパントを睨んでおり、両腕は力を入れ過ぎていて血が出ていた。

杉下達も漣司の寒気と殺気を感じていた。唯一感じて無かったのは・・・。

ナイト『ボーツトシテイル暇ハ無イデース！クライナサーイ！！』

ナイトは背中に背負った3メートルの大剣を杉下に向けて投げた。

神戸「杉下さん！？」

ガンツ！！！！

だが、杉下に届く事は無かった。

杉下「！！？」

大剣は粉々に碎かれ、大剣があった場所には空中に回転して床に刺さった。

ドスツ！！！！

床に刺さったのはISキャリバーだった。

千冬「まさか・・・桐札！？」

漣司は右手を前に出して何かを投げた様子だった。

漣司がISキャリバーを右手で投げ、ナイトの大剣に当て粉々に碎いたのだ。

篝「漣司・・・？」

篝は漣司に声をかけるが返事がない。

漣司「・・・だな。」

篝「えっ？」

漣司「俺を本気で怒らせるのは何時もあいつみたいだな・・・
。おい、そのエセ外国人。」

ナイト『エセ外国人？誰ノ事デスカ？』

ナイトドーパントが惚けた声で言う。

漣司「お前だよ。」

いつの間にかナイトドーパントの前に立つ漣司。

ナイト『ゾクッ！？』

ナイトドーパントは初めて漣司から発する寒気と殺気が自分に向けられているのにわかると剣で攻撃しようとした。

『ジョーカー！』

漣司「変身……。」

『ジョーカー！』

漣司は仮面ライダージョーカーに変身してナイトドーパントの剣の側面を殴り付けた。

剣は粉々に砕かれたがジョーカーの拳は止まらず、ナイトドーパントの鎧も砕き、ナイトドーパントをぶっ飛ばした。

ナイト『グハッ！？』

ナイトドーパントは壁に叩き付けられている。

ナイト『ヤバイデス……。サツサト逃ゲナイトヤバイ』その必要は無いぜ。『……！？』

漣司は指の関節を鳴らしながらナイトドーパントの言葉を遮る。

漣司「もう、逃げる必要は無い。何故なら俺が今ここでお前を駆除してやるよ。」

漣司は立ち上がるようにするナイトドーパントを殴り付ける。

ナイト『オツ、才前ハ一体・・・？』

漣司「俺は桐札漣司。仮面ライダー・・・ジョーカーだ!!!」

更に漣司の右拳のストレートがナイトの腹に決まった。

漣司「さあ！お前の罪を数える!!!」

ナイトドーパントに向けた漣司の右拳は若干緑色の光に包まれていた。

その38 尋問と正体と切り札の逆鱗（後書き）

ミニコーナー

あり？書いた自分でも恐怖を感じるぞ？

一夏「俺達だってそうだよ。ましてや千冬姉でさえ動けなかったんだぜ……。」

行人「漣司が本気でキレたらどうなるの？」

元の世界では、ある事件が切っ掛けでキレた漣司が近所で有名な極悪の高校の不良全員を1人で全治半年間にさせるほどの設定だったな……。

「「「……。」」」

漣司「ん？どうした皆？」

「「「イツ、イエ！ナンデモゴザイマセン！……。」」」

漣司「？」

篝「そつ、それでは次回もお楽しみに。」

その39 立場と新武器と漆黒の炎

同日 午前10時 九路洲学園 IS用第2アリーナ

一夏「はあっ、はあっ、はあっ。」

えみな「はあっ、はあっ、はあっ……。」

一夏達はモニターで見ていたえみな達も連れて第2アリーナの入り口まで来ていた。

ドカーーン!!!ドカーーン!!!

緑谷「すごい音がしているけど大丈夫なの!？」

鈴「これが大丈夫に聞こえると思う!？」

くない「それにしてもこの音を起こしているのが漣司はんなんてホンマなん?」

後藤「信じたく無いけど、漣司は近くにいた俺達でも恐れる位の殺気を放っていた!」

伊達「漣司は普段は冷静に行動出来るが、キレたら怒らせた奴に對して容赦しないからな!」

千桜（漣司君……）

楯無（漣司君……）

りん（ダンナ……）

一夏（漣司！）

後藤（漣司！）

伊達（漣司！）

ハヤテ（漣司君！）

ジロー（漣司！）

遊星（漣司！）

トリコ（漣司！）

行人（漣司！）

優人（漣司！）

夜空（漣司！）

イブキ（漣司！）

えみな（漣司君！）

『『『 漣司（桐札）（君）（さん）（殿）！』』』

篤（漣司！手遅れになる前に間に合ってくれ！）

皆がそれぞれ漣司の名を心で叫んだ。

『『『 ……?!?!?』』』

第2アリーナの観客席から見た一夏は驚いた。

観客席は遮断シールドによって無傷だったが、アリーナの地面は所々、大小様々のクレーターが出来ていた。アリーナを囲んでいる壁はあちこちにへこんであり、ヒビが割れている。

中でも一番大きいのは中央に出来た半径5メートルのクレーターで、その中央には鎧がほぼ無いに等しい程に破壊されたギルバード改めてナイトドローパントが右膝を着いていた。

そしてナイトドローパントを前に仁王立ちで立っていたのが、仮面ライダージョーカーに変身していた漣司のだが、一夏達は漣司の両手に驚いた。

漣司の右手は若干の緑色の光に包まれており、ISキャリバーを握っていた。

一夏達が特に驚いたのは、左手は漆黒の炎に包まれており、長さが約2.5メートルのブラスターライフルで、銃身の下には約1.3メートルのフォトン刃が取り付けられているのを握っていた。それが近接格闘、遠距離射撃両方可能な形状だと一夏達にはすぐに理解が出来た。

「ここで今から30分前に巻き戻してみよう。」

30分前 地下 独房室

漣司「さあ！お前の罪を数える！！！」

ナイト『グハツ！？』

漣司はすかさず、紫の炎で包まれた左拳でナイトドーパントにアツパーカットを決めてナイトドーパントは勢いで天井を突き破り、地上に出された。

漣司「はっ！」

漣司はジャンプして空いた穴から地上に出てナイトドーパントの首根っこを掴んだ。

漣司「まずは遠慮なく戦える場所ステージは……あそこにしよう。」

ナイト『ウワツーーーー！！！？』

漣司は第2アリーナに目掛けてナイトドーパントを思い切り投げた。

ヒューーーー、ドカーーーーン！！！！

ナイトドローパントは盛大な音を出しながらアリーナの地面に叩き付けられる。

ナイト『グッ、ガハアツ！ゴハアツ！』

漣司もアリーナに降り立つ。

漣司「お前はやってはいけない事を3つもやった。」

ナイト『?』

漣司は右手人差し指を上げる。

漣司「1つ。大した努力もしてねえのに、貴い物の力で調子に乗った事。」

今度は中指を上げる。

漣司「2つ。俺が尊敬している人達の名と力と誇りを汚そうとした事。」

最後に薬指を上げる。

漣司「3つ。女の子にガイアメモリを使わせて俺達の仲間を苦しませて、えみなを泣かせた事だ。・・・ギルバード、お前は等々俺を本気で怒らせたな。」

ナイト『!?!?』

ナイトドローパントは漣司の殺気でガクガクと震えている。

ナイト『シカシアナタノカモ貰い物ジャナイデスカ！人ノ事言エマセーン！』

ナイトドローパントは笑って言う。

漣司「確かに俺のも貰い物の力だ……。だがな、俺はそれを自分の力とする為にガイアメモリに抵抗出来る体とメモリの力に溺れない精神力を得るために心身共に鍛えきた。……。あの人達に比べれば俺はまだまだだがな……。」

漣司は若干顔をうつ伏せながら言う。

漣司「それに同じ転生者だからこそ俺は怒っているんだ。神に転生されたから自分は特別な存在だ？貰い物の力を貰って自分は最強だ？ふざけんな！」

漣司の殺気は更に増しており、子供がいたら泣き出すどころか失神してしまうだろう。

漣司「俺もお前ももうこの世界の住人で、チートキャラでも神様でも何でも無いんだよ！！貰い物の力を使っていい気になっせんじゃねえよ！！！」

一夏達が見たら、本当に漣司か？と疑ってしてしまうだろう。それほどに普段の漣司だったら出さないだろう怒りのオーラを出していた。

ふと漣司は空に向かって叫んだ。

「こいつを転生させ、結果を見て楽しんでいる神！……お前が二度と転生させる気を無くすようにこいつを叩き潰して、お前をいつか捻り潰してやるから覚悟しろ！……！」

漣司の右拳は更に緑に光始めたが、左拳にはジョーカーの紫の炎とは違う漆黒の炎に包まれていた。

ナイト『イツ、イイ気ナラナイデクダサーイ！！！！』

ナイトドーパントは二刀の刀を構えて漣司に突っ込む。

ナイト『コノメモリダケハチートデ色々ナ剣を出ス事がデキマース！炎ト氷ノ刀ヲクライナサー』ガシツ！！！！』！？』

漣司はナイトドーパントが言い切る前に降り下ろされた炎の刀を右手で氷の刀を左手で受け止め掴んだ。

ナイト『ヒツ！？何故炎ト氷ガ出ナイ！？』

ナイトドーパントの言う通り、それぞれの刀はまるで普通の刀のように何も起きなかった。

漣司「ふん！」

バキンッ！バキンッ！

漣司は手の握力で刀をへし折った。

漣司「剣か……。なら俺も剣で相手してやるよ。」

そう言うと漣司はISキャリバーを取り出し、右手で持つ。左手に光の粒子が集まりだした。

ナイト『ナツ、何デスカ！？ソノ武器ハ！！？』

冒頭にも書いたように漣司の左手にはフォトンの刃が付いたブラスターライフルだった。

漣司「これか？これはISの専用機の新武装のプロトタイプなんだが、でたために高い出力で調整が上手くいかなくてな……。特訓の時に危なすぎて使えないんだよ。お前で試してもいいか？」

漣司の殺気が更に増していたのは言うまでもない。

そして話は冒頭に戻る。

トリコ「それにしても漣司が左手に持ってんのは何だ？」

簪「あれは、漣司がISの新武装の為に作った試作品なんだけど、予想以上の出力が出てきてかなり危険だったから、訓練の武装訓練でも出せなかったの。」

トリコの質問に簪が答えると、アリーナに動きがあった。

ナイトドーパントは漣司から離れて背中 of 剣を取り出し構え漣司に斬りかかるが、漣司はISキャリバーで防ぎブラスターで砲撃を

浴びせる。

ドカーーン!!!!

レーザー型の砲撃がナイトドローパントに当たり地面にも当たったので爆発して半径3メートルのクレーターが出来た。

弾「うわっ!」

しのぶ「きゃあっ!」

サニー「でたらめにも程があるだろ!?!」

伊達「漣司の奴派手にやってるね〜。」

後藤「伊達さん感心してる場合じゃないですよ!!!」

夜空「それにしてもあの緑の光と黒い炎……。遊星、ジロー。」

ジロー「どうしたのだ?夜空。」

夜空「あの緑の光が何のか調べて。イブキ、黒い炎を調べたいから手伝って。」

遊星「わかった。」

イブキ「わかったわ。」

遊星とジローは所持してたパソコンを使い、夜空とイブキはそれぞれ魔方陣を出し、解析を始めた。

えみな「……。」

何かを決意したえみなが観客席の階段を降りた。

なな「えみな！？どこ行くんや！？」

ななは止めようとしたが既に遅かった。

一夏「俺が行ってくる！」

箒「一夏！？くっ！」

一夏がえみなの後を追い掛け、箒も一夏の後を追い掛ける。

セシリア「一夏さん！？箒さん！？」

ゼブラ「おいおいヤバイな……。」

小松「どうしたんですか？ゼブラさん？」

ゼブラ「漣司の心音が異常だ。これは明らかに怒っているようだぞ。」

クロウ「ゼブラ、漣司が怒りで我を忘れて暴走するってのかよ！？」

ゼブラ「いや、まだ漣司は己を保っている。あれだけの怒りをあらわにして自分を見失わずに闘っているとは、大した精神力だ。」

ゼブラが言い終わると、ナイトドーパントは仰向けで大の字で倒れていた。

皆がこれで終わりだろうと思った瞬間に、漣司はISキャリバーを振り上げた。

ちかげ「まだ攻撃するつもりですか!?」

行人「もういいよ!!漣司!!!戦意喪失の相手に攻撃しちゃ駄目だ!」

ジャック「くそっ!今から行っても間に合わん!!」

皆は漣司に止めるように言うが、漣司は聞こえてないのか、ISキャリバーを降り下ろした。

えみな「漣司君!!!やめてー!!!!!!」

えみなが叫びながら、漣司とナイトドーパントの間に割って入り、ナイトドーパントを庇うように両手を広げた。

漣司「!!!!!!」

漣司は驚きつつも、ISキャリバーをえみなの額に当たる寸前で止めた。

漣司「えみな・・・！こいつはお前達を操り利用したんだぞ！それを・・・。」

えみな「だからってその一撃を入れるのは間違ってるよ！漣司君、キミは怒りで力を振るう人じゃないでしょ？力の無い私達を守ってくれるように闘う漣司君に戻ってえ・・・。」

えみなのはそう言いながら漣司に抱き付いて止める。

漣司「えみな・・・！？」

漣司は驚く。えみなのは漣司の殺気を直に感じている為か汗だくで、両足が震え、顔は汗と涙でぐちゃぐちゃだった。

ガシャ！ガシャ！ポン。

漣司はISキャリバーとブラスターを地面に落とす、右手をえみなの頭に置く。緑の光と漆黒の炎は消えていた。

漣司「えみな・・・。悪かったな。止めてくれてありがとう。」

そう言いながら漣司は左手でえみなの涙を拭く。

ナイト『グガツ！スキアリ！』

気が付いたナイトドーパントはえみなもろとも大剣で漣司を串刺しにしようとする。

漣司「！」

漣司はえみなを自分の後ろに下がらせる。

ガキンッ！

一夏「ふうっ、危なかったな。」

一夏が白式を発動し雪片で防いだ。

箒「はあああああつー！！！」

箒も紅椿を発動して空裂から発したビームの刃が大剣を折った。

漣司「えみなの行動を無にしやがって……！！！」

再び漣司の左拳が漆黒の炎に包まれ、ナイトドールパントの顎を掴み何かを引き抜くように引っ張った。

亀山「どういふ事だ！？」

ワタル「ギルバードって奴に戻った！！？」

ワタルの言うように、ナイトドールパントはギルバードに戻った。

ギルバード「ア……。」

ギルバードは気絶して戻る。

鉄平「ん？漣司左手に何か持ってんな。」

滝丸「ガイアメモリと……。」

マツチ「黒いカード？」

マツチの言葉にセシリア達が驚く。

確かに漣司が左手に持っていたのはナイトメモリと黒のカードだった。

シャルロット「もしかしてナンバーズ!？」

シャルロットの言う通り、ナンバーズのカードだった。

『No.96 ブラック・ミスト』

漣司「ふん！」

漣司はナイトメモリを右手に持ち替えて握り潰した。

漣司「『No.96 ブラック・ミスト』、回収完了……。」
夏、篝助かった。」

一夏「良いつて事よ。」

篝「それよりもえみなは!？」

漣司「えみな!」

漣司は倒れているえみなを抱き抱えた。

漣司「気絶しているみたいだ。医療室に運ぼう。」

漣司はえみなを運び、医療室に向かった。

遊星「これは……。」

ジロー「まさか……。」

イブキ「これって……。」

夜空「やはりか……。」

全員、漣司の後を追ったのでこの4人の言葉を聞き取れなかった。

その39 立場と新武器と漆黒の炎（後書き）

ミニコーナー

ジロー「阿久野ジローだ今回漣司が使った武器に関する資料があったから紹介するぞ。」

正式名称 不明

製作者 桐札漣司 阿久野ジロー 不動遊星

製作段階 試作品

種類 多機能型ソードブラスター

備考 漣司が千桜、りんの専用機の装備を製作中にプロトタイプとして完成した。見た目はダールオーガ○ダムセ○ンソード/Gの装備、『G○ソード?ブラスター』に酷似している。近接、遠距離に優れているが出力に難があり調整が難しく訓練の新兵器の実験も危険すぎて出来なかった。

ソードモードとブラスターモードがあり、またそれぞれには3つの形状がある。

ジロー「こんな具合だ次回も楽しみにしてくれ。」

その40 苦悩と夕日と目撃

同日 午後5時 医療室

えみな「すう・・・すう・・・。」

漣司「・・・はあ・・・。」

医療室のベッドには髪をほどいて寝間着姿のえみなが寝ており、漣司はベッドの右隣の椅子に座って右手にジョーカーメモリを持ちながら寝ているえみなを見て溜め息をつく。

えみなを診たのは言うまでもなく伊達である。因みにえみなの着替えさせたのは静で若干顔を赤くしながら着替えさせたと言っ。

閑話休題。

ヒナギク「コラ、漣司君。女の子の寝顔をジロジロ見ない。」

漣司「ああつ、悪い。」

漣司はヒナギクから注意を受けえみなから目を反らす。

伊達「心配すんなって漣司。都幾川にはケガは無かったぞ。」

ジロー「だからいつまで落ち込んでるのだ！？漣司らしくないぞ！」

伊達やジローは励ますが漣司は左手で額を当てたまま動かなくなる。

漣司「俺今何やってたんだろうな……。」

ミサキ「？」

トオル「どうした急に？」

漣司「俺はギルバードに尊敬する人達の名を汚そうしたり女子を泣かせたりそれらの理由で俺自身は怒って攻撃したが、その怒りが『左翔太郎』さんの力と誇りを汚しそうになったり、えみなを泣かせて気絶までさせた……。俺本当に何やってんだ……？」

ジョーカーメモリを持った漣司の右手が震えていた。

漣司「『あの時』、怒りで我を忘れて暴れまわった時のままと変わらねえじゃねえか……！」

右手に持っていたジョーカーメモリに数滴、雫が落ちる。

緋鞠「漣司殿……!？」

声を掛けた緋鞠を始め皆が驚く。漣司が声を殺して泣いていたのだ。

ハヤテ「漣司君？泣いているのですか？」

漣司「ああ。皆に会って皆と飯食ったり、特訓したり、デュエルしたり、IS開発したり、メンテナンスしたり、敵と闘ってしたりもした。皆変わったし、俺自身も変わったと思った。でも、俺自身何も変わってなかった……！」

ジョーカーメモ리를落として、両手を頭に抱える。

漣司「俺はギルバードの事言えなかった！えみな達を気にかける資格もなかった！だから変わってもないし成長も出来てない！！！」

後藤「漣司！！それは違「はああああっ！！！」」

後藤が漣司の言ったことを否定する様に言いかける前に厳しい表情で箒が紅椿を右腕だけ部分展開をして雨月で漣司に斬りかかった。

漣司「！？」

ガキンツ！！！！

漣司は驚きつつもISキャリバーで防ぐ。

漣司「箒……！？」

千桜「箒！？何してんだ！？」

箒のあまりの行動に皆が驚く。

箒「漣司……。成長もしたし変わったじゃないか……。初めて会った時だったらこの攻撃を防げてないぞ。」

厳しい表情から優しい表情になった箒は部分展開を解除して右手で漣司の右腕を掴み、左手でジョーカーメモ리를拾う。

箒「行くぞ。漣司。」

漣司「え？」

篤は漣司を連れて医療室から出る。

楯無「ちよつと篤ちゃん……！？一夏君！？」

楯無は追い掛けようとしたが、一夏が楯無の前に手を伸ばし止めさせる。

一夏「楯無さん、漣司は篤に任せましょう。何故ならあいつは漣司の相棒だから……。大丈夫だ。」

一夏は確信していた。

今漣司の心を救えるのは篤だけだと。

九路洲学園 屋上

Bannon!

箒は屋上に続くドアを思い切り開けた。

箒「はあっ、はあっ……。漣司見る。」

漣司「はあっ、はあっ、箒……。行きなり屋上に連れ出すなんてどうしたんだ……。！」

息切れしながら漣司は箒の行動に驚きつつも箒の言った方向を見ると漣司は言葉を無くす。

それは漣司が今まで見た場所の中で一番美しいと感じた九路洲学園の屋上から見た真っ赤な夕日だった。

漣司「箒……。これはまさか……。」

箒「そうだ漣司。私が姉さんから紅椿をプレゼントとして貰い、一緒に訓練した時だ。私が絢爛舞踏が発動出来なくて焦っていた時、漣司が私にこの夕日を見せたのは……。」

箒は語り出す。

一方その頃。

えみな「うっ……ううん……。」

なな「おお、えみな目を覚ましたんか。」

えみな「あっ……ななっち、漣司君は……？さっきまで隣にいたような気がして……。」

数馬「漣司だったら箒に連れられてどっか行ったぞ。」

えみな「私、2人を捜して来るよ。」

えみなのは制服の上着を羽織り医療室から出る。

美由「ちよ、ちよっとえみー！」

鈴「えみな、漣司の事が気になっているみたいだからそっとしときなさいよ。」

静「ああいうえみなさんもカワイイです。」

ジャック「ったく、漣司はモテモテだな。」

クロウ「お前が言うか……。」

えみなの言葉に初々しさを感じたメンバーであった。

また戻って屋上

篤「漣司、自分は変わってないと言うがそれは違うぞ。初めて会った時とは一夏と同じ感情だったのだが、今では頼りなる私の唯一無二の相棒だと思えるように逞しくなって、私達の誰よりも変わった男だと私は思っぞ。」

漣司「……。」

篤「それに漣司は自分の事は必ず二の次で他の人の為に力になったり、助けたり、怒る事が出来たり、悲しんだり、闘う事が出来る。さすがにさっきのはやり過ぎだが、それでも漣司は一夏やえみなやその翔太郎さんと言う人の為に頑張る事が出来る人で、私の最高の相棒だ。」

漣司「篤……。」

篤「だから……。」

篤は漣司の右手にジョーカーメモリを握らす。

篤「だから漣司は私達を信じ漣司が信じる信念を貫き通して共に闘ってくれ。漣司が過ちを犯しそうになったら私達が全力で止めよう。漣司は私達の同じクラスメイトであり、私達の大事な仲間でもあり、私のたった一人の大事な相棒だからな。」

篤は明るい表情を漣司に見せた。

漣司「篤……!!！」

漣司は箒を抱き締めた。

箒「ふえっ！？漣司！？」

漣司「悪い……箒い。暫くこつささせて欲しい……。」

漣司は涙を流しながら箒に言う。

箒「ああ……いいぞ。」

箒はまるで我が子をあやす様に漣司を抱き締めた。

この様子を見た者は誰もいない。

えみな「え……？どういう事？」

ただ一人、漣司と箒を捜して屋上まで来たえみなだけを除いては……。

その40 苦悩と夕日と目撃（後書き）

ミニコーナー

後藤「作者、最後のは？」

えっと、なんとなく？

遊星「なんとなくなくて……。えみな、漣司と篤が付き合っていると誤解してしまうぞ。」

大丈夫、次で誤解解けるから……。多分。

ハヤテ「多分!？」

では次回もお楽しみに〜

トリコ「おい。」

皆どうしたのって……。ギャー！！？

作者は二度目のログオフになった。

漣司「どうした？」

篤「作者は？」

ジロー「一旦退席させて貰った。」

漣司 第「」? ? ? ? 「」

「夏」では、次回も楽しみにしてくれ。」

その41 掃除と代わりと解析結果

3月27日 午前9時 九路洲学園 寮 寮長室（千冬の部屋）
漣司 side

俺と一夏と篤は寮長室つまり千冬の部屋の前に来ていた。

何故俺達が千冬さんの前にいるのかと言つと、昨日篤に抱き付いてしまつて数十分経つて落ち着いて医療室に戻ると、千冬さんから俺は学園の施設を破壊して、襲撃犯のギルバードを痛め付け過ぎてしまい、一夏と篤は無断でISを展開（今までは千冬さんの許可を貰い展開していた）してしまつたので罰として俺達は千冬さんの部屋の片付けをする事になつた。

本来俺は3日間の独房室に入れられ、一夏と篤は500枚の反省文を書かされるのだが、今回は千冬さんがこの学園の理事達に掛け合い罰が軽減された。

漣司「一夏確か織斑家の家事は全部一夏がしてたんだよな。」

一夏「ああ、千冬姉家では結構すばらな『バシーン!!!』『ぐえっ!!!?』」

一夏は言い終える前に千冬さんの『大切断』ならぬ『出席簿』をくらつた。

因みに『大切断』とはある昭和仮面ライダーの必殺技である。俺は平成だけでは満足出来なくて昭和の方も見るようになった。

千冬「どうした桐札？」

漣司「いえ、別に……。」

千冬さんに聞かれ俺は考えるのをやめる。

千冬「さて3人には昨日の罰として、私の部屋の掃除を手伝って貰う。」

「」「はい！」「」

俺達は千冬さんの部屋に入った。

第「これは……。」

一夏「まあ覚悟はしてたけど……。」

漣司「でも、ツラよりかは断然マシだな……。」

千冬さんの部屋を見た俺達はそれぞれの反応した。

2つあるベッドの内、千冬さんが寝ているであろうベッドには寝間着やら下着やらで滅茶苦茶で、もう1つのベッドはパソコンや資料の束で埋まっついていて、机には缶ビールが5、6本と一夏に作らせたであろうお飲みがあった。

クローゼットなんかまるで空き巣に入られたんじゃないかと思うぐらいスーツや服を引っ掻き回し、放置。

床にゴミは落ちてなかったが代わりにクローゼットから引っ張り出したんであるう服が置かれていて、一目見ただけで、千冬さんの部屋とは誰も思わないだろう。

因みにツラ（雪路先生）の部屋は、千冬さんの部屋を作動している巨大な洗濯機の中に放り込まれた様に酷く、酒臭さが充満しており、壁なんかカビどころか変なキノコが生えて生産させていた。大丈夫なのかこの先生……。

漣司「取り敢えず、掃除しようか……。」

一夏 篤「ああ……。」

俺達は千冬さんの部屋の掃除を始めた。

同時刻 第2アリーナ

雪路「ぶえつくしよん！」

ISの訓練を観ていた雪路が盛大なくしゃみをした。

山田「どうしました？桂先生、風邪ですか？」

雪路「いや、誰かが私の噂してるのかしら？」

悪い意味で。

雪路「ん？何か悪口言われたような……。」

山田「気のせいでしょう。それにしても皆さん一層訓練に励みますね。」

山田の言う通り、女子達は『打鉄』や『ラファール・リヴァイヴ』を装着して近接ブレードの素振りや射撃訓練、模擬戦などをしており、後藤達男子も己の能力向上に励んでいる。

特にりんは鈴音と共に近接格闘を主体とした模擬戦をしており、千桜はシャルロットに高速切替を教えて貰い練習している。

雪路「そうね……、やはり昨日の桐札君の影響かしら？」

山田「そうですね……。昨日の桐札君を見て皆さん、只見る事しか出来なかったと聞きます。その時無力さを感じたのでしょうか……。桐札君に全てを背負わせない為に……。」

雪路「それにしても織斑君や篠ノ之さんはともかく都幾川さんは無茶したって聞いたけど……。」

山田「桐札君を止める為とは言え、自分の命を捨てるような行動でしたからね……。織斑先生や杉下先生達にお説教されました。私も教師としていい行動とは言えません。」

雪路「その都幾川さんは？」

山田「都幾川さんは更識さんに稽古つけて貰っています……。」

雪路「相当無茶してるわね……。」

楯無「……えみなちゃん、少し休憩しましょう？」

えみな「はあっ、はあっ……。まだまだ……。！お願いします
」！」

ミスティアス・レイディを纏った楯無は打鉄を纏ったえみなに休息させるように促すがえみなはまだ続けるようだ。

なな「えみな！無茶せんとき！休息しようや！」

えみな「ななっち私は！一人で全てを背負い込もうとしている漣司君の力になりたい！箒みたいに頼って欲しい！箒の代わりになれるように頑張りたいの！うっ……。ひぐっ……。」

えみなは泣きながら言う。

静「何があつたのですか？」

えみな「実は……。」

えみなは皆に屋上の話をした。

えみな「あの2人が抱き合ってた……。漣司君と箒は愛し合っていると思って、私は漣司君をどう思っているのかわからないけど、私も箒の代わりになって頼って欲しい。力になりたいよお……。」

ラウラ「そうだったのか……。えみなが何故あの後、元気が無かったのか……。」

シズカ「今、必死で特訓しているのかもわかりました。」

トオル「まあ、そんなところ見たら誰だって2人が付き合っていると思うわな……。」

えみな「え?。」

なな「2人つて異性としてお付き合いしてんのとちゃうの?」

ミサキ「2人は恋人とは違う親友以上の関係を持った……。」

鬼柳「互いを信じ、手を取り合い、助け合い、力を合わせる。」

後藤「その2人は相棒と言い、漣司と篝ちゃんもその関係だ。」

えみな「相棒……。」

杉下「それに貴女は間違ってますよ。」

えみな「え?」

杉下「都幾川君。貴女は篠ノ之君の代わりになりたいと仰ってましたが、貴女では篠ノ之君の代わりは出来ません。ここにいる皆さんでも出来ません。」

亀山「俺が神戸の代わりが出来ないように。」

神戸「僕も亀山さんの代わりが出来ないと一緒だよ。」

杉下「篠ノ之君の代わりはいません。何故ならそれは篠ノ之君しか出来ませんからねえ。しかし、それは都幾川君しか出来ない事があると言つ事です。」

えみな「私しか出来ない事……。」

雪路「都幾川さん、がむしゃらにやっただって体壊すし桐札君はそんな貴女を見たくないはずよ。」

山田「先ずは都幾川さんは何をしたいか考えて、何をしたらそれが出来るか考えて下さい。」

えみな「私は……、漣司君は私達の為に本気で怒ってくれて私達を助けてくれてメモリを使おうとした私の手を掴んで止めてくれた。」

えみなのは一呼吸おく。

えみな「漣司君は自覚は無いだろうけど1人で全てを背負い込もうとしている。私はそんな漣司君が助けを求めて手を延ばして来たら、私はその手を掴み助けたい。その為に私は強くなりた……！」

トリコ「そうか、でも安心しな。そう思ってるのはお前だけじゃない。漣司に全てを背負わせねーよ。」

優人「漣司は仲間の大切さがわかっているから俺達の為に必死に頑張ってる。」

伊達「まっ、そのせいか自分の事は全部後回しになるのが漣司の悪い癖だな……。」

後藤「だから俺達は漣司に全力で協力する。仲間だからだけじゃない。俺達は家族みたいなものだ。」

後藤の言葉に皆頷く。

えみな「私達もなれるのかな……。」

セシリア「なれますわ。」

ジャック「と言うかもうなってるではないか。」

えみな「皆……。ありがとう。」

えみなのは涙を流しながら、お礼を言う。

遊星「……皆、雰囲気壊すよつで悪いがちょっといいか？」

皆が振り向くと遊星、ジロー、夜空、イブキがいて、遊星が申し訳無さそうに言った。

龍亞「どうしたの？」

夜空「実は昨日漣司から発した。緑色の光と漆黒の炎について解

析が終わって、あの後から更に解析してついさっき終わって判明したから皆に知らせようと思って。」

「ココ」それでどうだったんだい？」

「ジロー」あれは本当に漣司が発していたのか疑ってしまった……。」

ゆきの「どういう事？」

イブキ「漣司はもしかすると、彼自身も知らない大いなる力を持っているかもしれないわ……。」

遊星達は解析結果を皆に話す。

その41 掃除と代わりと解析結果（後書き）

ミニコーナー

あれ？

漣司「作者・・・これ1話で終わらせるんじゃないのか？」

いや、ちよつと、意外に長くなつたから分けた方が言いかなつて・・・。

漣司「本当にしようがねえな・・・。えみなの勘違いは解けたからいいが、次回であるの2つの力がなんなのかわかるのか？」

次回でわかるけど取り敢えずヒント、あれは2つとも原理は違えど、能力はほぼ同じである事。漣司が元々持っていてこの世界に転生した時に覚醒が始めた。この2つかな？

漣司「つまり神から貰つたチートみたいな物じゃないと・・・。取り敢えず次回も楽しみにしてくれ。」

その42 光と炎と過去話

遊星「まず、緑色の光について俺とジローは科学的に調べた結果、あの光はガイアメモリと同じ種類の力だとわかった。」

朝風「それって、何の記憶が宿った力なのか？」

ジロー「わからん。ただ昨日の戦闘を見てあの光は相手の力を打ち消してしまおうようだ。」

ちかげ「無効化ですか？」

遊星「ああ正確には相手の能力をかなり高い演算能力で解析して上書きをして無かった事にしてるようだよ。」

美由「それってなんだかエクストリームメモリみたいだね。」

「『エクストリームメモリ？』」

美由の言葉に皆が疑問を抱く。

美由「うん、仮面ライダーWがサイクロンジョーカーエクストリームになる為に必要なメモリで、他のメモリの強化する事が出来るんだよ。無効化の能力はクリスタルサーバーって所と連携で発動してるけどね。緑色の光にも一緒だよ。」

しのぶ「やけに詳しいでござるな。」

えみな「美由っちは特撮ヒーローが好きなんだよ。」

なな「美少女である分残念な娘やけどな……。」

遊星「取り敢えず、解析結果と美由の話だとするとその光がエクストリームメモリの力である事は間違いないな。」

夜空「次に黒い炎についてなんだが……。」

一方その頃漣司達は……。

一夏「なあ、漣司……。」

漣司「ん？どうした一夏。Gが出たのか？」

一夏「いや、そうじゃない。漣司に聞きたい事があるんだ。」

漣司「何だ？」

一夏「この前、漣司の両親の事話してくれたじゃないか。兄弟いるのかなって思ってな……。」

漣司「いや、いないぞ。俺の母さん、何故かわからないが妊娠出来ない体質だったらしくてな。妊娠、出産の経験が無いらしいぞ。」

一夏「経験が無いって……。まさか……。」

漣司「そう、俺は今の両親とは書類上で親子なんだ。俺は近所の近くの公園に置き去りにされてたのを両親が見つけて拾われたんだ。」

一夏「漣司……悪い……。」

漣司「気にすんな。家事は全く駄目でも真剣に愛してくれて、全力でぶつかってくれて、俺を本気で信じてくれる両親には本当に感謝している。もう会えないが……（ボソツ）。」

一夏「どうしたんだ？」

漣司「いや、何でもねえ。兄弟はいなかったが、近所に10歳年上のお姉さんがいてな。家事もさる事ながら勉強、武術にも天才的な人でな、よくその人に慕ってたな……。」

一夏「教えて貰った事はあるのか？」

漣司「いや、あの人が結構忙しかったみたいだったから、教えて貰うのを躊躇してしまってたな。独学だったり生活している内に身に付いたり……。やっとここまで来れた感じだな。」

一夏「でも漣司が尊敬する程って事はそれだけ凄い人なんだな。」

漣司「ああ、でも俺が中学に入ったすぐに行方を眩ませてな、俺なりに捜してみたが結局は見つける事が出来なかった……。」

篤「警察は動かなかったのか？」

漣司「それがおかしな事になったんだ。その人がいなくなった日に、俺は両親や近所の人達に聞いたんだが誰もその人の事を覚えてないんだ。」

篤「覚えてない？」

漣司「ああ、警察や役所の所にも聞いたが、その人の戸籍も無かったし、住民登録もされてなかった。……まるで最初からいなかったんじゃないかと思ってしまうくらいに……。」

一夏「……なあ、もしかしてその人って異世界からの人じゃないか……。」

漣司「え……。そうか。」

篤「2人ともどうしたのだ？何故その人が異世界から来た人だと思うんだ？」

一夏「夜空から聞いたんだ。夜空がいた世界は魔法を使って異世界に行つてその世界に住みながら調査しているってな。」

漣司「ある程度、調査が終わつたら自分が関わつてたその世界の住人の記憶を消して帰るって。」

一夏「漣司が言つてたその人は夜空と同じもしくはよく似た世界

の住人で、漣司の世界に調査に来たってとこじゃないかって思ったんだ。」

第「なるほど……。でもそれじゃ1つおかしい事がある。何故一番に自分を慕ってた漣司の記憶を消さなかったんだ？」

漣司「それだ一夏の仮説が正しいとすると何故記憶を消さなかったのか？わからないんだ。」

第「わざと消さなかったんじゃないのか？」

漣司「いや夜空の話だと、記憶を消してなかったら色々と問題が起こって、その世界とは二度と繋がられなくなるって言うってたからそれはないと思うぞ。」

一夏「もしかすると消さなかったんじゃないかって消せなかったのか？」

漣司「しかしそうなると何で記憶を消せなかったんだ？」

第「今度、夜空達に聞いてみよう。」

この3人は話ながら常人の倍の速さで掃除をしているから大したものである。

話は後藤達に戻る。

夜空「……。」

後藤「どうしたんだ夜空？黙って。」

夜空「いや、何でもない……。あの黒い炎は魔術で生み出されたのがわかったわ。」

「……!?」「」

皆が驚く（因みに行人はこう言う話をしたらややこしくなるのであやねに睡眠薬が塗られた吹き矢で眠らせていた。）。

中津川「それってエクストリームと同じなのか？」

イブキ「ええ、漣司の体内で作られていたもので能力はエクストリームと同じ無効化能力みたいだけど方法が違うみたいなの。」

ブルーノ「違うってどんな方法？」

夜空「エクストリームは演算で解析しながら上書きして無かった事にしてみるみたいだが、あの炎はどうやら対象物とは『真逆の性質』に瞬時になって相殺させて無効化してるみたい。」

東雲「それって、火の攻撃は水になって打ち消しているって事？」

夜空「例えるならそうなるわ。漣司は魔力に似た力を大量に練り出せる事が出来るみたい。漣司自身は無意識でやってたみたいだけど……。」

花菱「それにしても、漣太君は本当に不思議な男の子だ。」

まち「ええ、会った時から漣司様を中心に皆の力が日増し高まっ

てるみたいだし。」

トリコ「俺達を繋いだのも漣司のおかげかもな。」

遊星「漣司にどの様な力があるのが漣司は俺達の仲間である事に変わりはない。」

ジロー「もうそろそろ漣司達も終わるようだし、行人起こして昼飯食べよう!」

「」「賛成!」「」

こうして皆は漣司達と合流して昼食を食べ、午後の訓練を開始した。

転生の方舟

レイ「ん?入学式の前に異世界からのお客さんが来るようだね
漣司君は特に喜びそうだよ」

レイは嬉しそうに言う。

レイ「待ってるからね〜」
「ん〜」
切り札の探偵さんとパンツの旅人さ

その42 光と炎と過去話（後書き）

ミニコーナー

第「漣司、1つ聞いていいか？」

漣司「どうした？」 カフェオレ飲んでる。

第「れ、漣司はその胸が大きい女性は好きなのか・・・？」

漣司「！？ゴホッ！ゴホッ！」 カフェオレ吹きそうになって耐えたがむせた。

第「だ、大丈夫か！？」

漣司「はあっ・・・はあっ・・・第・・・それは女の子が直接男にする質問じゃないだろ・・・。」

第「す、すまない・・・。ある時一夏や他の男子が山田先生の胸を見ていた事があるから気になって・・・。」

漣司「そうか・・・俺が言える事は女性の胸自体が女性の魅力の1つで大きさでどうこう言うものじゃないと思うぞ・・・。」

第「そうか・・・。ありがとう。参考になった。」

漣司「（第・・・次から女の子同士で聞くんだ。相棒の俺でもそう言った話には力になれそうにはない。）」

それでは次回もお楽しみに〜

その43 現れた切り札と欲望の王と新たなる決意（前書き）

ハヤテ「今回の話は鳴神 ソラさんの作品『仮面ライダーW』妖と探偵と鬼斬り役』で僕達とのコラボ話を、僕達の作者が鳴神 ソラさんの許可を頂き、本編とした物です。鳴神 ソラさん感謝します。」

一夏「内容は鳴神 ソラさんのコラボ作品と同じですが此方の物語に辻褄が合うように作者が直しながら新しく書いた物だ。」

漣司「それでは楽しんでくれ。」

その43 現れた切り札と欲望の王と新たなる決意

3月29日 午前9時 九路洲学園 中庭 第side

綺麗な青空だ。私篠ノ之箒は1人で学園の中庭森林を歩いていた。私の相棒である桐札漣司が最近心が不安定になってたが、落ち着いてきたから安心した。

1人で歩いているのもたまには1人でどうやってたら漣司の力になれるかを考えながら歩いていたのだ。漣司や皆と会ってからずっと一緒だったから、1人になったのは久しぶりな気がする。

箒「うーん。森の中に入ると気持ちがいいな。最近は色々と起こつて心が休まらないからな……。そうだ今度漣司を連れて行こう。」

『ジョーカー!』

箒「え……。?今のは……。漣司が闘っているのか!？」

私はさっき聞こえたジョーカーメモリの記憶の声がしたと思う方向に向かって走り出す。

箒「はあっ、はあっ。」

森から広い所に出た私の前にはマスカレイドドーパントが数体倒れており、ジョーカーがマスカレイドドーパントとは違うドーパントに止めを指そうとジョーカーメモ리를 マキシマムスロットに射し

込もつとしていた。

篤「漣司！大丈夫か！」

ジョーカー「はっ？」

私はジョーカーに声を掛けたがジョーカーは呆気な声を出していた。

ジョーカー「お嬢ちゃん、離れてろ。」

篤「！？漣司じゃない？」

私は驚いたが、ジョーカーはそんな私を気付いてないのかジョーカーメモリをマキシマムスロットに射し込む。

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

マキシマムドライブを発動したジョーカーは構えた後にジャンプして、

ジョーカー「ライダーパンチ！！」

ジョーカーの2つの必殺技の1つ、ライダーパンチをドーパントに命中させ、爆発して消えた。

ジョーカー「はっ？」

ドーパントを倒したジョーカーもまた呆気な声を出していた。

ジョーカー「どうなってるんだ？」

ジョーカーが戸惑っていた時に、

漣司「篤!!」

漣司が駆け付けた。え？漣司が駆け付けたって事は……。

篤「漣司!？それじゃあのジョーカーは何者だ……。」

漣司「ジョーカー?……!?!?」

私の言葉に漣司も目の前のジョーカーを見て驚く。

ジョーカー「ん？小さい俺!?!」

そのジョーカーも漣司を見て指を指して驚いている。漣司はジョーカーの声を聞いてやっぱり思ったのか、

漣司「左翔太郎さんですよ?」

ジョーカー「翔太郎?何で俺の名前を?」

漣司の問いにジョーカーはそう言った後変身を解いた。

変身を解いたジョーカーの姿は漣司が大人になった姿で私はカッコいいと思った。

この日私達は漣司が尊敬していて、漣司と同じ仮面ライダージョーカーである左翔太郎さんとその相棒であるフィリップさん、そしてコアメダルを使う無限を超えた欲望の戦士、火野映司さんとの出会いはこの時私は夢にも思いもしなかった。

箒 side out

九路洲学園 応接室 漣司 side

千冬「成る程・・・。」

俺桐札漣司は翔太郎さんを応接室まで連れていき、連絡で呼んだ千冬さんに事情を翔太郎さんが話した。

俺は箒が珍しく1人で行動しているのが気になり、箒を捜していたら箒を見付けて目の前に仮面ライダージョーカーがいたから驚いたが、声を聞くと翔太郎さんだとすぐわかり千冬さんに連絡して翔太郎さんを連れてきた。

翔太郎「しつかし、まさか俺以外にジョーカーがいるとは・・・。」

納得している千冬さんの前にいた翔太郎さんが俺を見る。

漣司「俺こそ、会えて嬉しいですよ。」

まさか、この世界で翔太郎さんに会えるなんて俺は嬉しくて泣きそうになった。

翔太郎さんと話していると、千冬さん以外に連絡した伊達先生と後藤に偶々近くにいたのであろう杉下先生、亀山先生、神戸先生に

優人、緋鞠、凜子、静水久、くえすが来た。

翔太郎「緋鞠！静水久！くえす！？お前等も来てたのか！？」

翔太郎さんは驚きながら3人に聞く。

優人「3人とも知り合い？」

緋鞠「いや・・・知らないのじゃ。」

静水久「私もなの・・・。」

くえす「同じくですわ。」

凜子「けど・・・あの様子じゃあ知り合いのようだけど？」

翔太郎さんが緋鞠達を知っていて、緋鞠達が翔太郎さんを知らない・・・って事は・・・。

漣司「翔太郎さん、もしかしてそっちに緋鞠達がいるんですか？」

翔太郎「ああ、緋鞠は俺の家族で静水久とくえすは俺の仲間だ・・・その2人は知らないけどな・・・そうか、別世界の緋鞠達か・・・。」

俺の質問に翔太郎さんは誇らしげに言った後、そう呟いた。

凜子「それじゃあ優人と同じ・・・俺は探偵！！緋鞠でそういう風に見るな！！」ひっ！？」

凜子の言おうとしたが翔太郎さんが激怒して立ち上がりそう叫んだ後息をして座る。

優人「あの、気に障ったのならすいません。」

翔太郎「いや、こつちも神経質になつてたからすまねえ。」

謝る優人に翔太郎さんも謝る。

凜子「そつ、そんなに怒鳴らなくても……。」

杉下「九崎君、それ程彼は自分の職に誇りを持つてるんですよ。」

優人の背中に隠れて言う凜子に杉下先生が言う。

ん？ちよつと待て翔太郎さんがジョーカーって事は……。

漣司「それにしてもジョーカーになつてゐるって事は……相棒は……その……もういないんですか？」

俺は言葉を濁して言った。翔太郎さんがジョーカーになっている事は相棒のフィリップさんの身に何かがあったと思ひ、最悪の結果を想像してしまった。

翔太郎「？いや、フィリップはいるぞ。今はダブルドライバーの修理で別行動中、このロストドライバーは爺ちゃんとおやっさんからの遅い誕生日プレゼントさ。」

俺の質問に翔太郎さんは首を傾けながらそう言い、ロストドライバーを見せた。

良かった……。フィリップさんは無事か……。それにしても翔太郎さんが優人と同じ立場で緋鞠達と一緒にいるとは、俺が知っているWの物語と目の前にいる翔太郎さん達の物語が違うって事が改めてわかった。

でも良かった。翔太郎さんが天河家出身でも探偵を目指して師匠である鳴海荘吉さんに弟子入りして探偵になった。やっぱり翔太郎さんは翔太郎さんだな。

俺はそう思っていたら、

小松「大変です!!」

小松が慌てて入ってきた。

伊達「おいおい、どうしたの小松ちゃん？」

小松「第2アリーナに怪物が現れたんです！しかも途中で巨大化になって怪物になったんです！！今、トリコさん達が抑えていますけど……。」

漣司「大きくなった!？」

翔太郎「案内してくれ!」

俺達は第2アリーナに行った。

第2アリーナ

第2アリーナにはISを纏った一夏達とトリコ達はビッグ・ティ
ーレックス、ビッグ・アノマロカリス、ビッグ・トライセラトップ
ス、ケツアルコアトルス・ドーパントと戦っていた。

翔太郎「何だあの鳥のドーパント!？」

漣司「(見た事ないって事はまだそこまで行ってないのか。・・・)
」

翔太郎さんはケツアルコアトルス・ドーパントに驚いていた。ハ
ヤテ達も戦っていた。

漣司「(俺も戦わないと・・・。)」

俺はロストドライバーを装着しようとした時、翔太郎さんの目の
前に紫の裂け目が現れた。

そこには目が沢山あった。

凜子「何あれ!？」

翔太郎「おいおいこれって・・・。」

凜子が驚き、翔太郎さんが何故か呆れている表情をしていたが何
かが飛び出したがまさか・・・。

?「やれやれ、やっと見つけたよ翔太郎。」

翔太郎「お前こそ、直ったんだなフィリップ!」

出てきたのは鳥の形をした自立型特殊ガイアメモリ『エクストリームメモリ』でエクストリームメモリから緑色の光が放射され、そこから翔太郎さんの相棒のフィリップさんが現れた。

フィリップ「待たせたね相棒。」

翔太郎「ああ、また半分力を貸してくれ。」

フィリップさんはそう言うのとダブルドライバーを翔太郎さんに渡し、受け取った翔太郎さんも言っただブルドライバーを腰に装着する。

フィリップ「さて、桐札漣司。」

漣司「えっ、あっ、はい！」

それを見た後フィリップさんは俺に声を掛けた。俺はいきなりだったから慌てて返すとフィリップさんはもう1つのダブルドライバーとルナメモリとトリガーメモリを見せる。

翔太郎「それって!？」

フィリップ「にとりが予備用にと作ったそうだよ。メモリも彼等用のだ……。それで桐札漣司、キミは相棒と相乗りする勇氣はあるかい？」

驚く翔太郎さんにフィリップさんはそう言い、俺を試す様に聞く。

俺は筭を見て、フィリップさんの話を聞いていたた筭も俺を見る。

箒は俺と相乗りする勇気があるかの様に頷き、俺はフィリップさんからダブルドライバーとルナメモリとトリガーメモリを受け取り、ダブルドライバーを装着する。

すると箒の腰にもダブルドライバーが装着された。

俺はフレイムメモリを取り出したが、千冬さんを見る。

千冬「安心しろ、桐札。今回は多目に見てやる。篠ノ之と一緒に
お前達の勇気を左達に見せてやれ。」

漣司 箒「ありがとうございます。」

俺と箒は千冬さんにお礼を言って、箒にフレイムメモリを渡し、俺もジョーカーメモリを取り出す。

翔太郎「んじゃ俺……いや俺達も。」

フィリップ「行こう相棒。」

翔太郎さんもジョーカーメモリ、フィリップさんもサイクロンメモリを取り出す。

『サイクロン！』

『『ジョーカー！』』

『フレイム！』

翔太郎 フィリップ 漣司 箒「『『変身！』』」

それぞれポーズを取ると、フィリップさんと箒はドライバーの右スロットにメモリを装填して俺と翔太郎さんのドライバーの右スロットに転送された。転送された瞬間2人は意識が失ったかの様に倒れ始めるが、優人と小松がフィリップさんの体を、緋鞠と凜子が箒の体を支える。

俺と翔太郎さんは転送されたメモリを装填して、左スロットにジョーカーメモリを装填し、ドライバーを展開した。

『サイクロン！ジョーカー！』

『フレイム！ジョーカー！』

音声と共に翔太郎さんの周りは旋風を巻き起こした後、右側が緑のサイクロンサイドに左側が黒のジョーカーサイドの『仮面ライダーW・サイクロンジョーカー』に変身して、俺は真紅と紫が混じった球体に包まれた後に右側が真紅のフレイムサイドに、左側がジョーカーサイドになった『仮面ライダーW・フレイムジョーカー』に変身した。

亀山「おお！？」

神戸「凄い……。」

箒「これが……。」

漣司「俺達に変身したWだ相棒。」

翔太郎「さてと……。」

緋鞠と凜子に自分の体が運ばれていくのを見た後Wの体を見て
咳く喘を俺は言つて翔太郎さんがドーパントに向かおうとする。
その時、

?「待てよ!!」

翔太郎「ん？」

いきなりの声に翔太郎さんは声をした方を向くと金縁の赤いメダ
ル、コアメダルが転がり翔太郎さんの足に辺り倒れた。翔太郎さん
が拾い上げると、コアメダルは鷹の絵が書かれたタカコアだった。

篤「何故コアメダルが!？」

翔太郎「ん? 篤これ知ってるのか？」

2人が話をしていたら、1人の男の人がこっちに走って来た。

男「すみません! それ俺のなんですよ!」

翔太郎「そうなのか、ほら……。」

伊達 後藤「火野!？」

男の人の言葉に翔太郎さんはメダルを渡すと伊達先生と後藤が驚
きながら男の人を見る。どうやら知っているようだ。

男 映司「えっ!?! 確かに俺は火野映司ですけど……誰ですか
?」

しかし映司って人は伊達先生や後藤を知らないようだ……。

伊達「いや、誰って……」

?「おい！映司！」

?「待つてくださいよ。」

呆気にとられている伊達先生を遮り、翼の付いた赤い腕と赤を基調とした服を着た女の子が現れた。

翔太郎「腕が飛んでるううう!?!」

映司「御免、アंकにカル。」

翔太郎さんが驚いている間に映司さんは腕をアंक、女の子を力ルと言い2人(?)に謝った。

伊達「えっ、アンコ?」

後藤「アंकですって、伊達さん。」

あのアंकって言う腕も知っているのか伊達先生はわざとなのか本気なのか名前を間違え、後藤が訂正と言う名のツッコミを入れた。

静水久「離れたほうが良いの。」

映司「その前にこいつ等を倒してからだよ。」

アंक「メダル無くすなよ!」

カル「はい、トラとバッタ。」

静水久がそう言うと映司さんが言いながら、懐から3つの丸いメダルが入りそうな長方形の物を腰に当てるとそれはベルトのバックルになり、映司さんの腰に装着された。アंकの言った後にカルが映司さんに黄色と緑のメダルを渡し映司さんは受け取った後、映司さんはさっきの赤いメダルをバックルの穴の右、黄色のメダルを真ん中、緑のメダルを左に嵌めた後、赤いメダルが上に来るようにバックルを斜めに傾けさせ、ベルトの右側にあつた黒い円盤みたいなものを取り出し、それをバックルに嵌めたメダルを読み取らせるかの様に滑らせた。

キーンキーンキーン！

映司「変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ』

映司さんが叫んだ後、歌と共に複数のメダルが回っていて映司さんの頭の前にタカ、胸の前にトラ、腰の前にバッタのメダルが止まりそれらが合体して映司さんの胸に当てられて変身した。

「「「！？」」」

変身した映司さんに俺達は驚いた。全体の色が黒で、頭は赤く鷹が羽を広げた様になっていて複眼は緑で、胴体で両腕は黄色く、前両腕部は降りた畳まれた3本爪のクローがあり、足は緑のラインが入っていた。一番驚いたのは胸に描かれている金縁の円で中に上か

らタカ、トラ、バッタが描かれていた。

篤「紅椿に入っているのと同じメダルで変身した！？その姿は一体？」

映司「オーズ、仮面ライダーオーズさ！」

篤の問いに映司さんが答えた。伊達先生や後藤から聞いたあれが複数のコアメダルを使い人々を欲望から作り出された怪人から守る無限を超えた超越した意味の名を持つ欲望の戦士、仮面ライダーオーズ。

オーズに変身した映司さんはバッタの部分を光らせて高く飛び、折り畳まれたクローを展開し、ケツアルコアトルス・ドーパントに攻撃をする。

フィリップ「縦に3色とか実に興味深い……。」

翔太郎「おいフィリップ、検索は後だ。行くぜ相棒！」

フィリップ「ああ、すまない……。では今こそ1つに。」

翔太郎さんとフィリップさんが言った後にエクストリームメモリが優人と小松が運んだフィリップさんの体とダブルドライバーに装填されたサイクロンメモリとジョーカーメモリを取り込みダブルドライバーに装着された。

『『『エクストリーム!!!』』』

音声と共にWのセントラルパーテンションと呼ばれる部分が左右に分離した後にクリスタルサーバーが現れ、顔の真ん中がXになっ

た。これが翔太郎さんとフィリップさんが本当の意味での2人で1人の姿『仮面ライダーW・サイクロンジョーカーエクストリーム』に強化変身した。

翔太郎「あいつに遅れを取るなよ漣司！」

漣司「はい！行こう篤！」

篤「ああ！」

翔太郎さんが言った後、俺達も翔太郎さん達と共に駆け出した。

伊達「俺達も行こうぜ後藤ちゃん！」

後藤「はい！」

伊達 後藤「変身！」

伊達先生と後藤はバースに変身する

アंक「おい伊達とやら。」

伊達「ん？」

行こうとした伊達先生はアंकに呼び止められる。

アंक「俺の名はアंकだ！アンパンやアンマンの中身じゃねえぞ！」

伊達「わかったよ。」

伊達先生はアंकに片腕拳げて行った。

アंक「ったく・・・。」

こうして俺と篤はビッグ・ティーレックス、翔太郎さんとフィリップさんはビッグ・アノマロカリス、伊達先生と後藤はビッグ・トライセラトプス、映司さんはケツアルコアトルス・ドーパントを相手にする事にした。

漣司 side out

漣司 篤「はっ！」

漣司達は炎を纏った右手でビッグ・ティーレックスを殴り付けた。

漣司「皆無事か!？」

一夏「ああ、漣司と・・・篤!？」

セシリア「漣司さんと篤が1人の戦士になりましたの!？」

鈴「上等じゃない!時間稼ぐから止め指しなさいよ!」

篤「わかった！」

一夏達が時間稼ぎしている間に漣司と篤はジョーカーメモ리를マキシмумスロットに装填する。

『ジョーカー！マキシмумドライブ！』

シャル「今だよ2人共！」

ラウラ「行っけえ！」

音声と共にフレームサイドの拳は赤い炎をジョーカーサイドは紫の炎を纏い、ジャンプと共に熱の推進力として上昇し、真ん中から分断され、

漣司 篤「ジョーカービッグバン！」

フレームサイドは切り裂く様に、ジョーカーサイドはパンチを叩きこみ、ティーレックスは爆発した。

簪「やった！」

一夏達は歓喜の声をあげる。

翔太郎「助太刀に来たぜ！」

翔太郎達はビッグ・アノマロカリスに戦っていたハヤテ達と合流した。

ジロー「助太刀感謝する！」

ハヤテ「僕達が時間を稼ぎます！」

遊星「行け『ジャンク・ウォリアー』！『ニトロ・ウォリアー』
！『ターボ・ウォリアー』！『ロード・ウォリアー』！『ジャンク・
アーチャー』！『ジャンク・デストロイヤー』！『ジャンク・バー
サーカー』！」

行人「うおおおっ！！！」

ジローとハヤテは必殺技を放ち、遊星はシンクロモンスターを召喚して攻撃させ、行人も今朝漣司から借りたISキャリバーを使い東方院家の剣術でビッグ・アノマロカリスを怯ませていた。

翔太郎「あっちも決めたし、俺達も決めるぜ相棒！」

漣司達が終わったの見て言う翔太郎。

フィリップ「ああ！にとりから新しいメモリを貰っているからそれも使うよ。」

ビッグ・アノマロカリスから距離を取ってプリズムビツカーを取り出し、最初は真紅でイニシャルがDのメモリを装填する。次に灰色のBのメモリ、水色のWのメモリ、オレンジのSのメモリの順に装填していく。

「デステイニー！ブレード！ウォーター！ストロング！マキシマムドライブ！」

音声の後プリズムビツカーが7色に光り出す。

翔太郎 フィリップ「ビツカー！ファイナルフィオキーナ！」

駆け出して光り輝くプリズムビツカーをビッグ・アノマロカリスに突き付けると光の放流がビッグ・アノマロカリスを包み込み、ビツグ・アノマロカリスが爆発した。

伊達「トリコ！大丈夫か！？」

トリコ「大丈夫だ伊達先生！後藤もいるし、よしゼブラ！合体技だ！」

ゼブラ「ふん、外すなよ！トリコ！」

Wバースと共にビッグ・トライセラトックスと戦っていたトリコが言うと、ゼブラは声を発し力を貯めたトリコの右腕に行き、トリコはビツグ・トライセラトックスに突っ込む。

ゼブラ「音壁……！」

ゼブラは逃げられないようにビッグ・トライセラトックスの両側と後ろに音の壁を出現させた。

トリコ「18連……音速釘パンチ……！！！」

トリコとゼブラの合体技が炸裂し、

『『セルバースト！』』

後藤「トリコ！離れる！」

伊達「こっちは準備完了だ！！」

後藤と伊達の言葉にトリコが横に飛び去ると共に、

後藤 伊達「発射！！」

発射されたブレストキャノンのエネルギー弾がビッグ・トライセラトップスに直撃しビッグ・トライセラトップスは爆発した。

夜空「はっ！」

イブキ「やあっ！」

映司「とりゃあ！」

夜空とイブキは突然現れた映司に驚きつつも、協力して戦っていた。夜空の魔法とイブキのドラゴンタイプの技で牽制しながら隙を見つけて映司が攻撃するが、ケツアルコアトルス・ドーパントは空中なので、なかなか当てられなかった。

映司「アंक！タジャドル！タジャドル！！」

アंक「しゃあねえ！受け取れ！」

催促する映司にアंकはカルからクジャクとコンドルのコアメダルを映司に投げ渡す。

受け取った映司はトラをクジャクに、バッタをコンドルに入れ換

え、スキャンする。

キインキインキイン！

『タカ！クジャク！コンドル！ タージャードル』

歌と共に映司の頭はタカヘッドからタカヘッド・ブレイブに変わり、トラアームは左手に手甲型の武器『タジャスピナー』を持ったクジャクアームに変わり、バツタレツグは爪先と踵に猛禽類の爪を思わせる、ストライカーネイルとラプタードエッジが付いたコンドルレツグに変わり、胸部のオーラングサークルもタカ、クジャク、コンドルが合体して不死鳥を描いていた。映司は炎のコンボ、『仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボ』にコンボチェンジした。

映司「はっ！」

コンボチェンジした後全身が赤く輝き、炎を発した後クジャクウイングを展開して飛び立つ。

ケツアルコアトルス・ドーパントが出す火炎弾をタジャスピナーで防ぎ、映司は両手を前に出し、少し後ろに引くと映司の後ろにクジャクが羽を広げた様に羽手裏剣、クジャクフェザーが現れた。映司は両手を思い切り前に突き出すと羽手裏剣はケツアルコアトルス・ドーパントに向かって行き全弾命中させた。

映司はタジャスピナーの中を開けるとオーズドライバーからタカ、クジャク、コンドルのコアメダルを抜き、タジャスピナーの内部のテーブル・オークラウンに窪みに嵌めてあった7枚のセルメダルの内、3枚を取り出し代わりにタカ、クジャク、コンドルのコアメダルを嵌めて閉じオースキャナーでタジャスピナーをスキャンする。

『タカ！クジャク！コンドル！ギン！ギン！ギン！ギン！ギガス
キャン！！』

映司「はあああああああ！！！」

音声の後に映司は不死鳥を模した炎を纏いケツアルコアトルス・
ドーパントに突っ込んでいく。

映司「セイヤアアアア！！！」

ケツアルコアトルス・ドーパントを貫いた映司は着地し、ケツア
ルコアトルス・ドーパントは爆発した。

映司「ふうっ……。」

映司は一息ついて変身を解く。

映司「ん？アंक？」

アंकはケツアルコアトルス・ドーパントが爆発した所から出た
何かを空中でキャッチする。

アंक「ここで、コアメダルを回収出来るとはな、ん？何だこの
カード？」

アंकが灰色のゴリラのコアメダルと黒いカードを持っていた。

翔太郎「そっちもか、俺達もドーパントを倒したら出てきたぞ。」

映司「けどなんて書いてあるのかわからないね。」

変身を解いた翔太郎も回収したカードを見せながら言っ
て、映司がカードの書かれている文字を読もうとするが断念する。

伊達「おい。火野に左。それはナンバーズカードだ。」

後藤「それを漣司に渡してくれ。」

伊達はカードを持ちながら言い、後藤も2人に漣司に渡す様
に言う。

翔太郎「ほら漣司。」

映司「はい。」

漣司「ありがとうございます。」

漣司はカードを受け取ると漣司がドーパント倒した場所に現れた
カード、合わせて4枚のナンバーズの文字が読める様になった。

カル「不思議ですね。」

アंक「コアメダル以外にも力を感じるモンがあんだな。」

カルもアंकもナンバーズのカード見て感心する。

翔太郎のは『No.11 ビッグ・アイ』、映司のは『No.1
6 色の支配者 ショック・ルーラー』、伊達のは『No.19
フリーザードン』、漣司のは『No.61 ヴォルカザウルス』だ
った。

漣司「『ビッグ・アイ』、『ショック・ルーラー』、『フリーザードン』、『ヴォルカザウルス』回収完了。これで8枚。翔太郎さん、フィリップさん、映司さんありがとうございます。」

翔太郎「こつちこそ助かったぜ漣司。」

フィリップ「僕もキミ達に会えて良かったよ。」

映司「いえいえ、ライダーは助け合いですよ！」

漣司のお礼に3人はそれぞれ言葉を返す。

その時、翔太郎、フィリップ、映司、アंक、カルの前に異世界に繋がる壁が現れる。

翔太郎「どうやらお別れのようだな。」

映司「そうらしいですね。」

漣司「もう行くんですか？」

壁を見て言う翔太郎、それに同意する映司、そしてそんな2人に声をかける漣司。

翔太郎「俺は風都を守る探偵だ・・・そつちも頑張れよ！漣司。」

漣司「・・・はい！」

翔太郎の激励に漣司は力強く答え、2人は握手をした。

映司「これ、俺からの饞別。」

亀山「いや、何でパンツ!？」

握手を終えた漣司に・・・パンツを渡す映司にパンツを饞別とした映司にツツコミを入れた亀山。

映司「明日のパンツですよ!パンツと少々のお金があれば大丈夫ですよ!」

アंक「まったく・・・。」

カル「変わりませんね。」

亀山のツツコミに笑顔で答えた映司、それを見たアंकとカルは呆れた顔をする。

翔太郎「んじゃな!」

フィリップ「頑張りたまえ!」

映司「それじゃあ!」

アंक「ふん。」

カル「御機嫌よう。」

5人はそれぞれ言って世界の壁を越えて行った。

世界の壁が消えた後、漣司はフィリップから渡されたダブルドライバーにトリガーメモリとルナメモリ、映司から渡されたパンツを見て、こう言った。

漣司「頑張ります……。相棒と仲間達と共に。」

漣司は相棒の箒、仲間の一夏達を見て新たな決意をしたのであった。

ちよつとこぼれ話

箒「漣司、フィリップさんから貰った物は兎も角、映司さんから貰ったのはどうするつもりだ？」

漣司「えっ？勿論使うが？」

「「「えっ!?!」「」」

漣司「どうした皆？そんなに驚いて？」

一夏「派手過ぎないか？」

漣司「確かに派手だが、映司さんがくれたんだ。使わないと勿体無い。」

「「「・・・」」」

当たり前のように言う漣司に皆は言葉を無くした。

漣司「ダブルドライバーは箒、使う時が来たら力を貸してくれ。」

箒「あ、ああわかった。」

漣司の言葉に箒は答えた。

その43 現れた切り札と欲望の王と新たなる決意（後書き）

ミニコーナー

この話の元のコラボを書いた下さった鳴神 ソラさん、ありがとうございます！

漣司「最後のドーパント戦はソラさんのコラボとは違い、主人公達も参加するようにしてしまいました。」

篝「こうなってしまうソラさん……。すみません。」

感想、批判お待ちしております。

連司のレポート(前書き)

3本立ての1本目です。

漣司のレポート

俺は転生してからの約1ヶ月間この島について仲間達と共に調べた事をこのレポートに書いておく。これからこの島について調べたい者が少しでも助けになる事を願って・・・。

九路洲島クロスじまについて

製作者 桐札漣司

位置 正確な位置は不明（太平洋の真ん中あたり）

面積 約1830万K？（四国の約10倍）

地区

東地区 港地区 市街地区 学園地区 スクラップ山脈

南地区 海岸地区 密林地区 高山地区 火山地区

西地区 沼地地区 森林地区 農業地区

北地区 砂漠地区 崖地区 氷山地区 鉱山地区

中央地区 九路洲マウンテン 十二湖（マウンテンの周囲に12の湖がありそれぞれ社がある。）

地下地区 不明

歴史 二十数年前に突如、浮上したと言われる。どの国にも干渉する事が出来ず、九路洲学園の理事長と5人の理事が所有、管理をしている。

荒地だった東地区に市街地区の九路洲タウンができ、学園地区の九路洲学園を創立。

東地区と農業地区を新たに開拓した西地区を除いて、南地区、北地区、中央地区は調査だけして殆ど人の手は加えられていない。(但し十二湖の社は初めて調査した時に存在したらしい。)

それぞれの地区には独自の生態系が生んだ生物が存在している。

理由は不明だが生物が他の地区を脅かす様な行動はしないらしい
九路洲学園の生徒は各国からの特待生を保護する名目で入学させる。生徒はこの島にあらゆる事に待遇される。

九路洲島の七不思議

この島には学校の七不思議みたいに七不思議がある以下の7つ

- 1 九路洲学園の秘密
- 2 地下地区の巨大遺跡
- 3 スクラップ山脈の巨人
- 4 砂漠地区の巨大竜巻
- 5 沼地区の古代魚
- 6 十二湖と12の社
- 7 理事長と5人の理事

1 については九路洲学園には不思議な力の源があり、ISと操縦者の同調率や霊力、魔力が上昇したり、デュエルモンスターのカードに意思つまりカードの精霊が誕生したりする。

2 については上記の通り不明だが、調査班の報告では地下には現代の技術では再現が不可能な巨大遺跡があると言われる。

3 については午前2時にスクラップ山脈にジャンク部品が集まった巨人が現れると言う。目撃証言もあるらしい。

4 については砂漠地区には巨大な竜巻が発生するがその竜巻は何故か人が来ると突如消えるらしい。

5 については沼地地区に食材、武器の素材と共に最高級な古代魚が生息しているとの噂がある。

6 については上記の通り十二湖にそれぞれ社があり調べた結果浮上する前に建てられた事が判明した。

7 については九路洲学園の理事長は女性であるが様々な噂があって一定していない。5人の理事ももうひとつ別の顔を持っているらしい。

以上で終わるがもし新たに発見があるなら随時更新予定。

桐札漣司。

番外編（前書き）

2本目です。

番外編

????? side

? 「しかし良いのか? お前の一族が百年以上結界を張って隠してきたこの島の結界を解いて公表させて・・・?」

? 「ええ、いずれこうなるだろうとは思ってたわ。それが今だったて事よ・・・。」

男は私に聞き、私はそう答えた。
そうこの島を解放させて準備をしなければならない。

? 「馬鹿な神共が何の考えもなしにチートを与えこの世界に送る愚かな転生者達を捻り潰す為の準備・・・だろ?」

? 「流石だな・・・。」

男は私が今考えた事をズバリと当てた。

? 「伊達や酔狂で長年お前のパートナーやってないんだぜ? そんなくらいわかる。協力するぜ。」

? 「しかし! お前の体はもう限界を超えている! また変身したら・・・。」

私は肩を震わせ涙声で言うと男は私を抱き締めた。

？「大丈夫だ。俺は死なねえよ。何でもかんでも1人で背負い込もうとしているお前を置いてな・・・。」

その時、転生者の軍団が来た。

？「つたく、こんな時に来るか？」

男は私から離れると私達に協力してくれた神様から貰った13本のガイアメモリと左手に黒い炎を灯した瞬間に現れた漆黒のガイアメモリを私に見せる。

そしてダブルドライバーを装着して左スロットにジョーカーメモリを右スロットにそのメモリを装填してドライバーを展開させた。

「*****！ジョーカー！」

ドライバーの音は何故か前半が聞き取れなかった。

音声の後に男がいた場所には胸部、腹から両膝、腰、右肩、右腕、左肩、左腕、背中、右膝下から右足首、右足、左膝から左足首、左足それぞれに機械で作られた12体の動物が変形され鎧の様に包まれた仮面ライダージョーカーがいた。

？「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおっ！！！！はあっ！！！！」

変身した男は力が有り余っているかの様に雄叫びをあげた。

男はいつの間にか持っていた紅蓮の悪魔の龍の翼広げた様な盾には納められたその龍を模した巨大な両刃剣があり、盾にある左右に

6個ずつ真ん中に1個、計13個のマキシマムスロットがあった。

両刃剣には紅蓮の悪魔の龍の頭を模した柄があり、柄にルビー色のイニシャルが「S・N」のメモリを装填した。

『*****・*****!』

これもそのメモリの音声が聞き取れなかった。

盾の右側スロットに上から緑色、黄色、白色、空色、茶色、銀色を、左側のスロットを上から真紅、水色、紫色、金色、灰色、橙色を装填した。

『サイクロン！サンダー！アイス！スカイ！グランド！メタル！ボイス！ウェーブ！ライト！ダークネス！アクア！フレイム!』

緑色から時計回りにメモリの音声が発声した。

？「そんじゃ、サクツと倒してくる。」

？「まっ……。」

私が言い終わる前に、男は転生者の群れに突っ込んだ。

？「*****!」

私はその男の名前を叫んだ。

side out

九路洲学園 理事長室

?「・・・長、理事長。」

?「えっ・・・。」

理事1「起きて下さい。理事達はもう集まっています。」

理事長「ごめんなさい。始めましょう。」

理事2「どうしたのです。理事長。うなされてましたが?」

理事長「ちよつと酷く懐かしい夢を見てしまいました。」

理事2「大丈夫ですか?」

理事長「ええ、それよりも今年第1期生の1組、2組ですが・・・」

理事3「そうじゃの、この2つのクラスは実に面白い。トリコ達の成長が楽しみだわい。」

理事4「素晴らしい!!!特に1組の桐札漣司君を初め、織斑君達も頼もしい限りではないか!早速入学式に『アレ』とケーキをプレゼントしなければ、ハッピーバースデー!!!!1組、2組の生徒

諸君！！！」

理事5「はっ！はっ！はっ！実にめでたい事だ。それにしても、桐札君は何処かで見えたような……。」

理事長「取り敢えず、入学式までの準備を怠らないようにしましょう。(けど何で漣司が……？それに今思うと漣司はアイツの生き写し、いやその者じゃない……。兎に角彼は私達の希望になるだろう。アイツの様に……。)」

この話は入学式の三日前の事である。

その44 入学式と理事長と襲撃（前書き）

3本目です。ようやく入学式です。

漣司「ってか、40話以上ダラダラやって年末ギリギリでやっと入学式ってどう言う事だよ……。」

まあ、それは置いて、制服はISS学園と同じようにしました。

漣司「それでは楽しんでくれ。」

その44 入学式と理事長と襲撃

4月1日 午前8時半 九路洲学園 1年1組の教室 漣司Si
de

漣司「やつと来たな。この日が……。」

一夏「ああ……。」

俺と一夏はそう言いながら、制服の上着を羽織る。

篝「漣司、一夏。第一ボタン外れているぞ。入学式の時位付けろ。」

漣司「ああ、すまねえ……。」

一夏「ありがとな、篝。」

篝はそう言いながら、俺と一夏の制服のワイシャツの第一ボタンを付けて来る。

ハヤテ「3人共ー！そろそろ行きますよ。」

ジロー「皆はほとんど会場に行ったぞ。」

ハヤテとジローが俺達を呼んだ。

箒「ああ一夏、漣司。行こう。」

一夏 漣司「ああ。」

箒は右手で一夏の左腕を左手で俺の右腕を掴んでハヤテ達と一緒に会場に向かった。

side out

会場

鈴「やっと来たって・・・あー！箒！何一夏の腕掴みながら来てるのよ!?!」

りん「それだけじゃなくてダンナにまで!?!」

鈴音の言葉に一夏LOVEズと漣司LOVEズの皆が箒に抗議する。

箒「あつ、いや、違う!これは・・・。」

漣司「落ち着け皆。」

しどろもどろしている箒と抗議してくる彼女達の間には漣司が割って入る。

漣司「箒は俺達を間に合わせるように、腕を掴んで走っただけだ。そう言うやましい考えでやったんじゃない。許してやってくれ。」

セシリア「うっ……。」

千桜「漣司君がそう言うなら……。」

漣司の言葉に皆は納得して下がる。

箒「ありがとう、漣司。」

漣司「どういたしまして。それにしても皆制服似合ってるな。箒もよく似合ってるよ。」

千桜「あ、ありがとう……。」

楯無「お姉さん嬉しいわ……。」

りん「えへへ……。」

漣司に誉められて顔を赤くして照れる3人。

遊星「漣司達も来たか。」

行人「これで全員来たね。」

遊星達も集まってくる。

漣司「後藤は？」

優人「後藤さんなら、伊達先生と何か話していたよ。」

漣司の質問に優人が答えた。

えみな「あ、漣司君。」

漣司「おー、えみな。」

入り口からえみな達も来て漣司の所まで来る。漣司達が知らない6人の男女も連れて。

？「君が漣司君だね。」

漣司「ああそうだが、お前は？」

トウマ「えみなの双子の弟の都幾川トウマです。トウマまでいいよ。」

漣司「俺の事も漣司で良いぜ。よろしくなトウマ。」

2人は握手をする。

なるみ「草加なるみです。」

愛歌「きさい まなか 騎西愛歌です。」

樹「岩槻樹です。」

朔也「日高朔也だ。」

侑斗「両神侑斗だ。」

なるみ達も自己紹介して一夏達も自己紹介する。

漣司「えみな達は2組になったのか。」

えみな「うん……。そうみたい……。」

えみなは若干暗く言う。

漣司「大丈夫だ。クラスが違えど、俺達は仲間だ。何時でも歓迎するぜ。」

えみな「漣司君……。うん！」

そんなえみなの頭を撫でながら言う漣司にえみなのは明るく返事をする。

山田「皆さんそろそろ入学式が始まります。席についてください。」

「」「」「はい。」「」

山田の言葉に漣司達は自分達の椅子に座る。

亀山「では、これより、第1回九路洲学園入学式を始めます。初めに理事長及び5人の理事達の挨拶からです。」

亀山の開始の言葉により、6人が壇上上がる。老人が1人、男が2人、女性が1人、そして残りの理事と理事長は漣司達と同じ位の年の少女だった。

後藤「えっ!?!」

ハヤテ「嘘……ですよ?」

ヒナギク「貴女は……。」

トリコ「マジかよ……。」

伊達「この世界でも会うとはね!。」

理事達を見て後藤達は驚き教師側の席で座っていた伊達も若干驚く。

漣司「……。」

一夏「どうした漣司?」

篤「黙ったままでどうしたのだ?」

理事長を見て黙り込む漣司に一夏と篤が尋ねる。

漣司「まさか、あの人が理事とは驚きだが理事長にはもっと驚いたぜ……。」

後藤 伊達「鴻上会長。」

ヒナギク「キリカさん……。」

ハヤテ「アーたん……。」

トリコ「会長……。」

漣司「園咲琉兵衛に、ほうぎょくいん 宝玉院美鈴義姉さん……。」

漣司達は理事長達の名前を言った。

一夏「義姉さんって……。漣司。」

漣司「ああ、千冬さんの部屋の片付けの時に話した人だ。まさかこの世界の住人で理事長とはな……。」

漣司が義姉と呼ぶ理事長は漣司達と同じ歳くらいの少女で160cm位で、青が掛かった黒髪を銀色のリボンでポニーテールにして、魔法使いみたいだが動きやすい服装をしていた。

美鈴「皆さん初めまして、理事長の宝玉院美鈴と申します。まず皆さん、この九路洲学園の入学おめでとう。」

理事長の美鈴が漣司達生徒に話をする。

美鈴「まず皆さんに話を『ドカーン!!!!!!』!?!?」

杉下「危ない!?!」

美鈴の言葉を遮る様に爆発音がした。

杉下の言葉のすぐに美鈴の頭上からライトが落ちてくる。

漣司「くっ!」

漣司は駆け出して壇上に登り、美鈴を抱え走り出した直後美鈴がいた所にライトが大きな音を立てて落ちてきた。

漣司「怪我はありませんか?」

美鈴「えっ、ええ、ありがと……って貴方頬切ってるじゃない!?!」

美鈴の言う通り、漣司の右頬はさっきの落下の衝撃で飛んだライトの破片が当たり、血が出ていた。

遊星「何だ?何か来ている。」

ゼブラ「どうやら外に1人で攻めに来たチヨーシに乗ったバカがいるな……。今のもそいつがやったぜ……。」

夜空「行ってみましょう。」

漣司達は外に出ると、上空に、ISを装着した男がいた。

漣司「何だ、お前は?」

？「俺か？俺は別の世界から神によって転生してIS貰ったこの世界を支配する男だ！！！」

漣司の問いに、男は高らかに笑ってそう答えた。

その44 入学式と理事長と襲撃（後書き）

ミニコーナー

そついや……。

漣司「どうした？」

漣司「どうして、どうして？」

漣司「おいおい……。自分で作ったキャラの気持ちが変わらないのかよ……。まあ、箸は俺にとってかけがえのない相棒だが、どうしたんだ？」

いやっ、一瞬漣司×箸もありませんって……。アツーーー!!?」

『作者は三度目のログオフになった。』

漣司「まったく何考えてんだ……。今のは作者の悪ふざけだから、読者の皆さん気にしないでくれ。それじゃ次回も楽しみにしてくれ。」

その45 比較と7人の勇者と欲望の巫女

美鈴「来たわね、転生者……。」

転生者を見た美鈴はそう言った。

漣司「お前は何でこんな事をする?」

漣司は転生者に向けて低い声で言った。

転生者「俺は、元の世界ではつまらない生き方をした。何も漫画やドラマのような事が起こらない退屈な世界でな。でもある日俺は神に出会った。転生して貰ってこのISを貰ってな!」

男は高らかに笑って言った。

転生者「このISの力を使い俺はこの世界の支配者にな「なれな
いぞお前では。」「!?!」

転生者の言葉を遮るかの様に箒が言った。

箒「お前は何故何も起こらない平凡な世界に生まれたのを幸福だと思わないんだ? つまらない? ふざけるな。お前が望んでいる事がどれ程の多くの人を悲しませるのかわかるのか?」

転生者「うぐっ!?!」

箒の言葉にたじろく転生者。

箒「それにお前と同じ転生者である私の相棒の漣司とは天と地の差がある。」

転生者「何だと!？」

箒「漣司は転生者だが力に溺れず、鍛練を欠かさず己を磨き幾度と無く私を助けてくれて力を貸してくれた。1人で背負い込もうとする悪い癖も出て私にだけ弱みを見せる放っては置けない私の唯一無二の相棒だ。」

箒は漣司に対しての気持ちを言う。

箒「お前何かに私達の友情や日常を壊そうものなら私はお前を斬る!」

箒は紅椿を展開して雨月、空裂を手にした。

転生者「こいつ女の癖に・・・生意気な!」

『clock up』

転生者は箒の言葉に怒りを覚え、転生者のISが音声を発した後転生者が消えた。

弾「消えた!？」

数馬「どこ行っただ!？」

皆が捜していると転生者は箒の目の前に現れた。

箒「なっ!?!」

転生者「このISは仮面ライダーの能力が全て使えんだよ。じゃあな死ね。」

驚く箒に転生者は自慢気に言っつて右手のクローで箒の心臓に向かつて突き出す。

漣司 一夏「箒!!!!!!」

漣司と一夏は箒の方に行くが間に合わない。

箒「(あつ……。私は死んでしまうのか? 私は一夏に自分の気持ちを伝える事が出来ず、漣司の力になれないまま終わるんだな……。)」

余りの出来事に動く事が出来なかった箒は死を覚悟した。

キイイイイン!

突如紅椿が7色に光出し、7枚のメダルが飛び出て来た。

転生者「何!?!?ぐあああああつ!?!」

7枚のメダルは転生者の目の前で衝撃波を出し転生者を吹き飛ばした。

箒「えつ……。?」

一瞬の出来事に呆気にとられる箒。

一夏「箒、大丈夫か!？」

一夏達が駆け寄る。

箒「私は大丈夫だ……。それよりも……。」

ラウラ「紅椿からコアメダルが？」

ゆきの「7色あるみたいだよ。」

後藤「それも全部頭の部分？」

後藤の言う通り、7枚のコアメダルはタカ、クワガタ、ライオン、サイ、シャチ、プテラ、コブラだった。

ライオン「やっと、出れたぜ。」

クワガタ「まさか、マスターがピンチの時に出てこれるとはね。」

サイ「それにしても俺等のマスターは正しく大和撫子だな。今度お茶……。」

タカ「私達のマスターがお、女の子……。」

シャチ「もう、キミ達は女の子を見るとこうなるんだから……。」

プテラ「……。」

コブラ「それにしても間に合って良かったのであるが、我輩達もセルメダルが必要である。」

静水久「メダルが喋ってるなの。」

伊達「おい、セルメダルならここに大量にあるから持ってけ！」

後藤「伊達さん！グリードを復活させる気ですか!？」

伊達「後藤ちゃん、こいつらはグリードとは違うみたいだ。」

伊達はそう言いながらタンクの中にある大量のセルメダルをコアメダルに差し出した。

するとセルメダルはコアメダルを中心に集まり出して、7体の二頭身の物体になった。

漣司「こいつらは・・・?」

シャチ ドラえもん「僕はドラえもんだよ。」

トラ キッド「俺はドラ・ザ・キッドだ。」

プテラ ドラニコフ「・・・。」 ドラニコフと書いたフリップを持っている。

コブラ ドラメッド「我輩はドラメッド二世である。」

タカ 王ドラ「僕は王ドラです。」

クワガタ ドラリーニヨ「僕はドラリーニヨ。」

サイ マタドーラ「俺はエル・マタドーラだ。」

コアメダルは各々の名前を言う。

「「「「「我等はザ・ドラえもんズ!!!」「」「」「」

「「「.....」「」

彼等はチーム名を言ったが、漣司達は呆然としている。

転生者「ド、ドラえもんズだと!? 何でコアメダルに.....!?」

キッド「やい転生者! この世界はお前何かじゃ理解できない事があるんだよ! それにお前が持っているチートごときで俺達の友情やマスター達の絆が壊れない事を教えてやるぜ! 皆親友テレカだ!!!」

転生者の疑問にキッドが答えてドラえもんズはテレカを出した。

行人「テレカ!?!」

マタドーラ「只のテレカじゃないぜ!」

ドラえもん「これは数々の困難な試練を乗り越えた不滅の友情を持つ7人の勇者だけが使える。最強にして伝説の秘密道具。」

王ドラ「それが親友テレカで、テレカをえるのが我等ドラえも

んズ！」

箒「!?!」

親友テレカの光が一点に集まり箒の腰に当たる。

箒「これは映司さんが持っていたオーズドライバー!?!」

箒の腰には仮面ライダーオーズが使うベルトオーズドライバーが装着されていてオースキャナーも紅椿のアームに合わせて大きくなっていた。

鴻上「素晴らしい!?! 篠ノ之君のISに欲望の結晶であるコアメダルが内蔵されているとは! そのコアメダルがグリードとは違う意思を持ち篠ノ之君を主として使っている。篠ノ之君なら、彼女なら欲望の器たる巫女になれる!?!」

オーズドライバーを見ていた鴻上が興奮した様子で言った。

鴻上「我々鴻上ファウンデーションが学園の建設中に収集したメダルを使う時が来たようだ。」

鴻上はそう言いながらいつの間にか持っていたアタッシュケースを開けた。

そこには紅椿の中にあるのと同じ21枚のコアメダルだった。

美鈴「鴻上理事!?! 貴方いつの間になんか……。」

鴻上「篠ノ之君! 受け取りたまえ!?!」

美鈴の言葉を遮る様に鴻上は言いながら鴻上は箒に向けて3枚の
コアメダルを投げ渡す。

箒「っと、これはタカとトラとバツタ……。よし。」

箒は鴻上から渡されたコアメダルをタカ・コアをオーズドライバ
ーの右側の穴、トラ・コアを真ん中、バツタ・コアを左側に嵌めて
右側が上に来るように斜めに傾けた。

そしてオースキャナーを右手に持ち、ドライバーの前に滑らせる
様にコアメダルをスキャンする。

キーンキーンキーン！

箒「変身。」

『タカ！トラ！バツタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ』

箒はそう言った後右手に持ったオースキャナーを自分の胸の前で
構えた。

その後、オースキャナーから音声歌が流れ、箒の周りには無数の
メダルが現れ、それらは頭はタカ、胴体はトラ、脚部にはバツタの
メダルに止まり、それらが合体して1枚の円形のプレートとなり箒
の胸に当たった。

トリコ「えっ？変身したのか？変わってねー様に見えるが？」

遊星「今ので変身した筈だ。」

後藤「火野のとは違うみたいだが。」

トリコ達の言う通り、箒はISスーツの姿で紅椿を纏っていたのは変わらなかったが、紅椿のヘッドギアには箒の耳の後ろに来るようにタカヘッドの翼があり、箒の目は鮮やかな青から緑になっていた。

両腕のアームにはトラアームにあるトラクローが折り畳まれる様に装着され、所々黄色の装飾がされていて両肩にもトラアームと同じ肩の装甲があった。

両足のレッグアーマーにはは緑色の装飾がされていた。

そしてISスーツの胸部には上からタカ、トラ、バッタのイラストが描かれた円形のプレート、オーリングサークルがありそこからヘッドギア、アーム、レッグアーマーにラインドライブが伸びていた。

漣司「映司さんとは違うオーズ？ いやっ、紅椿がコアメダルの力を取り込んで進化したのか？」

鴻上「その通りだよ桐札君！あれが篠ノ之君を器としてISがコアメダルを取り込み進化した姿だよ。『over』、無限を超えた超越なる存在、『紅椿・オーズ』！！！！」

漣司の疑問に鴻上が答え、叫んだ。

箒「『紅椿・オーズ』・・・よし！！」

転生者「進化した所で勝てると思うなよ！！」

箒は雨月と空裂を持ち、転生者と戦う。

箒「はあああああっ！！！！」

転生者「えっ！？ちよつマジ！タンマ！タンマ！」

雨月と空裂の乱舞で転生のISはたちまちにボロボロになっていく。

箒「はあっ！」

アームのラインドライブが光出し、両腕のトラクローが展開され転生者を5、6回切りつけた。

転生者「何で！？神が作ったISなのに負けそうなんだよおおおおおー！？」

箒「ISは操縦者の起動時間と信頼で強くなるんだ！お前みたいな昨日今日ISに動かした奴に私は負けない！！！」

転生者の言葉に箒はそう言った後、オースキャナーでドライバーをスキャンした。

『スキヤニングチャージ！』

音声と共にレッグアーマーが展開されバツタを思わせる足になり、箒の頭は赤、胴体は黄、脚部は緑のエネルギー体に包まれた。

箒「はあああああっ！はあっ！」

箒は掛け声と共に上空30メートル近くまで飛び、地上にいた転生者との間に箒の方から赤、黄、緑のオーリングが並んだ。

箒「はあああああつ！」

箒は両足を前に出して赤のオーリングを通過した時ウィングスラストアースとは違う赤いエネルギー体で作られた翼が箒の背中に生えた。

箒「はあああああつ！」

今度は黄色のオーリングを通過した時、両足にトラの爪を思わせるエネルギー刃が纏った。

箒「はあああああつ！」

転生者「ぐあああああああつ！！！！？」

最後の緑のオーリングを通過した時両足のドロップキック、タトバコンボの必殺技『タトバキック』が転生者に炸裂して爆発した。

箒「はあつ！はあつ！はあつ！」

爆発した場所の前に箒は息を切らしながら着地した。

緋鞠「やったでござる！」

咲夜「箒お姉ちゃんスゴイ！」

サニー「美し過ぎる！」

箒「いや、逃げられた。」

「「「えっ！！！！？」」」

皆は称賛の声を上げるが箒の言葉に皆は驚く。

箒「恐らく爆発する瞬間に、コアだけ抜き取り、爆発に紛れて逃げたんだろう……。」

箒はそう言いながら、オーブドライバーを水平に戻し、紅椿を解除してISスーツの姿に戻る。

箒「あ、あれ……?」

一夏「箒!」

箒はよろめき倒れそうになるが一夏が即座に駆け寄り箒を支える。

漣司「箒!大丈夫か!？」

漣司も駆け寄り、箒に尋ねる。他の皆も箒の近くに駆け寄り伊達が診ていた。

伊達「これは火野がコンボ使った時と同じみたいだなベッドに運んで休ませよう。」

後藤「しかしタトバコンボは体力の消耗がないのに何で箒ちゃんは……?」

伊達の簡単な診療の結果に後藤が疑問に思う。

箒「一夏……漣司……私に構わず……転生者を追ってくれ……。まだそう遠くにいてない筈だ……。」

一夏 漣司「それよりも今はお前の方が先だ！」

篤は弱々しく言うが、漣司と一夏は声を揃って言った。

転生者「くそっ！あの神め！！コアメダルがあるなんて聞いてないぞ！？」

？「そりゃそうだよ。ここを管理している神様でも予期してなかったからね。」

転生者「！！？」

ISコアを持ちながら逃げている転生者の言葉に後ろから声がして転生者は驚きながら後ろを振り返った。

転生者「だっ、誰だお前は！？」

東「はるー、天才の篠ノ之東さんだよ。」

篤の姉、東だった。

東「さあて、キミは1つやってはいけない事をしたね。」

転生者「ひいつ！？」

さっきの明るい声とは違い冷たい声で言う束に転生者は恐怖を覚える。

束「私の大事な篝ちゃんを傷付けようとした……。どんな目に会わせようかな？」

転生者「た、頼む！助け……。」

束「うん 無理」

転生者「ギャアアアアアアアアアア！！？」

転生者はその場から跡形もなく消えた。

束「よし レイちゃんの所まで転送完了」

束は神であるレイの元に転生者を送ったようだ。

束「れつくくんが転生者封じの力が覚醒するまで私とレイちゃんが頑張らないとね それにしても、篝ちゃんと紅椿が進化したか、これは嬉しい事だね、いっくんとれつくくんが篝ちゃんのケアをしてきているし、うんうん 束さん嬉しいよ」

束はそう言いながらその場を後にした。

その45 比較と7人の勇者と欲望の巫女(後書き)

ミニコーナー

どうも作者です。実はネギまとFAIRY TAILのキャラ達も介入(漣司達の仲間として)させようかと悩んでおります。

感想で受付ますのでご意見あつたら申して下さい。

それでは次回もお楽しみにして下さい。

その46 再会と真実と新たな日々。

同日 医療室

箒「……。」

医療室のベッドには箒が寝ていた。

箒が転生者を撃退した後倒れて一夏が医療室まで運び伊達の診察が終わろうとしていた。

伊達「やはりオーズのコンボの時と同じみたいだが、タトバでも倒れるなんてな……。どうなってるんだ？」

マタドローラ「そりゃ、マスターがコアメダルの力を引き出しすぎたのさ。」

診察結果に疑問を抱く伊達にマタドローラが答えた。

「まず「引き出しすぎた？」

ドラーニョ「うん、マスターはコアメダルの力を存分に引き出せる体質みたいなんだ。」

王ドラ「しかしマスターは調整が出来てないから、常にただ漏れなのですよ。」

キッド「本来だったらコンボの消費は紅椿のシールドエネルギー

が代用になる筈なんだが……。」

ドラメツド「どう言う訳かコアメダルの力が直接マスターの方に影響を及ぼしてしまっているのである。」

すずの質問にキッド達が答える。

美鈴「桐札君、織斑君、後藤君少し良いかしら？」

突如美鈴が漣司と一夏と後藤に話しかける。

漣司「はい？」

一夏「何ですか？」

後藤「どうかしました？」

美鈴「本当は篠ノ之さんにも話を聞きたいのだけど、篠ノ之さんがあの様な状態なので、今から2人とも理事長室に来てくれますか。」

漣司 一夏 後藤「「「わかりました。」「」」

美鈴の頼みに漣司と一夏と後藤が揃えて答える。

理事長室

美鈴「さあ入って。」

漣司 一夏「」「失礼します。」「」

漣司、一夏、後藤、美鈴は理事長室に入った。

漣司「宝玉院理事長、俺達に何の御用ですか？」

漣司はそう訪ねるが美鈴は顔を伏せて震えていた。

漣司「理事長？」

美鈴「・・・じ。」

一夏「え？」

美鈴「漣司ーーーーー!!!」

漣司「うわっ!?!」

美鈴は漣司の名前を叫びながら漣司に抱き付いた。

美鈴「大きくなったねー漣司 最後に会ったのが中学入る前だったわね。あんなに可愛いかった小学生の漣司がこんなにカッコいい高校生になるなんて私嬉しいわ」

漣司「じゃあやっぱり理事長貴女は……。」

美鈴「もう漣司。堅苦しい言葉使いは抜きにして昔の様に美鈴義姉と読んでいいのよ？」

漣司「わかったよ。美鈴義姉さん。」

美鈴「さん付けしなくてもいいのに……。」

2人のやり取りに一夏は苦笑し、後藤は状況がわからず啞然としていた。

一夏「後藤は……知らないか。」

一夏は後藤に千冬の部屋で話した事を伝えた。

後藤「成る程……漣司が義姉と慕っていた人か……。」

漣司に抱き付いて頬擦りしている美鈴を見て後藤は納得する。

漣司「義姉さん……。そろそろ離れてくれないか？一夏も後藤も見ているから……。」

美鈴「あっ！ごめんなさい……。」

漣司がそう言った後美鈴は慌てて離れる。

漣司「義姉さん、いくつか聞きたい事があるんだが……。」

美鈴「どうして私が貴方の世界に行き、貴方が中学に入る前に貴方以外の人の記憶を消したのか、何故私が高校生くらいの姿のままなのか・・・でしょ？」

漣司「流石だな・・・。答えてくれますか？」

美鈴「ええ、まず内容は言えないけど貴方の世界で調査していたの、魔法でこっちの世界から。」

一夏「記憶を消したのも自分がいた痕跡を消す為に、漣司だけは覚えて欲しい為にわざと漣司の記憶だけを消去しなかったのですか？」

美鈴「前半は正解よ。後半は違うわ。漣司も例外なく、記憶消去の魔法をかけたはずなんだけど・・・。」

漣司「その辺についても義姉さんでもわからないか・・・。」

美鈴「ええ、ごめんなさい・・・。」

漣司「義姉さんが謝る事は無いよ。それよりも本題に入るよ。何故俺達を呼んだ？」

漣司の顔が真剣になる。

美鈴「簡単な答えよ貴方達に協力して欲しい事があるの。」

後藤「協力とは？」

美鈴「この世界に来た神達によって下らない理由で中途半端な仮

初めの力を持つて介入してくる転生者達を倒して欲しいの。」

一夏「え？そんな事ですか？」

美鈴「は？」

美鈴は漣司達に真剣に頼むが、一夏の言葉に一瞬呆けてしまう。

後藤「それだったら頼まれる事じゃないですよ。」

漣司「俺達は俺達の日常を壊そうとする転生者達（奴等）を倒しているから結果的に義姉さんの頼みを俺達は勝手に引き受けている様な物だからな……。」

美鈴「そうだったわね……。」

漣司「まあ義姉さん、奴等の事は俺達に任せてくれ。互いに出来る事をしよう。」

美鈴「わかったわ。これからもよろしくね漣司」

漣司「ああ、こっちこそよろしく義姉さん。」

そう言いながら漣司と美鈴は握手する。

漣司「それじゃそろそろ失礼するよ。義姉さん。」

美鈴「ええ、ではまた。」

握手した後、漣司達は積もるに積もった話をして三十分くらい経って漣司、一夏、後藤は理事長室から出た。

美鈴「本当に漣司はあいつにそっくりね……。見た目もさることながら仮面ライダージョーカーだったり、私の魔法が効かなかつたり、まるであいつの生まれ変わりみたい……。はっ！」

漣司達が去った後、美鈴は悲しげに言うが我に返って首を横に振る。

美鈴「ダメよ！ダメ！あいつと漣司は違う！あいつと重ねて見えてしまったら私は二度と漣司を漣司として見る事が出来なくなってしまう……。」「

美鈴はそう言いながら心を落ち着かせる。

美鈴「漣司は必ず私が守る……。二度とあいつの様にあの子を政府の人間達の戦闘マシンにはさせないわ……。」「

彼女はそう覚悟を決めた。

一方その頃

箒「ん……。」

鈴「箒、目が覚めたわね。気分はどう？」

箒「ああ……。鈴、大丈夫だ……。」

ドラえもん「皆。」

起きた箒が鈴の言葉にそう答えると、ドラえもんが話し掛けた。

箒「どうした？」

ドラえもん「明日の放課後、全員整備室に来て欲しいんだ。」

「同」「」「わかった(わ)(ぜ)(よ)(です)(ですわ)。「。「。「。「」

かくして入学式は終わり、漣司達の学園生活が始まる。

この世界の最強の力を持つ12の力が覚醒する。

その46 再会と真実と新たな日々。(後書き)

ミニコーナー

さて次からは学園生活&amp;12本のメモリ覚醒編です。

漣司「え？区切ってたのか？」

一応、今までの出会い&amp;入学式まで編と名付けてたけど。。。。

漣司「携帯で投稿しているから区切れないんだっけな。。。」

orz。。。。

漣司「まあ、あなたなりこの作品を仕上げてくれれば俺達は満足だが。。それじゃ次回も楽しみにしてくれ。」

その47 代表と子供教師と2つの力（前書き）

今年初の投稿です。3日遅れですが皆さん明けましておめでとう
ございます！ 今年もこの作品をよろしくお願いします！

皆さんからアドバイスを貰い取り敢えず、ネギまだけ出すと言っ
結論しました。アドバイスしてくださった皆さんありがとうございました！

その47 代表と子供教師と2つの力

4月2日 午前8時 九路洲学園 1年1組の教室 漣司side

山田「では、改めて紹介します。このクラスの副担任の山田真耶です。よろしくお願いしますね。」

1組一同「「「「よろしくお願いします。」」」」

山田先生の挨拶に俺達も返した。

昨日の事件が原因で翌日の今日4月2日に俺達1組の最初のHRとなった。

箒もあの後目が覚めて良かったがドラえもんズ達が俺達に用があるとの事だ。何でも箒とコアメダルについて一通り調べるようだ。ドラえもんズ達の話だと自分達のコアメダルと鴻上理事長が持っていたコアメダルは全くの別物でそれぞれ後56枚あるそうだ。

千冬「諸君改めて、このクラスの担任の織斑千冬だ。」

コアメダルの事を考えていたら千冬さんが挨拶をした。

そう言えば千冬さんと初めて会った時ジョーカー以外のメモリは入学まで使用禁止されてたな・・・と言う事は昨日から使える事だな。

俺は制服の上着の内ポケットに入れた12本のメモリを見る。

漣司「（レイから聞いているとは言えこのメモリ達が俺や箒達にどれ程の力を与えるのか気になるな・・・）」桐札。「えっ、はい

!？」

俺が考え事をしていたら千冬さんが俺を呼んだ。

千冬「お前が何を考えていたのかは大体わかる。だが今は私の話を聞いてくれ。」

漣司「はい、すみません……。」

千冬さんから受けた注意に俺は謝る。悪いのは自分自身だからな……。

千冬「では、これより授業を始める……つとその前にこのクラス代表と副代表を決めたいのだが、事情によりこちらが勝手に決めさせて貰った。」

「「「えっ!？」」」

千冬「静かに!これくらいで驚いてどうする。」

皆が驚くがそりゃそうだろ……。クラス代表を勝手に決められたのだからな……。千冬さんの事だ、しっかりしているヒナギクやキョーコ達とか……。

千冬「クラス代表は桐札、副代表は織斑に決まりだ。異論は認めんぞ。」

……俺の予想は千冬さんみたいな人と通用しない事が今回でよくわかった。

千冬「では授業を始める。」

こうして俺達の最初の授業が始まった。

side out

午後3時 教室

山田「それでは本日の授業はここまでです。明日は2組と3組の皆さんと一緒にISSの合同実習があるので女子の皆さんはISSスーツを忘れない様にして下さいね。では皆さんまた明日会いましょう。」

1組一同「」「ありがとうございました。」「」

山田の言葉により、本日の授業が終了した。

一夏「漣司、お疲れ、授業どうだった？」

漣司「なんとかかなりそうだ。一夏の方は？」

一夏「俺もなんとか、それにしても千冬姉、俺達を代表にする

なんて……。」

一夏が恨めしそうに言う。

漣司「しょうがないだろ……。千冬さんも考えがあつてした事だと思つぞ。」

？「桐札漣司君と織斑一夏君ですね？」

漣司「ん？」

一夏「え？」

いきなり第三者の声が出て漣司と一夏が生声をあげて声が出た方向に振り向くと、10才くらいのスーツ姿で小さい眼鏡を掛けた男の子がいた。

一夏「えっ？そつだが子供？」

漣司「ん？胸に付けてるのは教員のバッジ？つて事は教師ですか？」

漣司が言う教員のバッジとはこの学園の理事達が認め採用した証として配布されるバッジだ（勿論千冬や山田、伊達や杉下達、後一応雪路も配布され付けている）。

？ ネギ「はい！3組の担任で1、2、3組の英語担当のネギ・スプリングフィールドです！よろしくお願いしますね！」

一夏「こ、こちらこそよろしく願います。」

漣司「お互いにいい学園生活を築きましょう。」

漣司と一夏も挨拶を交わし、ネギと別れた後教室を後にした。

IS整備室

蘭「一夏さんと漣司さんも来ました。」

ゆきの「もお。2人共遅いよう。」

一夏「悪い悪い。」

龍亞「何やってたの?」

漣司「ああ、この学園の最年少の教師に会った。」

「「「はっ?」「」

漣司の言いに一夏と篤と教師達以外が呆気な声を出す。

神戸「桐札君その子ってネギ・スプリングフィールドって名前なのかな？」

漣司「はいそうですけど・・・、神戸先生は知っているんですか？」

神戸の質問に漣司が答え逆に聞き返す。

神戸「うん、この学園には織斑先生や僕達以外にもどの様な教師が来るのか調べてみたんだ。そしたら最年少の英語教師、ネギ先生が赴任されると聞いてね。桐札君が言う教師はその子かかって思っ
て。」

神戸は聞いた理由を説明する。

杉下「君も細かい事が気になる癖がありましたか？」

亀山「右京さん程じゃないと思いますよ・・・。」

杉下は神戸にそう尋ね、亀山も喋る。

キッド「おーい。お喋りはここまでにしてマスターと紅椿とコアメダルについて調べようぜ。」

王ドラ「鴻上理事から頂いたコアメダルもありますし。」

キッドが漣司達に調査を促す様に言って、王ドラも鴻上からコア

メダルとセルメダル3枚が入ったメダルケースを見せる。

漣司「あゝ悪い悪い。でも始める前に千桜にりん。」

漣司は千桜とりんを手招きして呼ぶ。

千桜「漣司君どうしたんだ？」

りん「あたいと千桜を呼んで？」

千桜とりんは不思議に思いながらも漣司の所に駆け付け、漣司は右手には深緑色で亀の形をした指輪を千桜に、左手には紅く鳳凰の形をしたバングルをりに渡す。

千桜　りん「こ、これって……。」

漣司「そう、俺達を作った2人の為の専用機だ。千桜のは緑武^{りょくぶ}、りんのは紅雀^{くわく}だ。」

千桜「緑武……。」

りん「朱雀……。」

漣司「試しに呼び出してくれ。筈と紅椿の時みたいに2人のデータを入力して2人専用にするから。」

千桜　りん「わかった。」

漣司「ジロー　遊星手伝ってくれ。」

ジロー「任せる。」

遊星「わかった。」

漣司の頼みに2人は了承する。

千桜は指輪を左手の中指に、りんはバングルを右腕の二の腕につける。

千桜「来い、緑武。」

りん「来い、紅雀。」

声と共に千桜は深緑、りんは真紅の光に包まれる。

光が消えた後、制服姿で2人はISを纏っていた。

千桜のは基本カラーが深緑で、頭部は2本の丸い角みたいなのがあ
るヘッドギアで二の腕、腹部、背部以外は装甲されており、腰には
スカート状のスラスターが装備されていて機動力よりも防御重視の
姿だった。

りんのは基本カラーが真紅で鳳凰の翼があるヘッドギアで、千桜
のとは逆にISに必要最低限な装甲しかなく、四対のウイングスラ
スターが装備されて機動力重視の姿だった。

漣司「それじゃセッティング始めるか。」

漣司、ジロー、遊星はセッティングを始めた。

三十分後

漣司達はセッティングを終えた。

漣司「これで完了だ。これからはそれらの機体は2人専用になった。」

千桜「漣司君、皆ありがとう。」

りん「あたい達の為に作ってくれて……。」

千桜とりんはお礼を言う。

一同「……どういたしまして。」

漣司達もそう返した。

その後漣司達は箒と紅椿とコアメダルについて調べていたが、余り大きな成果はなく、午後6時辺りに食堂で夕食をとり、解散した。

その47 代表と子供教師と2つの力（後書き）

ミニコーナー

漣司「作者……。」

どうしたの？

漣司「俺の予想が正しければ、千桜とりん以外にもオリジナル
S出す予定だろ……2機ぐらい。」

さ、さすが漣司だ……。

漣司「読者の方々には気付いている人いるんじゃないか？」

取り敢えず片方は誰かに、もう片方には既に別の形となって登場
しています。

漣司「勝手にべらべら喋ってるよ……ん？待て作者、既に登場
させてるって。」

それでは次回もお楽しみに！

漣司「待て、逃げるなコラ。」

その48 演習とクワガタ虫と爆風の切り札（前書き）

何か長い上に更にぐだぐだになった気が……。取り敢えずお楽しみにしてください。

その48 演習とクワガタ虫と爆風の切り札

4月3日 午前9時 九路洲学園 第2アリーナ

千冬「全員集合したな。これよりIS合同演習を行う！」

「「「はい！」」」

千冬の演習開始の言葉にISスーツの一夏と1組、2組、3組の女子達が返事する。

九路洲学園で行われるISや他の演習はクラスが多く合同でやることが多い。

今の状況を説明するとアリーナにはジャージ姿の千冬の左右にはISスーツにジャージの上着を羽織った山田、制服姿の漣司がいる。千冬の前には一夏を先頭にした1組に2組と3組がそれぞれ3列ずつに並んでいた。

千冬達の後ろには合同演習の時にもしもの事があつた時に来る伊達達後藤達メンバー（行人は顔を俯せている）、更に後ろには1組、2組、3組の男子が白衣を着て待機していた。

千冬「諸君等に始める前に一つ言って置かねばならない。1組と2組の一部は知っていると思うが最近この学園には襲撃者が多く、ISや魔法、私達教師だけでは対処が難しい状況になった。」

「「「えっ！？」」」

千冬の言った内容に事情を知っている以外の生徒達が驚く。

千冬「だからこの先起こるであろう事態に対して諸君等には心身共に強くなってもらおう！これから行うのは只の演習ではなく、軍隊並みの訓練だと思おうように！」

「……はっ、はい！！！」

事情を知らない生徒達は千冬の一喝に慌てて返事をする。

伊達「千冬ちゃん厳しいねえ。」

後藤「織斑先生も、この先自分達教師や俺達だけで学園を守るのには限界があるとわかるんでしょう。ですから事情を知らない生徒達も最低でも己を守る様に強くなって欲しいと思って言ったのだと思います。」

そう言う伊達の後に後藤がそう言う。

千冬「では、これより演習を始めるが何か質問はあるか？」

「???」「はい！」

千冬がそう言った後に

3組の列にいた女子が手をあげる。

千冬「神楽坂。」

千冬が名を呼んだ生徒神楽坂明日菜は質問する。

明日菜「織斑先生の隣にいるえっと……漣司だ。桐札漣司。」
「ありがとう。桐札君や後ろにいる男子達に法仙さんやイブキさんは

どうして男子達といえるのですか？」

明日菜は名乗った漣司に礼を言って何故漣司達メンバーがここにいるのか、夜空やイブキがこちら側ではなく後藤達と一緒にいるのか聞いた。

千冬「それについては詳しくは教えられないが、桐札を含め彼等は事情で演習中は他の男子達とは違う事をしてもらう事にして、法仙やイブキについては2人はある理由でISが使えないのだ。」

千冬がそう言うが若干の訂正がある。夜空とイブキはISの適正は代表候補生と匹敵するほど高い。しかし2人はかなり強い魔術系統の力を持っておりそれがISと反発してしまう。だからISを起動中思うように動かず、ISを解除して数時間魔術が使用不能に陥った。例えるなら2人にとってISは自身の力を拘束してしまう歯痒い鎧みたいな物だ。

正確に言うと夜空とイブキは『ISを使ってしまうと戦う事が出来ない』のである。

千冬「桐札達に関してはなるべく戦闘の経験を多くしたい理由で諸君等の模擬戦に参加してもらおう事になった。」

女子1「えっ、一緒に……。」

女子2「いくらなんでも……。」

女子3「生身でISと戦うなんて……。」

千冬の言葉に1組とえみなや本音達以外の女子達はそれぞれ喋る。この世界では女性だけが使えるISが史上最強だと言われる。『

表向き』では……。

千冬「困惑しているようだな小娘共、神楽坂、桜咲前に来い。」

明日菜「あ、はい！」

刹那「えっ！？私もですか!？」

千冬に呼ばれた明日菜と桜咲刹那は前まへに行く。

千冬「伊達先生、後藤。2人にバースバスターを。」

伊達「あいよ。」

後藤「はい。」

千冬がそう言った後伊達は明日菜に、後藤は刹那にバースバスターを渡す。

千冬「試しに撃ってみる。因みにこれは小型の機関銃と言っている。」

明日菜 刹那「はい。」

そう言う千冬に2人は返事する。

2人はバースバスターの引き金を引いた瞬間……

バンッ！x2

明日菜 刹那「あぐつ！」

「えっ!?」

バースバスターの銃声が響いた瞬間に2人はバースバスターの反動でバースバスターを手放してしまい、後方5メートルまで飛んでしまった。これには女子達も一瞬の出来事だったので何がなんだかわからない状態であった。

明日菜「何・・・あの武器？」

刹那「引き金を引いた瞬間に勢いよく前から突き飛ばされたよう
な・・・。」

2人は反動が残って思うように体を動かさなっていた。

千冬「次は桐札、織斑撃ってみろ。」

漣司 一夏「はい。」

千冬がそう言い漣司と一夏は返事した後バースバスターを拾い構えて引き金を引いた。

バンツ！バンツ！バンツ！x2

漣司と一夏は3回続けてバースバスターの引き金を引いたが飛ばされずしっかり構えながらメタルポッドの中のセルメダルが無くなるまで撃ち続けた。

明日菜「凄い……。」

刹那「一発の反動に耐えただけじゃなく連続で撃ち続けるなんて……。」

2人は漣司と一夏が自分達とはどれだけ違うのか理解する事が出来た。

千冬「因みに1組のほとんどと2組の一部の者は2人の様にあれを使いこなす事が出来るぞ。」

「「えっ!?!」」

千冬の言葉に更に女子達は驚く。

千冬「では、これより模擬戦を行う!諸君等の内10人对桐札1人で始める!」

明日菜「あの、それはいくらなんでも……。」

刹那「桐札君だけじゃ……。」

千冬「お前達はさっき何を見ていたんだ?それに安心しろ。今のお前達じゃ桐札にすぐ負ける。」

反論しようとした明日菜と刹那だが千冬の言葉にムツとした。

明日菜「桐札君?決闘してくれる?」

刹那「私も手合わせをお願いしたい。」

「私達もお願いします!」

明日菜や刹那達は訓練機である打鉄を纏い漣司に模擬戦を申し込んだ。

漣司「織斑先生……。」

千冬「お前だったら大丈夫だ。それにあのメモリの使用を許可する。」

漣司「……わかりました。」

漣司は反論しようとしたが千冬の言葉に漣司は決意したようだった。

漣司はロストドライバーを装着しジョーカーメモリを取り出す

『ジョーカー!』

ジョーカーメモリをドライバーに装填し、

漣司「変身。」

『ジョーカー!』

漣司はそう言った後にドライバーを展開させ、仮面ライダージョーカーに変身した。

「!?!」

明日菜「えっ!?!」

刹那「桐札君が仮面ライダージョーカー……?」

漣司「よし、それじゃ……。」

知らない生徒達は驚くが漣司は気にせず、左手首にメモリリングを嵌めサイクロンメモリを取り出した。

『サイクロン!』

ハヤテside

漣司「よし、それじゃ……。」

漣司君はそう言うと緑色のメモリ、サイクロンメモリを取り出した。

『サイクロン!』

そして漣司君はサイクロンメモリを左手首に嵌めているメモリリングに装填し展開しました。

『サイクロン!ジョーカー!』

音声と共にサイクロンメモリから緑色の光と共に何かが出てきた。

ナギ「あれは、クワガタ!？」

お嬢様の仰った通り、サイクロンメモリから現れたのは、体長1.5メートルくらいあって全身が黒を基調とした所々緑色のラインが入ったいかにも機械じみたクワガタ虫のガジェットでした。そのガジェットは、いくつかのパーツになって分解され、ジョーカーとなった漣司君の胸部、両肩、両腕、両足に装着され、クワガタの最大の特徴である大顎と言われる鋏はそれぞれ両前腕部に取り付けられた様になりました。

ガジェットの鎧を纏ったジョーカーには両肩、両肘、両膝、両足首、背中、胸部そして武器であろう2本のブレード状の鋏（鋏よりもどちらかと言うと素早く振れる鋭利な青竜刀みたいでした）、計12個の緑色の珠が埋め込まれていました。

そしてジョーカーの複眼も赤から緑色になってました。

漣司「うおおおおおおおおお!!!」

瀬川「ひゃあ!？」

静「なんと言う風ですか!？」

漣司君が咆哮をあげた瞬間、漣司の中心に台風と間違えてしまうんじゃないかと言う爆風がおきました。

漣司「おおおおおおお!!!」

ジャック「くそっ!立ってるだけでやっただ!」

花菱「今にも吹き飛ばされそうだ!」

漣司「おおおおおおおつ！！！！はあつ！！！！」

漣司君の咆哮が止むと神楽坂さん達を見て、両前腕部に収納された2本のブレードを逆手に持って構えました。

桜咲「！」

フツ！

皆さんは漣司君の構えに警戒しましたが漣司君はその場から消え、神楽坂さん達10人の内、後ろにいた3人が宙を舞っていました。

女子1「えっ・・・？」

女子2「ちょ、ちょっと・・・！」

女子3「私達何され・・・きゃあ！？」

ギャリン！ギャリン！ギャリン！

宙に舞った3人は風の推進力で来た漣司君の余りに早い斬撃に空中で切りつけられながらどんどんシールドエネルギーが無くなり、戦闘不能になりましたが落下の際、漣司君が風を起こし彼女等を優しく降ろしていました。

女子4「こっちから攻めなきゃ！」

女子5「やってやるわ！」

次に女子2人の近接ブレードが降りてきた漣司君に襲い掛かりましたが、漣司君は慌てる様子もなく難なくブレードで防ぎ、相手が怯んだ隙に高速でブレードを振るい相手のシールドエネルギーを削りゼロにしてしまいました。

女子6「うっそ!?はやつ!」

女子7「勝ち目がどうのレベルじゃない!」

女子8「一旦引いて・・・!?!」

更に退避しようとした3人に対して漣司君はブレードの柄の部分同士を連結してブレードの刃の部分に風が纏いました。

漣司「はあああああ!セイヤー!」

漣司君は叫んだ後、連結したブレードを手裏剣の様に投げました。

女子6「7「きゃあああああ!?!」

女子8「な、何の・・・えっ!?!きゃあああああ!?!」

3人の女子はブレードに当たり火花を散りながらも倒れないように踏ん張ってましたが、3人を切りつけたブレードはブーメランの様に戻りまた3人を切りつけて漣司の手に戻りまた2本のブレードに戻りました。

弾「すげえ・・・。」

クロウ「おいおい、始まってから1分もたってないぞ!」

緋鞠「速すぎて何が起こったのかわからなかったのじゃ……。」
皆が次々に言いました。

後藤「ハヤテ？どうした？震えているぞ？」

ハヤテ「後藤さん……。僕はあの力を使いこなす事が出来るの
でしょうか？」

後藤さんは僕を心配して声をかけてくれましたが、その時の僕は
逆に聞き返してしまいました。

ハヤテ「ドライバーやメモリングで制御されているとはいえ漣
司君は今2本のメモリを同時に使用しています……。耐えるだけ
でも凄いのに相手を圧倒的な戦闘力で相手を倒している……。」

僕は無意識の内、両手の拳を握り震わせました。

ハヤテ「漣司君は凄いですよね。メモリに祝福されながらもそれを
奢りとせず、自身の鍛練を欠かさない。そして力を手にする勇氣
と覚悟もある。だから……。」

僕は一旦言葉を切り、

ハヤテ「だからこそ漣司君と共に歩きたいです。漣司君がこの世
界に来なければ僕は今の成長は無かったです。僕は漣司君に危機が
訪れたら、疾風はやての様に駆け付けられて助けに行ける男になりたいです。

「

ジロー「なれるさ。ハヤテなら。」

伊達「ハヤテちゃんなら絶対なれるぜ。」

イブキ「最もハヤテだけには背負わせないわ。」

後藤「漣司が俺達を成長させるなら俺達は漣司を支える。」

ハヤテ「皆さん・・・はい！」

皆の言葉で僕は嬉しくなって涙が出ってしまった。

漣司君、何時でも僕達を頼ってください。例え漣司君が世界を敵に回してしまっただとしても、僕・・・いや僕達は直向きに頑張っている漣司の味方です!!!

ハヤテ side out

明日菜「私達だけね刹那さん。」

刹那「そうですね・・・。」

明日菜と刹那は近接ブレードを構えながら漣司と対峙していた。

一同「……」

皆も沈黙してしまい、数分立つ。

刹那「はあああああつ！！！」

沈黙を破つたのは刹那で近接ブレードを居合いするように構え漣司に突っ込んだ。

それを見た漣司は慌てる事なく、ドライバーからジョーカーメモリを抜き、マキシマムスロットに装填した。

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

マキシマムドライブ発動の音声と共に、ブレードとアーマーに埋め込まれた12個の珠が光り、2本のブレードは展開し速く振れる事が出来る鋭い風の刃が惑い、両足のアーマーも踵に鋭利なサーベル状の刃が展開されこちらにも風の刃が纏った。

漣司「はあつ！」

ガキンッ！

刹那「くっ！」

漣司は自分に突っ込んで来た刹那の近接ブレードが振り切る前に右足を蹴り上げて、ブレードを弾き飛ばす。

刹那「しまった!？」

漣司「はあっ!おらっ!・・・はあああああ!セイヤ!!!」

刹那「あっ!ぐっ!がっ!うわあああああっ!!!」

漣司は素早い動きで、左右のブレードの乱舞に回し蹴り、サマーソルトキックなどの連続蹴りで間髪入れず刹那に当て、一旦退いた後、2本のブレードに力を貯めて終わった瞬間に刹那の斜め上の上空まで飛び、掛け声と共に2本のブレードでクロスさせる様に切りつけ刹那を切り飛ばした。

刹那は吹っ飛ばされ壁に激突。ISの絶対防御によってケガは無かったが、刹那は気絶してしまい、ISのシールドエネルギーもゼロになった。

明日菜「刹那さ!はあっ!」!？」

明日菜は刹那の名を叫ぼうとしたが、漣司の声に遮られて漣司の方を向いてしまう。

漣司はブレードをまた同じように連結したが今度はアーマーまで追加して漣司はジョーカーに戻り、右手にはアーマーが追加装備されたので『甲籠』の武器、『双天牙月』よりも巨大になったが、刃部分だけは鋭いままだった。漣司はメモリリングを外し、連結したブレードの柄の部分に取り付けた。

『サイクロン！マキシマムドライブ！』

音声と共に2本の刃が風を纏い出した。

漣司「はあああああ！！！！」

明日菜「うっ！あぐっ！きゃあああああ！？」

漣司はブレードをバトンの様に振り回し、連続で明日菜に当てて吹き飛ばした。

吹き飛ばした明日菜は悲鳴をあげながら吹っ飛ばされ、シールドエネルギーがゼロになり気絶した。

千冬「終了！勝者、桐札漣司！」

千冬は終了の言葉を言った。

漣司「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……ぐっ。」

「漣司（君）（さん）！！！！」

またアーマーを纏った漣司は右膝と右手を地面に付けていて、夏達も漣司に駆け寄る。

一夏「大丈夫か！？」

漣司「ああ……何とかな……。」

そう言う漣司は何とか立ち上がり、サイクロンメモリ、ジョーカメモリの順番にメモリを抜いて変身を解除した。

漣司「ぐっ！」

全身が汗だくになってしている漣司はISキャリバーを取り出しそれを杖の代わりにした。

東宮「まだ駄目じゃないか！」

歩「漣司君無理しない方がいいんじゃないかな!？」

漣司「いや、大丈夫・・・夫・・・だ。」

千桜「漣司君！何故君は空元気の時何時も、大丈夫そうな顔をするんだ！」

楯無「お姉さん達に心配させたくない気持ちもわかるけどお姉さん達は苦しんでいるのに我慢している漣司君を見るのが一番辛いのよ？」

りん「ダンナはあたい達にもっと我が儘になっていいんだ！このまま壊れていくダンナをあたい達は見たくない！」

えみな「漣司君、私達の誰でもいいから、弱音をはいていいんだよ？辛くなったら我慢せず誰かに頼る。漣司君が足りないものがあるとするなら、そこ何だと思よ？」

漣司はそう言った後、千桜、楯無、りんは涙を流しながら言い、えみはそう言う。

漣司「・・・。」

箒「漣司、大丈夫だ。漣司が弱音をはいても誰もお前を責めない。寧ろそれに頼って欲しいと皆が思っている。だから大丈夫だ。」

漣司「皆……ありが……とう……。」

箒「漣司！」

漣司は俺を言いきる前に倒れるが、箒が膝枕するように受け止める。

漣司「すうつ、すうつ……。」

漣司ら箒の膝の上で寝息をたてながら眠ってしまった。

箒「お休み漣司……。」

箒はそつ言いながら漣司の頭を撫でた。

レイ「まずはサイクロンメモリの覚醒されたね〜」

東「これで一步近付いたね。レイちゃん、美鈴ちゃん。」

美鈴「ええ、漣司があいつと同じ様に耐える事が出来た……。転生者を封じる私達にとって漣司は希望と同じ……。」

東「れつくくん達が覚醒まで馬鹿な神達かられつくくん達を守るう（何がなんでもれつくくん達を死なせない）。」

レイ「そうだね〜」（漣司君達をあの子の二の舞を演じさせない為にも。）

美鈴「ええ。（ごめんね、漣司。貴方を巻き込んでしまって……）」

アリーナの外で様子を見た3人の会話である。

漣司が覚醒させるメモリは後11本。

その48 演習とクワガタ虫と爆風の切り札（後書き）

ミニコーナー

ハヤテ「綾崎ハヤテです。今回はサイクロンメモリの解説です。」

サイクロンメモリ

風の記憶を内包したメモリ。最もスピードに特化したメモリでWだとジョーカーメモリとの組み合わせが最も良い。

漣司が変身するジョーカーに使うとサイクロンメモリからクワガタ虫型のガジェットが現れ、アーマーと2本の青竜刀型のブレードとなりジョーカーに装着され「仮面ライダージョーカー・サイクロンジョーカーフォーム」なる。

このフォームは全フォーム中最高のスピードを誇り、視野、手数、リーチに特化して敵の数を選ばず戦う事が可能。

必殺技はジョーカーメモリをマキシマムスロットに装填して敵にブレードと両足の蹴り技の乱舞とブレードの柄の同士部分を連結しアーマーと合体させた後、柄の部分にサイクロンメモリを装填したメモリスロットを取り付ける事でマキシマムドライブが発動、刃の部分か風を纏いバトンの様に振り回す。

ハヤテ「つとこのような具合ですね。それでは皆さん、次回もお楽しみに。」

その49 やせ我慢と教師達と記憶の欠片<風>(前書き)

今回から一部書き方を変えてみました。

これでよかったら、この書き方にします。

その49 やせ我慢と教師達と記憶の欠片<風>

同日 正午0時 医療室

漣司「うつ…うつん。」

えみな「あつ、漣司君気が付いたみたいだね。」

ハヤテ「漣司君大丈夫ですか？」

医療室にはベッドに寝ている漣司と横で椅子に座っているえみなと反対側に立ってトレイを持っているハヤテの3人だけであった。

漣司「大丈夫だ。ハヤテとえみなは何でここに？」

漣司は上半身を起こしながら2人に聞く。

ハヤテ「あの後、漣司君が篝さんの膝の上で倒れて眠ってしまったので僕と一夏君でここまで運んだのですよ。一夏君は今織斑先生の所に報告しに行きました。」

えみな「私は付き添いで千桜、楯無、りんも一緒に行こうとしたけど織斑先生に反対されて。篝は漣司君の部屋に着替えを取りに行ったよ。」

漣司の質問にハヤテとえみなが答える。

ハヤテ「あ、漣司君これどうぞ。えみなさんも。」

漣司「あ、サンキュー。丁度喉が渴いてたんだ。」

えみな「ありがとう。」

ハヤテは漣司とえみなに持っていたトレイに乗せているジュースが入ったコップを渡し、2人はハヤテに礼を言ってコップを受け取る。

漣司「お、旨いな。」

えみな「マスカットビネガーだよね？」

漣司はそう言いえみなもコップのジュースがマスカットビネガーだと思つてハヤテに聞く。

ハヤテ「えみなさんよくわかりましたね。皆さんの為に作ったんですよ。」

えみな「作つたつて、自家製なんだ…。」

ハヤテはそう言い、えみなも自家製だと聞いて驚く。

えみな「けど、これつて君のお嬢様の為に作つたんだよね？」

ハヤテ「あ、お嬢様なら『高校生活三日目で体を動かす、この学

園の教育は間違っている。』と言って朝から自分の部屋でふて寝です…。」

漣司& amp; えみな「…。」

えみなのはハヤテに聞いてハヤテは落ち込み気味にナギの言葉を言い、漣司とえみなのは言葉を無くす。

えみな「ナギは筋金入りの引きこもりだね…。」

ハヤテ「ええ…。お嬢様は小さい頃から三千院家の遺産を狙う人達に狙われた日々を送っていましたから…。」

漣司「だからってハヤテ。このままではナギは墮ちるところまで墮ちるぞ。俺達も協力するから、ナギを引っ張り出すぞ。」

えみな「私達も協力するよ。」

ハヤテ「ありがとうございます。漣司君。えみなさん。」

落ち込むハヤテに漣司とえみなのは協力すると言い、ハヤテは2人に礼を言う。

ガラッ。

伊達「おーい。漣司は…お、起きたか。」

伊達がドアを開けながら入ってきて一夏、箒を除く他のメンバーが入ってきた。

遊星「漣司大丈夫か？」

漣司「ああ、少しだるさがあるが大丈夫……」

夜空「漣司、正直に言いなさい。あれだけの力の反動がたった数時間で大丈夫なはずがないわ？」

漣司「……ああ、悪い。本当は上半身起こしただけで結構しんどい……」

遊星に聞かれた漣司は答えかけたが、夜空にそう言われ謝り、本音を言う。

えみな「漣司君……さっきも言ったけど辛かったら私達に遠慮なく言っていていいんだよ？ 篤が言ったように皆迷惑だなんて思ってないんだから。ね？」

漣司「ああ……。皆ありがとつ。」

えみなはそう言い、漣司は皆に礼を言う。

ガラッ。

一夏「漣司起きたんだな。」

篤「漣司、着替えを取ってきたぞ。」

漣司「ああ、一夏体は結構しんどいが、篤ありがとつ。」

一夏と箒も入ってきて漣司は一夏に状態を言い、箒に礼を言う。

一夏「あ、そう言えば漣司、千冬姉から伝言だけど神楽坂達はほぼ無傷で訓練機も損傷してないから安心しろって。」

漣司「そうか、よかった…。」

一夏は千冬からの伝言を言い、それを聞いた漣司は安堵の溜め息をつく。

行人「それにしても、あれは凄かったね。」

ジロー「ああ、一瞬何が起こったのかわからなかったぞ。」

トリコ「あのサイクロンメモリはスピード重視の戦闘を可能にしているんだな。」

ハヤテ「そうですね。漣司サイクロンメモリ見せてくれませんか？」

行人、ジロー、トリコはそれぞれ言ってハヤテは漣司にそう聞く。

漣司「ああ…ほら。」

漣司はハヤテにサイクロンメモリを渡す。

ハヤテ「ありがとございます…っわっ!？」

ハヤテが受け取った瞬間サイクロンメモリが緑色に光だし、

メンバー「!？」

漣司「うわっ!？」

漣司とメモリに選ばれたメンバーも額に緑色の光が出た。

????「こいつ…強いわね…。」

何処かの遺跡の中なのか、1人の少女がゴーレムと闘っていたが苦戦をしていた。

????「だったら相討ち覚悟で『待ちな。』え?」

『ジョーカー!マキシマムドライブ!』

????『ライダーパンチ!』

ドカーン!!!

少女は覚悟を決めたが突如現れた黒い戦士、仮面ライダージョーカーがライダーパンチでゴーレムは爆発した。

「???? 『ふう…。』」

ジョーカーはドライバーからジョーカーメモリを抜き変身を解除した。

変身解除したジョーカーの姿は漣司が十年位たった姿だった。

美鈴『助けてありがとう。私は宝玉院美鈴。貴方は?』

「???? 『俺は*****だ。どういたしまして。』」

少女は自分の名前を言って礼を言ったが、男の名は何故か聞き取れなかった。

メンバー「はっ!」

漣司達は我に返ったかのような反応をした。

優人「何だったんだ?今の?」

イブキ「理事長に…。」

漣司「大人になった俺…?」

えみな「え?皆どうしたの?」

漣司達の言葉にえみなのは心配してそう聞く。

遊星「わからない…。夢を見ていたのか？」

行人「いや、夢と言うより記憶…。？」

篤「…そうだ！ハヤテは無事か？」

ハヤテ「ええ…僕は…つてえ？」

右手にサイクロンメモリを持ったハヤテは返事したが自分の腰を見て気付く。

腰にはサイクロンメモリに内包されていたクワガタ虫のガジェットで装飾されたバックルを装着されていた。

ハヤテ「なんでしょうか？このバックル？」

漣司「ハヤテの新しい力なのか？」

ハヤテの質問に漣司がそう言った。

同時刻 モニタールーム

モニタールームでは千冬達教師が記録していた漣司対女子十人の模擬戦を見ていた。

千冬「レイから聞いてはいたがこれ程とはな…。」

山田「生徒達が初心者とは言え、ISが一方的にやられてしまっ
んで信じられません…。」

ネギ「ライダーシステムは対怪人用に作られたシステムと聞きました
が、成る程…製作目的が違うだけでこれ程の差が出るんですね…。

「
神戸「それにしても桐札君、初めて使ったのに戦い方が様になって
ますね。」

杉下「まるで最初からあの形態はこの様にして戦うんだと知ってた
かのように見えますねえ。」

亀山「でも、これ各国の政府に見せたら不味いんじゃないツスか？」

千冬「その点は心配ありません。理事長から口止めをされています。
(まあ、されてなくても政府の人間共にはこの映像を見せる気が無
いかな…)」

ネギ「桐札君の周りには善悪関係無く力が集まっている…。僕は昨
日初めて会いましたけど、彼は一体…？」

杉下「ネギ先生。どんな事があるかと彼は我々の大事な生徒です。
彼の事は特別に思わず一人の生徒として接してあげてください。」

ネギ「杉下先生…はい!!」

千冬「(桐札…、お前がどう思っているかわからないが、一夏達や
私達教師はお前を見捨てたりはしない…。頼らない事は強い事じゃ
ないからな…)」

千冬達はもう一度記録していた映像を見た。

その49 やせ我慢と教師達と記憶の欠片<風>(後書き)

ミニコーナー

漣司「何だこのチラシ?」

一夏「漣司、何だよそのチラシ。」

漣司「えーと、鴻上理事が会長している鴻上ファウンデーションが新たに開発したバイクがD・ホイールとして学園に百台支給されて書いてる。」

一夏「へえーどんなのだろう?」

伊達「後藤ちゃん、もしかして支給されるバイクって…。」

後藤「多分伊達さんが思っているのと同じだと思います…。もしかしたら『アレ』も…。」

遊星「?」

第「次回も楽しみにしてくれ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4896t/>

ある少年のなんとかなった学園物語

2012年1月14日23時51分発行